

# 東方開心劇 ①

チャリタク

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

- ① 20XX年。とある学者が創り出した装置により、人類はウェブサイトの世界へ自在に入り込めるようになった。装置を活用した様々な商品が生み出される中、主人公はboketeという世界に目をつける――
- ② ある日、蔵の掃除をしていた霊夢は埃まみれになったスペルカードを見つける。遊びに来ていた紫に聞くと、静かに語り始めた――
- ③ その能力の高さ故、全世界から理屈無しに嫌われる『メアリー・スー』。目指した幸せを掴むべく、幻想入りするのだが――

# 目次

## 第一部 bokete編

1話「誓約と誤解」	1
第2話「初投稿」	10
第3話「下請け始めました」	19
第4話「活動開始」	28
第5話「夕方⑨インテット」	37
第6話「ラインナップ拡張」	46
第7話「命を懸けて」	57
第8話「今週の俳句モデル」	77
第⑨話「映画を撮ろう」	93
第10話「Change To Smile」	106

第11話「熱狂！弾幕舞踏会！」（前編）	122
第12話「熱狂！弾幕舞踏会！」（後編）	130
第13話「秋を祝おう」	155
第14話「いざという時は」	172
第15話「寂しくないように」	195
第16話「告白する二人」	224
第17話「不気味な数字」	246
第18話「仲直りミサイル」	261
第19話「十六夜咲夜」	280
第20話「ガールフレンド（神）」	

第28話「笑顔の裏に」	462
449 第27話「レミリア見守り隊」	419
第26話「暴走を止めろ」	398
第25話「姉妹揃って」	380
第24話「それ以上いけない」	357
第23話「プロポーズ大作戦」	336
第22話「変化」	319
第21話「第二次幻想郷革命」	301

第29話「再開の時」	478
第30話「いつも通り」	491
第31話「君のための」(前編)	504
第32話「君のための」(後編)	512
第33話「Mission impossible」	535
第34話「月面旅行」	557
第35話「さようなら」	575
第36話「終わりの始まり」	593
第37話「自転車バカ」(前編)	607

- 746 最終話「守り抜け、五人の幸せ」
- 717 第40話「取り戻せ、五人の幸せ」
- 687 第39話「手に入れた、五人の幸せ」
- 626 第38話「自転車バカ」(後編)



# 第一部 b o k e t e 編

## 1話 「誓約と誤解」

「よし、今日から俺もボケ職人だ！」

夜9時、1人の男がヘルメットのような装置を被りベットに入る。ヘルメットにはコードが繋がれており、それはPCから伸びている。

(これさえあれば、寝ながらネットサーフィンが出来るんだ。苦勞して買った甲斐があった！)

男が頭に付けた装置。詳細は省くが、夢の中でネット世界に入り込む事が出来る大衆娯楽装置なのだ。それを遂に買う事が出来たという訳。男は水と共に睡眠薬を飲み干す。これで朝まで目が覚める事は無いだろう。

(…? 何処だここ、霧で良く見えないなあ……)

男は周囲を見渡すが、霧の為に視界が悪い。足元を見ると、ここが草原である事だけは理解できた。これからどうしたものか、そんな事を胡坐を掻いてぼんやりと考えていると、次第に霧が晴れてきた。

(ん? 何だあれ、シャボン玉が……)

思わず立ち上がる。まあ、当然だろう。目の前で無数に漂う巨大なシャボン玉、その一つ一つに幻想郷が映し出されているのだから。

(うわっ、此処アレじゃん! あの場合じゃん! えっマジで!? こんな風になってんだ! やつベテンション上がってきた! ヒヤッホーウ!)

忙しなく周囲を見渡し、子どものようににはしゃぎだす。男の傍に小さな紋章が描か



れ、子犬らしき生命体が召喚されるが、それに気が付くほど冷静では無かった。

まあ新規ユーザーなんて大体こんな反応ですし、大人しくなるまで待つてみましょうかね。

などと考え見守るが、一向に大人しくなる気配がない。しびれを切らし、話しかけた。

「そろそろ話をしてもいいでしょうか、新規ユーザーさん？」

「ひゃいっ!?ど、どちら様でせうか!？」

驚きながらも声の在りかを確認し、向き直る。

ソレは身体も頭も黄色く、頭からはアンテナが生えている。無論、先端は黄色だ。但し顔の部分だけは白く、黄色い髪を蓄えている以外は至って普通の犬の顔である。世の全てが面白くない、といった表情だが。

四足歩行かと思いきや、どこぞのアンアン鳴く犬宜しく二本の足で立ち上がると紳士的な会釈をして話し始めた。

「私はボケて運営事務局の者です。ユーザーの方々からは運営と呼ばれています」

「なんだ、運営さんかあ。びつくりさせないで下さいよ」

「どうもすみません。そんな事よりですね、これから初期設定をして頂きたいのですが

宜しいですか?」

「するのは良いけど一個質問良いですか?なんで俺はここに?」

「なあに、簡単な事ですよ。貴方ヘルメットの設定に”東方好き”って書いてたでしょう?だからですよ」

「あ、なるほど」

「解決ですね。それでは初期設定をします、お手元の画面からどうぞ」

「お手元…?おお、何だこれ!スパイクツズみてえ!」

ふと左手に目をやると、腕時計のような物から映像が空中に映し出されている。テンションが荒ぶるのを嗜められながらも、どうにか終えた。

「ふむ、”自転車バカ” ですか。ではこれからそう呼ばせて頂きますね」

「…あの、ひとつ聞いてもいいですか?」

「何でしょう?」

「ほら、幻想郷って人喰い妖怪なり吸血鬼なり居るじゃないですか。そいつらに殺される事ってあるんですか?」

「心配いりませんよ。東方に限らず、ボケての作った二次世界はアトラクションのよう

なものです。キャラクター達は基本的には原作通りの性格にしていますが、ユーザーであるお客様に危害を加えそうな都合の悪い部分は消してあります。皆様に手を出す事はしませんよ」

「良かったあ…」

「まあ場合によつては攻撃されるかも知れませんが、防ぐだけの能力は授けてありますので。いざという時は頑張つて下さいね。」

「万が一殺害に至つてしまつたら、場合によつてはその世界ごと消して作り直しますので」

「さうつと恐ろしい事言いますね」

「あ、それからもう一つ。ユーザー様のアバターの件ですが、初期設定はコナンの犯人のように全身真っ黒にしてあります。生活していくに連れて徐々に性格や能力の強さに合わせた人物像となりますので、鏡を見てもビックリしないで下さいね？」

「わ、分かりました……これで終わりですか？」

「いえ、最後に＜名だしの誓約＞をして頂きます」

「名だ……何ですかそれ？」

男が疑問を口にすると同時に、一陣の風が吹いて身体が宙に浮かび上がる。

「うわわっ！何事!？」

「これよりく名だしの誓約をを行います。どうか静粛に」

「アツハイ」

「……貴方はいずれ、ある出来事がきっかけとなり子会社を立ち上げる事になるでしょう。他人の嫁を4人、保護する事になります」

(嫁……?何言ってるんだこの人)

「その功績が認められて下請けから独立し、会社名を付ける時が来ようとも絶対に、名づけてはなりません。良いですね?」

「名前をつけたらどうなるんです?」

「貴方のアカウントを削除します」

「!？」

「名づけをしない限り、貴方は幻想郷での自由が認められます。…以上を持ってく名だしの誓約を終了します」

風が止み、身体が地面へと降りていく。だが、止まりはしない。地面をすり抜けてどこまでも落ちていくのではないか。



一方その頃、迷いの竹林では。

「つたく、あの野郎。今度こそとつちめてやる」

炎を出しながら怒っているのは紅の自警隊こと藤原妹紅。誰かを探しているようだが、永遠亭に向かつてはいない。当てもなく竹林の中をうろついている。そこへ、人が落ちてきた。考えるが速いか、なんの迷いもなくお姫様抱っこで受け止めて地面にそつと降ろす。振動で気がついたのか、落ちてきた男は目を覚ました。

（ん…竹藪だ。助かったんだ、良かったあ……え？竹藪？）

勢いよく起き上がる。顔が真っ青なのは落ちてきたせいでは無いだろう。辺りを不安げに見渡していると、背後からの熱気と殺気に動きが止まる。

「何だ、アンタだったのか。なら助けなくても良かったな」

「ええと…どちら様で」

「とぼけたって無駄だよ。今度という今度は許さない。その浮気ぐせは、死ななきや治

らないのかな？」

「ご、誤解だ！浮気なんかしてないって！そもそも嫁にしたいくらい可愛いなって思ってる人こそ居ますけど流石に嫁は居ませんよ!？」

「この野郎……!」

このまま溶けるんじゃないか。そう思える程の炎で自身の回りが燃えている。死を覚悟したその時、声が聞こえてきた。

「ちよつと待った妹紅！それ俺じゃねええ！」

『!?!』

続く。

## 第二話「初投稿」

「ちよつと待った妹紅！それ俺じゃねええ！」

息を切らし、彼女を呼ぶ男は走ってくる。叫び声を聞いて動きを止めた妹紅の右腕は炎を纏っており、振り抜かれていたら命は無かつただろう。

「さ、鯖の味噌煮?!…が二人?どういうこと?」

「はあ…はあ…あつぶねー、間一髪だったな」

「あ、違うわ。本物はこつちか。じゃあお前誰だよ?」

「ちよ、ちよつと待って!何がどうなってるのか先に説明を求む!」

「はあ?何言って…」

訝しがる妹紅を遮り、息を整えた男が話し出す。

「説明しよう!いや、この場合は違うな。紹介しよう!俺は鯖の味噌煮、そこで美しく燃えてる妹紅の旦那だ。よろしく!」



そういうと、鯖の味噌煮なる人物は妹紅の肩に手を回して引き寄せる。

「ちよ、おまつ…」

顔が赤くなり何も言えなくなった妹紅を見て、自転車バカの頭にはクエスチョンマークが無数に浮かんだ。

「だ、旦那？え、何、あんたら結婚してたんすか？」

「おいおい、愚問にも程があるぞ？数ある幻想郷の中で唯一、正式に結婚出来るのが此処なんだ。してて当然だろう？競争率は半端じゃないけどな。」

それはそうと、お前こそ誰だ？見ない顔だが…

「俺は自転車バカ、今日からこの住人になった新規ユーザーだ。今さっき、その不死鳥に危うく殺される所だったんだ。どうもありがとう」

「そうだったのか、俺の嫁が迷惑かけたな。ほら、お前も謝れ」

「あ、えと…その…すまない（—・—）」

（やだ可愛い）

「そ、そうだ！お前新規ユーザーなんだろう？な、なら説明しなくちゃな！な!?」  
「おっと、そうだな……おーい、射命丸やーい!!」

男は天を仰いでその名を叫ぶ。すると5分と経たない内に、うなるような風と共に一人の人物が舞い降りる。月明かりで照らされた黒い翼が、大きく、ゆつくりと動いている。

「はいはい♪何かご用ですか?」

「こいつが今度の新規ユーザーだ、説明してやってくれ。俺らはこれで失礼するわ。じゃーな」

「あやや、行っちゃいましたか……まあ良いでしょう。」

さて、幻想郷へようこそ！ご存知とはおもいますが私、妖怪の山で文々。新聞という新聞を出している伝統の幻想ブン屋こと、射命丸 文と申します！以後お見知り置きを」

「はあ、どうも」

ピコン！と腕につけた装置が音を立てる。装置を覗くと、画像の下に文章が書かれて

いる。思わず朗読。

「ご、誤解だ！浮気なんかしてないって！…？何だこれ」

「お、さつそく投稿しましたね。ふむ、初投稿にしては良いんじゃないですかね」

「この、画面に表示されてる1とか10とかの数字は何なんですか？」

「かいつまんで言うと、その1という数字は貴方の残基のような物です。余程の攻撃を受けられない限りピチユるだけで死には至りません。」

そして10という数字は貴方がスイッチを入れた状態での戦闘可能時間です。入ると一定時間だけ身体能力が向上するシステムです。1||1分なので今は10分が限度ですね。

因みに、長い人は1ヶ月以上ぶつ通しで行けます」

「1ヶ月!?ほえく…あ、どうすればスイッチが入るんですか？」

「人には特有の動作があります、絶対にその人しかやらない動きというものがね。それを見つけて下さい。そうすればスイッチが入ります。消す時も同様に動いて下さい」

「ラグビーで言うルーティンみたいなもんですか?いや、知らんけど」

「ざっくり言うとそんな感じですよ。他に質問はないですか?なければこれで失礼します  
が」

「うーん、無いな。説明あざっした」

「お役に立てて何よりです。また何かあったら呼んで下さい。それでは！」

そういうと、自身の電話番号を書いたメモを残して来た時とは逆に音も無く去っていく。しばらく眺めた後、ぎこちなく腕の装置を操作して電話帳に追加し、ふと我に帰る。

(あ、そういやここ迷いの竹林じゃねーか！やべえ！どっから出るんだろう!?)

彷徨うこと一時間。腕の装置を活用し、どうにか抜け出せた。木の幹にもたれて座っていると複数人の声が聞こえてくる。会話を聞いていると、嫌でも穏やかな雰囲気にな

い事に気付く。

「な、言った通りだったろ？このロリ妖怪。さつさとやっちまおうぜ」

「待て待て、こういうのはある程度慣らしてからの方がぜってー良いから。もちつけお前ら」

「バツカ、育てる楽しみを奪うんじゃないやねえよ。お持ち帰りしようぜ」

息を殺して様子を伺うと、赤いリボンを頭に結んだ金髪の少女が村人に囲まれている。今にも泣き出しそう。

（あいつら…何であそこまで強気なんだ？ルーミアもそうだ。人喰い妖怪だろ？なんで人間相手に怯えてんだよ）

「しっかしお前もバカだね。そんなリボンさえつけなきゃ、こんな目に遭わずにすんだのになあ」

一人がニヤニヤしながら言うと、3人は下卑た笑みを浮かべて笑い出す。それを聞

き、一つの仮定を導いた。

(ひよつとして、ここのルーミアはリボンの封印を解かなきゃタダのロリ妖怪なのか？  
 だったら微塵も怖くないのも頷けるけど……さて、どうやってあの馬鹿共を……？ 何か  
 来る、何だあれ……人か？)

ドス黒く禍々しいオーラを放ちながら結構な速度で近づいてくる人が見える。目の  
 焦点を合わせると、頭の上に出ているアイコンに⑨—③—③／糸工竹世 と出ている  
 ではないか。

「マズイ！ 投稿したボケの大半が旧暦ネタな事からその名が付けられたという旧暦の人  
 だ！」

「説明乙！ 激おこプリンプリン丸じゃねえか！ ずらかるぞ！」

「最早幻想郷でも死語だぞソレ！ くそっ！ 良い所だったのによお！」

3人は一目散に駆け出した。だが、逃げ切る事は出来なかった。

ある程度近づいた瞬間、射程圏内に捕らえた旧暦の人は姿を消した。と同時に轟音が

響き、3人は一瞬で地面に埋められた。肩から下がそれはもうすつぽりと。いつの間に立てたのか、

「彼らはDMです。どうか虐めてやって下さい」

という看板がセットになっている。

奴ら、気がついたらどんな反応をするのだろう。

「……」

自転車バカは考えた。

「ぷぷぷ」

ちよつとワロタ。

「まったく、俺の嫁に手を出すからこうなるんだ。覚えとけ、次は全裸にして木に括り付けてやるンゴ」

「怖かったのだー！」

「おおよしよし、もう心配いらなからな。無事で良かったよ。さあ、帰るぞ」  
「うん！」

手を取り合い、二人はネオンが輝く人里へと歩いて行った。

続く。



### 第3話 「下請け始めました」

(いや、昨日は楽しかったなあ。炎で包まれそうになったのは死を覚悟したけど)

鼻歌混じりで寝巻きに着替えているのは自転車バカ。あの後人里を探索し、どうにかアパートの一室を借りる事が出来た。ひと段落した所で程よい時間となり、ログアウトしたのだ。

(お、もうこんな時間か。おし、そろそろ寝よう。今日はどこへ行くかな)

ヘルメットを装着し、睡眠薬を飲んで布団に入る。再び目が覚めると借家の中に居た。時刻はAM9:00。

前回はログイン時の時間帯を間違えた為、今日は昼夜を逆転させたのである。  
じゃないとみんな寝てるし。

(さてと、本当にどこ行こっかな……いや、悩むくらいなら文さん呼んだ方が早い)

腕の装置を通話モードに切り替え、数回の呼び出し音が鳴った所で切った。玄関から着信音が聞こえてきたからだ。玄関を開けると、ニヤニヤと笑う文がスマホを耳に当てていた。

「もしもしー?」

「……なんで数回コール音なった時点で既に来てるんすか。いや、呼んだけでも」

「ふふん、私の速さを舐めて貰っちゃあ困りますね。このくらいは朝飯後ですよ」

「食ったんかい!」

「ごちそうさまでした!」

「おそまつさま…じゃなくて、実は」

「どこへ行ったら良いか検討もつかない。ならば知ってる人に案内して貰おう。でしよ  
う?」

「…その通りです」

「新規ユーザーが考える事なんてお見通しですよ。ふふつ…さあご案内しましょう。妖  
と人が織り成す忘却が集う里…幻想郷を」

「何スかその適当な……ッ!」



背中に双丘が当たっているのだが、それどころではない。

「……大丈夫ですか？」

「……」

「？」

「これが大丈夫に見えるなら今すぐ眼科行ってこい！死ぬかと思ったわ！そして何故飛んだしー！」

「地底に行くからですよー」

「答えになってな……ぬおおおおおおおおおおお……」

急激に速度が上がリ、最早叫ぶ余裕すらなくなってくる。からの気絶。

（あれ？確かさつきまで飛んでた……いや、飛ばされてた気が……どこだ……）

「あ、気がついた。さとり様ー、起きましたー」  
「!?」

飛び起きようとするが、身体に力が上手く入らないので思うようにいかない……つていうか寧ろ脚が細く震えている。仕方がないのでゆっくりと起き上がる。足元を見ると、赤いソファーに横たわっていたのだと気付く。頭があつた場所には太ももがあり、見上げると黒の下地に何やら緑の模様の入ったゴシッククロリータファツシヨンのような服を着ている人物がいる。膝枕をされていた事に驚くも、叫ぶ気力が残っていないのでソファーに座りなおして挨拶。

「あ、どうも初めまして。新規ユーザーの自転車バカです。貴方は？」

「よくぞ聞いてくれた、あたいは灼熱地獄跡で怨霊の管理を任されている妖怪にしてこの地霊殿の主人、古明地さとり様のペット。火焰猫 燐って言うんだ。お燐って呼んでくれ！」

「……」

「説明が長くて何言ってるか分からなかったが、この人がお燐か。生で見ると思ったより背が近いなあ」

…ね。それだけ分かっていれば充分よ」

「!?」

「あらあら、心を読まれるのは初めてかしら? そんなおいしい反応は久しぶりね」

そう語るのはやや癖のある薄紫のボブに深紅の瞳を持ち、フリルの多くついたゆつた  
りとした水色の服装をしている古明地 さとり。続けて話す。

「挨拶が遅れたわね、私は“みんなの心の病み”こと古明地 さとり。もう気づいてる  
でしょうけど人の心が読めるの。よろしくね」

「こ、こちらこそよろしくです」

「あの、もう良いですか?そろそろ本題に入りたいのですが」

『あ、どうぞどうぞ』

「今回自転車バカさんを連れてきたのは他でもありません。現在進行中の地底ピーア  
ル projectに参加して頂きたいのです!」

「地底……何故に?」

理解が追いつかないので聞き返すと、三人が代わる代わる答えた。

「原作や二次創作、さらには人気投票のおかげもあって、地底の世界は過去と比べて観光客が増えたの」

「でもまだ固定客がついたってだけなんだ。利便の悪さもあってか、守谷よりも数は少ない」

「このまま廃れていくのは何としても避けたい。そこでふと思いついたんですよ、短編でドラマを撮って地上で放送してはどうか　ってね」

「でも何を撮ったら良いのか分からないの。なんせ初めてやる試みだから」

「頼むよ、協力しておくれ」

考え込む事、およそ5分。さとりが読み取った。

「なる程……そのアイデア頂いても？」

「ああそつか、言わなくても分かるんでしたね。これならある程度需要がありそうだし、使えるんじゃないっすか？」

「さとり様、如何でしょうか」

「お燐、お空とこいしを連れてきてちょうだい。詳しいことは全員揃ってからよ」

かくしてさとりさん全面監修の元、撮影は始まった。色々とハプニングもあつたらしいけど、俺はその場に居なかつたからよく知らない。

1ヶ月後、ポストを除くとさとりさんから手紙が届いていた。感謝の言葉と撮影中のあれこれを書いてあり、読んでいて面白かつた。敬具の代わりにタイトルが添えられていたのはわざとなんだらうか。

「地霊殿 エピソード0

くもうひとつのサードアイク

」



続く。

## 第4話「活動開始」

午前9時。アパートの一室である302号室の玄関を叩いている人物は紛れもなく射命丸 文。今日から自転車バカを部下としてこき使う為、わざわざこうして赴いている。自分の家に来させても良いのだが、

「辿り着く前に日が暮れる」

という理由で断られてしまった。

まあ仕方ないかと諦め、玄関を開けながら催促する。

「ほれほれー、いつまで支度してるんですか。さっさと行きますよー」

部屋の中では、胸をなでおろし安堵する自転車バカが居た。

「ログインと同時に玄関叩くの止めて下さいよ…心臓止まるかと思ったじゃないですか」  
「九時に来いって行ったのは貴方でしょう？文句言わないの！」

「わ、分かりましたよ…で、今日は何を？」

「二つほど依頼を取って来ました、今日はそれを片付けて貰います」

「場所は？」

「二つとも妖怪の山です。さ、行きますよ。前回の失敗を踏まえて今日は“ゆつくり”飛んであげますから」

前回同様、UFOキャッチャーに捕まった景品のように抱えられて飛び上がったのだが、その代わりに高度が高かったのは言うまでも無いだろう。会話が出来るくらいの速度だったのが功を奏したのか、辛うじて気絶はしなかった。

暫く飛ぶと、前方に山が見えて来た。何処かと思いきや、思考を巡らせようとしたが、ロープウェイが見えた。妖怪の山だ。そういやさつき言われたな。地面に降りて解放されると深呼吸をし、ようやく人心地ついた。

「さ、着きましたよ」

「あー怖かった。つたく、何もあんな高く上がる必要無かったでしょうに」

「あんなおいしい反応をするからですよ」

「畜生、何も言えねえ」

「そんなことより、あの人が最初の依頼者です。挨拶して下さい」  
「あの人？」

文が指さした先に居た人物は、ウェーブのかかった外ハネが特徴的な青髪で、赤い珠がいくつも付いた数珠のようなアクセサリーでツーサイドアップにして、緑のキャスケットを被っている。瞳の色は青色だ。服装は肩の部分にポケットが付いている水色の上着、そして裾に大量のポケットが付いた濃い青色のスカートを着用している。靴は長靴のようなものを履いており胸元には紐で固定された鍵がついている。

二次創作では現代を遥かに凌駕する程の科学力を持つ妖怪、河城にとりだ。

「や、やあ」

「初めまして、自転車バカって言います。新参者ですがどうぞよろしく」

「き、君が自転車バカなのか。その天狗様から話は聞いたよ。私は水中のエンジンア  
こと河城にとり。にとりって呼んでくれ」

「天狗様って呼び方は原作と一緒になんだ……じゃあにとりさん、依頼つてのは？」

「それについては私から説明しましょう！」

「あ、どうぞどうぞ」

「なんだこのデジャヴ」

「結論から言うとうと、地霊殿の時とほぼ一緒です」

「てことは、えーつと……」

妖怪の山に来る人間をもう少し増やしたい、その為には人里で宣伝する必要がある。でも何をどうやってやれば良いのか分からない。つて理解で良いっすか?」

「…よく分かったな。その通りだよ、力を貸してくれないかい?」

「あ、今回はドラマでなくて結構です。今でも充分来てる方なのでね」

「うーん……ちよつと難しいな。もう少し話を聞かせて下さい」

「お、散歩ですか? 良いですねえ、そうしましょう!」

「いや、散歩するなんて一言も言ってますんけど……なんでそんな乗り気なの?」

「当然でしょう? 貴方がここの地勢を覚えれば、次から借家に行かなくて済むじゃないですか」

「自分の為かよ!」

「清々しいくらいの本音だな」

「考えてみて下さいよ。どうしてボロ雑巾が如くこき使う部下を、いちいち家まで迎えるに行かなきゃいけないんです? たかが人間の為に」

「高飛車などこまで原作通りかよ……」

「諦めろ、自転車バカ。この人はこういう性格なんだ」

「他の幻想郷に行けば良かったなあ」

なんだかんだ言いつつも散策開始。思ったより広大だったから、にとりさん家と守谷神社に行く道しか覚えられなかった。

これを拳ひとつで吹き飛ばすとか鬼の腕力怖すぎだろ。

道中で話を聞いてるとアイデアが纏まったので、にとりさんに話す。

「雑誌かあ、悪くはないけど……」

「何か問題が？」

「あいにくと文章書くのは苦手なんだよなあ、しかも宣伝文句だろう？」

「まあ、そうなりますね」

「それなら私にお任せを！得意分野ですから」

「おおその手があったか！気づかなかった」

「悪いね、恩に着るよ」

「カメラの修理でお世話になってますから、これくらいお安いご用ですよ」

「じゃあタイトルは 月刊「にとり s 工房」で決まりだな」

「ひゆい？わ、私の名前を出すのか!？」

「監修は貴方にして頂くつもりですから」

「となると表紙はにとりさんが飾った方が良いですね。ねえ文さん？」

「それもそうですね。まあ細かい段取りは後でしましょう。我々はここで失礼します」

「ん？どこか行くんですか？」

「ええ、二人目の依頼人が待つてますので」

「……いまいち納得がいけないが、よろしく頼むな」

「任せて下さい！行きますよ、自転車バカさん」

「え、ちよつまっ」

右手を掴み、心の準備もさせず文は強引に飛び立った。小さくなる断末魔と姿を眺め、にとりは疑問を口にした。

「……あいつその内死ぬんじゃないのか？」

「お待たせしました、二人目の依頼人です」

と呑気に言う文とは対象に、当の本人は地面に横たわっていた。安全装置の無いジェットコースターを身一つで味わったのだ、気絶してないだけでも褒めて欲しいくらいである。

出来ればもう少し休みたかったが、呼びかけが煩いので上半身だけ起き上がった。

「はあ…はあ…？誰の家ですか此処」

「私の自宅です」

「なんだ、文さんが依頼人だったんすね」

「はい、これからの時期に合わせて新聞の号外で何を出したのか迷ってましてね」

「…ファクション特集でもやったらどうです？」

「それは良いアイデアですね！どことなく投げやりなのが気になります」

「だって、ネタを考えるのは文さんの本職でしょう。俺みたいなのに助け求めてどーすんの」

「痛いところついてきますね…確かにそうです」



じつと睨む。罵倒されるわ物理的に振り回されるわの挙句がこれだ。何か腹立ってきた。

「いやあく、一人で考えるのって結構面倒くさくって」

「知るかそんなの！はたてでも頼ってる！俺はもう帰る！」

「あ、最後にひとつだけ！」

「まだ何か？」

「見出しはどうしたら…」

「勝手に悩め!!」

「あややく…ホントにログアウトしちゃった、少々やり過ぎましたかね」

続く。

## 第5話 「夕方⑨インテット」

午前九時。いつものようにログインした自転車バカを出迎えたのは、ログインと同時に鳴る着信音だった。

「うわっほい！」

吃驚しつつも腕の装置を見ると、通話画面が宙に浮かび上がっている。文からだ。スマホの要領で電話を取る。

「おはようございます。ログインと同時に電話かけるの止めて貰えませんか？」

「おはようございます。いやね、いい加減チャイムだと飽きるかと思ひまして」

「そこまで気イ使えるんならログインと同時になんかすんの止めてください。大体何で俺ん家知ってんすか」

「椀が千里眼で」

「マジでか」

「無駄話をしてる時間はありません、さっさと妖怪の山に行きますよ」

と言うと文は通話を切り、持っていた合鍵で玄関を開ける。勿論、本人に了承など得ておらず無断で作った物である。抗議する彼を遮り、手を取ってロープウェイへと歩いて行つた。

「ここで合ってるんですよ？」

「…？そうですよ、お伝えしたじゃないですか」

「いや、それはそうなんすけど。なんかこう…寒くないですか？」

「ああ、それは…」

「あたいが居るからだよーん！」

「!？」

突如現れた人物の身長はかなり低く、青い服装に氷の羽根を持っている。髪は薄めの水色で、ウエーブがかかったセミショートヘアに青い瞳。背中の羽は六枚で、青の大きなリボンをつけている。服装は青いワンピース（スカートの縁に白のぎざぎざ模様）を着用し、首元には赤いリボンが巻かれている。足元には水色のストラップシューズを履いており、何とも動きやすそうだ。

「やっぱりあんただだったのね。何？またしばかれに来たの？」

「やだよ！出会って3秒でしばかれるなんて理不尽過ぎるよ！」

「AVの宣伝文句で似たようなのがあったな」

「とりあえず冷気しまいなさい、迷惑だから」

「あ、うん」

（おお、寒くなくなつた。ここのチルノは冷気の出し入れが出来るんだ）

「で？用件は済んだ？ならさっさと帰る」

「だーかーらー！」

「もういい、私が説明するよ。チルノじゃ無理だ」

「あ、にとりさん居たんすね」

「光学迷彩で様子を見てたんだ、チルノがどうしても

”自分で説明する!”

って言ってるから」

「説明?」

「そうだよ!一言も出来てないけどな!」

「実は、こいつら⑨インテットが虹川三姉妹と一緒に今日ライブをやるんだ。それを見せようと思ってね」

「あやや、雑誌の件では無かったんですね」

「虹川?ああ、プリズムリバーの事か。でも何で?」

「雑誌の件では世話になってるからな、礼をしたんだ。それに…」

「それに?」

「ほ、本当の事を言ったら断られるかと思って…//」

(絶対友達少ないだろこいつ)

(お前、空気は読めるのな)

(なんだってサイキョーですから!)

「いや、関係ないだろ」

「ん？どうかしましたか？」

「何でもありません。ライブは分かりました、それとにとりさんがどう関係あるんです？」  
「この人はライブで使うスピーカー（JBL）の提供主なんです。ま、スポンサーみたいなものですよ」

「今から最後のリハやるし！見てってよ！」

「うーん、リアルじゃ一度もライブを生で見る機会無かったし……良いね！見させて貰うよ！」

「決まりだな、それじゃあついて来て。会場はこっちだ」

先導されるまま歩くこと30分。だんだんと視界が開けてきた。

木々を抜けると広大な平野が広がっており、中央通路の付いた特設ステージが一つ。それを囲むように露店が立ち並んでいる。

「到着く！どうだ、広いだろ！」

「おぉー！」

「何度来ても素晴らしい広さですね、建築を鬼に依頼したのは伊達じゃなかったか」

「マジっすか、どうりで広い訳だ」

「最大で5千人入れるんだぞ！しかも飲食店のブースまであるんだぞ！凄いだろ！」

「超パに出演したのが効いてるな。すっかりいいところ取りが出来てる」

「お、焼きそば発見！あつちにはどうもろこしも！すっげえ！あ、しまった。金足りるか  
な？」

「全然話聞いてませんね……やれやれ、あれじゃ唯の小学生ですよ」

「尻尾降って喜んでるよ、さては全部回るつもりだな」

「おーい、自転車バカー！ステージの上に立ってみるかー？」

「まじで!?行く行くー！」

「素直で良いじゃないですか。嫌いじゃないでしょう？ああいう人」

「同感だ、毎日が楽しくて仕方ないって目をしてる。私の工場に欲しいな」

「駄目です、あんな使える人なかなか居ないんですから」

「ケチ」

「何とでも」

顔を見合わせ、同じタイミングで笑い出す。

「はあ……おや？メンバーに挨拶してますね」



「段取りの打ち合わせもあるし、行こう」

この後めちやくちや楽しんだ。食い物もひとつひとつ丁寧に作られてたから美味しかったし、値段も良心的だった。ライブはどうやら今年で5年目なんだとか。チルノの歌やMCが上手かったので納得出来た。途中、来客の中に妹紅とルーミアの姿を確認出来た。声をかけようとしたが旦那と腕組んで幸せそうなので止めた。邪魔しちや悪いや。他にも居るには居たらしいけど、人の多さで良く分からなかった。ちよつとシヨツク。

全部終わった頃にはすっかり日が暮れており、星が田舎のぼあちゃん家で見たと同じくらい良く見えた。

「いやー楽しかった。それ以外の感想が浮かばない」

「嬉しいこと言うねえ。後であたいから皆に伝えとくよ」

「話の腰を折るようだが、時間は大丈夫なのか？」

「…！おっと、7時か。そろそろ起きなきやまずいな。ありがとにとりさん。じゃ、失礼します」

「ばいばーい…さて、我々は後片付けをしますか」

「だな」

「家に帰るまでがライブだ！」

「たまには良いこと言うじゃない。⑨のくせに」

「む、一言余計だ！」

「⑨のくせに」

「カムバック褒め言葉！」

「褒め言葉？ああ、良い奴だったよ…」

「大ちゃん、いつもの事と言えばそれまでなんだけど2人が苛めるー！」

そう叫んで走り出したチルノの背中に、そつと呟く。

ふうん……仏頂面しか出来ない訳じゃないんだ。

「ん？何か言ったかい？」

「いえ、何も？」

続く。

## 第6話「ラインナップ拡張」

「まだ二回目ですけど、歩いて現場に向かうって良いっすね」

「どうしてですか？」

「言わなきゃ分かりませんか？」

「あややく……これでも気を付けてる方なんですけどね」

「まあ、気を使って貰えるのは感謝してますけど」

頭を掻いて苦笑いする文と、ため息を付く自転車バカの二人が歩いているのは“人里のメインストリート”と呼ばれる大通り。

商店街もあれば歓楽街もあり、ちよつとしたビル群もある。以前は超高層ビルもあつたのだが、自治体が

「これでは景観を損なう」

と訴えたので高さ制限を設ける事になったのだ。

（しっかしまあ、科学の進歩は凄いいもんだな）

周囲を見渡し、改めて関心する。当然と言えば当然である。

大半の建物の外観はMMDで見たように古風な佇まいなのだが、一步中に入れば自分の生活する現実世界の建物とやら変わらないのだ。

初めて見たときなど催眠術かと思つた程である。

「ところで、本当にこの先に居るんですか？」

「ええ。本当なら守谷神社までひとつ飛び……なんですが、依頼主がこの時間は里で買い物兼手品をしているので」

「そこは原作通りなんだ。お、人だかりが出来てる……文さん」

「恐らくあの中心に居るでしょう。ここで終わるのを待つのも一興ですが、せつかくだし見ていきませんか？」

「異議なし」



「お待たせしました。すいませんね、まさかアンコールが掛かるとは」

「手品（タネ無し）が終わってからの約束でしたし、問題ありませんよ」

バッグを持って現れた人物こそ、今日の依頼主。胸の位置ほどまである緑のロングヘアで、髪の色は深緑だ。服装は白地に青の縁取りがされた上着と、水玉や御幣のような模様の書かれた青いスカートを着用。靴は水色のローファー、髪飾りの蛙と白蛇が特徴的だ。

「タネ有りなら散々見てきたし俺も過去にやったけど、タネ無しってやつは凄いわ」  
「そうですね、”タネも仕掛けもございません”が嘘じゃないんですからね」  
「毎回あの台詞で笑いそうになるから大変なんですよ？」

思わず吹き出す二人を、早苗は制する。

「そんなことはさて置き本題に入ります」

「あつハイ」

「貴方の活動は風の便り（物理）で聞いています。そこで一つお願いがあるのですが」  
「貴方も宣伝ですか？神社の信仰なら足りているでしょう？」

「ロープウェイだってもう試運転の段階に入ってるって聞いたけど」

「それはそうなんですけどおくその、なんて言うか…まだ欲しいというか…あるに越した事は無いというか」

「……まあいいや、これ以上つつこむと話が進まない。で、具体的に何が欲しい。とかあります?」

「そうですね、グッズはそこそこ揃えてあるし…参拝客の増加はもうすぐ解決するし…」

『うーん…』

案が出ないまま5分経過。すると自転車バカが一言。

「早苗さん、買い物まだ済んでないよね?」

「え? あ、はい、まだです。それがどうかしたんですか?」

「付き合うからそれ先に済ませちゃおう。煮詰まったら気分転換に違うことしないと。ねえ文さん?」

「はい、それが物を考える時の定石です。早苗さん、行きましょう」

「なるほど、時として常識的に考えるのもありなんです。分かりました、行きましょう」

！」

「そうこなくっちゃ」

場所は変わってロープウェイ内。

「すみません、荷物まで持って頂いて」

「大した量じゃないから大丈夫だよ。いや、強がりとかじゃ無くマジで」

「こんな量で良いんですか？」

「はい、年頃（意味深）の女子が3人ですから。それに神奈子様も諏訪子様も今ダイエット中なんです」

「そうなんですか？この前お会いした時は二人共いつも通りに見えましたけど……」

「ダイエットねえ、痩せてりや良いってもんじやないんだけどなあ。俺からすれば」

（ほっほーう……）

「今の台詞は是非お二方に言ってお上げて下さい」

「いや、言うのは良いけど逆鱗に触れるとか無いよね？なったら俺死ぬよ？肉片すら残



んないよ？」

「だーいじょうぶですって。あの二人は少し気にし過ぎてるんです。最近はお飯だつて残しちゃうし。全くもう」

「なら安心だな」

「自転車バカさんは痩せてる女の子は嫌いなんですか？」

「嫌いじゃないつすよ？ただね、俺の世界の妖怪と違って貴方達は凄く個性的だし良い顔してるんです。ポスターにして売りに出せば良い線行けるんじゃないかってくらいにね。だから何もしなくて良いんすよ。ありのままが素晴らしいんだから」

「は、恥ずかしくないんですか？そんなこと言つて／＼」

「ありのまま：／＼」

「つて台詞を誰かが言つてたような、そうでもないような」

「いや、引用かい！」

「しかももう覚え！」

「なんか可笑しな事言いましたか？あんたらの旦那だつてどうせ似たようなプロポーズしたんでしょ？まだ会つた事ないけど」

『ギクツ』

「お、着いた着いた。歩かないで良いのは楽だねえ」

ロープウェイを下りて神社へと歩き出す彼に聞こえないように、二人は声を潜めて会話をした。

(こつちが既婚者だと知つての発言でしたか、やりますね)

(やつぱり文さんもそう思いましたか、だからあんな恥ずかしい台詞言えたんですね)



「という訳で、私が今度発売されるカレンダーの表紙を飾る事になりました」

「うん、説明ありがとう。よく分かった」

「でも最後の部分はいらなかったよね」

「すみません、話し出すと止まらなくなっちゃって。つい」

「いいよ、いつもの事だし。で？その”自転車バカ”ってのはどこに居るの？」

「そういえば姿が見えないね。早苗、どこに行ったか知ってる？」

「なんか”次の依頼者が待ってるから”とか言つて飛んでっちゃいました」

「せわしないな」

「構わんよ」

「それちよつと違うんじやない？」

「そーだっけ？」

（本当仲良いですね、この人達は）

人里の外れにある大木、その下で立っている人は赤いマントを身につけて、そのマフラーのような部分で口元を隠している。ショートカットの赤い髪で青い大きなリボン着头に着けており、リボンと黒い服には周りに赤い刺繍がついている。服装は赤いミニスカートと黒いブーツを履いていて、ブーツにも赤い刺繍もしくは紐のようなものがついている。赤蛮奇だ。

「おそいな…何してるんだろ」

「すみませーん！遅れましたー！」

「ふう、流石にもう気絶はしないな」

「あんたが遅れるなんて珍しいじゃない。最速さん？」

「あはは、思ったより一つ目が長引いちやったもので」

「まあ来たんだから良しとするよ。そっちが自転車バカ？」

「どうも初めまして。自転車バカって言います。よろしく」

「早速本題に入りましょう。確か…人間と仲良くなりたいでしたっけ？」

「そうなんだ。このプライドと性格のせいで上手く馴染めなくてね。友達と呼べる奴だつて影狼と小傘くらいだ。どうにかしなくちゃいけないんだけど…」

「どうします？カレンダーの順番に入れるのは確実として…」

「速効性があるものとなると…やっぱり」

『雑誌しかないか…』

「ぞ、雑誌？どうする気だ？写真でも載せるってのか？」

「それなら紹介文も書いた方が良さそうですね」

「え」

「袋とじにすれば買う人も出てくるでしょうね」

「あの」

「でも肝心の中身はどうします？上手くやらないと見て貰えませんよ？」

「そこなんだよな問題は…」

「ちよつと」

「そうだ！こういうのはどうです？」

「なんです？」

「ねえ」

「にとり、s 工房は妖怪の山を紹介する雑誌でしょう？なら今度は人里を中心に幻想郷全土のあれこれを紹介するってのは」

「良いっすねそれ！その路線で決まりだ！」

「だから」

「そうなるのと取材範囲がとんでもない事になりますね、まあ貴方も飛ぶの慣れたし大丈夫でしょう」

「飛ぶつつつても俺は文さんにUFOキャッチャーのごとく捕まってるだけです」

「という結論になったのですがどうですか壱奇さん？」

「何かこれは！っていうのあります？」

「…物凄くとんとん拍子に話が決まったけど、概ね異論は無いよ。その案に賛成」

「じゃあ、これで終わりですね。時間も余ったことですし、どっか喫茶店でも行きませんか？人間慣れの練習も兼ねて」

「賛成、俺も東方にわかファンだから赤壱奇さんの事もっと知りたいし」

「全く都合の良い…っていうか息びったりだなあんた達」

「ま、なんだかんだ言って私の部下ですから。これくらいは昼飯前ですよ」  
「腹減ってるんなら素直に言えばいいのに」

「それな」

続く。

## 第7話 「命を懸けて」

ログインをして約2分が経過した頃、腕の装置が振動し着信画面が浮かび上がった。毎度の事ながら何でここまでタイミング合うんだろう。

と思いつつ画面を見るが、掛けてきた相手は文では無かった。

「もしもし。えっ、にとりさん？」

「もしもし。そうだ、私だ。驚かせて申し訳ない」

「いや、ログインと同時にじゃないんで大丈夫ですよ。文さんじゃないことに驚いたってだけなんで。どうかされましたか？」

「ああ。呼びつけるように申し訳ないが、話したい事があるからとある場所まで来て欲しいんだ。迎えに文を行かせる。来れるかい？」

「はい、大丈夫ですよ。何分以内に来いとかあります？」

「えっ」

「えっ?」

「あいつ……:はあ、何か泣けてくるよ」

「はい?」

「何でもない。時間はいくら掛かっても構わないから安全に来てくれ。良いね?」

「あ、はい。分かりました、失礼します」

「うん、じゃあ切るよ」

通話を切り、彼女の応対に疑問を持ちながらも文からの電話に出た。



「すみませんね、わざわざ運んで貰って」

「お気になさらずとも、これくらいは問題ありませんよ。しかし、何をやらかしたんです? 貴方が呼び出しをくらうなんて」

「身に覚えがないだけにちよつと怖いっすね」

文に例のごとく運んで貰う自転車バカだが、文は完全に面白がっている。その下卑た笑みに腹を立てるが、そんなもので動じる彼女ではない。



「ま、私としては面白い記事になればどうだって良いんですけどね〜」  
「はあ…」

ときどき嫌になるな、この人の部下なのが。

「さ、そろそろ着きま…おや？誰か居ますね」

「誰かって呼び出したにとりさ…本当だ、誰かいる」

呼び出された場所に居るのはにとりさんだ。それは間違いないんだけど…にとりさんの服装を男性用にアレンジしたような服を着た隣の人は誰だろう？旦那さんかな？だとしたら俺は怒られるのかな？いや待て、危ない発言も行動もしてないから大丈夫のはずだ。大丈夫大丈夫。

地面に降り、姿勢を正す。

「やあ、初めましてだね。俺はトム。ここに居るにとりの彼氏だ。急な呼び出しですまない、話があつてね」

そう言い、頭上にトムと表記された男は左腕に抱き寄せた彼女に視線を移す。いつものキリつとした表情は何処へやら。頬を赤く染めてトムを見つめている。

「あ、こちらこそ初めまして。自転車バカつて言います。どうぞよろしく」

にとりさん、あんたそんな表情出来たんだね。初めて知ったよ。

「やれやれ、彼氏の前だといつもこれですよ。その癖、どうにかした方が良いんじゃないですか？」

「俺からすればキリツとしたにとりさんしか見てないから凄く新鮮ですがね」

「これじゃ話が出来そうにないな。仕方ない。俺から言うよ。今日来て貰ったのは理由があるんだ」

「理由？」

「実は昨日紅魔館から招待状が来てね、中に”お前らの一年記念日を祝ってやるから来いコノヤロー”って書いてあったんだ」

「何という上から目線…ってか言葉使い汚いな」

「良いじゃないですか、おめでとうございませう。何でそれを俺に？」

「にとりにこの事を話すと

それなら自転車バカを同行させてくれないか

と言われてね。聞けばにとりの為に雑誌を作ってくれたそうじゃないか。お礼も兼ねて紅魔館へ行かないか？」

「紅魔館かあ…：そういえばまだ行ってなかったな」

「それなら尚更好都合だ、一緒に行こう」

「なるほど、だからここに來させたんですね」

「ドユコト？」

「紅魔館ならここから歩いて行けますよ」

「そんな近いの!？」

「近いよ、だってここは霧の湖だからね」

「霧の湖！そりや視界が悪い訳だ」

「なんだかネタの匂いがあるので私もご同行します！」

「それで良いのかあんたは」

「let's go！」

(そしてこのにとりのハイテンションである)

10分と歩かない内に霧が晴れ、赤くそびえる館が見えてくる。話をしてあるのだから、門番はあっさりの中へ通した。便乗して入ろうとした白黒の魔法使いを除いて。門を開けると既に用意が整っており、館の面々がそれぞれの旦那を連れて談笑していた。トムも輪の中に混ざっていく。文は写真を撮るのに夢中だ。皆をぼんやり眺めていると思わず呟く。

「あれ？あの姉妹は日光当たったらヤバイんじゃない？」

「それなら問題ありませんよー」

「お、美鈴さん…と、そちらは旦那さん？キヤーイクサーンって言うんすね」

「ども、よろしく」

「こちらこそ」

「…話をしてても宜しいですか？」

「あつハイ」

「一から説明しますね。まずパチュリー様がお嬢様の要望で館全体を覆う特殊な結界を編み出したんです。太陽の明るさだけを通す奴をね。」

「でもずっと張り続けるのはきついので装置で制御出来ないか、と山の河童達に依頼したんです」

「……その開発責任者がにとりさん？」

「ご名答」

「で、その装置が出来たからああやって敷地内であれば外に出ても平気つつーことだ」「へえ、科学と魔法の融合か。凄い事やってのけるなあ」

（あ、フラン様が居なくなつた）

（つて事はそろそろ作戦開始か）

「あ、館内見て回つても良いですか？」

「構いませんよ、どうぞごゆっくり」

（みんな、フランが戻つてきたら行動開始よ。たまたい、準備は良いわね？）

（任せろ！なあ、きいろだま？）

（おう、何かすつげえドキドキする！いい意味で）

（ドッキリ仕掛けるなんていつ以来かしら。楽しみね、ガーリック？）

（あの、パチュリー様？リハみたいに服の裾踏んですつてんころりんとか無しだぞ？）

（全てはトムさんの為ですからね！不肖小悪魔、頑張ります！）

などと言う会話が交わされていたのだが、それを自転車バカは知る由もなかった。

正面玄関を開けて館内へと入り、当てもなく彷徨う。すると、廊下の奥から一人の少

女が飛んで来るのが見えた。が、その飛行速度は彼の目で追える速度では無かった。

(トムが彼女さんにプロポーズするように仕向けるドツキリとか…お姉さまも無茶な事言うなあ)

当然ながら、考え事をしていたフランも人が居た事など気づいていない。

「……今すれ違ったのってひよつとしてフランちゃんかな？何かカラフルなモン見えたし多分そうだよな、うん。」

「しっかし広いなあ。これが紅魔館か。MMDで見た通り、本当に紅いんだな」  
「お待ちしておりました自転車バカ様」

「ん？」

「名無しの妖精メイドです。レミリア様より館内見学を手伝うよう命じられております。どうぞよろしくお願い致します」

「まじでか。じゃあお願いするよ」

(トムが連れてきた奴は運命いじって館内を見学させるように仕向けたから)

(流石お姉さま！)

「なんかアレだな」

「どうされましたか？」

「外から見ても結構デカイなって思ったけど、中はもっと広いつてのがビックリした。セグウェイが無かったら脚やばかったかも」

「ふふっ、初めて館内を見学されるお客様は皆様そう仰るんですよ」

「何作目だったか忘れたけどハリー○ッターを彷彿とさせるね」

「存じております。それ多分炎のゴブレットですね」

「あれ？知ってるんだ」

「はい、DVD全巻が最近幻想入りしましたので」

「……因みに入手先は？」

「こうりんマートでございます」

「はえ……ん？なんか外が騒がしいな。何してるん」

その時、突然の轟音と地震が発生する。転けそうになるものの、妖精メイドがしつかりとサポートに入ったので事無きを得る。地響きと天高く舞い上がった粉塵が収まると、セグウェイを降りて窓へ駆け寄る。信じられない光景が飛び込んで来た。

「何じゃこりゃ……!」

用意してあったテーブルや皿は砕け散り、地面には紅く光る槍が突き刺さっている。レミリアはおろおろ、フランは地面に座り込み、パチュリーは気絶。旦那達は戸惑いつつも、それぞれの嫁を落ち着かせようと奔走中だ。小悪魔と美鈴は倒れたトムに駆け寄っている。よく見ると彼の左腕の肘から下が無い。代わりに血だまりが出来ているではないか。気絶しそうになるもどうにか堪え、メイドに叫ぶ。

「メイドさん!!」

「何でしょう?」

「俺を今すぐあそこへ降ろしてくれない!」

「承知しました。すぐにメイドを集めます、少々お待ちください!」



「なるべく早くね！」

「盟友！しっかりしてくれ！盟友！！」

「トムさん死んじやったんですか？」

「いや、まだ死んじやいない。けど、状況は悪いね」

「美鈴、どういう事だ？」

「出血量です。このまま何もしなければそれこそ死にます」

「!？」

「おいレミイ！作戦と違うじゃないか！」

「ご、ごめんなさい…：こんなつもりじゃ無かったのよ」

「ねえお兄様…？」

「どうしたフラン？」

「私が蜘蛛なんて見つけたからこうなったんだよね？だからあいつが」

「それは違うぞフランちゃん！あの蜘蛛はコウモリを主食にするヤバイ奴だった。だからあの時叫んだのは正解だよ。フランちゃんは悪くない！」

「お兄様あ…」

「む、むきゆう〜」

「つたく、こんな時こそ回復魔法使って欲しいのになあ！パチュリー様!」

「……美鈴、悪いのはそれだけじゃないな」

「ええ、ああなつたパチュリー様は1時間程あのみまです。かといって今から永遠亭に行くのは論外ですね、彼を動かすのは危険過ぎます」

「つ、レミイ!どうにかならないのか!」

「無理ですね、こうなつたお嬢様に運命は見えません。こうなつたら私が時間を止めて永遠亭まで行くしか……!」

「止めて下さい咲夜さん!貴方1時間以上時を止めたらヤバいでしょう!この前言われたじゃないですか!」

「社畜……確かに言われました。嘘ではありません。ですがこのままでは!」

「くそ!どうすれば……!」

「おい何があつたんだよ!?!さつきまであんなに……!」

「ごめん、ちよつと待って。そのグングニル突き刺さつた蜘蛛、何か動いてない?」

『え?』

その言葉を聞き皆が振り返ると、貫かれた筈の蜘蛛はまだ生きていたどころか、身体を分裂させ増えると元気よくレミリアを追いかけた。した。

「ぎいやああああああ！こつち来ないでええええええええ！」

反射的に弾幕を放とうとするが、たまたまいが止めた。

「駄目だレミィ！そいつ多分単細胞生物が妖怪になった類だから攻撃した分だけ増える

ぞー！」

「じゃあ跡形もなく消せばいいのね!？」

「バカ野郎！そんな真似したら俺らも死ぬわ！」

「じゃあどうしろって言うのよー！」

「そいつの動き止めろ！お前の腕力ならイケるだろ!？」

「嫌よ！出来るっちゃ出来るけどこんな気持ち悪いの触れる訳ないでしょー！」

「だったらそのまま逃げ回ってろ！俺らがどうにかする！」

行くぞ野郎ども、あの蜘蛛を完膚なきまで叩き潰せ！」

『おう!』

たまたいの号令で皆が蜘蛛を追いかけ、館内へと入っていった。それを見届けた後、改めて疑問をぶつけた。

「文さん、何があつたんです？」

「えと、それが…」

「はあ？ トムさんの足元に蜘蛛が居たからレミイさんがグングニル投げたあ？」

「そうなんです、本当は投げずに脅かすだけの予定だったので…」

「盟友！ 盟友ー！！」

「に、にとりさん？ いきなり抱きついてどうしたんです？」

「頼むよ自転車バカ！ 君の力を貸してくれ！ このままだと盟友が！」

「な、なんで俺なんです？」

「…！ そうか、まだ貴方が居たじゃないですか！」

「は？」

「自転車バカさん、色々時間が無いので手短に聞きます。貴方は“スイッチ”を入れた事が有りますか？」

「スイッチ？ ああ、文さんが前に言ってくれた奴か。まだ有りません、それがどうして？」

「説明が足りませんでしたね。スイッチの入れ方は様々ですが、解放される力には2種類しか無いんです」

「2種類……」

「そう、攻撃特化型と回復・防衛専門型です」

「ひよつとしたら君の力がその回復かも知れないんだ！」

「私からもお願いします。力を貸して頂けませんか？」

「……分かりました」

「大きく深呼吸をして下さい。そうすれば何か見えてくる筈です」

（スイッチねえ、今まで使う状況になった事一回も無かったもんなあ。考えた事すら無かったよ、まあ悔やんでどうにかなるもんじやないよな。基本に戻ろう。スイッチなんだよ、それさえ入れば……ん？ スイッチ？ ……！）

「そうか、簡単な事だった。レースと同じで良いんだ」

「盟友……？」

「自転車バカさん？何のはな」

「文さんちよつと黙ってて、今スイッチ入りそう」

大きく深呼吸をされると言われた通り、頭の中に文字が浮かんでくる。

「我が名は自転車バカ、他人の勝利を支える事に喜びと生きがいを見出し、身体が動く限りアシストを続けると誓った。

友達全てを人生の勝利者にする。誰一人として、悲しませてはならない。今こそ我が力で森羅万象を光り輝かせん！」

足元に魔法陣が描かれ、右手の神秘十字線が光る。それを人差し指でそつとなぞると、両手が緑色のオーラで包まれていき、蠟燭の炎のように灯った。

「…うわ！なんか出た！どうすんのこの仄かに暖かい奴！」

「落ち着いて、両手にボールを作るイメージを描くんです」

「お、出来た！これをトムさんに？」

「はい、そつと当てて下さい。そうすれば治る筈です」

横たわるトムの左腕に当てると、少しずつではあるが失われた腕が再生されていくのが分かる。

文に視線を向け、小さく聞く。

「…これ成功で良いんだよな？」

「やった、やりましたよ！」

「助かるんだ…！」

一同が歓喜の溜息を漏らす。にとりは泣き崩れ、文は座り込む。皆、固唾を飲んで見守っていたのだ。緊張の緩和と安心で疲れが出たのだろう。

30分程続けると、腕は完璧に修復された。

目を覚ましたトムは、横たわったまま話し掛ける。

「…にとりさん、怪我はないかい？」

「盟友！…うん、大丈夫だよ」

「なら良かった、庇った甲斐があったよ」

「良かった、無事で、本当に…ッ」

右手を伸ばし、彼女の頬を伝う涙をふき取る。

「にとりさん、話があるんだ」

「何？」

「僕はただの人間だ。君達のようなタフでは無いし、ちよつとした事で死ぬだろう。

……寿命だつて短い。それでも僕は、君と一緒に居るだけで世界一の幸せ者になれるんだ」

「…うん」

「先に逝つてしまふ僕を許しておくれ…でも必ず、君を幸せにしてみせるよ。

だから僕と、結婚して下さい」

彼の差し伸べた右手を両手で掴んで、頬に優しく当て最高の笑顔で答える。

「…はい、こちらこそ、よろしくお願ひします」



誰からとも無く、暖かな拍手が送られる。鳴り止んだ後、レミリアと蜘蛛を追いかけていったはずの咲夜が一言。

「大変、まだテーブルやら料理が壊れたままだった。どうしましょう」

わざとらしく、文を見ながら呟く。意思をくみ取った文は露骨に嫌悪した。

「そこそ時間止めれば良いのに……はあ。」

自転車バカさん、お願い出来ますか？」

「おっけ、引き受けた。せーの、よっこいしょういち！」

『古っ！ギャグ古っ！最早懐かしっ！』

両手に作った緑色の球を地面に撃ち込む。すると5分程で元に戻り、心身共にボロボロになったレミリアが出てきて再開の宣言をした。

「さ、さあ！パーティーの続きよ！」

「あれ？蜘蛛倒したんすか？」

「ええ、残基20と引き換えに自爆して塵一つ残さず消してやったわよ」  
『ベジータかお前は』

宴は夜まで続いたが、ドツキリを敢行した一同の謝罪も夜まで続いた。

続く。

## 第8話 「今週の俳句モデル」

「あ、そうなんすか？流石っすね。

……はい、はい。分かりました、失礼します」

自転車バカは電話を切り、椅子を回転させて机に向き直る。画面には通知が何件も来ていたが、あまりの量にチェックする気が失せたので閉じた。

例の事件以降、トムにフォローされたのでメッセージや電話が頻繁に来るのだ。しかも、彼が事件の概要をSNSでアップした為に自転車バカの知名度も結果として上がってしまった。通知の大半は冷やかしのだが、中には好意的な物もある以上おろそかにも出来ない。

「うーん、良いことには違いないんだけど…」

悩みの種はそれだけでは無い。悩んでいても仕方のない事なのだが、どうしたって気になるのだ。ついでに言うところ現在彼が居るのは妖怪の山にある文々。新聞社であり、文

が立ち上げた会社である。そこへ、取材を終えた文が帰ってきた。

「只今戻りましたー！ 捗ってますかー？」

「ああ、文さん。おかえりなさい。さつき文句言いながら出てった割には機嫌良いですね」

「当たり前じゃないですかーって、どうしましたか？ 浮かない顔して。今日も依頼が届いてますよー！」

「それなんですよ、分からないのは」

「あやや、嬉しくないんですか？」

「そうではないんです。ただ…こんな順調で良いのかなって」

「…先の事件後から急に依頼が来るようになったのが疑問なんですけどね？」

「そうです。大した事してないのになんで…？」

「貴方にとってはそうかも知れませんが、我々からすればあれは大した事なんです。」

「…？」

「あの”トムさんを助けたんですから。反響が来てもなんらおかしい事ではありませんん」

「そんな凄い人なんですか？ あの人」

「知らないのも無理はないですね、貴方は新規ユーザーなんですから」  
「はあ」

「初めはただのにとり好きな普通のボケラーでした。ですがボケ続けて行く内に、此処で過ごししていく内に、あの人を持つ人徳や人柄に一人、また一人と惹かれて行つたんです。言い方は悪いですが、ライトアップした漁船に集まるイカのような物ですね」

「なるほど」

「今や」大御所」と言つても過言では有りませんね。あの子の知名度はかなりいつてますから」

「他に大御所は誰が？」

「そうですね……」

空、えーき、たまたい、たいぞう、きいろだま、ガーリック、KOPPE、穂谷野（雷様）、町人E、椀もみもみ、松田クリーパーマン、刺身蒟蒻、鈴美紅……

「ざつとこんな所ですかね。まあ私の独断と偏見なのであまり当てにしない方が良いでしょうが」

「無理無理無理無理！いや、そんな一気に言われてもなんのこっちゃ分からんから！えーき、の次くらいからもう既に記憶があやしいし！つてか最後何て言ったの!?!？」

「ここで活動する以上、その内覚えますから大丈夫ですよ」

「覚えられる気が微塵もしないんすけど」

「どうせ会ったらアイコンで表示されるんだし、問題ないでしょう?」

「そーいやそーだ」

「さ、行きますよ。今日は三ヶ所回りますからね」

「はーい」

◆  
新聞社を後にし、人力UFOキャッチャーは景品を抱えて天高く飛び上がった。

幻想郷の東の端。ではないが、人里からそれなりに遠い場所にある博麗神社。その境内では、霊夢と早苗が手持ち無沙汰にしていた。

「一つ聞きたいんだけど」

「なんですか?」

「どうして博麗神社なの?」

「どうしてって…」

「カレンダー効果」で参拝客が増えたんでしよう？なら今回だって独占すれば良かったじゃない」

「何言ってるんですか！私、あまりのひもじさに霊夢さんが雑草を煮て食べてる所なんて見たく有りません！」

「あ？」

「キヤー♪霊夢さんが怒ったー♪」

「はあ、あんたにや何言っても無駄か」

「はい！」

微笑ましいほどに楽しそうな光景を神社上空から見ていた文と自転車バカだったが、

「お取込み中みたいっすね、どうします？」

「このまま眺めていてもそれはそれで楽しいんですが、二人とも遅刻には煩いので行きましょうか」

「お待たせしましたー」

「あ、やっと来たわね」

「霊夢さん、まるで向こうが遅刻したような言い方ですけど、約束の時間まで後5分余っ

「ます」

「あ、そうなの？」

「なんか楽しそうだったんでちよつと離れたところから眺めてました」

「仲良きことは美しきかなつってね、うんうん」

「良くないわよ、今のやり取りのどこを見たらそう見えるのよ」

「霊夢さん…私のこと嫌いなんですか…？」

「なっ！ち、違うわよ。そんな泣きそうな顔しないでよ…好きよ／＼」

「霊夢さん！！」

「ああもう！いちいち抱きつくな鬱陶しい！」

「さ、次行きましようか」

「そうですね」

「待て待て待て待て！えっ帰る!?この状況で普通早苗と二人つきりにする!？」

「冗談ですよ。せつかくの依頼を無下には出来ませんからね」

「この二人ってこんな仲良かったっけ？」

「元々は違ったのよ。むしろ昔はライバル視されてたくらいだし」

「私の記憶では、守谷神社が起こした異変の解決後にはこうなっていました」

「思いつきりボコったらこうなったの」



「なるほど」

「そんな事はさて置き、そろそろ本題に入ろうじゃないですか」

「それもそうですね。茶番はこれくらいにしましょう」

（つたく、こういう切り替えだけは速いんだから）

「依頼メールには表紙を霊夢さんと飾りたいって書いてあったけど」

「ついでに博麗神社も紹介して欲しいとか書いてありましたね」

「そうなんです、その為の写真をここで撮りたいなあ」と

早苗が境内に視線を向け、釣られて皆が見る。

「おお、桜が満開だ」

「にしては季節外れですね。奇跡ですか？」

「いいえ、今回は妖夢さんに手伝って貰いました」

「春を貰ったのか」

「そういうことらしいわ。さ、早いとこ終わらせましょう。この後予定が入ってるの」

「なんの用事？」

「ニコ動にアップする動画の撮影よ。MMD世界に入るの意外と面倒だから早めに行つ

ときたくて」

「顔芸担当ですっかり有名になりましたからね。あ、私もあるんですけど。霊夢さんとは違う動画ですが」

「じゃ、ぱぱつと撮りますね。何かポーズ作って下さい。」

……あー、そんな感じでオツケーです。じゃ行きますね、はい、チーズ！」

「うん、良いんじゃないすか？」

「こんなもんでどうでしょう？」

「バツチリですよ！」

「では神社の記事はそれとなく書いておきますね。何か特筆して欲しい事はありますか？」

「特に無いわね」

「では後ほど、行きますよ自転車バカさん！」

「はいよー」

飛び立った二人を見送り、早苗がボソツと呟いた。

「…あの二人も結構仲良いですよね」

「言えてる」

「次はどこ行くんです？随分高い所飛んでるけど」

「人里です」

「だったら低くても…」

「この方が探しやすいんです。なんせ人通りが多いですから」

「一理ありますね」

「確かこの辺に…お、居た」

「あつついなあ、これで10月とかおかしいでしょ」

「木陰に入って、足を川に着けて、その上アタイに触っててまだ暑いって言うそっちがお

「かしいから」

「妖夢さーん、お待たせしましたー」

「あ、来た。こつちでーす」

「すげえ、本当に居た。文さんって目良いんすね」

「ふふん、見直しましたか？」

「いや、そもそも失望してないんすけど」

「あれま」

「すみません、私を無視しないで下さい」

「おっと、すみません。依頼メールは読みました。自転車バカって言います。よろしく」

「貴方が自転車バカなんですね。私は魂魄妖夢、白玉楼の庭師をしています」

「チルノも一緒だったんですね。これは珍しい」

「今日は冷やかashionじゃないからな！」

「分かってますって。X a n a d uの限定版に付録で着けるポスターの写真でしたよね

？」

「お願いします」

「よし。時間も押してるんで撮っちゃいますか」

「そつすね、半分は自己責任だけ」



「…あ、半霊はもうちよつと右でお願いしますー。はい、そこで良いです。撮りますねー、はい、チーズ！」

「ふう、やっと終わったー」

「写真はこうになりましたが、如何ですか？」

「問題無しです、それでお願います。帰って幽々子様の食事がありますのでこれにて失礼」

「分かりました、では失礼します」

「ふう、これで二件終了か。後は？」

「命蓮寺です。が、一つ注意して下さい…」

「♪」

「響子さん、こんにちはー！」

「こんにちはー！」

「こんにちは、自転車バカです。よろしく。」

「むっ、声が小さい！」

「甚大な危害を加えない程度に妖怪らしく振舞う」

という寺の勤め、だったが最早習慣となつていたので取り合えず襲いかかる。だがその攻撃は届かない。自転車バカの手から溢れる緑色のオーラが、盾の形となつて弾いたからだ。あえなく尻餅をついた響子がぼやく。

「痛ったあく、何するのさ！」

「今の台詞、そっくりそのままバットでセンター返ししてやらあ」

「ね？スイッチ入れておいて正解だったでしょう？」

「ですね、文さんの言つてた通りでした。声が小さいと襲われるんすね」

「いえ、小さくなくても襲いますけど」

「あ、どっちにしろこうなるんだ」

「むうー、卑怯だぞ！」

「ふーん、初対面にいきなり襲いかかるのは卑怯じゃないんですかあ？」

「…ふんだ！」

「あはは、まあからかうのはこれくらいにしておきましょう。妖夢さんの替わりにはありませんでしたし」

「言っていましたもんね、からかうの忘れた！って」

「解せぬ」

「で、えっと…存在の消滅を防ぎたいんですたっけ？」

「メールの文面を要約するとそんな感じだったんだけど、合ってる？」

「うん、大体あつてる。詳しく話すと………」

「なるほど、こうして挨拶するだけじゃ不安だからもつと世間に対してアピールがしたいと」

「そーゆー事。今は平気だけど、いつか忘れられそうな気がして…どうにかならないかな？」

「自転車バカさん、どうします？」

「取り敢えずカレンダーの順番は回すけど。それだけじゃ嫌かい？」

「嫌じゃないけど…出来ればもう少しパンチが効いたの欲しいかな」

「確かに、カレンダーだと目に馴染むよなあ」

『……………』

一同をあざ笑うかのように、そよ風が吹き抜ける。なんとなく視線を遠くにやると、紅葉が綺麗な事に気づく。

「やっぱ幻想郷の四季は良いねえ。こつちのと違って空気が澄んでるからだろうな」

「車も工場も有りませんからね」

「この時期は必ず紅葉狩りに来る登山者が多いよ、おかげで結構賑わってるもん。へつたくそな俳句読んでるくらいだし」

「山彦の 声に応える 桐一葉 とかなんとか？」

「凄いや、とつさに作ったにしては合ってるじゃん。まさにそんなクオリティだよ」

「…ん？俳句…パンチの効いた…」

閃いた！



「ど、どうしたんすか」

「俳句ですよ、俳句！これを作って街で売ればいいんです！」

「そうか…それならパンチが効いてるし、私としては申し分ないよ」

「いや、あの、俳句だけじゃ流石に買って貰えないと思うんですけど」

「なら写真を付けければ良いじゃないですか。その為の私です！」

タイトルはそうですね」

「今週の俳句モデルってのはどう？」

「はい決定！」

「えっ。今週って事は毎週やるんすか？」

「勿論、肝心の俳句は貴方にお任せしますので」

「マジっすか、俺俳句なんてやったことないのに」

「じゃあウチで練習していきなよ。なんならBGMも演奏するし」

「ヘヴィメタル以外でお願いします」

その後、写真を撮ってきつきの俳句を乗せた（解説付き）葉書を文さんは街へ持って行った。絶対売れないだろうとタカをくくっていたが、

「六部売れました！」

と上機嫌で帰って来た。マジかよ。借家に送って貰い、葉書を眺める。五・七・五で全てを言い表す、世界一短い定型詩。それを毎週？一抹の不安と共にログアウト。仕方ない。もう決まった事なんだ。やるだけやろう。そう宣言すると少し気が楽になった。気がする。

続く。

## 第⑨話 「映画を撮ろう」

午前9：00。いつものようにログインした自転車バカだが、目の前に居たのは文だけでは無かった。

本当は普通に家の中に入って来てる事にも文句を言いたいのだが、そこから突っ込むと話が進まないのでスルー。

「文さん、なんでレミイさんがここに居るんすか？しかも咲夜さんと一緒に」  
「あはは。えーと、どこから説明したものか…」

苦笑する文を見て、椅子に座ってふんぞり返ったレミリアが命令した。

「咲夜、よろしく」

「畏まりました、では説明させて頂きます……………」



「要するに、ルーミアを主役にした映画を撮りたいと?」

「そうよ。この私が直接依頼してやるのだから、感謝することね」

「そりや、ありがたいですけど…」

「あやや、何か言いたそうですね」

「いやね? わざわざレミイさんが来なくても、咲夜さんがここに来るだけで良かったんじゃないかなーって」

「とうとうと?」

その発言であからさまにレミリアの肩が動いたが、構わず話を続ける。

「だってもう日が昇ってるし、このアパート紅魔館からそこそこ距離あるし」

「確かにそうですね。いくら日傘があるとはいえ、この時間に館の外に出るのはいささかリスクが…」

「でしよう? それにあの事件を見る限り、レミイさん説明とか下手ぞ」

「そ、それには理由があるのよ! ねえ咲夜!?!」

椅子から勢いよく立ち上がり誤魔化そうとするも、睽夜が止めを刺した。

「お嬢様駄目ですよ！それ以上言ったら普段引きこもって仕事ばかりしてて館の人以外と話す機会がなくて寂しいから今日無理して出てきたのがバレてしまいますよ！」

『そうだったんですか？』

「ほらばれたー！」

「いや、お前が全部バラしたんだろが！しばらくぞ確信犯！」

「我々の業界ではご褒美です！」

「くっ…どうしてこうなったのかしら」

「いやあんたのせいだろ。と思ったが、口には出さない自転車バカであつた」

「思いつきり出てるから！全部聞こえてるから！お願いだからそういうモノローグは心の中でやってー！うっ…」

「もうやめて！お嬢様のライフはとづくにゼロよ！主に私のせいで」

「自覚…！いえ、止めておきましょう。これ以上無駄に疲れたくないもの」

「あの一、我々結構なりフレッシュになりましたけど？」

「そりやそうでしょう！もの凄く息びったりだったじゃない！何よあの一体感！」

「閑話休題」

『あつハイ』

「何で主役がルーミアなんですか？紅魔郷メンバーでやるんなら他にも適役は居るでしょう？」

「仰るとおり我々の方が撮影慣れしていますし、ギャグからシリアスまで基本何でもいけます」

「寿命ネタもやってるしね」

「だったら…」

「ですが問題点がひとつあるんです。何か分かりますか？」

「え、何だろう…やり尽くされてるとか？」

「そうよ、だからこそそのルーミアなの」

「それに何よりも、フラン様のお友達ですから」

「そうなんすか？」

「ええ。実は今回の本当の依頼者は私じゃなくフランなのよ。」

ルーちゃんをもつと露出して欲しい！

って頼まれちゃったの」

「あんな目をしてお願いされたら、断るわけにはまいりませんもの」

「分かりました、その方向で行きましょう」

「ではさっそく打ち合わせに入りたいのですが、どうせなら紅魔館に行きましようか」  
「それもそうね、本人が居なくちゃ話にならないし。行くわよ咲夜」

「御意」

無事に紅魔館に着いた一同だったが、着くと同時にレミリアは即座にデスクワークに戻った。呆れつつ、咲夜と小悪魔に案内されて部屋の前に着く。彼女だけが入り、ルーミアとフランに事のあらましを話した。

「という訳ですフラン様、良かったですね」

「やったー！ありがとうございますルーちゃんも、今の聴いた？」

「うん、すっごく嬉しい！ありがとうございますフーちゃん！でも、そんな大役務まるかなあ？」

「何言ってるんの、たまには主役はってみたい　って自分で言ってたじゃない」

「世間にアピールする絶好のチャンスよ、頑張りなさい」

「ほら、咲夜もこう言ってるんだし。ね？」

「……分かった、やってみる！」

10cmほど開いたドアから、少女達の和気あいあいとした声が聞こえてくる。やばい

ルーフラ尊い。壁にもたれかかって聞いていた三人の内、小悪魔が沈黙を破った。

「お聞きの通り、本人はすっかりやる気ですよ」

「ええ、これから忙しくなりそうっすね」

「打ち合わせでも言いました、撮影は我々の方が慣れてるので大丈夫です」

「そこはお願いします。俺は今月中に台本を書き上げればそれで良いんですよ？」

「はい。原稿が上がったら連絡を下さい、こちらから伺います」

「了解しました。じゃあそういう事で」

かくして自転車バカ初の試みである、映画の台本作りが始まった。どういう物にするか皆と打ち合わせで話した結果、旦那との馴れ初めをドキュメンタリー方式で描く事になった。二番煎じを避ける為に消去法で考えた結果である。

「おし、じゃあまずは旧暦の人に会いに行かねば。主人公が不在とか言語道断だもん」

「あ、だったら案内するよ。同棲してるし」

「お願いしやつす」



紅魔館を出て、彼女の案内の元に行こうとしたが、ルーミアが大声で旧暦の人の名を呼ぶとスキマが召喚された。

「どわあつ！えっ？なにこれどうなってるの!？」

「アイツ特殊能力持ちでさー、こんな風に空間移動が出来るの。凄いつしよ」

「普通に尊敬するわ。凄い彼氏持つてんのな。」

……あーなるほど、だから最初に見たとき妖怪じみた動き出来たのか。納得」

「そういう事。実はただのユーザーじゃなくて幻想入りしてきたんだけどそれは後で話すとして、取り合えず行こっか」

「何それむっちゃ気になる」

スキマに入ると入り口が閉じる。再び開いた出口を抜けると家の前だった。戸をノックし、ルーミアに誘われるまま玄関に入る。廊下を小走りする音が徐々に大きくなり、現れたのは伝説のボーカロイドだった。吃驚しつつも事情を話し、本人の居る応接間に移動して映画用に脚色しつつメモを取る。

話が終わると、纏めたメモを見せてあーでもないこーでもないと言いながら内容を膨らませていく。筋が通らないとおかしな事になるので、旧暦の人の話に出てきた人物の

元へ行き確認をとる。という一連の作業を2週間程掛けてこなしていく。

「あ、俳句の事すっかり忘れてた。どうすつかなあ」

「ご安心を。どうせそんな事だろうと思って既に考えがあります」

「マジっすか」

「マジです」

「どうするつもりなんすか？」

「街角の掲示板があるでしょう？あそこに張り紙をして俳句を募集すれば良いんです」

「おお、本当だ。既に貼ってある」

「1ヶ月分は貯めてありますから、貴方は脚本作りに専念して下さい」

「文さんありがとう！じゃ行ってきまーす！」

そう言って駆け出した彼の背に、笑みを浮かべて呟く。

「やれやれ、手間の掛かる部下ですね」

それからさらに2週間後。

「できたー！これで文句は出ない筈！」

「お、遂に完成ですか？ちよつと見せて貰っても」

「どうぞどうぞ」

「……良いですね、これなら大丈夫でしょう。さつそく人数分コピーして来ますね。何か飲みます？」

「カフェオレでお願いしやーす！」

「無事終了です。原本は念の為に保管して置きますね」

「お願いします。さ、持って行きますか。みんな待つてるだろうし」

「行きましょう！」

「どうです？何か意見はありますか？出来ればもう書き直しはごめんだけど」

「ないよ！これなら出来そう！ね、フーちゃん？」

「うん！……あれ？私こんなに台詞多いの？」

「ルーミアの親友なんだから当たり前でしよう？……以外と出番少ないわね」

「お、お嬢様は仕方ないですよ。仕事があるんですから」

「そういう咲夜さんはそこそこ有るのにな。やっぱメイド長だからか。

　　つてか俺一番多過ぎてワロエナイ、覚えられつかない？」

「大ちゃん、漢字が読めない」

「よく見てチルノちゃん、ルビが付いてるよ？」

「あ、本当だ。みんなはついてるの？」

『いや、お前だけ』

「」

「私の出番お嬢様と良い勝負なんですわ、パチュリー様。」

……パチュリー様？」

「何で私だけ魔理沙と弾幕ごっこなの？舐めてんの？」

「だってやってたじゃん。ね、ルーちゃん」

「うん、あの時は巻き添えくらってピチュるかと思った……」

「こんな美味しい台詞貰えるとは……門番やってて良かった……！」

「1人気絶してるのは放っておくとして、こーゆー段取りでお願いします。文さん、後は

頼みます」

「任せて下さい。では明日から台詞合わせに入りますので、よろしくお願いしまーす」  
『お願いしまーす』

それから更に二ヶ月後。

「おいあの映画、もう見たか？」

「見たぜ。結構良かったなあれ」

「マジかよ？良いなあ。金と時間がとれねーからまだだわー」

「行つとけて！ぜってー後悔しねーから」

「試写会も見た俺まじ勝ち組」

「ルーミアちゃん可愛かったねー」

「ほんとそれ。あたしもあのくらい可愛くなりたいなー」

「無理無理、ウチが宝クジで3億円当てるくらいあり得ないから」

「つまり望みはあるんだよね!？」

『ぶふっ……ッ、アツハハハハ!!』

「良かったですね、大盛況じゃないですか」

「俺は脚本書いただけっすよ。頑張ったのはあの人らです」

自転車バカの視線の先では、出演者達が握手会を開いている。ルーミアの列が特に長いのは言うまでもないだろう。

「ごめんちよつと待って、何で旧暦の人も並んでんの？」

「でも貴方の名はエンドロールでしっかり出しましたからね」

「これから更に無茶振りが増えるかもな」

「ああ、にとりさん。カメラワーク良かったっすねー」

「あれくらいは朝飯前だ」

「流石、あまたの撮影をしてきた猛者は言うことが違いますねえ」

「猛者も何も、お前らいつも私に丸投げじゃないか。嫌でも技術が身につくよ」

「お疲れ様です」

「うむ、くるしゅうないぞ」

「ははー」

「本当にノリ良いですねあんたら。そろそろ落ちますわ、また明日」

「バイバーイ」

「さて、どうする？」

「もう少し眺めてみましょう。当分終わりませんよこれは」

星空の明かりに照らされる紅魔館では賑わいがピークを迎えていた。

続く。

# 第10話「Change To Smile」

午前9時、いつものようにログインした自転車バカを待っていたのは喧噪だった。

（…なんか表が騒がしいな。今日イベントとかあったっけ？）

考えたところで分かる筈がない。外へ出ようとすると、机の上に手紙が置かれているのに気づく。差出人は文だ。

（自転車バカさんへ。）

今日は人里でフードフェスタが開催されています。先のライブと違い、こちらは由緒ある秋の伝統行事が俗化したものなので参加人数が多いです。私たち妖怪も、旦那様と一緒にありますが里のどこかしらには居るので回っていればお会いするかも知れませんね。

射命丸より。）

（へー、秋の伝統行事かあ。面白そう。）



私たちってことは他のメンツもいるのかな？ だったら行くしかないな。この機会に誰が誰の嫁なのか確認しておきたいし）

軽く身支度を済ませ、玄関を開ける。普段はそこそこ人通りのある住宅街なのだが、今日は心配すらない。皆、出払っているのだろう。その代わりに大通りの方から子供の笑い声や客寄せの声が聞こえてくる。無上の興奮を覚えた自転車バカは通りへと歩いていった。



（ふうん……現実世界にも同じようなイベントはあるらしいけど、こっちの方が断然楽しいよなあ。やっぱ規模がでかいとそれだけ出店の数も多いもんな。

あ、射的やってる）

懐かしさで人込みをすり抜け出店に近づいていくが、その歩みは止まることになる。店までおよそ五メートルという距離で。

(……何してんだあいつら)

視線の先では、風見幽香と頭上に“こはつきー”と表記された男が射的を楽しんでいた。否、楽しんでいるのは幽香だけだ。

おもちゃのコルク銃を使って景品を落とすのが普通なのだが、彼女のソレから放たれる弾はどつからどう見ても弾幕である。可哀そうな程に景品が続々と落ちていくのを見て、堪らず店主が懇願した。

「た、頼む！からかったのは謝るからもう勘弁してくれ！お願いだ！」

「あら、そうはいかないわね。まだ弾が残ってるんですもの」

「あの、ゆうかりん？誰が弾幕使って景品落とせなんて言いましたか？」

「何よ、このおもちゃの銃を使ってあれらを落とすのでしょうか？言われた通りやってるじゃない。ルール違反はしてないわよ」

「そっか、ならいいや」

「よくねえよ！常識的に考えたら分かるだろ?!」

「幻想郷では常識に囚われてはいけないのです！」

「限度があるだろ！つーかどつから沸いた守谷の巫女さんよオ!!」

自転車バカと同じように、遠巻きに見ていた人々が呟く。

「可哀そうに……今年最初の犠牲は射的屋か」

「あのお方を怒らせたらどうなるかがよく分かったよ。おれらは氣イ付けような」  
(俗化した弊害はこういう所に出るんだな、きつと。さ、次行つてみよう)

目を合わせないように、そそくさと場を離れた。

それから程なくして、今度は出店の店員から声を掛けられた。

「あ、自転車バカさーん！」

「はい？」

「どこ見てるんですか、こつちですこつち！」

「ああそつちか。分かりづらいわあ……あれ？そちらの方はもしかして」

声を掛けた主、文の隣には「穂谷野（雷様）」と表記されたユーザーが居た。

雷神と電車の車掌の服装を混ぜ合わせた格好をしており、中々の高身長でハンサムで

ある。男は帽子を取って丁寧にあやまった。

「初めまして、かな。射命丸の旦那です。いつも話は聞いてるよ、こいつの部下なんだって？ 苦労をかけるね」

「こちらこそ初めまして、自転車バカって言います。慣れたらそうでもないですよ」

「私が迷惑かけてる体で話進めるのやめてくれませんか？」

「事実だろ？」

「マジでか」

「自覚なしかよ……まあいいや。店出してたんすね」

「去年までは見る側だったんだけど、今年から出すことにしたんだ」

何の店か気になり、2、3歩下がってちらつと看板を見る。

「へ、へそ饅頭？ 美味しいんですか？」

「美味しいらしいですよ？ 既にストックの三分の一が売れましたから」

「すげえ！ 大人気じゃないっすか！」

「開店から三時間ちよいでこれだけ売れるとはね、正直言って予想外だ」

「このペースだと次来たときには無くなってそうだな…俺にも一袋下さい」

「五個入りで300円です、毎度あり！」

「お、財布にも優しい」

などという会話をしつつ貰った袋を眺めていると、文に手招きされた。

「自転車バカさん、ちょっと」

「はい？」

「実は昨日はたてからこんな画像が送られてきましたね」

「これはまた何とも……」

「でしよう？本人は

〃 ひよとしたら自分の夢を念写したかも〃

と言ってたんですが、念には念をということで」

「分かりました、それとなく探してみます。あとで画像送ってもらってもいいですか？」

「ええ、お願いします」

「すまないね。手伝いたいのはやまやまだが、店を開ける訳にはいかないんだ」

「いえいえ、では」

それから暫くして。

(ふう、見た目に反して旨かったな。ちよつと休憩しよう、まだ時間はあるんだ……し?)

通りから少し外れた道を歩いていると、欄干に寄りかかって橋の上から川に向かって小石を投げている人物が居る。水色のショートボブに酷く傷ついた大きな唐傘お化けを持つており、傘の色は紫だ。今は伏し目がちだが、右目は水色で左目は赤色のオッドアイである。服装は水色のミニスカートで素足に下駄姿。上は白の長そでシャツに水色のベストを着用している。間違いない、多々良小傘だ。

「おーい、危ないよー!」

「へ……?危ないってなに」

欄干に入っていた亀裂が瞬く間に広がり、崩壊して川へと落ちていく。だが小傘は落ちていない。すんでの所で駆けつけた自転車バカによって助かったからだ。彼女の右

腕を握る力を更に加え落ちない場所まで引き寄せ、ようやく一息ついた。手を離し腕を回す。

「やれやれ間に合って良かった。今の時期、落ちたら間違いなく風邪引くからね」

もつとも、落ちた所で対して高いわけではないのだが。

「あ、ありがとう……こうなるのが分かってて危ないって言ってたの？」

「まあね、それよりもこの橋から離れてて。直すから」

「直すって……」

「いいからいいから」

スイッチを入れ、緑色に光る光球が唐傘と橋全体を覆うイメージを描く。突き出した手に力を込めると、光球は思い描いた通りに動いてくれた。驚く小傘に説明をし、元に戻ると橋の近くにあった椅子に腰掛ける。

「凄い、ほんとに直った……貴方が自転車バカなのね」

「あれ？知ってたんだ」

「うん、ばんきちちゃんから聞いたの」

「なるほどね、その繋がりが」

「じゃあこっちの質問。どうしてそんなに悲しそうな顔してんの？」

「…分かる？」

「あんだけ露骨にため息ついてりや分かるって。今だって笑顔が引きつってんじゃん」

「そっか、バレてたんだ。嘘つきの下手だなあ、私って…」

「…：答えたくないなら別に良いからな？」

「今は、話したくない」

「分かった。独りにして欲しいってんなら俺はこのまま失礼するけど、どうする？」

そういつて立ち上がる素振りを見せると、小傘は腕をつかんで引き留める。見上げる瞳には涙が滲んでいいるではないか。

「待って、行かないで！ひとりぼっちにしないで！」

「じゃあ俺はどうすればいい？」

「ただ、一緒に居て。それだけで良いから…」



「おっけ、それで気分が晴れるなら」

その言葉を聞き、本格的に泣き出してしまった小傘。シオルダーバッグに入れていたポケットティッシュを差し出した自転車バカだが、それ以上は何もしない。時雨のように泣く小傘を、あざ笑うかのように大通りから聞こえてくる喧噪が、なんとも言えない雰囲気醸し出す。

しばらくして、泣き止んだ小傘からティッシュが返却された。

「ありがとう、少し楽になった」

「そりや良かった。」

「……だいぶ減ったな」

「あ、使い過ぎた？」

「全然、だつてまだ三袋あるし何だったらハンカチ持つてるし」

「ぶつ、準備良すぎでしょ。綺麗好きなの？」

「いや？通り歩いてたら無料で配ってたから一つ貰おうとしたら三つ重ねて配られた」

「ふふふつ、あるある。つい貰いすぎちゃうんだよねー」

「かと言って返す訳にもいかんしなあ」

「ねー」

「……良かった、やつと笑ってくれた」

「あ…／＼」

「何があったのか、話してくれるか？」

「実は…」



「そっか、そういう事があったんだ」

「まあいつものことなだけどね、でも流石に今回は堪えたよう…」

「確かに、そのまま行ったら存在が危ういもんな」

「今考えるとあんな旨い話なんてある筈ないのね。馬鹿だからつい騙されちゃうんだ

よね」

「それが元で勝手に因縁つけられて、鍛冶仕事すら出来なくなつて」

「誰からも相手にされなくなつちやつたつて訳。もう私、誰を信じたらいいか分からないの…」

「…」

「ねえ、教えて？ 私は誰を信じたら良いの？」

「それは…」

「俺らだよーん！」

『!?!』

振り向いた先にいたのは、金髪チンピラ三人組。全員もれなく釘バツトスタイルである。

「こいつらよ！ さっきの話に出た張本人！」

「なるほど、完全に一致だ。なんの用だ？ まさか、あんだけやってまだいじめ足りないってのか？」

「そのまさかだよ」

「ほんつと、どうしようもねーな」

「お褒めいただき感謝するぜ、お礼に目にももの見せてやらあ」

言うや否や、チンピラ達から妖気が溢れ出す。背筋が凍る錯覚を覚えた自転車バカだ

が、小傘は傘を庇いながら言った。

「貴方たち…やっぱり妖怪だったのね！」

「同じ妖怪なら容赦しないよ！霊夢に比べたらカスだもの！」

「んだとクソガキ!!？」

「待たんかいコラア!!」

「ああん!？」

「後で掛けなおす！」

『電話かい!!』

盛大にズッコケた三人を見て、小傘が閃いた。

「……今だ、喰らえ！対人間驚かせ用に開発したオリジナルスペルカード！」

「驚雨”ゲリラ酸性雨”——！」

三人を覆う程度の暗雲が発生し、バケツをひっくり返したような酸性雨が降り注いだ。

『あだだだだ！ら、らめえええ！（物理的に）溶けちゃうううう！』

はだし○ゲンみたいになるううう！』

「ふん！どんなもんよ！」

「いや、仕事しろ伏せ字！”つのだ☆ひろ”みたいになつてんぞー！」

『そこまでだ！手間かけさせやがつて！我らのアイドルに何してくれとんじやゴミがあああ！』

「何もしてねーのに偉そうだなオイ！」

つてかすっげー良いタイミングで来んなお前ら」

『全部そこで見えました！』

「なら加勢に來いやボケええええ！」

続々と到着した小傘ファンクラブの会員が、チンピラ達を縄で縛り上げていく。それを見て、小傘がボソツと呟いた。

「こんなにわちきのファンつて居たんだ…」

「お前は決して独りじゃないよ。そもそも俺が最初に見かけたのだからって偶然じゃないも

ん」

「そうなの？」

「ここ最近姿が見えないから心配してたんだぞ？」

「小傘ちゃん俺たちの太陽だからな！」

「こんな感じで今日はずっと小傘ちゃんの話で里が持ちきりだったんだ。だから探してたんだよ。文さんにも頼まれたし」

「じ、じゃあ最近相手してくれなかったのは？」

「そこにくたばってるチンピラ共を探してたからさ。そういや言うのすっかり忘れてた、さーせん」

「余計なおせっかいだったかい？」

「ううん…嬉しい、すつごく嬉しい！みんなありがとう！」

「何のこれしき！小傘ちゃん笑顔で俺らはいっただって元気になるんだ！」

盛り上がるファン達を尻目に、自転車バカは腕の装置を漁る。

「しっかし、これが事件の発端になった写真かあ」

「あ、それ撮られてたんだ」

「はたてが念写で撮ったんだと、ちよつと使わせて貰つてもいいかな？」

「何に使うのさ？」

「今週の俳句モデルだ。内容はそうだな…」

夜の路地　響く時雨が　むせび泣き

続く。

## 第11話「熱狂!弾幕舞踏会!」(前編)

南中高度が低い為、日差しは室内の奥まで差し込んでいる。今日のように晴れた日であれば、電気など付けなくとも充分明るい。

が、賃貸家具付きアパートの一室。机に向かつて考え込んでいる自転車バカ表情は暗かった。

「うーん、どうしたものか……」

「あれ?いつになく真面目ですね」

「ああ、文さんか。いらっしやい。せめてひとこと言ってから入ってきて欲しかったかな」

「心臓に悪いからですか?」

「ザツツライト」

「だが断る!」

「うん、知ってた。まあ今更その性格が治るとは思ってないから良いんですけどね……やれやれ」



「そ、そんなに嫌だったんですか？」

顔色を伺うように、おどおどしつつ聞く文を見て、笑いながら答えた。

「へ？…ああ、違いますよ。ちよつと考え事してて」

（良かったあ…いよいよ嫌われたかと）

「そんなことより文さん。相談があるんですけど」

「は、はい。何でしょう？」

受けた話の内容は、要約すると以下のような物だった。

以前地底でさとりと言われた事を思い出していたのだ。

幻想郷——そこで生活する人妖の人気度・知名度は、確実に上がっている。仮想空間となつてログインすればいつでも触れ合えるようになったことも大きい。

しかし。現に小傘が襲撃されたように、それを快く思っていない者が居るのも確かだ。

ならどうするか？

妖怪として権威を保つのが難しい以上、襲撃されなくらいに高めるしか無い。それ

こそアイドルのように。

もつと、良い方法は無いだろうか。

「それはまたかなりの難問ですね〜」

「やっぱりそう思います?」

「アイデアとしては私も賛成ですが、漠然とし過ぎてちよつと…」

「やつぱりかあ、実はそこをどうするか悩んでるのが現状なんです」

「そうですね」

「分かるんですか?」

「分かるも何も、貴方が今手掛けている品はいくつですか?」

「え?えーと…」 X a n a d u ”、にとり、 s 工房、カレンダー、俳句の四つで…あ」

「もう気づいたでしょうが敢えて言います。」

「貴方は既にイメージアップを行っているんですよ?私としてはこれらを継続するだけで充分だと思っています、ちらほらと依頼も来てますからね。後は世間に浸透させるだけでお釣りが来ますって」

「…いつになく嬉しいこと言ってくれるじゃないすか」

「部下の仕事ぶりを把握出来ないようでは、上司は務まりませんからね」

「ありがとうございます、でも今回ばかりは諦める訳にやいかないですよ」

「…そつちこそ、いつになく格好良い事言うじゃないですか」

「期待された以上は出来る限り答えるのが部下の務めだと思つてます」

「…ま、まあ。この話はこれくらいにして置きましょう。俳句の募集に関しては前回と同じく貼り紙をしておきます。何でしたらピラも撒きますが？／／／」

「備えあれば憂いなしです。お願いします」

「で、では行つて参ります。それではー！／／／」

（…色々おかしかったけど突つ込まんでおこう）

顔を赤らめた文が飛んで行つたのは妖怪の山だ。

哨戒任務中の柵を捕まえ、先の出来事を話し始めた。

「つてな事があつてね、危なかつたわあ。もう少しで浮気するところだったのよ」

「そんな戯言言う為にここへ来たんなら即帰つて下さい。つてか本当に何しに来たんですか？」

「いや、ちゃんと聞いてた？少しずれたけど大体分かつたでしょう？」

「理解は出来ました。なれど、相談に来たのであれば人違いです。他を当たつて下さい」

「そうじゃないの、あんたの部下を通じて山全体に広めてくれないかなって。出来る?」  
「そういう事でしたか、これは失敬…」

お任せ下さい、日没までには妖怪の山で知らぬ者は居なくなっているでしょう」

「流石、仕事の早さはピカイチね。じゃあ他当たってくるから」

(…他でもない貴方の頼みですからね、断る訳無いでしょうに)

「という訳なの、手伝って貰える?」

岩陰に目をやった椀がそういうと、“椀もみもみ”と表記された男が頭を掻きながら心底嫌そうにぼやいた。

「やれやれ、お前に頼まれなきや絶対手え貸さない事なのに…仕方ねえな」

「そんなに嫌いなのか?あのユーザー」

「いや、別に好きでも嫌いでもねえけどよ。ただ、嫁がこき使われるのが気に入らねえだけだ」

「それ言うなら普段の仕事が正にそうなんだけど…まあいいや」

その頃人里では。

(たまには家でのんびりつてのも悪くないけど、やっぱり自宅近辺の地図くらいは覚えとかないと不便だし。出掛けるべきか…)

「おい兄ちゃん、随分ご機嫌そうじゃねえか。怨返しに来てやったぜ、感謝しな」  
「はい？どちらさま…」

振り返った彼が最後に見たのは、勢いよく迫りくる釘バットだった。



「ではそういう事で！ご協力ありがとうございまして！失礼しまーす！」

「礼には及ばないわよ？私はただ友人に、幽々子に頼まれただけですもの…！すっかりやるのよ」

「それもそうですね、では！」

「本当にせっかちなね、あいつ」

「宜しいのですか？あんな新規ユーザーなんか知恵を貸すなんて」

「その台詞は幽々子にも言ったわよ…！見事にスルーされたけど。」

ったく、

“ 妖夢の喜ぶ顔が見れるなら、これくらい良いじゃない♪ ”  
の一点張りだったし」

「畏まりました、夕食になさいますか?」

「あら、もうそんな時間なのね。橙ー、帰るわよー」

「はーい♪」

縦に、横に。旋回しながら飛ぶ文は、誰がどう見たって嬉しそうである。

スマホが着信音を響かせているのだが、気づいてはない。

(ふふっ…あの人の、この事を知ったらどんな美味しい反応してくれるかな。楽しみ〜

♪って電話? 誰よこんな時…あやや、にとりさん?)

「もしもし、射命丸か!? 大変な事になったぞ!」

「どうしたんですか? そんな大声で。少しはポリウム考えて下さいよ全く…」

「何呑気な事言ってるのさ! さつき早苗さんから連絡があったんだが実は…」

「…え？自転車バカが意識不明の重体？」

続く。

## 第12話「熱狂!弾幕舞踏会!」(後編)

物心ついた頃から、何となく感じていた。

何故、目が悪い訳でもないのにメガネを掛けるのだろうか。どうして父さん母さんは、一日の終わりには必ずメガネをパソコンに繋いで何かをしているのだろうか。

どうして皆、俺に対して風当たりが強いんだろう。

「……まさか、ここの事だったとはね」

男は伊達メガネを外し、メガネからUSBを取り出してパソコンに接続する。画面を起動し、伊達メガネで撮った映像をSNSにアップロードした。

断っておくが、男はユーチューバーではない。では何故か? 答えは一つ、法律で定められているからだ

男が住む国には、“負け組”と“勝ち組”という階級が存在する。と言っても思春期の学生が口にするような比喻表現では無く、その昔ヨーロッパで存在したカースト制度のような代物だと思って頂ければ幸いである。



男は先祖代々“負け組”の為、戦争が起これば兵隊として出動する。国に支払う税金も“勝ち組”に比べて割高だ。

当然ながら人権も有つて無いような物で、行列に並んでいても“勝ち組”が後ろに居れば順番を譲らねばならない。満員電車で運良く座れても、同じ車両に“勝ち組”が居れば譲らねばならない。

今日1日、何処で何をして過ごしたのか。その活動報告も義務の一つである為、こうしてメガネ型のビデオカメラで撮影した映像をSNSに投稿している。

つまり。日常生活のありとあらゆる場面で、常に自分を犠牲にしなければならないのだ。

「……ッ！」

そうだよな、俺にはコレがあるもんな」

胸の奥が痛む想いをグツと堪え、罵声を浴びながらも、男は話題沸騰中の

“装着するだけで仮想空間に入り込めるヘルメット”

の最新版を手に入れた。

昏睡状態な事くらい分かっている。行っても普通に寝てるのと変わらない。それでも、

俺はコレ以外の癒しを知らない。あの幻想郷には、俺と正面から向き合ってくれる人が居る。コレ以上の安らぎが、他にあるだろうか。

ヘルメットを装着し、幻想郷にログインした。



「ッ！来た！」

永遠亭内の病室で、にとり・小傘・優曇華の三人が手持ち無沙汰に、尚且つイライラしていたが、ベッドの傍の椅子に座っていた小傘が真つ先に気が付いた。皆が見つめる先で、ベッドへ虹色に輝く光の粒が集まっていく。やがて光の粒は人型となり、輝きが収まると、静かに眠る病院服姿の自転車バカが現れた。

「自転車バカさん、来てくれたんだ・・・！」

「目覚めないと知っても来るか、本当に此処が好きなんだな」

「良かったね、小傘ちゃん？」

と優曇華が言うと、小傘は振り返って笑顔で答えた。

「うん！間に合って良かったってもんだよ！」

まあ、結局わちき一人じゃ無理だったし早苗さんに手伝って貰ったけど」

「卑下する事ないよ？大事な命を繋ぎとめる事なんだから。手段なんかどうだっていいの」

「それに、その方が結果として早かったらどう？」

「まあね、何たってテレポートだし」

何気ない会話をしていると、こちらに廊下を走って向かって来る音が聞こえて来た。病室のドアを勢いよく開けたのは文だ。

「はあ、はあ…容態は!?!」

「大きな声を出さないで。それと、院内は静かに行動しろって教わらなかったかい？」

「安心して、とりあえずは安定してるから」

「…とりあえず？」

「なんかね、説明が難しくくてよく分かんなかったんだけど…」

「……」

そこまで言うとな3人が揃って表情を曇らせる。嫌な予感を覚えた文が質問をすると、優曇華が苦しそうに答えた。

「…もう2度と目覚めないかも知れない」

「!?!」

「怪我自体はたいした事無かったの、でも打ちどころが悪かったんでしょね」

「放っておけば、このまま植物人間だそうだ」

「なんで…なんでそんな冷静なんですか!?!このままじゃマズインでしょう!?!だったら」

「大きな声を出さないで!」

「…ここは個室だけど、他の部屋にも患者は居るのよ」

「冷静なのは薬を投与して貰ってるからさ」

「薬?」

「師匠が作った特別製よ、これを投与し続ければ…」

「治る確率が50%まで上がるんだって」

「それでも…半分なんですわね」

「本人が生きたいかどうかって問題なだけに、今回ばかりは早苗さんにもスキマにも頼みようがないんだ」

「そうですね…」

「冷静じゃないのに考え事したっていい結論は出ないよ、今日はもう帰ろう?」

「心配することはない、少なくとも現実世界では元気なんだから」

「…それもそうですね、また明日来ます。失礼しました」

永遠亭を出て小傘と別れ、雲の切れ間から燦然と輝く朝日を睨んで呟いた。

(せっかく…貴方の案が”弾幕舞踏会”という形で実現しそうなんですよ?それなのに…こんな仕打ちって)

翌日。

「では行って来ます、留守をお願いしますね」

「ああ、行ってらっしゃい」

旦那に手を振り、永遠亭へと向かう途中で小傘と遭遇する。尋ねた所、どうやら行き先は一緒のようだ。妹紅に案内をして貰って無事到着。インターホンを鳴らすと、優曇華が出て来た。

「あれから2週間か…忙しいって言ってる割には皆勤賞ね」

「会場の設営はにとり率いる建築部隊と小傘ファンクラブの皆さんに任せてありますから。私の役目は出演者との打ち合わせやリハーサルくらいです」

「そうだったの、病室は分かるでしょう? 面会時間に制限なんて無いからごゆっくり」

「ありがとうございます」

「あ、わちきトイレ行ってくるから先行ってて」

病室に入り、自転車バカの傍にある椅子に腰掛ける。心電図には今日も変わらず56という数字が出ている。

「自転車バカさん、会場はほとんど完成しました。あとは出演者と打ち合わせやリハーサルをしながらちよつとずつ手直ししていく感じですよ。とても和やかで楽しいんです」

から。あの光景、貴方にも見せたいくらいですよ。あ、それから……」

文が楽し気に話しかける病室の外では、小傘とてゐが壁にもたれかかっていた。

「いつもあんな感じで語りかけてるの？」

「そうウサ、中に入る？」

「ううん、止めとく。邪魔しちや悪いもん」

「まあ私から言わせると、あいつはああする事で精神を安定させてるウサ。だから邪魔する事は止めた方がいいウサ」

「へく……周りからすると不可解な行動でも、本人にとっては意味のあるものなんだね。よく分かったよ。」

「つてか原作で絡んだ事ないから聞くんだけど、貴女つてそんな語尾だったっけ？」

「いや？ただのキャラ作りだけど？」

「……ああ、そう」

「さて、今日はこの辺で失礼しますね。午後からリハーサルなので、つて小傘さん遅いですね……そんなにトイレつて遠かったっけ？」

「あ、やべ」

「なるべく自然に入るウサ、いかにも 今戻つて来ました感 を出しながら」  
「了解!」

こうして自転車バカが目覚めないまま、舞踏会の準備だけが順調に整つていく。何のアクシデントも起こらず進行していくのが、今の文には皮肉に思えて仕方がなかった。

開催日が近づいてくる中、それに比例して文に焦りが出始める。が、それでもミスは起こらない。次第に笑顔も消えてくる。そんな文を見ていられなくなつたのだろう、にとりが休むよう提案した。

「いいんですか? だつて明後日には本番なのに…」

「そんな事は百も承知さ、皆がやる気なのは今日の通し練でよく分かつたじゃないか。後のことはこつちでやるから、君は自転車バカの所に行くんだ。目を覚まさせて来い」  
「目覚めさせるつて…」

「にとりの言う通りです、肝心の貴方が中途半端な体調では皆が困ります。しつかり整えて下さい」



「椀……二人共、ありがとう」

翼を広げ飛び立った彼女の背中に、二人は思いつきりぼやいた。

「やれやれ、馬鹿な上司を持つと苦労しますよ」

「同意だな、まったくもって面倒くさい奴だ」

病室に着いた文は、二人の予想通りに困惑していた。

「目覚めさせるったってどうすれば良いのよ、薬で駄目ならもう…

や、夜に考え事するのは良くないか。外泊するのは伝えてあるし、時間も遅いからもう寝ますかね」

周囲を注意深く見渡し、自身に言い聞かせた。

「し、仕方ないよね、ベッドはひとつしかないんだから…／＼／＼」

以下、どのようにして一夜を共にしたかはご想像にお任せ致します。

「ん…もう朝? まあ昨日遅かったし当たり前か」

ベッドから起き上がって目をこすっていると、ドアが勢いよく開いて優曇華とてゐがわざとらしく手を繋いで同時に喋った。

『おはようございます、昨日はお楽しみでしたね』

「なん…だと…!?!」

「まさかここが迷いの竹林だということをお忘れてたとは言わせないウサ」

「くっ…人里と違って静かなのが裏目に出たか…」

『いえ、普通に監視カメラで』

「オーマイガー」

「まさか文さんがあんなスキンシップ激しい人だったなんて…」

「ねー♪」

「わー! わー! もういいから出てって下さい! / / /」

『はいはい♪』

「あ、それと文さん」

「…何ですか？」

「流石にアレは激し過ぎますって」

「~~~~~っ／／」

ドアを閉め、二人はオッサンみたいに笑いながら遠ざかっていった。

「……………」

その声を聞き、自転車バカの表情が僅かに動いた。

「…本当に良かったウサか？もう既に復活してる事伝えなくて」

「いいのよあれで。だって師匠がああしろって言うんだもの」

「…わざと騒いで心電図の乱れがあるかチェックしろって？」

「そ、案の定乱れは確認出来たし。放っておいても今に目が覚めるでしょ」

そんな事とはつゆ知らず、文は一人で恥ずかしがっていた。

「病院だと思つて油断してたわ…そういうえば監視カメラあるのよね。全部見られてたとは…//」

まあ逆に?あそこまで見られたら何だつて出来るわね逆に。うん」

「…自転車バカさん。いよいよ明日、貴方が考えてた弾幕舞踏会が開催しますよ。総合司会は私と権です。ほら、ここに台本だつてあるんですよ?」

「…手垢がついて汚れてるのはご愛嬌です。…出演者全員、台本が、ボロボロになるまで頑張つて…つ、り、リハーサルだつて…全員が納得行くまで…何回も、何回もやり直したんですから…くっ…」

ひとつ、またひとつ、涙が床に落ちる。視界がぼやける中、それでも自転車バカの手を取って語りかける。

「ねえ、お願い…もう…ログインと同時にチャイムを鳴らさないから…つ、もう、二度と…イジワルなんてしないからあ…だから…」

…目を覚ましてよお…!」

そつと、頬にキスをする文。その姿はまるで、童話の世界みたいに綺麗だった。

「うう…あ、文…さん?」

「え!?そ、そんな…キス…え?」

「そうか、俺…良かった、助かったんだ…!生きてまた、文さんと会えたんだ!よいしょつと…」

ゆつくりと起き上がる自転車バカ、体を起こして文のほうに向き、改めて言う。

「…ただいま戻りました、文さん」

「おかえりなさい…このバカ…バカあ〜!」

うあああああああああああああああああああ…」

自転車バカに抱きつこうと、思いつきり泣き叫ぶ文。しつかりと抱きとめる構えを取ったが、それが間違いだと気づいた時は手遅れになっていた。

「~~~~ツ!?!」

彼女が抱き着いた瞬間、頭を含む上半身に尋常じやない痛みが走る。初めて空を飛んだ時も凄かったが、比べ物にならない程だ。痛みの余り意識が遠のく中、ふと気が付いた。

(そっか…そーいや文さんって、妖怪だったよ、ね…)

「あ、あやや?」

思いがけず押し倒してしまい赤面するが、当の本人が青ざめていくのを見て、ラブコメ的な状況では無いと理解し叫んだ。

「えっあつちよっ……!」

だ、誰かー!へ、ヘルプ、ヘルプ…ヘルペスミイイイ!!」

その一部始終を永琳・てゐ・優曇華・輝夜・妹紅・見舞いに来た早苗・小傘・にとりの面々は監視カメラで見えていたが、現在進行形で腹を抱えて大爆笑しているので助けに行くなど不可能である。

早苗・小傘・にとりの助けが向かったのは、それから五分後の事だった。

「全くもう……見てたなら早く来てくださいよ。すっごい怖かったんですからね?」

「文さん、それ俺の台詞。 ついでに言うならそれアンタに言いたい」

「マジすんませんでした」

「いやはや……本当に、幻想郷では常識に囚われてはいけませんねー」

「ね、わちき笑い過ぎてお腹痛いの初めてだよ。あれ絶対ラブコメ展開だと思ったのに」

「まさか烏天狗本来の力で鯖折りを食らうとは……んっふっふっ!」

「黒歴史過ぎて文さん泣きそう」

「盟友。今後こうならないように、これを持っておくと良い」

「…? 何すかこの人型の紙人形」

「私が開発した、人為的に完全憑依出来る装置だ。肌身離さず持つていれば、シンクロ率が100%に達すると勝手に完全憑依してくれる便利な代物さ。いずれ役に立つだろう」

「あ、ありがとうございます」

妖怪の山を切り開いた広場に大きなドームが建てられている、以前チルノがライブを行った広場だ。その周囲には出店も並んでおり、文字通りお祭り騒ぎとなっている。そこに、自転車バカの姿があった。



「すっげえ…まさかここまで予想通りとは…!」

「ね? 凄いでしょ?」

「あれ、小傘ちゃん? 確か今日出番あるんだったよね? 時間あんの?」

「いつけない、前座だから結構前の方だったの忘れてた! 行ってくる!」

「偶におつちよこちよいですねあの子」

「うん、チルノと良い勝負だな。そういう早苗は出番ないのか?」

「はい、霊夢さんの応援をするので!」

「それならまだ時間はあるな。とは言え、俺も挨拶しなきゃいけないから中に入らないといけないんだよね」

「そういえば実行委員長になってましたね、パンフレットに書いてありました。えーと…うわ! 後5分で出番じゃないですか!」

「マジでか! 急がないと…痛っ!」

「無理しないで下さい、まだ病み上がりなんですから」

「文さん!」

「話は後です、しっかりつかまってお下さいね。行きますよ?」



アリーナの中央で、椀と文が晴れ着姿でマイクを握っている。会場は、見事に満席だ。

「寒椿が芽吹くこの季節、皆様いかがお過ごしでしょうか」

「告知より1ヶ月…舞台は全て整いました」

『第1回弾幕舞踏会、これより開幕です!』

割れんばかりの歓声が会場を包む。文が片手を上げて静め、椀が話す。

「早速演目に移りたい所ではありますがその前に。今大会の実行委員長、自転車バカより挨拶があります、どうぞ」

「えー、ご紹介に預かりました自転車バカと申します。頭に包帯&松葉杖スタイルなのをお許し下さい、浮かれすぎて階段から落ちちゃいまして…」

「小学生か!」

「早速のツツコミありがとうございます。えー…やべつ。緊張しすぎて台詞飛んだ」

「ちよつとお!?!」

「仕方ないじゃん!まさかこんなに大盛況だとは思ってもみなかつたんだよ!」

「あんた本当にメンタル弱いな！それでも文様の部下か！」

「それでも部下だよ文句あつか！」

「アツハハハハハ！」「良いぞー！」「頑張れー！」「適当に喋れー！」

と観客に後押しされ、無事に考えが纏まった。

「…自分はこの5月に此処へ来た、しがたないユーザーに過ぎません。初めは色々な人に圧倒されるだけで何も出来ませんでした。

ですが、ひよんな事から、この射命丸 文さんに部下として雇われ、現在は皆様お馴染みの文々。新聞社の下請けのような形で活動しております」

「おお」

「ライオンナップは現在四つ程です。これから更に増えるかも知れませんが、減るかも知れません。

それでも、自分はこの活動を止めるつもりは有りません。地域に根ざした会社に、我が社が無くなったら困ると言われるような会社になりたいと考えています。

その一環である今日のイベントには色々な方が出場されます。皆様には是非とも、楽しんで！そしてファンになって頂きたい！」

「おおおおおおおー!」

文と椀に視線を向け、三人で喋る。

『それでは参りましょう! トップバッターは優曇華&てるの二人で、”お月見うどんてる!”のテーマ曲に合わせて弾幕を張りながら踊ります!』

尚、出場者が放つ弾幕は威力を最小限に抑えてありますので、ぶつかっても風船が当たったのと大差ありません!

どうぞ!』

「わあああああああ……!」



「ありがとうございましたー!お気をつけてお帰り下さいねー!…ふう、今ので最後かな?にとりさん」

「だね、後は身内しか残ってないよ」

「最初の挨拶面白かったよー!」

「マジか、ありがとう小傘ちゃん」

「ったく、こっちはヒヤヒヤもんでしたがね」

「みんなではなしてたんだけど、あれって本当にアドリブだったの?」

「そうだよ…ってか仕方ないじゃん、挨拶するって聞かされたのが昨日だったんだぞ?」

「忘れるも何も、最初から考えてなかったんです」

「ひゆい?じゃあ本当にアドリブだったのかい?よくあの程度で纏めたなあ」

「二人の対応力に助けられたって感じっすね。ありがとうございます」

「ま、あれくらいは出来ますよ。こちとら場数踏んでますからね、経験の差って奴です」

「文様、威張ってる暇があるんなら後片付け手伝って下さい」

「それもそうね、じゃ、我々はこれで」

「あ、俺もそろそろログアウトしなきゃマズいな。じゃあ文さん、また明日」

「なんかあの一件以降、仲の良さが上司と部下ってレベルじゃ無くなってきた感じがするな」

「ね、付き合っちゃえば良いのに」

「泣き叫ぶ文様とキスをする文様、どっちの写真が欲しいですか？」

「ちよつと！何であるのよ!?!?!」

『どっちもー♪』

「私としては様子も詳しく聞きたいので向こうに行きましょう。ここじゃ邪魔が入りま  
すからね」

「あんた達い!?!」

『逃げーげるんだよおー♪』

「無駄無駄無駄無駄あ!」

駆け出す四人の笑顔は、絶える事は無かった。

続  
く。



## 第13話 「秋を祝おう」

午前9時。

ここは人里のメインストリートから少し離れた場所にある住宅街。その中のアパートに、1人のボケラーがログインした。

（うゝ寒い、昨日までも充分寒かったけど今日は特に冷えるな。やれやれ、窓なんか結露で真っ白じやねーか…ん？真っ白？）

ふと思い立って窓を開けると、予想通りと言えば予想通りな風景が飛び込んできた。目の前に広がる住宅街が、雪化粧をしているではないか。このまま眺めて過ごすのも悪くないのだが、ある人物と会う約束を思い出し、出掛けることにした。

普段と違う景色を楽しみながら歩くこと10分、寺子屋の近くに差し掛かった所で、公園から無数の笑い声が聞こえてくる。よく見ると大妖精とチルノが子ども達と雪合戦中だったので挨拶すると全員が手を止めて振り返り、チルノが声を掛けた。

「あ、自転車バカだ。おーい！こっち来いよー！」

「おいつす、久しぶりー。舞踏会以来だな」

「言われてみればそうだなー。もう怪我は治ったのかー？」

「それくらいは見て分かるうよチルノちゃん…」

あ、お久しぶりです。あの時は乱入してすみませんでした」

深々と頭を下げ、謝罪する大妖精を、自転車バカは笑いながら制する。

「いや、謝ること無いって。むしろ盛り上がったし。ついでに尺稼ぎも出来たからね、一

石二鳥って奴だよ」

「そうだよ大ちゃん、こいつの言う通りじゃん」

とチルノが頭の後ろで手を組んで呑気に言うのと、子ども達が代わる代わるツツコミを入れた。

「お前は反省しろ！」

「いて、何するのさー！」

「うるせえ！お前がバカルテットのメンバー全員引き連れてステージに上がるからこの人びつくりしてたじゃねーか！」

「うっ」

「それにあの時ノープランだったろ！大ちゃんの

”何も考えて無かったの!?”

って声、スタンドマイクが拾ってたぞー！」

「そ、そうだったんだ：／／」

「まあ落ち着こうぜ、尺稼ぎ出来たってのは事実なんだしき」

「氣遣って頂いてありがとうございます、自転車バカさん」

「……アンタは優し過ぎるんだって。叱る時は叱らなきゃ」

「そんなに優しいか？普通じゃね？」

「優し過ぎだよ、現に僕たちがタメ口聞いても怒らないじゃないか」

「そりやそうだけど……」

その時。フェンスの向こう、教室の窓から慧音が呼びかけた。

「おい、そろそろ大休憩終わるぞー！」

「ほらチルノちゃん、戻ろう？」

「むう〜」

「一番遅い奴は頭突きだぞー！」

『それだけはやめてー！』

（血相変えて走るほど痛いのか…あ、なんか急に寒気が。俺も喫茶店に避難しようかな）

程なくして到着。店内は昼前という事もあり、いつもより賑わっている。

（さて…どこに座ったものか）

「あ。自転車バカさーん、こっちですよー！」

声が出た方向に居た人物。瞳は赤色で髪は黒髪のセミロングだ。服装は紅葉色のジャケツトにキヤスケツト帽をかぶり、シオルダーバッグをかけたジャーナリスト然とした出で立ちをしている。

呼ばれるままに席へ座り、ネックウオーマーを外した。

「なんだ、もう来てたんすね文さん」

「まあ最速の異名を持つ者としては、これくらい昼飯前ですよ」

「…もしかして腹減ってます？」

「もしかしくなくても減ってます。冬の朝が苦手なのは知ってるでしょう？今朝だってトーストとコーンスープしか食べてないんですから」

「よくそれだけで持ちま」

「あ、店員さん！注文お願いしまーす！」

「聞けよ！」

10分後、頼んだ品を綺麗に片付けた文はお腹をさすりながら満足げに言った。

「ふい、これで明後日まで何も要らないですね」

「まあ、そんだけ食えば十分でしょうよ。あ、それはそうと…」

遮るように扉が開き、(農)が四人入ってきた。

「いらっしやいませー!!空いている席にお座り下さいねー!!」

「……………」

「…なあ、マジでどうする？このままじゃ」

「んなもんおめーが言わなくても分かってるさ。ここに居る4人全員がな」  
「穰子さま…」

「…自転車バカさん？」

「なーんか重たい雰囲気ですなあいつら、何言ってるか聞き取れないけど」

気にかかりそのまま眺めていた2人だが、胸ぐらを掴んで殴り合いを始めそうになったので慌てて止めに入る。(農)が緑色のオーラに包まれて唾然としているところで事情を聞く。

「何があったか知らないけどさ、暴力だけで解決するってのは関心出来んな」

「ここは人々の憩いの場です、決して争いの場ではありません」

『ここ、これは一体…？』

「何があったのか話してくれるんなら解除するよ、ここじゃ迷惑になるから外でな」

会計を済ませて店を出る。通行の邪魔にならない場所まで行くと、着くや否や言っ

た。

「その」

「待て、俺から言う。元はと言えば俺が言い出した事だからな。実は…」



「なるほど、それは厳しいなあ」

「だろ？あそこまで落ち込まれるとドツキリ仕掛けた側としても辛くてな…」

「収穫祭がフードフェスタに形を変えてから信仰も供物もさらに減り始めたのもあってよ、流石に見てられないからどうにかして喜んで貰おうと思つてな…」

「やっぱり、伝統行事が俗化したのはまずかったか…」

「それでサプライズパーティーをしようか？」

「そうだ。信仰は俺らが生まれる前からあつた問題だからすぐにどうにかする事は出来ねえ、それは分かつてるんだ。でも…」

「このまま放つておくと次の秋までに信仰が本当に消え失せるかも知れねえ。それだけは絶対に防がなきゃならねえんだ！」

『頼む！お二方を救いたいんだ！力を貸してくれ！俺たちの一生のお願いだ！』

「……」

「自転車バカさん、ここまで真剣にお願いされて断る理由は？」

「ない！」

頭を上げ口々に感謝の言葉を述べる（農）。

その後の話し合いでパーティーの準備が整うまでの間、今週の俳句モデルに秋姉妹を選ぶことでどうにか気を引く、という形に収まった。勿論、文の旦那である穂谷野（雷様）を介して旦那達の協力を仰ぐ事も確定だ。

「何もそこまでしなくても……」

「何言ってるんですか、こういうのはどこからバレルか分からないんですよ？協力者は多い方が良いんです」

「その人の言う通りだ、今の時期お二方は当てもなく幻想郷中を彷徨ってらっしゃるか  
らな」

「それに、俺らの様子がおかしいのに気付き始めてる。バレルのは時間の問題だ」



腕を組み、そんなものかと考えていると、視界の端に秋姉妹が映った。

「…っ！言ってる側から来たし！じ、じゃあ手筈通りに！」

「…ねえ、手筈通りって何？もしかして信仰が減ったのは、貴方の仕業だったの…？」

「…そんなに秋はお嫌いかしら…？」

「え、あ、いや、その…（えっ、早くもばれた!?!）」

「否定しないということは、肯定と受け取って良いのよね…？」

返答に困る自転車バカを見て、文と（農）達が素早くフォローに入る。

「ちよ、ちよつと待つて下さい！誤解ですつて！（大丈夫です！発言内容から察するにまだ大丈夫です！）」

「そ、その人の言う通りです静葉様！穰子様！（おい、誰か援護してくれ!）」

「…何がどう誤解だと言うの？」

「じ、実は今週の俳句モデルにお二方が選ばれたんです！（すまん、これで精一杯だ！後よろしく!）」

「……………」

「あ、あのく、もしもし? (黙っちゃったよ! どーすんだよこれ!?) お前後で覚えとけよ!」

「えー!? 遂に選ばれたのー!」

『…は?』

先程まで固まっていたのが嘘のように元気を取り戻し、生気を失っていた目も輝きだす。啞然とする自転車バカ達を他所に、二人は手を取ってはしやぎまわった。

「え、あの、今週の俳句モデルってあれでしょ!?! 大昔に現世で流行った”ミスコン”と同じくらいの価値があるっていうアレでしょ!?!」

「しかもしかも! 年間表彰で一位だったら翌年1年間は”幻想郷で最も女子力の高い妖怪”って肩書きが付くんでしょう!?!」

『キヤー!』

(…:…:なんか”喜びの舞”みたいな踊り出したンスけど。つかアレそんな大層な肩書きついてんすか?)

(あやや。まあ仕方ないですね、対象者の写真は全て綺麗に映るように撮ってるわけですし)

(なあ農民さん。これは多分セーフだよな?)

(…と、とりあえずはバレてねえみてーだし、結果オーライだ)

「…！そ、そんなですよ！いつお伝えしたら良いか相談してた所だったんです！

(自転車バカさん！今こそ援護を！)」

「あ、あの！ここで話すのもアレですし、あの喫茶店に入りませんか？(援護つてこれで

良いの!?!間違つてたらマジゴメンね！)」

「…！そ、それもそうね。行くわよ、穰子／＼」

「そ、そうね、お姉ちゃん／＼」

『では、我らはここで失礼します』

(農) 達と別れて先ほどの喫茶店へと入り、秋姉妹が落ち着いた所で本題へと入った。

「…じゃあ近いうちに写真を撮らせて頂くという事で宜しいですか？」

「ええ、それをお願い。穰子、異論は？」

「特に無いよ！」

「なら決まりですね、用事があるんで俺は失礼します。(文さん、穂谷野さん達に知らせてくるから時間稼ぎ頼みます)」

「行つてらっしやーい」

「それなら私たちは一昨日レティさんと雪合戦した話でもしましょうか？」  
「何それ無茶苦茶気になる」

(さて、一軒一軒回るか。その方が誠意も伝わるだろうし)

かくして、どうにか気づかれる事なくパーティーの準備が整つていった。

本来なら一軒ずつ旦那たちの家を回る筈だったが、穂谷野(雷様)の

「なんだ、そんな事なら私から皆に伝えておくよ」

の一言で全て解決した。集った協力者の名に自転車バカが知らない人物が多かったのは言うまでもないだろう。妖怪の山中腹にあるコンサート会場を利用した事もあり、2週間程で全ての準備が整った。

そして当日、ログインした自転車バカはそのまま秋姉妹を迎えに行く。

”(農)が連れて行くと途中で感づかれる”

という理由で案内役選ばれたのだ。教えて貰った住所に行き、にとり特製の四輪駆

動型人力車に乗せて目隠しをさせる。

「ねえ、随分と揺られてるような気がするのだけど、何処に連れて行ってくれるの？」

「それを言っちゃあつまらないじゃないですか、もう少し待ってて下さい」

「そうよ。目隠しがある以上、黙ってついていくのがレディの嗜みというものよ」

(お姉ちゃんは大人だなあ…)

さらに揺られる事10分、人力車ごとロープウェイに乗り込んで会場へと向かう。動き出しの振動でびびったのか、姉妹揃って軽い悲鳴をあげる。あら可愛い。

「ちよ、ちよつと！本当に何処へ行く気なの!？」

「今 ゴトン って言ったわよ？」

「おおつと、目隠しを取って良いとは言ってないですよ？後少しですから、落ち着いて下さい」

『むう〜』

(またハモった)

ロープウェイを降り、会場へと駆ける自転車バカ。視線の先では皆が息を殺して並んでいる。勿論、笑顔でだ。

「…さ、大変長らくお待たせしました。もう目隠しを取っても構いませんよ？」

『……………!?!?』

「せーのお！」

『ドッキリ、大成功————!!』

くす玉が割られ、クラッカーが鳴り響き、横断幕が張られる。書いている字は

『秋姉妹特別感謝祭…?』

「それについてはあの四人衆から説明があります。さあ、降りて下さいな」

(農)に手を取られ、人力車から降りる姉妹。困惑する二人に(農)が話しかける。

「黙っていて申し訳ございません。これは、我々からの感謝の印です」

「……………感謝？」

「お二方の信仰や供物が減少傾向にあったのは、我々も重々承知しておりました。どうかせねば、と思っていたのですが」

「我らに出来る事は限られています。なので、今回はこういう形を採りました」

「全てはあなた方の喜ぶ顔見たさです…お二方が沈んでいては、我々も悲しくなるのです」

「あなた達…」

少し瞳がうるんでいる秋姉妹に、文が止めを刺しに行く。

「私からも一言良いですか？」

「どうぞどうぞ」

「秋に関連する妖怪や精霊はあなた達の他にも居ます、これは周知の事実です」

「…確かにそうだね」

「ですが、他に居ますか？毎年収穫祭と称して皆が崇める程の妖怪が。」

神社を建てられる程に、人々から崇拜される精霊が」

『…!!』

「もう昔とは違うんです。」

もう、お二人が消えて喜ぶ人なんて居ません。

あなた方はこの幻想郷で唯一、秋を司る神様  
だと言うことをお忘れな

く」

秋姉妹が泣き出す中、それを上回る声で自転車バカ達がこう叫ぶ。

「野郎共！宴を楽しむ覚悟は良いかー！？」

割れんばかりの歓声が会場中に響き渡った。

祝杯を挙げて盛り上がっていると、自転車バカが呟いた。

「あ、忘れる所だった」



「どうしたんです？」

「さつき文さんが撮った写真、アレ俳句に使っても良いですか？」

「アレって…ああ、秋姉妹が泣いてる写真ですか？良いですよ」

「ありがとうございます、句はそうだな、どうしようか…」

「それならこういうのはどうです？参考までに」

冬の朝　　感涙消すかの　　感謝祭

続く。

## 第14話「いざという時は」

(やつぱりああいう感じのドツキリはやつてて楽しいよなあ、バレそうになったのは滅茶苦茶あせったけど)

夜の内に降り積もった雪の中を上機嫌で歩く自転車バカ。漆塗りの人力車は雪や自転車バカが移りこむほど手入れされている。

すると、そこに少女の姿が移りこんできた。

「自転車バカさーん！」

「ん？ ああ、文さんか。おはようございまして」

「…どうしたんですか？ 物凄い勢いで下向いたりして。虫でも居ましたか？」

「白か…」

意味が分からない、といった表情の文だったが、耳が真っ赤な自転車バカを見て即座に理解し着地。

「…見た？／＼」

「It's a great scenery」

「誰が感想を…」

「待てえ！逃げるな！人力車はドリフトするもんじゃありません！つてか扱い上手いなオイ！」

顔を真っ赤にしながらかけっこをする二人の姿は、暫く人里で話題となったという。ロープウェイの中で、文を振り切った自転車バカヘアアウンズが入る。ここで降りると目的地までもうすぐだ。火照った顔と身体を冷ましながら、にとりの家に向かう。

（いくら雪の上だからってドリフトしたのはマズかったかな。なんて言い訳し…  
お、にとりさんだ）

視線を上げると、家の前で壁に寄りかかっている彼女が居た。

「はあ…」

「おーい、にとりさーん。人力車返しに来たよー」

「ああ、君か。」

「…随分キレイな雪化粧をしているが役に立ったのかい？」

「お、おかげさまで…あはは」

「ま、何でも良いさ。君の事だ、無茶な扱いをしていないのは一目見てすぐ分かったよ。」

あ、それ倉庫に取り敢えず置いといて」

「鍵開いてます？」

「…そーういや閉めてたっけ。今開けるよ」

ポケットからカギを取り出して倉庫に向かい、指定された場所に置く。目に見える範囲で付いた雪を二人で払い落としながら、疑問を口にした。

「なんか元気ないっすね、やな事でもあった？」

なんとなく聞いたつもりだったのだが、それを聞くと彼女は手を止めて話し始めた。

「…最近、盟友がログインしていないんだ」

「トムさんの事？ そう言えば見てないなあ」

「だろう？2・3日くらい間隔が開くのはしょっちゅうさ。ログインしても前のような覇気がない、空を見上げてぼーっとしてるんだ」

「会話は？」

「することはする、本人はいつものように振舞ってるつもりなんだろうが…空元気なのは一目瞭然さ」

「そっか、そんな事が…」

出来ればどうにかしてあげたいけど…俺に何が出来るかな。

「…私はどうすれば良いんだろう？」

「うーん…もう少し様子見ても良いんじゃない？無理に聞き出してもアレだしさ」

「…そっか」

「これはにとりさんと彼の問題だからね、俺がどうこう言うのはお門違いだよ。それに、トムさんを笑顔に出来るのは貴女しか居ないじゃないか」

「…！」

その言葉でにとりは目を見開いて振り向くが、当の本人は雪を落とす作業を続けてい

た。

やばい、言つてて超恥ずい。誰か俺を殺してくれ。

「まあ、あれだ。あんただけの問題で無くなるようなら、いつでも…ね」

「ありがとう…」

「じゃ、人力車はここにおいてくね。他にもやる事あるから失礼するよ。またねー」

「あんただけの問題…ね」

ロープウェイに向かう自転車バカを、不安と感謝の混ざった表情で見送るにとりだつた。

程なくしてアパートに戻る。当たり前のように居た文に若干驚くも、椅子に腰かけて俳句モデルの話を持ちかけた。

「天人…ですか？」

「ええ、今週はこの方にしようと思ってるんです。なんせこんな手紙まで届いたんでね」  
「読ませて貰ってもいいですか？」

「どうぞどうぞ」

ひらひらと揺らしていた手紙を受け取り開くと、中にこう書いてあった。

「拝啓 自転車バカへ

衣玖から聞いたわよ、私の写真を無断で使ったらしいわね。天人を侮るとどうなるか、その身に叩き込んでやるから近いうちに天界へ来なさい。

比那名居 天子より」

「…これは果たし状か何かですか？」

「果たし状というよりは無茶振りですね、あんな高い所に行く方法なんて分からないんだもの」

「まあ、普通はそう考えますよね」

「…まさか方法があるんすか？」

「ありますとも！」

そう言うと、文はスマホを取り出して電話をかける。内容を聞いたがよく分からん

かったので、話し終えたのを確認して聞く。

「…結局どうなったんです？」

「それはわたしが説明致しますわ」

「フア!?!」Σ(。D。1111)

タイミング良く、自転車バカの背後に人が現れ肩を軽く叩かれる。突然の事に反応出  
来ず、椅子ごと仰向きに倒れてしまった。

「あら、二回目でもいいリアクションするじゃない」

「…お願いですから背後に出てくるのをやめてくださいよ紫さん。舞踏会でもそうだった  
じゃないっすか」

「だって、そんな面白い事するからよ」

「何も言えねえ」

「まあいいわ。それより、貴方天界へ行きたいのでしょうか？今スキマを繋げるから準備  
なさい」



予想外の言葉に思わず立ち上がり、椅子を直して聞き直す。

「え？行ってもいいんですか？」

「なによ、行きたくないの？」

「いや、そうじゃなくて。そもそも俺みたいなのが行っていい場所じゃないでしょ？」

「自転車バカさん、貴方いつの時代の話をしてるんですか？」

「はい？」

「あのねえ…もう昔とは違うの。天界は天子の許可が、同じく月の都は綿月姉妹の許可があれば、誰でも行けるような仕組みになってるのよ？ったく、これだからにわかには…」

「さ、サーセン」

そっか、綿月姉妹か…。

「ま、そういう訳だから安心して行ってらっしゃいな♪それっ」

言うが速いか、自転車バカと文の足元にスキマが開き、あっという間に落ちてゆく。

「えっちよつ、私もですか!？」

「ボディーガードは必要でしょうー?」

「確かに!」

遠ざかる二人を見ながら、そつと呟く紫。

(ふふ、後で土産話でも聞かせて貰おうかしら。あの二人は絶対何かやらかすでしょうし♪)

スキマが開き、二人を地面に落として消え去る。綺麗に着地した文と対象に尻餅をついた自転車バカはしばらく悶絶していたが、痛みが治まると状況を確認し始めた。

そして己の置かれた状況を後悔した。

「……ねえ文さん」

「何でしょうか」

「エンカウントってこういう事を言うんすかね?」

「ええ、多分」

周囲の穏やかな景色とは正反対に、二人の前には良からぬ事を考えている笑顔を浮かべた天子が仁王立ちしていた。緋想の剣を持ち要石を連れて。

「ふつつつふ、あんな手紙送ったのによく来たわね」

「当然じゃないですか、これも仕事の内ですし。ね、自転車バカさん？」

「正直来たくなかったつすけどね、何であんな脅迫状じみた手紙だったんですか？」

「さーて、どう料理してくれようかしら？」

「おっと話を通じませぬね」

「あ、これ死んだわ」



その後は燦々たる物だった。

ドリル状の要石が雨のごとく降り注ぎ、文の葉団扇が起こした風も自転車バカが展開したバリアも全く通用せず二人の残基を減らしていった。

しかし、

追い詰められた自転車バカを庇い文が緋想の剣で斬られ倒れると、状況は一変した。すぐさま駆け寄り意識を確認する。

「文さん!? 文さん!」

「だ、大丈夫ですよ。ちよつと指先すら、動かせないだけですから…ッ!」

文は汗を流し、苦痛に顔を歪める。

それ大丈夫じゃないじゃん!

天子を睨みつけるが、本人はスカートの裾や襟首の辺りを直していた。大して汚れても乱れてもいけないのである。

反射的に怒りがこみ上げてきたが、とある疑問が生じたことで一次的に怒りは収まった。

「あーあ、こんな簡単に片付いちや面白くないわ。

……そうだ、待っててあげるから一発だけ攻撃してみなさいよ。威力によっては見逃してあげるわ。どうよ、悪い話じゃ無いでしょ?」



ツも指でクイってやってたし」

「うっ」

「わざとやってくらしいに語尾に

くだわ

とか

くかしら

とか付けるし」

「そ、その何処がおかしいのよ!？」

「残念だったな。そういうのは野郎が考えた女性言葉であつて、女性は本来そんな言葉使わないんだよ。」

まあ、衣玖さんくらいしか話し相手が居ない奴には分からんかも知れんがな」

「でも…紫さんや霊夢さん。それに、アリスさん・パチュリーさん・幽香さんは使つてますよ…?？」

「逆に聞きますけど、その人達と語尾の話になつた事つてありますか?？」

ゆつくりと起き上がつて手帳を取り出した文がページをめくつていくと、唐突に手が止まった。

「…あ。

“ 本当はこんな喋り方しないけど、人里にも行くし私というキャラのイメージを崩したくないから”

つて、走り書きで書いてある」

「でしょ？でもコイツは別なんすよ」

「…まさか」

「そう。多分ですけど、この天子という人物は人前に出る時以外オツサンみたいな言葉遣いでジャージかなんか着てるんすよ。普通に過ごしてりゃ、文さんみたいに女性らしい言葉遣いと立ち振る舞いになりますからね。自然に。」

首元にクリーニングの札付いてんぞ、世間知らずの不良天人さん？」

宣言通り、渾身の一発を喰らわせる。

完全敗北した天子は顔を真っ赤にして捨て台詞を吐いて去って言ったが、早口過ぎて聞き取れなかった。

「……………ふっ、勝った」

安心したのか、力が抜け座り込む。後ろ手を付き足を放り出す彼が、凄くイケメンに見えた。とても数ヶ月前まで生死の境目を彷徨っていたとは思えないほどに。

つていうか

(女性らしい、かあ……)

「文さん」

「な、何でしよう?」

「ごめん、挑発し過ぎたっぽい」

「っ!?!」

彼が指さした先には、巨大な要石が空を覆い隠す光景が広がっていた。嘘だろオイ。

スキマに連絡する? 駄目だ、仮に転送が間に合った所でアレを天界が受け止めきれぬ保証はない。万が一崩壊した天界ごと地上に振ってきたら一大事だ。

葉団扇で防ぐ? それも駄目だ、さっきのですら防げなかったのにアレを防ぐなんて出来る訳がない。

宥めに行く? もはや論外だ。この身体では歩行出来るかすら怪しい。



「くそっ、こうなったら・・・!」

「ツ!? 自転車バカさん、何を!?!」

「ダメもとだけどこれしか無いっしょ!」

私と彼を覆うようにシールドが展開される。要石が放たれると、彼は私を抱きしめ自らの背を盾にした。目を瞑り、鼓膜を突き破る轟音と地響き。四肢が粉々に破壊される衝撃を待つ。

……あれ、来ない?

恐る恐る目を開けると、二人の前に人が立っていた。

否。人だけでは無く、要石を閉じ込めるように無数の刀が地面から生えていた。

「…………まさか、こんな所でお会い出来るとはな」

抱きしめていた文を開放し、シールドも解除して向き直る。

その人物は薄紫色の長い髪を、黄色のリボンを用いてポニーテールにして纏めており、服装は、白くて半袖・襟の広いシャツのようなものの上に、右肩側だけ肩紐のある、

赤いサロペットスカートのような物を着ている。

おそらくボタンが前面中央にあり膝上くらいからそのボタンを空けている筈なので、後ろからでもスリットのようになった部分から生足が拝める。その他の装飾品も原作で見た通りだ。

正真正銘の月の民。二つ名は、神霊の依り憑く月の姫。

自転車バカの推しキャラ、綿月依姫だ。

空を覆っていた要石は瞬く間に姿を消す。生えていた刀も消えると、その場所に雷が落ちた。

「あ、衣玖さんだ」

「でしようね」

「つたく、何の力もない地上人相手に何してるんだか……」

あ、お怪我はありませんか？

「ええ、おかげさまで最悪の事態にはならず済みました。ありがとうございます……つて、アレ」

こちらを見向きもせず無事を確認した依姫だが、返答を聞いて振り返り自転車バカの

顔を見ると急に顔を赤くしてモジモジし始めた。

えっ何、社会の窓開いてるとかそーゆーオチ？

と思ひ確認するが、グレーのジャケット・黒のパーカー・黒のズボンが所々破れ汚れているだけだった。

(ねえ文さん、何であの人照れてんすか?)

(原作で一度も絡んだ事ないのに分かる訳ないでしょ、私が聞きたいくらいです)

などという会話を小声でしていると、依姫の傍に姉が現れ揶揄いだした。

「あれれ〜?」一度で良いから会って話してみたい” って言ってたのは何処の何方だったかしら〜?」

「し、仕方ないじゃないですか! 思ってたよりも顔立ちが…その…」  
「すみません。全く話が見えてこないんですがそれは」

依姫は俯いてしまっている。よほど近寄らなければ顔色を伺うのは無理だろう。変わって説明した豊姫の話を要約すると、以下のような事だった。

どうやら毎年行われている人気投票では、どういう名前のユーザーが誰を一押し投票してどういったコメントを残したのか、キャラクター側に分かるようになっていらい。

“ここ数年の話だが自転車バカは依姫を一押し投票しているの、彼女も” 自転車バカ  
“というユーザーが自分を好いている事は理解していた。

「悪い人じゃ無さそうだし、もしこの世界に居るなら会って話してみたいなあ」  
とも呟いていた。

だが実際に会えるとは微塵も思っておらず、尚且つ想定よりもイケメンだったので緊張と恥ずかしさの余り何も話せなくなってしまったのだそう。

……どんな想定してたんだろう？

いやだから私に聞かないで下さいってば。

「ごめんなさいね、そういう訳だから。話だけでもしてやって貰えないかしら？」

「承知しました」

「ほーら、依姫？」

「う、うう……／／／」

立ち上がって向き合う。依姫は両手の人差し指をつけては離しを繰り返し、潤んだ瞳で上目遣いにこちらを見る。

何だこの生き物可愛すぎかよ、萌え死するかと思つたわ。

咳払いをし、努めて邪な感情を追い払うと話を切り出した。

「危ないところを助けて頂いて有り難うございます。自分は自転車バカと言います、新参者ですがよろしくお願い致します」

「え、あ、こ、ここちらこそ…宜しくお願い致します」

「……」

「……」

駄目だ間が持たねえ！

目で豊姫に助けを求めると、ため息をつき助け船を出した。

「我が妹ながら呆れてくるわね…言いたいことはそれだけ？他にあるんじゃないの？」

「…！あ、あの！」

「何でしょうか」

「わ、私と友達になつてくれませんか？」

「友達に…ですか？良いですよ、私のような者でよければ」

「…っ、ありがとうございます—！」

腕を伸ばして駆け寄ってくる彼女を見た瞬間、いつかの文と姿が重なって見えた。

あれ、この展開つてもしかして。

身構える間もなく、抱き着かれた瞬間に自転車バカは吹き飛ばされた。三人は顔を見合わせ、全力で追いかけて始めた。

「私の部下になんてことしてくれてんですかこの馬鹿垂れええええ—！」

「だから言つたじゃない—！」地上人に触れる時はハサミで豆腐を掴むくらい気を点けなきゃ駄目よ—って—！」

事前に散々言つておいたでしょう!？」

「だつて嬉しかったんだもん—！」

『子どもか!』

「ただでさえ天子さんにフルボッコにされてしんどいのにな原作で話した事ない私に初絡みでツッコミさせないで下さいよ—！」

「ごめんなさーい！」

その後どうにか追いつき、依姫は産まれて初めて友達に土下座をした。ついでにL I N Eも繋がった。



「……ってな事があってマジ死ぬかと思ったっす」

「あっははははは！待って！お、お腹が……あっははははは！」

『笑いすぎだろ』

閑静な紫の自宅に響いた笑い声は、式神に聞かれた事も相まって途絶えるまでかなりの時間を要した。

続く。



## 第15話「寂しくないように」

紫の家で休憩すること、およそ30分。ある程度回復したので再びスキマで自転車バカの家へと送って貰った。

「よつと、今度は着地出来たぞ」

「二回目でコツを掴むとは中々要領いいですね」

「要領も何も最初っから出口見えてんすから、落ちる道中で気をしっかり持てば行けますよ」

「さつすが、私とのフライト訓練で鍛えただけはありますね」

「自分で言うか」

「テヘペロ」

「あ、そうだ。こうしちやいられん、にとりさん家に行くんだつた」

「何か約束でも？」

「ええ、雑誌の件でちよつと」

「なるほど…それなら一緒に行きましようか。飛んで行った方が速いですし、何よりも

う歩きたくないでしょう?」

「ありがたいえ、お願いします」



「今思ってたんすけど」

「何です?」

「アレってどう見ても…」

「ですよね、私もそう思ってた所です」

文と自転車バカが見つめる先では、にとりとトムが悲しげな表情で話し合いをしている。にとりに至っては既に目が潤んでおり、今にも泣き出しそうだ。声をかけたものか迷っているとバレたので側まで行く。

「喧嘩なんて珍しいですね、どうしたんです?」

「いや、これはち」

「違うさ、これは断じて喧嘩なんかじゃない」

「…もつと重要なことなんだ」

「にとりさん、ひよつとして…」

「察しが良いね、そういう事だ」

「え？自転車バカさん、貴方知ってるんですか？」

「多分、トムさんはボケてから…」

「その通り。…：実は少しの間、ボケてから離れようと思ってるんだ」

「!？」

「うう…」

「やっぱり活動休止だったか…」

「本当に知ってたとはね、にとりに教えて貰ったのかい？」

「活動休止までは教えて貰ってないっすよ。でもまあ、元気がないって聞いた時点で想

像はしてました」

「どうして？」

「ネット世界で生きる者が避けて通れない道、それが”活動休止”と”引退”なんすよ」

「避けて通れない道…？」

「そう、何故か分かりますか？」

「さあ…」

自転車バカが手を背後に回しトムに目線を送ると、意思をくみ取って説明し始めた。

「これは俺の想像だけど、基本的にネット世界で活動する年齢層は10代と3,40代くらいの間だ。みんな昼間は現実世界で戦い、夜になると疲れ果てて帰ってくる。だからこそ、何か嫌な事を忘れられるような、また明日も頑張る為の癒しを求めるんだ」

「そうだったのか…」  
「でも例外がある。」

今の時代、この大衆娯楽装置のおかげで寝てる間をネットサーフィンに使えるんだけど、生活環境がガラッと変わるとそこでの新しい生活に一刻も早く馴染む必要がある。だから夜でも遊びに使ってた時間を削って頑張るんだ。そうなれば当然、余裕なんて無くなるんだよ。この装置は勉強にも使えるんだからね。

「……そうやって勝ち続けなきゃ、生きていけないんだ」  
「…っ！」

最後にポロっと口から出た言葉の意味を、自転車バカだけが理解した。

「盟友、それが君の理由かい？」

「細かい所は色々あるけど…大体合ってるかな。そういう訳だからこれで…」  
「待つてくれよトムさん」

「……………」

「アンタ、勝ち組だったんすか」

「……………そういう君は負け組かい？」

「その最下層つす。周りからは“戦犯”って呼ばれてる」

「戦犯だつて……………!？」

「そうか、だからメガネを掛けてたのか！」

「呪われて外せない最凶装備なんでね、何処に行つても掛けなきゃいけないんすよ」

「booketteの幻想郷に居るユーザーで君だけがメガネを掛けていたのが、そういう事だったとは…申し訳ない」

「お気になさらず、もう慣れましたから。勝ち組はいつだつて優遇されるんです。

勝ち組だから…」

「貴方の活動休止を聞きつけて、こんなに多くのユーザーが集まるんです」

「トムさん、俺たちに一言も言わずに消えるのは無しだぜ？」

「皆さん…どうしてここに？」

「空、ガーリック、社畜、コメット、きいろだま…駄目だ、多すぎて名前が読めないや。」

あ、穂谷野（雷様）さん居た」

「自転車バカさん…貴方の仕業ですね？」

「さっすが文さん、おっしゃる通りです。このままじゃアレだろうと思つてさっきの会話を穂谷野（雷様）さんに電話で聞いて貰つてました。トムさんを慕うユーザーは多いと聞いてたんで、あのお方なら広めてくれるだろうと思つた訳です。ここまで集つたのは予想外でしたけどね」

ざつと見渡して10人は確実に居るだろう、数えるのが億劫なくらい多くのユーザーが活動休止を聞いてトムの元へ集つた。皆と一通り挨拶を終えた後、トムがにとりに声をかける。

「にとり…こつちを向いてくれないか？目を見て話が見たいんだ」

「めーゆー…」

「…そんな顔しないでくれよ、もう会えない訳じゃないんだ。少しの間だけだから…必ず戻ってくるよ」

「うん…分かつた、行つてらっしゃい」

「行つてらっしゃい、トムさん」

身体が薄れゆく中、トムは誰にも聞こえないように静かに呟く。

(さようなら)

事態はこれだけで終わらなかった。本当に事件が起こったのはトムが活動休止して数日後の事。タッチの差だが、一番最初に気づいたのは自転車バカだった。

「嘘だろ…トムさんのアカウントが…消えた…？」

お気に入り職人一覧にも…ボケての全ユーザーを記録してある職人リストにも…どこをどう探しても、彼の名が見当たらないのだ。慌てて皆に伝えようとするのだが、既にボケて内のSNSで彼らは連絡を取り合っていた。動揺と戸惑いが混ざり合うごちやごちやの思考回路で、大事な事に気づく。

(…そうだ、にとりさん！)

人里を駆け抜け、ロープウェイに乗り込み、彼女の家に向かう。着いた頃には顔から湯気が出ていた。呼吸が落ち着くのを待たずして、目の焦点が合っていないにとり声をかける。

「はあ、はあ…に…にとりさん」

「ああ…君か…何の用だい？」

「そ、それなんだけど…その…はあ、はあ」

マズイ…ノープランで此処まで来た俺もマズイけど、にとりさんの目もつとマズイ



…これは放っておくと取り返しがつかなくなりそうだ。

「用が無いのなら帰ってくれ…今は誰とも会いたくないんだ…」

そう言つて自宅から立ち去ろうとするにとりを、自転車バカが制す。

「…どこに行くつもりだ？アンタの家はこつちだぞ？」

「……」

「それに、用事ならある。俺はアンタ…」

いや、河城にとりを保護しに来たんだ。文々。新聞社の下請けとして」

「へえ……？」

「…俺の知つてる河城にとりとは、旦那のアカウントが消えたくらいで死を決意するよ  
うな弱い妖怪じゃない。だつて人間と盟友…っ！そうだよ、

”一生をかけて君を守るから 僕と人生を共にしてくれ”

つて、堅い約束を結んだ仲なんだから!？」

「…っ！」

「一度心に誓つた約束は、最後まで守るのが男の務めだ。だつたら俺も、今ここで誓お

う」

「自転車バカあ…」

「君の旦那は修行の旅に出てるんだ。心配すんな、奴は必ず帰って来る。…それまでの間、俺がお前を守ってみせる」

天を仰ぐようにして泣き出すにとりに対し、黙って頭を撫でる事しかない自転車バカであった。



「…ありがとう。手、離していいよ」

「少しは楽になったか？」

「うん…目が腫れた事を除けばちよつとは落ち着いたから」

「ふつ、そういう冗談が言えるならもう大丈夫だな」

刹那、頭が痛み出す。あまりの痛さに耐え切れず、膝から崩れ落ちてしまう。

「いつ……！」

「自転車バカ!? どうしたんだ急に！」

（何だ、この痛み……！ うっかり自動ドアで頭挟まれた時だって、ここまで痛くなかったぞ……！）

「頭か!? 頭が痛むのか!? ど、どうしよう……！ 頭痛薬ってあったかな……？」

必死に自転車バカの背中をさするにとりだが、痛みは増すばかり。遂には気絶してしまふ。

-----

-----

-----

-----

目の前を覆っていた霧が晴れ、柔らかく暖かい光に包まれた世界に無数のシャボン玉が浮かぶ。視線は上がりシャボン玉を追って忙しなく動いていると、背後から声が聞こえた。

振り向いた先には子犬らしき生物が紋章より現れており、驚きながらも話を進めていく。

風が吹いて身体が浮かび上がると、運営と名乗る子犬はこう言った。

貴方はいずれ、ある出来事がきつかけとなり子会社を立ち上げる事になるでしょう。他人の嫁を4人、保護する事になります

そこで映像は途切れた。

「……………」

目を覚ました筈なのだが、何故が目の前が暗い。つていうか何も見えない。視力落ちたかな？

と思つて目元に手を伸ばすと簡単に取れた。

(何だ蒸しタオルか、びつくりさせ……ッ!?)

タオルを避けると更に驚いた。目の前には寝入っているにとりの顔が見えたのである。顔を横に向けると案の定太ももが映り、膝枕されたのだと理解した。

前にもこんななんあつたな確か。

起こさないように、されど素早く起き上がり距離を取る。心臓は痛いくらい速く鼓動している、これが寝起きドッキリなら満点だ。

重みが無くなったのか気配に気づいたのか、にとりは小さく声を上げて目を覚ました。

「盟友、目が覚め……何やってるんだい？」

「こっちの台詞だわ、何で息をするように気絶した人間を膝枕してんの？」

「何でって……1+1は2だろう？植物は日光を浴びると光合成するだろう？そーゆー事だよ」

「やって当たり前みたいに言うな。やめろ、”こいつ何言ってるの？”みたいな目で見るな」

「リアクションが童貞臭いぞ盟友、これくらいで何を恥ずかしがってるんだい？」

「ツ、黙れ！年齢〓彼女&友達居ない歴の人間を馬鹿にするのもそこまでだ！」

そろそろ時間だし落ちる！また明日ね！

「……本当に童貞だったのか、悪いことしちゃったかな」

次の日、すっかりクリスマスモードになった人里の大通りを歩いているのは自転車バカだ。いちやつくバカップルを尻目に街を出てロープウェイに乗り、途中下車をしていつもの家に向かう。

（何でだろう、”暖かいね？”って会話聞くと無性に腹がたつのは。今ならアリと同じ感覚で人を殺せそうな気がする……ってあれ？家に電気が点いてない？なら工場か）

自宅の隣にある工場の窓からは蛍光灯が光っているのが見えた。ドアに手を掛けるが、カギはかかって居なかった。

「ふう…こんな所かな」

「あ、やつぱりこつちに居た。おーい、にとりさーん」

「ああ おはよう、寒そうだな」

「おはよう、外は雪降ってたぞ。コート着なきやぜってー死んでるね。そのリストは何？」

「これは在庫がない工具一覽だよ。半分くらいは急を要する物じゃないけど…あるに越した事はないし、今から買いに行こうとしてたんだ、一緒に来てくれないか？ ついでに食料品も買いたいんだ」

「…台車か何かあった方が良くない？」

「心配いらぬよ、工具の大半は手のひらサイズだし。食料品だって足りない分を買い足すだけだから」

「それを聞いて安心した、じゃあ行こう」

人里のメインストリートから一本奥に入った道には、大通りと比べこじんまりとした

店が所狭しと立ち並んでいる。その一角、曲がり角に面した“幻想電気”という店の自動ドアが開き、にとりと自転車バカが出て来た。

「な？心配いらないうって言っただろ？」

「うん、米粒よりちっさい部品なんてあるんだ…専門店つて凄え」

「あの店には樹○工業の創業者から直々に技術を学んだ者がいるんだが…まあそれは置いといて、これで私の用事は終わりだ」

「どうする？一旦家に戻るか？」

「いや、その必要は無いよ。こういう時の為のリユックなんだから。これをこうして…よし、入った」

「じゃあ俺の用事を済ませたいと思いまーす」

「わあー」

「でも目的地が紅魔館なんで助っ人召喚しまーす」

「助っ人？」

腕に着けている装置を使って文に電話をして、紅魔館へと連れていって貰った。門の前では美鈴が旦那と談笑していたが、



「今週の俳句モデルの件で来た」

と言うとあつきり通してくれた。応接間で文が咲夜の写真を何枚か撮り、いささか上機嫌なのを見計らって自転車バカは疑問をぶつけてみる。

「咲夜さん、そういや美鈴さんって結婚してたりは…?」

それを聞いた途端それまでの決め顔が一気に崩れ、こみ上げる笑いを必死に抑えながら答えた。

「結婚? 美鈴が? 無い無い、それは無い」

「あやや? まだでしたっけ?」

「まだっていうか、あんな絵に描いたような奥手バカツプルがそんな話題切り出すとか出来っこないから」

「え、じゃあ付き合うちに当たつての告白は…?」

「ああ、あれはもう最ツ高に傑作でね? 今思い出しても…あははっ!」

崩れ落ちるようにソファアに座り俯いて机を叩き思い出し笑いをする咲夜に、にとり

と文の野次馬魂に火が付いた。

『その話詳しく!!』

「はあー…涙出てきちゃった。してもいいのだけれど、貴女達お腹は空いてない？良かったら昼食のオカズにどうぞ？」

一瞬で用意されたテーブルに座らされ、談笑し始める3人。空気を読んで部屋を退散した自転車バカだが、妖精メイドに声をかけられあの時最後まで出来なかった館内見学の続きをする事になった。

見学が終わり、再び応接間に戻った頃には談笑も済んで帰り支度が出来ていた。ログアウトするには中途半端な時間を

「家で過ごしたい」

と言った自転車バカの意見は通らず、にとりに付き添って街を散歩する事になった。

「用事があったとはいえ、人里まで送って貰えたのはラッキーだったね」

「確かに。あの距離を徒歩で移動するなんて言われたら速攻でログアウトしてた自信がある」

「ふふっ、したところですぐ戻ってきた癖に」

「否定はしない」

「んっふふふふ！」

「…ん？その方がむしろ時間短縮なったんじゃね？」

「どうして？」

「だつてさ、出て即入れば家に瞬間移動するようなもんじゃん。いくら文さんが速くてもこっちの方が圧倒的に速いよ」

「…ふむ、一理あるな」

「それに、そうすればにとりさんだつて飛んでこれるじゃん。俺に合わせて歩く必要が無いんだし」

「それもそうだ」

「何で送るって言つて聞かなかつたのかなあ…？」

「…」

——ね、付き合っっちゃえば良いのに

（まあ抱きかかえられてたんじゃ、あいつの嬉しそうな顔なんて見えないよな。”目覚

めのキス”の話だつてしてないくらいだし…近いうちに一悶着ありそうだな)

腕を組んで考え込む自転車バカを横目にそんな事を思い出しながら歩いていると、売  
り子から声を掛けられた。

「すみませーん、ちよつと宜しいですかー？」

『はい？』

「街頭アンケートやってるんでご協力お願いしますー」

アンケート用紙を手にとって辺りを見回すと、意外と書いている者が多い。そんなに  
面白いのかと用紙を見つめるのだが、里で有名な呉服店が実施しているから書く者が多  
いのだと気づく。それぞれ往来の邪魔にならない位置で書いていると、周囲のどよめき  
で作業が止まる。どよめきの発生地では、泣いているにとりをガラの悪い男達を取り囲  
んでいた。

「え、泣き…?」

「おいおい嬢ちゃん、そんなきつたねー顔して何泣いてんだあ？」

「お前の顔がキモくて泣いたんじゃねーの？」

「心にクリティカルヒットした今の」

『だーっはっはっはっはっはっは！』

冷やかし連中の漫才に腹を立てつつ、アンケート用紙の質問を確認する自転車バカ。すると、下の方に彼女が泣いている原因と思わしき質問があった。

「クリスマスと一緒に過ごしたい人……これか！」

「盟友……ッ！」

（しまった！まだ傷が癒えてない精神状態でこの文句は耐えられなかったか！くそつ、何でそこまで気が回らなかったし！しかも今日クリスマスイヴじゃねえ……あつ!!）

用紙を睨んでいた際に、泣いているにとりて更に取り囲むようにして人だかりが出来ていた。彼女の元へ行こうとするが、ただでさえ往来が混んでいる状況下で人だかりが出来ている為、近づくことすらままならない。足掻けば足掻く程、にとりから遠ざかっている気さえする。そんな自転車バカを知ってか知らずか、にとりにこんな声がかけられた。

「邪魔くせえチビだなあ、取り敢えず殴るか!？」  
『ひっどーい！キヤハハハハッ！』

プチッ

一体何が起こったのか、自転車バカには理解が出来なかった。気がつけばにとりを冷やかしていた連中は尻もちをついて、全員が怯えるような目で自転車バカを見上げている。肝心のにとりは左腕で抱き寄せている、同じくびっくりしたのか半泣き状態でこちらを見上げているが。

「自分のことは一切合切棚に上げて、強い奴にはゴマをする。自分より格下で気が弱い奴は、ありとあらゆる手段を使って苛め抜くんだ……例えそいつが何も気に触る事をしなくてもな」

H u n t e r   G r e e n と呼ばれる色に身体を覆われた自転車バカは喋る。

「……だ、誰の話だ？」

「そういう屑ってさ、友達が居ない所じゃすつげー虐げられてんだよ。主に家族とかにな」

『うっ』

「何でこんな事が出来ないんだ、お前のそういう所が駄目なんだ、他の人はこのくらい出来るんだぞ、それに比べてお前は…ってな具合に、常に他人と比較されてな」

『うぐっ』

「そうやって人格否定された辛さを、弱い奴にぶつけて一時的に気持ち悪さを誤魔化すだけの一生を過ぐす奴は、更なる高みへ行こうと努力する人間からすれば目障りでしか無いんだよ。自分の努力を邪魔されるだけなんだからな。お前らそんな事出来もしねえだろ？」

『ぐっ…』

「生きるって言葉の本当の意味を理解出来ねえ奴に、未来に向かって努力する人間を邪魔する権利は無え。次こんな真似したらどうなるか分かってんだろーな？」

『ひ、ひい…！すんませんでした…！』

「邪魔くせえチビだなあ、取り敢えず殴るか？」

『う、うわあああああ…！！』



一目散に駆け出す野次馬連中と、一部始終を見守っていた連中に聞かせる為、大きく息を吸って叫ぶ。

「この娘は責任を持って俺が預かる!!?…」あの人”に無事再会させるのが俺の使命だ!!?」

翌日、この事件を一面にした文々。新聞は過去最高の売り上げを記録した。



あれから二週間が経った。少しずつではあるけれど、にとりさんの傷は確実に癒えてきている。毎日家まで通い詰めたのが効いたらしい……まあ

「出来るなら毎日来てくれ」

って言われたからなんだけど。でもたまーに訳もなく泣き出す事があるから注意が必要だ。トムさんの話題を一切出さないようにするのが一番難しい、心の状態を例えるなら“出血は止まった”って感じだから、うっかり彼を思い出させてしまえば泣かせる羽目になる。…頑張ろう、これ以上悪化させない為に。

そんな自転車バカの奮闘も空しく事態は悪化する。ある日のことだ。三日ぶりに口グインした自転車バカを待ち受けていたのは、たいぞうの引退だった。ボケて内のSN Sを使って彼が公表した文面は、自転車バカが居ないうちにユーザーに知れ渡っていた。

すぐさま彼のマイページへと飛び自転車バカ。幸いなことに、彼はまだ皆と最後の挨拶をしている途中だった。

「お、自転車バカ！間に合ったな！」

「ぎりぎりセーフか、良かったあ…お前に知らせて貰ってなかったら分からずじまいだったよ。ありがとな、しんたん」

「神様に感謝だな」

「10日までルーミアお題出すってこういう事だったんだな、今気づいたよ」

「まあ、お前に限らずみんながそうだと思うがな」

自転車バカが眺める先で、たいぞうは皆と別れを済ませていく。

「さて、そろそろ行こうかな」

「いつかまた戻ってくるなら俺は楽しみにまっています。いつでも来てください。ここには東方好きのみんながいますから!」

「たいぞうさん、お題などでお世話になりました。今まで本当にありがとうございましたーごさいますー!」

「たいぞうさんルーミアお題&今までありがとうございます!!またここで会えたらよろしくですっ!!!」

「引退ってマジですか…戻ってきてください!幼○夢で泣いてますんで!」

「たいぞうさん今までお疲れ様でした…」

「みんな、ありがとう。でも…」

『……』

たいぞうと皆が見つめる先ではアリスが皆に背を向けて俯いている。

「最後まで見送ろうぜ」

と声をかければ良いのだが、それが出来るならとつくにやっていただろう。沈黙を破ったのは自転車バカだった。

「アリスなら心配いらん、俺が人形作り教わりに通うから」

「お前…」

「なあに、保護する人数が増えたところでどうってことは無いよ。あんたらは何も心配しなくて良い、これは俺の管轄だ。だから…行つてらっしゃい！」

『行つてらっしゃい！』

「アリスの事、よろしく頼む。いつかまた会えると信じて、その日まで…さらば！」

身体が七色に光り、紙吹雪のように散ってゆくたいぞうを見上げながら、自転車バカは小さく呟く。

「これが、  
アンタの見た運命か」

現在の保護対象者：2人  
続く。

## 第16話「告白する二人」

午前9時。ログインした自転車バカは椅子に腰かけ、にとりに電話を掛ける。

「おはようにとりさん、ちょっと相談した事があるんだけど良い？」

「おはよう、何だい？」

「ほら、この前へんなのに町で絡まれたじゃん？」

「君がキレて追い払ったやつか」

「そうそう。あの時は話を通じるからどうにかなったけどさ、実力行使してくる輩が今後出てこないとは言いきれないし。コナン君みたいに一次的にでも身体能力が上がる装備があれば良いなと」

「うーん……」

「難しい感じ？」

「出来ないことは無い、ただ靴に電気をため込むのは危険極まりないんだ。下手をすれば感電死するからね」

「どうすんの？」

「安全で後遺症の残らない供給源となると……うーん、何があるかな」  
「……あ、俺の能力とかどうよ？」

応答が止まる。

代わりにキヤスターが回転する音、シャーペンが紙の上をリズミカルに滑る音が聞こえて来た。

5分ほど経過したのち、若干トーンの上がった声でこう言われた。

「イケるかも知れない、取り敢えずサンプルを取りたいから家に来てくれ」

「はーい、じゃ切るね」



100Hz前後の低音を上げ、雪の降る中をロープウェイは降りていく。

私の目論見は成功した。どうやら盟友がキレた状態で能力を発動すると、光球の色が常盤色になり防御力も向上するのだ。

サンプルをPCに読み込ませた結果、グローブと靴の形をした少々特殊な装置を作れ

ば行けるとの答えを出した。

待っててくれ、盟友。時間は掛かるが必ず作ってみせるよ。

“水中のエンジニア”の名に懸けて。

「おっと、時間だ。そろそろ行かないとな」

腕の装置で時刻を確認し別画面でグーグルマップを起動する。目的地を設定し、音声案内の示すまま歩いて行った。

着いた先は人里から少しだけ離れた場所、アリスの別荘だ。ご丁寧に玄関前で待っていてくれたようだ。

「そんな寒い所おらんでも……」

「おい、アリスさーん。今日は頼まれてた月刊「にとり☒s工房」の2月号持ってきたよー、発売前だけど特別に」

「あら、早かったのね。もう少し掛かると思っていたのだけけど?」

「そう?これでもにとりさんのトコ先行ってきたから遅くなっただけだ」

「……」



「ん？どうかした？」

「いえ、ごめんなさいね。思えば窓ガラス壊さずにちゃんと玄関から入ってくる来客なんて滅多に居ないから……」

「……苦労してんね」

「貴方に比べれば大したこと無いけどね、取り敢えず中へ入りましょう？外で立ち話つてもアレだし」

「賛成」

中に入り、イスに腰掛けた所で本題に入る。

「でさあ、ひとつ聞きたいんだけど。アリスさんとあの人ってどういう関係？」

「…彼との関係？」

「うん、あまり会う機会が無かったから記憶が曖昧なんだ。出来れば説明して貰えると助かる」

「良いわ、但し一度しか言わないから良く聞いておいてね」

「ウイっす」

「……実は彼と初めて会ったのはそこまで昔では無いの、貴方よりは早かったというだ

けで。

けれど不思議な人だったわ：彼のデータは知ってるでしょう？そう、それ。1000にも満たないボケ投稿数なのに星の合計がそれなのよ？可笑しいわよね、ホント。笑っちゃうくらい、彼は人を惹きつけるのが上手だった：いえ、アレは最早技術うんぬんじゃなかった、天性のものよ。確信を持ってそう言える。じゃなきゃ引退するって言ったって、あんな多くのユーザーが集う筈ないもの。

始めは魔理沙みたいな印象を受けたけれど：彼はあたしを一途に愛してくれた。周りが離し立てても、そんな視線を物ともせず。

それであたしも決心したの、この人となら一緒になっても良いかなって。想いを打ち明けたら彼はとても喜んでくれたわ、まるで小学生みたいだね。それからは毎日が充実した素晴らしい物になったの：霊夢たちも暖かく祝福してくれたし。

本当は宵闇妖怪のお題を連続投稿してた時、彼は真っ先に打ち明けてくれたの。

”これが終わったら引退する”

って。目が本気なのは一目瞭然だったから、無駄な抵抗は出来なかった。

覚悟はしてたのだけど：いざ目の当たりにすると：決心が、揺らぎそうになって：ツ、だつて！せっかく幸せを掴んだと思つたのよ！？今更独りきりなんて：耐えられない筈ないじゃない！だからあたし：！

「ごめんなさい、熱くなり過ぎたわね…話せるのはこれくらいよ、少しはお役に立てたかしら？」

「そうだったんだ、良く分かったよ。話してくれてありがとう」

ほんの数秒、二人の間に沈黙が流れる。それを嫌ってか、アリスが再び口を開く。

「何か辛気臭い雰囲気になっちゃったわね、今お茶受け用意するからちょっと待ってて」

「あ、だったらにとり、s工房はテーブルの上に置いとくから」

「ありがとう、後で読ませて貰うわ」

アリスはいそいそとキッチンに向かい、座ったままの自転車バカは腕を組んで考え込む。

(3日ぶりにログインしたあの日、既にたいぞうさんは皆に別れを告げてる最中だったんだ…今思うと危なかったな。あの時、年末からボケてに参加したユーザーであるしんたんに知らせを受けなかったら、彼に行つてらっしゃいと言う事なんて出来てなかった

だろう。アリスさんを保護することだって…

いや、よそう。何はともあれ間に合ったんだ、それで充分だ)

「ねえ、自転車バカ？」

「呼んだー？」

「貴方って確かコーヒー飲めないのよね？カフェオレで良いかしら？」

「飲めない。つつーか飲みたくない。カフェオレでお願いしやーす」

「はいはい、分かったわよ」

その後。世間話に花を咲かせたり、アリスの持っている本（魔道書は理解出来ないし出来ても意味がないのでそれ以外）を読ませて貰うなど、まったりと過ごして暫く経過。そろそろ退散しようと思ひ、アリスを探してうろつく。

（まさか東野○吾作品が幻想入りしてたとは…しかも入手先がこうりんマートだと？いつか行ってみよう…！じゃなくて、アリスさんはどこだろう。アレが無いと帰れんからなあ〜つと、この部屋かな？）

目星をつけた部屋をノックと同時に開ける。  
それが悲劇の始まりとも知らずに。

「アリスさーん、そろそろ」にとり、s工房の原本返してほ…」

部屋の中では、下半身だけ下着姿になったアリスがベッドに寝転がっていた。

「あ…／＼」

「えっと…その…」

「…何よ」

あ、目が座った。

ヤバイ、これはヤバイ！ひっじょーにヤバイ！アリスさんの着替え？を目撃してしまった！クソつ、ノックしてすぐにドア開けたのが間違いだったか！いや待て落ち着け！今必要なのは懺悔では無くこの場を生きて潜り抜ける為の言い訳だ。考えろ、考えるな、感じるんだ…

アレ？考えないと駄目じゃね？あーもう駄目だ！何も浮かばねえ！最早ここまでか

！大体ピンクのパンツってどういう趣味してんだよ！最高かよ！何でそんな中途半端な格好でベッドに寝転んでんだよ！そもそもあの服ってワンピースタイプじゃなかったっけ!?畜生!こうなったらやけくそだ!

「あ!後ろに幽霊が!」

「ツ!」

それは何となく言ったのだ。大して考えた物では無い。本当に思い付きで適当だったのだ。

しかし、何故か効果はてきめんだった。

自転車バカに矛先を向けていた怒りが一瞬で消え失せ、音を立てて振り返り窓を見た。

その隙に逃げれば良かったのだが、出来る訳が無かった。

アリスが窓を見ると同時に、それまで家事をしていた人形たちが一斉に彼女の元に集い臨戦態勢を取ったからだ。

怖がりなどというレベルでは無い事は、誰が見ても明らかだ。完全に憶測だが、彼女は何かトラウマに近い経験をしたのかもしれない。

居ないと分かると心底安堵し、人形たちと一緒に更なる怒りで睨んできた。

「一応確認させて、今の発言には悪気も他意も無いのよね？」

「う、うん。この場から逃げる為だけに適当に言いました」

「はあ〜……」

「あ、アリスさん？」

「一つ約束してちょうだい。

“あたしの目が黒い内は、二度と幽霊なんて単語を口にしない”  
って」

「や、約束します」

「そう、ありがとう……」

でも本当に言わないか不安だから身体にも教えてあげるわね」  
「嘘だろ」

魔法の森に二度、男の悲鳴が響いた。



「あやや、そんな事が……愁傷さまです」

「フロアリングに正座は辛いわあ、しかも目隠し&手足完全拘束つすよ？暗闇で聞こえてくるのはドスの聞いた小言のみ。もうね、心が折れるかと……」

「うわあ……」

「許してもらえたのが唯一の救いつすよ」

「結果的に人里で俳句の販売が出来てるから良かったじゃないですか、次から気をつければ大丈夫ですって。ね？」

「もうこのメインストリートを歩けないかと思いましたがよ……そんな事より今日は以外と売れましたね」

「そうですね、11部の売り上げは今のところ過去最高じゃないですか？」

「確かに」

「さて。これで今日はやる事無くなった訳ですが、これからどうしますか？」

「うーん、日は暮れたけど時間はまだ余裕があるし……」

「そ、それならどこか行きませんか？」

「その案には賛成なんすけど……出来ればもう歩きたくないつすね」

「ふむ、それは至極最もな意見ですね……閃いた」



「通報した」

「混ぜっ返さないで下さいよ、せっかく思い付いたナイスアイデアが消えちゃうじやないですか」

「自分で言うかよ…どんなアイデアです？」

「景色のいい場所を知ってるんです、そこへ行きませんか？勿論飛んで行きますから、貴方が歩く必要は無用です。どうですか、素晴らしいでしょう？」

「…異議なし！」

氣力すら残ってないからしよーもないボケにや突っ込まんぞ。

文に抱えられ飛ぶ事、約30分。目隠しをさせられて着いた場所は、小高い丘の上に立つ灯台の頂上だった。堪らずフェンス際まで寄る。

「おお…こりや絶景つすな」

「この高台は元々火消しが見回りに使ってた場所なんです、今じゃただの観光スポットですけど」

「人里が一望出来るのも納得出来るや…あ、メインストリートってあんな長かったんだ。」

へえ〜」

「ライトアップされた街が良く見える、私のとっておきの場所です。ほら、あそこが迷いの竹林ですよ」

「ほえー、一部だけ若干明るいのが永遠亭ですか？」

「はい、貴方が入院してた場所です。そして、私と貴方が初めて出会った場所の近くでもあります」

「思い出した、あん時妹紅って人に焼かれそうになったんすよ。向こうの勘違いでね」

「そんな事もありましたねえ…ま、一部始終は上から見ましたけど」

「なっ…！まあいいや。あれから約半年かあ、懐かしい」

「色々ありましたねえ…」

「あ、そういえば」

「？」

「俺が入院してた時の話でひとつ気になるのがあるんすよ」

「どんな事ですか？」

「周り曰く」

”二度と目が覚めない状態の寸前まで行ってある日突然目が覚めた”

って…」



く。

「そうか、文さんがあの時涙目だったのはそういう事だったんすね…でも、どうして俺なんかに？部下へのサービス良すぎじゃないっすか？」

「見れなくなつたからよ…貴方を、部下として」

「……？」

「初めは、ただの”使える駒”としか見てなかつたの。散々文句言われたけど半分は私のせいだしね」

「半分……？」

「で、でもね、⑨のライブの頃から”ああ、この人は表裏の少ない良い人なんだな”って…貴方を見るようになったの。思えばあの頃からよ…」

貴方とただの部下として付き合えなくなつたのは。だって、そうじゃなきゃ抱き抱えて飛ばないって…そもそも下請けとして雇つてたかどうかも怪しいのに」

さまざまな光を放つ街を眺めながら、文はフェンスに手を触れ更に続ける。

「貴方が意識不明になつたつて聞いた時、持つてた携帯を落としそうになつたの。舞踏

会を開くにあたってスキマ妖怪が協力してくれるって言ったのを伝えようとした最中だったから…。

一瞬で目の前が真っ暗になってね、気がつけば永遠亭に居たの」

掛ける言葉が、何も出てこない。

フェンスから離れ、そっぽを向いて話す。

「ホント、鳥頭も良いところよね私って。失いかけて、やっと気づいたんだもの…私は貴方を部下なんかじゃなく、想い人として見てた事に」

「文さん…」

振り返って高鳴る鼓動を感じながら、言葉を紡ぐ。

「ねえ、もう我慢出来ないの。もうこれ以上、自分に嘘はつきたくないの…！だから私と…私と…！」

幻想だと思っていた。叶うはずの無い夢だと、中学に進学する頃には諦めていた。

俺は奴らとは違う。奴らみたいに、人生を謳歌する事なんて出来ない。する資格が無いんだ。いっどこで命を捨てる羽目になるか分からないのだから。だから友達を作る権利なんて無い、誰かと喧嘩する事だつて無い。

ましてや告白なんて在る筈が無いと、本気で思い込んでいた。しかし今、その夢が現実になろうとしているのだ。やっべ、これ油断したら泣いちゃうやつだ。

「私と…私と…」

「どうなりたいの？」

「ツ!?!」

訂正、やっべ幻想のままだわ。

盛大にズツコケ、立ち上がって突っ込む。

「いてて…」

んなの知らねえよ!こつちが聞きたいわ!何これまでの雰囲気台無しにしてくれちやつてる訳!?!」

「だ、だって！」

いざ考えてみると既に旦那は居る訳だし、結婚してくださいは変だから付き合つて下さいが妥当かな？二号になって下さいはおかしいなあ。

とか考えたら自分でも何が言いたいのか良く分かんなくなっちゃつて」

「やれやれ、その様子じゃ文さんに浮気なんて無理そうっすね」

「つてことは無理ですか？」

「まあどつかの統計じゃ？誰かを一途に愛する人は食糞家よりも数が少ない生粋の変態らしいんで、浮気なんてのは自然現象なんかなとは思つてますけどね」

「じゃあOKですか？」

「話は最後まで聞きなさい」

「アツハイ」

「それを踏まえても、やっぱり俺は文さん…もとい、誰かと付き合うだなんて無理っすよ。」

明日もログイン出来るっつー確証が何処にも無いんすから」

「それは現実が忙しくなるという意味ですか？」

「いいえ、死ぬかも知れないからです」

「!?」

「勝ち組・負け組って話をしたの、覚えてます？」

「……トムさんですよ？」

「ええ。この際なんで正直に言いますけど、アレは比喻じゃなく実際に存在する階級なんです。

負け組つーのは常に自分を犠牲にして、勝ち組が快適に過ごせる環境配備をしなくちゃいけないんです。

奴らの命令には、どんなものでも従う義務があるんです。

……極端な話、死んでくれと言われたら理由も聞かずに殺されなきゃならないんですよ」

「そ、そんな……!!」

「だからね、文さん。俺は此処にログイン出来るだけで幸せなんすよ。

貴女は生まれて初めて出来た知人で、

尊敬する上司で、

友人なんです。

これ以上俺を幸せにししないで下さい、死にたくなくなっちゃうじゃないですか」

「……ッ！」



泣きそうな顔で、それでも微笑む。背を向け立ち去ろうとする彼の背には、哀愁が漂っていた。

何だよ。何で二十歳そこそこの若者が、こんな苦勞しなきやいけないのよ・・・！  
堪らず駆け寄り、羽まで使って抱きしめる。この温もりが無くなるなんて、そんなの許さない。

絶対に許されない。

「……何してんすか？」

「お願いだから、もつと。叶いもしない夢を願ってよ。若者らしく大言壮語してよ。自画自賛してよ。子どもみたいに騒いでよ！」

「してみたいつすね、それ」

「幸せを感じることに不幸になる？ふざけないでよ！だったら何でこの世界に来たの？  
どうしてヘルメットを買ったの？」

「幸せになりたいからでしょ!？」

「辛く苦しいだけの人生が嫌だから、安らぎを求めたんでしょ!？」

罵倒されて踏みにじられるのが嫌だから、一緒に過ごすと楽しくなれる友達が欲しかったんでしょ!？」

心から愛して愛される恋人が欲しかったから、「綿月依姫」と繋がったんじゃないの!?」

「…ツ!?文さん、アンタまさ…つてえ!」

言葉を遮るように突き飛ばし、地面に押し倒してマウントポジションを取る。顔を挟むように両手を付き、懇願した。

「貴方があの人を好きだって事は理解してる!私に勝ち目がないのは分かってる!

だけどそんなのどうだって良いの!」

「……」

「貴方が居なくなると悲しむ人は、此処に居るの。今まで誰も、そんな事言う人居なかったかもしれないけど。

貴方はもう独りじゃないの、簡単に死なないで。

明日も明後日もその先もずっと、此処に来て?」

あの二人を幸せに出来ない俺は、君と付き合う資格が無い。悪いが他を当たってくれ……告白してくれてありがとな、凄く嬉しかった。

と去り際に言いかけた言葉を口にする事は無く、返事の代わりに優しく抱きしめた。透明なドーム型天井の下で。二人は気が済むまで抱き合っていた。

続く。

## 第17話「不気味な数字」

いくら冬といえど、9時を回れば人々は活動を開始する。にもかかわらず、家から一歩も外に出ようとしない人物が居た。自転車バカだ。机に突つ伏したまま動こうとしない。

「どうしてこうなったし……」

顔だけ起こし、机の上に無造作に置かれた紙面を見る。花果子念報の号外にはこう書かれていた。

自転車バカ、上司と夜の密着取材!!

↳ 射命丸が見せた涙の訳

どうやらあの時はたてに一部始終を目撃され、なおかつ号外のピラが幻想郷中にばら撒かれていたらしい。勿論、俺の家にもだ。内容を確認した……まあ読めた代物じゃ無

かった。シユレッダーにかけて粉々にした後

よし、タチの悪い噂は打ち消しておかねば。

とSNSを立ち上げたけどそれがマズかった。憶測だけで書かれた記事をみんなが更に膨らませるもんだから、手に負えない事になっていた。ハツハツハ、これもう收拾つかねーや。

(あんな別れ方した以上、文さん家どころか今日はどこ行っても駄目な気がする…でもこのまま家で過ごししても誰か冷やかに来そうだよなあ…よし)

意を決して腕の装置を操作すると、自転車バカはたちどころに消えてしまった。

(……)がボケて本来の世界か……何々？

“ユーザーの皆様が過ごしやすいよう、日本という国の首都だった東京という街並みを再現しております”？

(……凄いいんポイントで看板立ってるな)

物珍しそうに辺りを見回していると、ビル郡が目止まる。大して高い訳では無いの

だが、周りに高い建造物が無いため余計に目立つ。近づくと看板がある事に気づいた。

(新着の館…注目の館…人気の館…ピックアップの館…セレクトの館…殿堂入りの館…なるほど、分からん。とりあえず新着の館つてのに入ってみるか、館じゃなくてビルだけど)

自動ドアを抜け緑色を基調とした館内に足を踏み入れると、受付嬢が真っ先に気づいて声を掛けた。

「いらつしやいませ、ここは今生み出されたばかりのボケを取り揃えております。ご自由にご覧くださいませ」

「あの、何でビルなのに館なんですか？」

「……質問を返すようで失礼ですがお客様、ここへおいでになるのは初めてですね？でしたら説明させて頂きます」

「お願いしやっす」

「人類がウェブサイト内の世界に入る事が出来るようになった当初は、ここら一带に建物なんて無かったのです。ですが社長を始めとしてユーザーの方々は殺風景な風景を

良しともしませんでした。そこで思いついたのです、美術館よろしく建物を創ってそこにボケを載せるのはどうか、と」

「……じゃあ当初は館だったんですね？」

「はい。ですがそれでは手狭になったので、こうしてビルに改装したのです」

「なるほど、良く分かりました。それだけ分かれば充分です、ありがとうございます」  
「ではこれを持って行って行かれてはいかががでしょうか？」

カウンターの下に入れた手を出すと、受付嬢の手には蛍光灯の光を浴びて銀色に光る球体に乗っていた。

「…なんですか？このガンダムSEEDを彷彿とさせる銀色の球体は」

「ガイドロボです。それにはボケての歴史を全て搭載しておりますので、お役に立てるか」と

「了承です、じゃあ」

「いってらっしゃいませ」



数時間後、自転車バカは

これ絶対HARO2モデルにしたよね

と言いたくなるような見た目のガイドロボを連れビル群の谷間を歩いていた。否、歩いているのは自転車バカだけである。

「お前空中浮遊とか出来るんだ……まあいいや。」

いやあ面白かった、やっぱり殿堂入りは傑作しかないんだな」

「ソウ思ツテ頂ダケルト幸イデス。ボケヲ創ツタ職人ノ方々モ喜ンデラツシャル事デシヨウ」

「俺もあんなボケ創つてみたいねえ……ん？あれは……？」

「アレハボケテ歴史資料館デ御座イマス。ボケテノ歩ンデ来タ道ガ記サレテオリマス」  
「なるほど、ちよつと覗いてみよっかな」

中に入り、ジオラマや立体ホログラムなどを見てまわる。

休もうと思いい壁に寄りかかったのだが、



「おわつとおつ!？」

まさかの回転扉。頭をぶつけもがき苦しんでいると、視界の端に移った回転扉が嘲笑うように回っていた。痛みが引いたので奥へ進むと一冊の本が置いてあった。タイトルは

「先人の過ち」  
だ。

（何々…我々ボケラーの犯した過ちは、決して許されるものではない。二度とあのよう  
な悲劇を起こさぬ為にも、ここに書き記しておく…）

まさかこうなるとは思ってもいなかった。

誰が最初に目を付けたのか、誰があんな生物兵器を生み出してしまったのか、そんな

事はどうでも良い。現に誕生させてしまったのだ。史上最凶のコンピュータウイルス、SAORIとAKIKOを。

それはあまりにも強大過ぎた。奴らの瞬きで研究所は塵と化した。奴らの吐いた息で、前方10kmの地面が抉れた。

生物の形にしたのがより悪い結果をもたらした事は言うまでもない。

ネット上の話だろうと思われるかも知れないが、ありとあらゆる場所に侵入する事が出来たので世界中の核ミサイルを同時発射するのは時間の問題だった。このままでは人類どころか地球が消し炭になってしまう。それを恐れた我々はすぐさま対抗したのだが、何をやっても効き目はゼロだった。世界中の誰もが終末を確信して嘆くなか、ある二人のボケラーだけは諦めていなかった。名を隠す必要もないので書いてしまうが、

” 大人店長 ” と ” 葵 ”

という2人だ。ボケてに瀑誕した伝説の勇者は嘆く我らの前でこう言った。

「ボケてが生み出した怪物は、ボケラーが始末する」と。

その言葉通り、彼らは身体を碧色と蛍光の黄色に輝かせ見事に生物兵器を封印してしまった。我々は勇者様が死力を尽くして封印したあの兵器を、厳重な管理下に置いた。

自転車バカが読み終えたのを見計らって、ガイドロボが話しかける。

「コレガ、先人ノ犯シタ唯一ニシテ最大ノ過チデス。ドウシテ人間ノ創造力ハコンナ方向ヘ向カツテシマウノカ、ロボットノワタシニハ理解不能デス」

「高校時代、授業で教わったよ。過去の人類は

” 自分さえ良ければ他はどうでもいい ”

という主義の元に、とにかく力や権威を求めていたらしい……自分が努力して強くなるんじゃない、相手を蹴落として自分が優位に立つ方が楽だと思ってたそうだ。この本にも書いてあったけど、その結果が”コレ”なんだろうな。

” まさかこうなるとは思ってもいなかった ”

後先を考えずに、一時の感情で衝動的に行動する奴がよく口にする台詞だ。そうならないように俺も気をつけなくちゃな」

そう言いながら巻末を見ると、赤い文字で

「復活まで残り20」

と書いてある事に気づく。

「何だこの落書き？」

「恐らく、誰かガフザケテ書イタノデシヨウ」

「消さなくていいの？」

「問題アリマセン、何故ナラコレハ複製サレタ物ダカラデス。本物ハウツカリシテタラ朽チテシマッタノデ…」

「おいコラ」

「サテ、コレカラドウサレマスカ？」

「大体の事は分かったし、そろそろお暇すつかな。他に行きたい所もあるし」

そう言つて建物を後にした自転車バカだが、どこかすつきりしない顔をしている。

（あの生物兵器は嚴重な管理下で平和利用出来ないか研究中だつて言つてたし、大丈夫だよな。アレが復活なんて…考え過ぎだな）

その後P i x i vなど他のサイトを見て回つたが、嫌な気分が晴れることはなかつた。

何とは無しに再びボケて本来の世界へと戻る。ビル群から離れ住宅街を歩いていると、マンションがあった。

特にこれといって特徴は無い、八階建てでレンガの模様が施された小さなマンションだ。しかし、何故か自転車バカは興味を引かれた。エントランスに入り表札を眺め、ある部屋で目が止まった。

(一、これは・・・何でこんな所に!?)

見間違いではない。これは自分しか知らない筈の、小さい頃に思いついた暗号だ。だが、現にこうして表札となっている。

(そうか! 此処、爺ちゃんが暮らしてたマンションだ! って事は……)

郵便受けのダイヤルを回し開ける。中にはリングで留められた二つの鍵があった。一つはエントランスの、もう一つは部屋のだ。

エレベーターで目的の部屋の階に着き、唾を飲み込んで恐る恐る部屋に入る。信じらんねえ、何もかも昔来た時のまんまだ。誘われるように祖父の部屋に行くと、机の上に

一台のパソコンが起動した状態で置いてあった。マウスに触れた瞬間。

「何か御用ですか？ ■■さん」

「!?そ、それ俺の本名…!?」

「驚かせてしまい申し訳ありません。」

私は貴方のおじい様より任務を受けた音声案内ソフト、コルタナと申します。どうぞよろしく」

「お、おう」

「早速ですが見て頂きたい物があるので、動画を再生してもよろしいですか？」

「い、いいけど」

「では……」



動画を見終わり言葉が出ない自転車バカに、コルタナは申し訳なさそうに言う。

「矢継ぎ早で申し訳ありませんが、こちらのPDFファイルを御高覧下さい」

デスクトップ画面にタブが開く。文章を目で追っていくと、そこには更に驚愕する事が書いてあった。

へ我々が生み出した化け物の凄まじさは、理解して頂けたと思う。だが、これは単なる昔話では無い。そんな無駄話をする為に見せたわけでは無いのだ。

率直に言おう、奴は復活する。

動画では映っていないが、とある霊媒師に視て貰った限りではアレを作った関係者の一人は逃げおおせたのだそうだ、逮捕どころの騒ぎでは無かったので助かったがな。

遠い未来、奴の子孫は必ず仮想空間に現れる。そして、必ずや世界を滅ぼしにかかるだろう。だが、君にはアレを止める力がある。

君の先祖。日本人が発揮する力は仮想空間において非常に強力な力だ。その遺伝子を受け継ぐ君にも、その力は備わっている。君が使う“防御・回復専門型”は、極めると放つオーラが常盤色では無く碧色となる。とある段階まで進化すれば、オーラを黄緑色と常盤色に分ける事も可能だ。かつての“葵”がそうであったように。

能力を進化させる方法は至って単純だ。常に自分の限界を超えるギリギリのレベル



で努力する

“限界的練習”

と、小説を読む時に文章を追いながら場面を想像する時にも使う

“心的イメージ”

の二つの練習を徹底的にこなせ。集中して練習し続ければ、必ずや君の能力は開花する。

あの化け物を止められるのは、日本人のDNAを唯一受け継いだ君にしか出来ない。  
頼んだぞ、未来を

ずっと感じていた嫌な気分が、此処に来て確信に変わった。

部屋に満ちた重たい静寂に、自転車バカの心は潰されそうになった。

続く。

## 第18話 「仲直りミサイル」

(うーむ、にとりさんが電話に出ない……忙しいのかな?)

”あの日”から数えて、3日ぶりのログインとなった自転車バカ。雑誌の件で電話を掛けているのだが、先ほどから何度かけても

「ただいま留守にしております。ピーという発信音の後に、お名前とご用件をお話下さる」

という音声しか聞こえてこない。諦めて通話を切る。

(そーいや、作業に集中する時は携帯をマナーモードにするとか言ってたっけ。だったら直接行くか。そのほう……)

「自転車バカさん!?居ますか?居るならドアを開けて下さい!」

「!?そ、その声は文さん?」

「ああ、今日は居るんですね。良かった……じゃなくて!」

「ああはいはい。今開けますよ」

相変わらず心臓に悪いタイミングだが、いつもと違いかなり慌てふためいている様子。玄関を開けると声色通り、焦燥感を全面に押し出していた。

「何でそんな焦ってるのか知らないけど、とりあえず中に入ったらどうです?」

「本来ならそうするべきなのでしょうが、今はそんな悠長な事言ってもらえないんです。

アレを見て下さい!」

「アレって……?!」

外へ出て、文が指差す方角を見る自転車バカ。その先は妖怪の山なのだが、どこかおかしい。

「……文さん」

「言わんとする事は大体想像が付きませんが何でしょう?」

「何すかあの砲台みたいな突起物は?この距離から見えるってそうとうデカイつすよ?」

「現在調査中ですが、おそらく見た目通りかと」

「それからもう一つ。アレにとりさんの携帯が通じないのは関係あるんすか？」

「あるも何も、アレ作ったの彼女ですから。昨日の夜には無かつたんですが、朝起きたらああなつてました」

「マジかよ…で、本人は何て？」

「昨日の夜、彼女がツイッターで

”にとり、s工房が売れない…”

と呟いたのが最後です。それ以来連絡がつかなくつて……」

「売れないから大砲？うーむ、さっぱり分からん」

「権を現場に向かわせたのでそろそろ連絡が……来た」

振動するスマホを取り耳に当てると、通話口を遠ざけたくなるくらいに声が聞こえて来た。

「もしもし、こちら権！文様、応答願います！」

「あんたにしては時間かかったじゃない、何かあった？」

「申し訳ありません、にとりの家に結界が張られていたので解くのに手間取ってしま

いました」

「面倒なことを……それで？肝心の彼女はとうだったの？」

「それが……」

椛が次の言葉を発する前に、二人の元へ霊夢がやってきて疑問を口にする。

「ちよつと、何なのよあれは！」

「霊夢さん！どうしてここへ？」

「久々に勘が働いたのよ。気がつけばあんな物がそびえ立ってるし」

「相変わらず冴えてますね……流石博麗の巫女」

「で、あれは何？」

「今メインシステムらしき物体がある部屋に居ますが、画面を見る限り……これは本を積んだミサイルみたいですね」

「本？だったら放っておいても大丈夫なんじゃないの？」

「それが、そうもいかないみたいで……」

「にとりはどこに居んのよ？本人に説明させりやいいじゃない」

「すぐそばに居ますが、彼女は使い物になりません」

「どういう事?」

「精神攪乱剤でも持っていたのでしよう、目の焦点が定まっていません。よだれ垂らして笑ってます」

『うわあ……』

「そ、そのメイんシステムとやらを止めることは出来ないの? いくら中身が本でも見た目が物騒だから勘違いされるわ。」

「下手すりゃ戦争が始まりかねないし」

「……………」

「ちよつと、今のツツコミ所でしようが」

「そうですね、本当に戦争が始まりそうです」

『はい?』

「今気が付いたのですが画面の表示に

松ダイナマイト

とあります」

「ダイナマイトの中でも最も威力が高いと言われる松ダイナマイトですって…!?

なによそれ…:それじゃ唯の大量殺戮兵器じゃない!」

「椛、ミサイルの大きさをどのくらい!？」

「全長が178cmで、直径が30cmです。完全にダイナマイトを元にしてますね。こいつらがあと数十分で発射します」

一瞬、霊夢と文が黙りこむ。だが、すぐに声を揃えてこう叫んだ。

『はあ?!』

「ちよ、すぐに止めなさい!」

「今やってます!けどここにも結界があつて…発射までに間に合いそうもないです!」

「また結界!?ホント面倒な事を…!」

苛立つ霊夢だが、そこは博麗の巫女。頭を掻き耂りつつも幾つかのパターンを想定した上で問いかける。

「椀、着地点はどこ?」

「えつと、紅魔館…人里…魔法の森…博麗神社…妖怪の山です。にとりは何がしたいんでしよう?」



「クーデターでしょ」

「ど、どうしたら……!」

「文、着地点に居る妖怪に片っ端から連絡して」

「な、何て言つて……?」

「どうせ逃げろつて言つても聞かないだろうから迎撃してもらおう」

「出来ますかね?」

「やらなきゃ自分らの家が駄目になるだけよ。それに、あんなのが炸裂したら周りにも被害が及ぶの。断る意味はないはずよ。ほら、時間無いんだからはやくして」

言われた通りに電話を掛ける文を横目に、霊夢はポケつとしていた自転車バカにも指し示を与える。

「あんたにも協力してもらおうわよ、自転車バカ?」

「え?」

「え? じゃないわよ、あんたの力があれば私の労力が半分で済むの。だから協力して。因みに拒否権はないからね?」

「いや、断るつもりはないけどさ……俺に出来る事あんの?」

「あんたの能力を使うわ」

「能力って…これ？」

右手に力を入れて、ソフトボール程の球体を作る。

「そう、それ」

「これでミサイル防ぐのか？確かに防御&回復型とは言われたけども…橋直すくらいしか出来んぞ？」

「防げるわよ、出力を最大にすれば良いんだから」

「最大って…具体的にどうすれば？」

「順を追って話すわ。以前にとりに絡んだチンピラ追い払おうとしてブチ切れたことあったでしょう？」

「ああ、あったねそんな事」

「あの時、普段と色が変わったのは覚えてる？」

「そういえば黒っぽい色だったような…ってか見てたような言い草だな」

「見たても何も偶然近くに居たし。あの状態なら私の”夢想封印”がギリギリ防げないくらいの強度にはなるわ」

「マジで!?アレそんな強かったの!?俺すっげえ!」

「集中」

「え?」

「話は最後まで聞きなさい」

「さ、さーせん…」

「でもその程度の強度じゃ足りないから、合図したら”ソレ”を限界まで展開してちよ  
うだい、”一重大結界”と”拡散結界”で強化&援護するから」

「おお、何とも心強いお言葉…」

「あら、連絡は終わった?」

「はい。霊夢さんが仰ったとおり、皆さんとてもノリノリでした」

「だから言ったでしょう?あんたは穂谷野と一緒にここで迎撃に当たって、一番手薄だ  
から」

「了解しました、連れて来ます!」



「あ、そういや博麗神社は?」

「あそこは大丈夫よ、だって萃香と勇儀がいるもの」  
「鬼が二人かよ…それなら大丈夫だな」

様子を想像して思わず鼻で笑っていると、自宅まで向かった文が戻ってきた。  
が、自分のように旦那を抱えてはいない。

注意して見ると、文の傍で黒い雲に胡坐をかいて座る人が居る。

青いスーツを着た穂谷野（雷様）は、勾玉のような模様が三つ入った小さな太鼓をリング状に八つ浮かべている。雲からは絶えず、小さな稲光が走る。

「すっげえ…空飛んでる…!」

「そういえば、この姿を見せるのは初めてだったね。私はスイッチを入れるとこうなるんだ、中々便利だよ」

「此処」に住まうボケラーは沢山いますが、飛行出来る能力を持っているのは私の旦那様のみです」

「ああそれから、他のメンバーには私から連絡しておいた。今は心の準備をしているだろう…号砲一発でスイッチを入れられるように」

「あ、ありがとうございます」

「椛がSkyypeを繋いでいるので参加して下さい、無線の代わりです」

「発射まで5分切りました！すみません、やっぱり間に合いません！皆さんお願いしますー！」

「だつてさ、聞こえたかい？勇儀」

「ああ、ぼつちり聞こえたさ。こっちは準備万端だ、どつからでもかかつて来な！」

「テンション高いねえ……ま、無理もないか。久々に大手を振って暴れられるんだからね！社にや塵ひとつ当てないから安心しな、霊夢！」

「……頼りにしてるわよ」

「咲夜？これが終わったら博麗神社で宴会よ、今の内に門番と一緒に酒の用意でもしてなさい」

「ふふっ……畏まりました」

「ねえねえお姉さま？今日は最高の天気ね！なんだかワクワクしてきちゃった♪」

「それもそうね、曇り空なら结界を張る必要もないし。今日は喘息の発作も起きそうになさう」

「なんの気兼ねもいらんだろう……スカーレット家の恐ろしさを思い知るがいい！」

「ふん！私とアリスが手を組んだら無敵だつて事、見せてやるぜ！」

「まさかゴリアテを使う日が来るなんて……整備しといて良かった」

「わわっ!ど、どうしまししょう!?!」

「ここは私らがやるから早苗は下がってて……でないと本気、出せないから」  
「これを機に信仰増大だね!」

霊夢が自転車バカを抱えてアパートの屋根に移り、四人は妖怪の山を睨む。

場数を踏んでいるのか肩に余計な力が入っていない、恐らく文と旦那は大丈夫だろう。問題はコイツだ。

少しでも力を出せるように、肩を叩いて励ます。

「出番よ、出来る範囲で構わないから展開して」

「……おっけい」

両手を重ねて突き出し、目を閉じる。

あのファイルに書いてあった“心的イメージ”とは即ち、心の中で描く風景や想像力を働かせる事を意味する。

だから小説を読むにも使うなどと書かれていたのだ。

言葉のせいで少し遠回りしてしまったが……

数学で展開図を解く時

能力を使う時

心的イメージは必ず使っている。寧ろ数学に関しては使いこなせるよう、かなり努力してきた。

やって出来ないことは、無い筈だ。

身体から溢れ出した黄緑色と常盤色のオーラが、螺旋状に渦を巻いて天へ昇っていく。

「・・・ッ!？」

イメージを働かせようとするが、頭が痛みだす。描いた風景にノイズが交じり、上手く出来ない。

これが限界だとしても言うのか。今の俺には、不可能な領域だと。

螺旋が崩れ、オーラが歪みだす。

ふざけるな……限界だなんて誰が決めた!

ノイズを振り切り、痛みを無視して作り上げる。出来上がったと同時に、楯のカウン  
トダウンが終わり無数のミサイルが発射された。

『自転車バカ!』

「自転車バカさん!」

「があああああああ!!!」

雄叫びを上げて展開したシールドは、止まる事なく突き進む。

「拡散・二重大結界!!」

シールドにミサイルが衝突した瞬間、耳を塞がなければ鼓膜が持っていられる程の轟音が轟き粉塵が舞い上がった。

収まったのを感じて目を開けるも、砂埃で何も見えない。

「ど、どうなったんだ…?」

「手応えはあったわ、結界が破られた感触は無かったから大丈夫な筈んだけど…」

「k…聞こえ、m…ますか…?文様、聞こえますか?」

「椀?大丈夫なの?喋ってる口だけが無事、なんてオチじゃないでしょうね?」



「ええ、大丈夫です。ちゃんと生きてますよ、にとりも無事です」

文が通信を取っている内に視界が晴れてきた。  
それに気づいた霊夢は目を細め、大きく見開いた。

「……どうやら、防ぎきつたらしいわね」

「うっそだろ……！」

「これは凄いな……！」

「ねえ、パチエ？」

「……どうかした？」

「種族的にはやつちやいけないらさうけど、神様に感謝する事があるの……何だか分かる？」

「私でも分かるよお姉さま。それは、あの事でしょう？」

「長い事生きてきたが、こんな面白い光景に出会えるとはねえ……」

「昔の人は訳の分からない物事に出くわした時、それを“鬼”と言ったそうだが……今な

「分かる気がするな」

「同感だね、ありや本当の意味での鬼だ」

「なあアリス…」

「何？」

「お前、これを魔法で出来るか？私にや無理だ」

「どうかしら、神綺様なら出来るかも知れないけれど…」

「凄いのは凄いが…どうせならこつちまで覆って欲しかったかな」

「それは無茶つてもんでしょ…あの子は人間だよ？妖怪でもなければ、早苗みたいに現人神でも無い」

「奇跡だ…自転車バカさんが奇跡を起こした…！」

全員が見つめるその先…正確にはミサイルの着弾地点ほぼ全土を、常盤色の障壁が覆っている。

問題のミサイルは全て障壁で止まっている。全弾がひとつ残らず、破壊ではなく分解された状態だ。

結界を解いた椀がPCを操作して解析する。

「そうか…あの人の能力は、防御&回復型！応用して、ミサイルを組み立てる前の状態に戻したんだ！」

「ただし、ニトログリセリンだけは爆発した。あれは衝撃にめっぽう弱いからね」

「にとり！正気戻ったのね！」

「あんな轟音で五月蠅いと感じない方がおかしいよ、色々と迷惑を掛けたね…申し訳ない」

「にとりさん…どうしてこんな真似を？」

「すまない、全ては君と文を仲直りさせようと思ってやった事なんだ」

「はあ？」

「花果子念報の号外を見て、居ても立つても居られなくなつたんだ。このままじゃ、取り返しが付かなくなると…」

「そりゃ勘違いだよ、そもそも俺と文さん仲違いなんてしてないし」

「え、そうなのかい？」

一つ、深いため息を付いて頭を掻く。

「普段から散々

“ あんなゴシップ記事信じる馬鹿が居たら見てみたいね ”

とか言ってた癖に、まさかアンタが引つ掛かって鵜呑みにするとは……」

「さ、さーせん……」

「霊夢さん、この騒動の主犯とつちめて貰っていいですか？」

「良いわよ、誰？」

「姫海棠 は た て」

「よしきた」

その後、はたての姿を見たものは居ない。

続く。

## 第19話「十六夜咲夜」

「では、行つて参ります」

身支度を整えた私は、深々と頭を下げてお嬢様の部屋を後にする。

正門では美鈴が退屈そうにしてるだろうとの予測の元、突然の思い付きでお嬢様から面倒くさい命令を受けたストレス発散に門を右足で蹴破るように入れてやった。

「ッ!?!」

片方は壁に当たり大きな音を立てて跳ね返ってきたけど、もう片方は跳ね返つてこない。門の向こう側を覗くと、美鈴が酷く驚いた顔をしていた。

「うんうん、少しは気が引き締まったようね」

「もー、心臓に悪いから止めてくださいよー」

「ごめんごめん、じゃ行つてくるから」

「行つてらつしやーい」

霧の湖を抜け、人里に着く。買い物メモを睨みながら歩く内に、ふと思い出した。そういえばあの人に出会ったのも、こんな天気の良い日だったっけ……。

◇

いつものように館内の掃除をしていると、美鈴から連絡が連絡が入った。

〈はいもしもし〉

〈咲夜さん、館内見学を希望された方がいらしゃったのでお通しました〉

〈案内させる妖精メイドは？〉

〈既に連絡してます〉

〈分かった、頭に留めとく。わざわざありがとう〉

〈いえいえ、では〉

電話を切り、通りかかった妖精メイドに窓ふきを任せて応接間の掃除へと向かう。

以前は人手不足だった紅魔館も、お嬢様の思い付きで

「三食休憩室付き」

で求人広告したおかげで瞬く間に集まった。ただ集ったのが食事や睡眠などが不要な種族だったのと、給料より働き甲斐を求める人材ばかりだったのは流石に予想外だったらしい。

そうこうしている内に掃除を終わらせて部屋を出る。すると、曲がり角の向こうから楽しげに語らう声が聞こえてきた。折角だし挨拶でもしておこうと思いつくと、頭上に“社畜”と表記された男の人がこけそうになっていたので時間を止めてサポートに入る。

お客様ってユーザーの事だったのね、美鈴あとでナイフの刑。聞かなかった私にも非はあるけどまあいいや。

しゃんと立たせた所で解除すると、予想通り驚いてくれた。

「うおつあれっ？コケ……て、ない？何これ魔法？」

「いいえ、時間を止めただけですわ」

「ツ!?あ、貴女は……!」

「ようこそ紅魔館へ。私は此処でメイド長を務めております、“十六夜咲夜”と申しま



す。以後お見知りおき……ッ!？」

驚いた。いや、こんな状況に出くわせば誰だって驚くだろう。

自己紹介して深々とお辞儀して頭上げたら相手が真つすぐ私を見て涙流してたんですよ、いくら弾幕ごつこで色々鍛えた私でも流石にパニックですって。

何か失礼があつたかと考えるが、皆目見当もつかないので恐る恐る聞いてみた。

「わ、私何か失礼な事を……?」

「い、いえ、これはっ、その……っ」

しゃくり上げながら事情を説明してくれた彼の言葉を纏めると、

「夢にまで見た大好きな人に会えたのが嬉しかった」

との事。思いがけない言葉に赤面する私などお構いなしに、彼は私の手を取つて懇願してきた。

「お願いします！僕、咲夜さんが大好きなんです！何だつたら嫁に貰いたいくらい愛してるんです！だから、その……友達から始めさせて下さい！」

「ま、まあ友達でしたら、良いですよ」

「……我が世の春が来たアアア!!」

そのままバク転でも始めそうな勢いで拳を突き上げて雄たけびを上げ走り出したので、慌てて手を取って応接間へと案内した。トムとジェリーじゃ無いんだから。

ユーザー様だからって気軽にOKしたのは不味かったかなとの考えが頭をよぎるも、時すでに遅し。後の祭り。後悔先に立たず。

翌日から、社畜は紅魔館へ：いや、私に会いにくるようになった。庭で洗濯物を干すのも、窓ふきも、部屋の掃除も、拙い手つきだが進んで手伝ってくれた。ログインして時間の殆どを私と過ごすのに費やしてる為、他のメイドやお嬢様方の間で

「メイド長は専属の下僕を取ったらしい」

と噂されているのを美鈴が教えてくれた時は吃驚した。

「本当にそう言ったの?」

「ええ。でもまあ仕方ないですよ、あの人って白のポロシャツにダメージジーンズでしよう?それが咲夜さんに付きっ切りなんですから」

「しかも冴えない顔だね」

「あれは誰が見ても下僕ですよ。追い払わないんだつたらせめて身なりくらいは執事っぽくしないと」

「……まあ、それもそうね。魔理沙辺りに漏れたらマズいし」

「あはは、あれは話を盛る天才ですからね」

という訳で倉庫から引つ張り出した黒のジャケットとズボンを着させると、幾らかマシになった。言うまでもない事だけど、

“ 私から服を貰った ”

という事実が彼のやる気を更に引き出す結果になった。どのくらい引き出したかと言うと、喧嘩なんて一度もしたこと無いのに魔理沙の泥棒を阻止しようと奮闘してくれた程だ。

当然ながら紅魔館に住む他のユーザー達との交流も増えていき、

“ たまたまい ” “ ガーリック ” “ きいろだま ” の三人にいじられキャラと認定されて参った。ただでさえレミリアさん達にも弄られてるのに。

と、笑顔で話してくれた。

次第に、社畜が居ない日でも彼の顔が頭に浮かぶようになった。いつ曲がり角から顔を覗かせるかと思ひ、ついつい探してしまう。ミスこそしないものの、ぼうつとしてい

る事が多くなっていった。それを見かねたのかお嬢様にも、

「お前はもう少し、自分の為に生きても良いと思うぞ」

と言われ、心が揺らいだ。

「それは、どういう……?」

「どうも何も無いよ、掃除してても部屋の片付けしててもアイツを探してキョロキョロ見回して」

「も、申し訳ございません」

「うちはアイドルグループと違って恋愛禁止だなんて言わないよ、そんな物は個人の自由だ。仕事に支障をきたさなければ何だって構わない。お前が此処に来た時、一番最初に言ったよな?」

「……はい」

「くつつこうが振ろうがどうだって良いんだよ。」

“ 今の十六夜咲夜は仕事に支障をきたす問題を抱えている ”

だから早いとこ解決して、いつもの咲夜に戻ってくれ。いいね?」

「承知しました、失礼します」

「……あ、そうだ」

部屋から出ようとした私は、その言葉で足を止め振り返る。

「何でしょうか」

「折角だし買い物に行つてきてくれないか、アイツと一緒に」

そう言つて、お嬢様はニヤリと笑う。だから私も、ニヤリと笑いながら尋ねた。

「何をお求めですか？」

「言わなきや分からないのか？」

「ふふつ、では行つて参ります」

「ああ、行つてらっしゃい」

という訳で彼を連れて人里に買い物へ行く。特に買うものは指定されていない、それどころか今日は半ドンである。早い話がデートだ。

遊歩道の整備された森を歩きながら、彼の取り留めもない話を聞く。時間を節約するなら彼を抱えて飛んだ方が速いんだけど、そんな恥ずかしい真似は出来ない。私だつて

10代の乙女なのだ。いくらユーザー様とはいえども、流石に御勘弁願いたい。

木漏れ日が射すなかを、小鳥が楽し気に飛び回る。段々と前方が賑やかになり後少いで人里に着こうかという時、茂みの向こうから少女の悲鳴が聞こえた。

「だ、誰か助けてーッ！」

「咲夜さん、今のは……」

「穏やかじゃない事は確かね、行きましょう」

茂みを抜け現場に駆け付けると、行きつけの洋服屋の娘が妖獣の群れに囲まれていた。

見過ごすつもりなど無かったが、こうなると尚更後には引けない。

「社畜！」

「分かっています！」

時間を止め、少女を彼に保護させる。このまま逃げるのもアリだけど、探し回って人

里に來られては厄介なので真つ向から迎え撃つ事にした。

「そして時は動き出す」

「!? た、助かったの・・・?」

「まだ安心は出来ないよ、悪いけどこいつら倒すまで僕におんぶさせてね!」

「う、うん!」

「咲夜さん、背中任せて良いですか!」

「もとよりそのつもりよ」

弾幕ごっこだろうと近接格闘だろうと、戦いの場において油断や慢心は絶対にしてはならない。そして、常に数通りのパターンを想定しなければならぬ。これは基本中の基本だ。

これを疎かにするとどうなるのか?

答えは簡単だ、妖獣が人型に変化し高い知能指数と戦闘力を持つ事に動揺した私達のように大変な事になるのである。

巧みな連携で確実にダメージを与えて来る奴らに対し、こちらは防御に徹するので精一杯だ。社畜も頑張ってくれてはいるが、その身に庇い傷が増えていく。勿論私にも

だ。

「ッ！まずい、手持ちが．．．！」

冷静さを失い集中力の切れた私は

“動いていた物体を元の位置に戻す時は、その位置に身体を置かない”  
という初歩的な事を忘れ、脳内に直接ナイフを喰らってしまった。

「．．．！！」

意識を失う直前、彼の発するオーラが黒く濁って見えた。



「此処は……？？」

「咲夜さん！良かったあ……」

「社畜、私、どうなったの……？」



「それについては私から説明しましょうか」

目を逸らし口ごもった彼に対し、壁に寄りかかっていた竹林の医者が口を開いた。  
という事は私は永遠亭に運び込まれたらしい。

「順番に言うわね。」

まず貴女たちが戦ってた妖獣だけど、これは彼が殲滅したそうよ」

「殲滅……!?!」

「で、頭にナイフの刺さった貴方を妹紅が運んできたから私が取り敢えず治療したって  
訳。何か質問はある?」

「あの、取り敢えずというのは……?」

ベッドから起き上がり、冷や汗を流して尋ねる。

彼がああ群れを殲滅したのも気になるが、それ以上に今は気になる事がある。

起きてからずっと頭が痛くて堪らないのだ。頭痛のソレでないのは素人だけ分かる。  
る。

医者はカルテを取り出し、声を押し出すように言った。

「貴女はもう、時を止める事は出来ないわ」

「!？」

「もう以前のように時間を操る事は出来ないでしょう。能力を行使するだけで頭が割れるような激痛が走って、まともに立つ事さえ難しいと思う。時間を進めるのも止めるのも、一時間が限度よ」

「それ以上やったら、どうなるの？」

「くも膜下出血を起こして死ぬわ」

「そ、そんな・・・！」

「ごめんなさい、私の腕が足りないばかりに……」

謝罪の言葉が見つからないのか、深々と頭を下げると部屋を後にした。残ったのは、絶望を叩きつけられた私と社畜のみ。

「……僕のせいです」

「え？」

ベッドの傍の椅子に座った社畜が、握り拳を作り俯いて語る。

「咲夜さんが手術を受けてる間に、電話でレミリアさんから話は全部聞きました」

「……そう」

「僕、知らなかったんです。」

“ 憧れの人と毎日会えて話が出る ”

それだけで凄く幸せだったのに、それが咲夜さんの負担になってるなんて考えもしませんでした」

「別に大したこと……」

「ありますよ！現に負担になってたから、こんな大怪我させてしまったんじゃないですか！」

「そ、それとこれとは関係……」

「アカウント消します」

「は？」

「僕が咲夜さんと出会ってしまったのが悪いんです。だから責任取って、ボケてから退会します」

立ち上がるとうとした彼の腕を引つ張り、平手打ちをかます。

「咲夜さん……?」

「人の話も聞かないで、好き勝手言ってくれるじゃない。」

「アカウント消す? バカな事言わないでよ、誰のせいになつたと思ってるの? そんな事で償えると思つたら大間違いなんだから」

「……」

「周囲から忌み嫌われた私に、お嬢様は救いの手を差し伸べてくれた。」

「独りぼっちだった私を、みんなは家族だつて言ってくれた。」

「ユーザーと親しくなるどころか、忙しそうだの雰囲気か怖いだの言われて近寄られる事すらなかった私を、貴方は嫁に欲しいって言ってくれた。愛してるって……言ってくれた。」

「分かる? この世界に来てから、ずっと欲しかったものが、ようやく手に入りそうなのよ? 手放す訳ないじゃない」

「咲夜さん……!」

「もう私、貴方なしじゃ生きられないの。本当に責任取る気があるなら結婚しなさい」

「……はい、喜んで」



地味で冴えない奴だけど、一緒に居ると楽しくなれる。喧嘩もした事無い癖に、一生懸命私を守ろうとしてくれる。

そんな社畜が突如、姿を消した。

買い物を済ませ人里を歩いていると、自転車バカと文から声を掛けられた。

「咲夜さーん!」

「あら、誰かと思えば部下に振られたシヨックで面倒ごと起こした人じゃない。何の用?」

「うぐつ、まだ覚えてましたか…って、そうじゃなくて」

「買い物中には暗い顔してたから、何かこう…特売日が昨日だったの忘れてたとかそういう事あったのかなーって思ったんすけど」

その言葉を聞いて、ため息をつくように答える。

「そういう単純なことならどんなに良かったか…」

「…え？」

「何があったのか、聞かせて貰って良いですか？」

「実は最近、社畜の姿が見えないの」

「社畜って言ったら確か…咲夜さんの旦那ですよ？単に来てないんじゃないんですか？ログイン率は低いって聞いてますし」

「そうよ、元々ログイン率は低いんだけど…違うの、そうじゃないのよ」

「どう違うんですか？」

「最後にログアウトする前に彼が言ったの、”そろそろ頃合いかな”って…」

「それは…さようなならの意味にも取れますね」

「今までそんなこと無かったし、それに、アリスの”彼”は消えたでしょ？ちよつと不安で…」

「それだけですか？書き置きとかは？」

「…！そう言えば部屋に手紙があったような。まだ読んでないけど」

「それだ。多分それに姿が見えない理由が書いてある筈」

「咲夜さん、すぐに…！」

「え、ええ…買い物は終わったし、すぐ戻った方が良いかもね」

「時間止めりやすぐじゃん、行ってらっしゃい」

「そ、そうね……」

「…？戻らないんですか？」

「情けないけど……独りで見るのが怖い、何が書いてあるのか分からないし」

「咲夜さん……」

「ねえ、文？一緒に来てくれない？」

「え？私ですか？」

キョトンとする文に対し、私は文の手をとって懇願する。

「だって、既婚者の気持ちは既婚者にしか分からないじゃない。貴女にしか頼めないの

…お願い」

「それは…そうですが」

自転車バカに

” 貴方も来て下さい”

と言わんばかりの視線を向ける文。しかし、自転車バカはいつもと変わらぬ笑顔でこ

う言った。

「俺のことは気にしなくていいから、行ってきたらどうですか？」

「しかし…」

「それに、手紙の内容なら知ってるもん」

「え!?!」

「う、嘘でしょ？あの手紙はまだ誰にも見せてないのよ？何で貴方が知ってるのよ!?!」

「そうですよ！何故自転車バカさんが…!?!」

「社畜さんとはボケて内のSNSでちよくちよく話をする機会があつてさ。3日前に見たんすよ、

” 持病の癌が悪化して、命の危険があるのでネット世界から離れます。手術が終わって生きてたら、また戻って来ます。”

っていう文面をね。まあ、本当のことを言いたくなかったから出まかせ言ったんでしようけど」

「そ、そうだったんですか…でも冗談にしてはきついですよ」

「でしょ？だからこれは

” 一身上の都合によりネット世界から離れる事になりました。戻ってこられないか



も知れませんが、ひよっとしたら戻ってこれるかも知れないので待って下さい。”  
 つていう意味だと思っすよ」

「……つまり、この場合の”癌” っていうのは”戻ってこれる可能性”を示す…いえ、”癌にかかったのと同じくらい、現実世界でやっかいな事になった” っていう暗号なのね？」

「確かに、本当にそんな病気だったらネット世界に来られる筈無いですね。現実世界の病院には”装置”がないって、穂谷野（雷様）さんも仰ってましたし」

「俺はそういう事じゃないかと思ってます、確認したわけじゃないから確証はないけど」  
 「だとしても……」

「…1週間だ」

「え？」

「もし1週間たって奴が帰って来なけりゃ、あんた”も”俺が保護する。」

【誰一人、淋しい思いをさせない】

それが我が社の社訓だ」

「我が社…？」

「この方は我が文々。新聞社が誇る下請けの社長です。例え口約束でも、一度誓ったら必ず守るのがこの人です」

「そう言えば貴方…ミサイル事件でウチを守ってくれたのよね？だったらお願いしても良い？」

「もっちゃん！」

こうして寒空の下、新たに保護対象者が増えるのであった。

続く。

## 第20話 「ガールフレンド（神）」

（やっべ、凍ってる！こんのつ……）

駄目だ、びくともしねえ！つーか冷た過ぎてまともに触れねえんだけど）

自宅の窓と格闘している自転車バカだったが、5分ほどして諦めた。能力を解放して修復すると身支度を簡単に整え、ある場所へと向かうべく腕の装置を操作する。

（まさか”マイページ”をタップするとその人の居住地へ飛ぶ機能が あったとはね、穂谷野（雷様）さんって物知りなんだなあ）

「お、自転車バカさん。やっとな装置の使い方慣れてきましたね」

「あれ？美鈴さん知ってたんすか？だったら教えてくれても良かったのに」

「いやいや、まさか知らずに歩いて来るとは気づきませんよ。何で使わないのかなあ……くらいしか思ってたので」

「だから文さんは俺を運ぶ時いつも笑ってたのか…性格悪いなちくしょう」

「まあまあ、それで今日はどうぞされましたか？」

「咲夜さんの様子を見にきました、大丈夫だとは思いますが」

「同感です、あの人結構メンタル強いんですね。見た目通りとか何というか…」  
独り言のように喋りながら門を開く様子を横目に進むと、後ろから美鈴が思い出したように声をかける。

「あ、一応お嬢様に一声かけて下さいねー?」

「了解です」

玄関ホールでセグウェイを借り、レミアアの部屋まで行く。ノックをして入り、事のあらましを話した。

「…という訳です」

「そう、良く分かったわ。足を運んで貰ってありがとう、咲夜なら今のところは大丈夫よ。だって紅茶の味に変化がないから」

「判断基準そこすか?」

「あの娘は見た目に出さないからね……そのかわり、内面が荒れると紅茶の味が変わる

の

「ほえ、ちなみにどんな風に？」

「不安になると苦く、動揺すると甘く、落ち込むと辛く……といった具合になるの。数十年前に発見した法則よ」

「紅茶が辛く……？」

「不思議でしょう？でもなるのよ、何入れてんのかしら……」

「一番変わったのってどんなのだったんすか？」

「そうね……キッチンから爆発音が聞こえたのが一番かしら」

「ばっ……!!？」

「見てた訳じゃないから詳しくは知らないし知りたくもないけど……咲夜曰く

”ティーバッグを入れたら爆発した”

そうよ」

「マジっすか……。ま、まあ良いや。特に問題ないんならこれで」

帰ろうとする自転車バカを見ながら、記憶を辿るレミリア。

「確かアレ儚月抄……あ、思い出した。

待ちなさい自転車バカ。せっかく来たのだし良いこと教えてあげる」

「良いこと……？」

「フランの部屋へ行ってみなさい、何かある筈だから……私から言えるのはこれだけよ」  
「は、はあ」

不敵に笑うレミリアに、何となく悪寒を覚えた自転車バカだった。  
妖精メイドから貰った地図を頼りに廊下を進む。

（たまたまいさん達は出払ってんのか、せっかく来たんだし挨拶したかったな……つと、この部屋か）

レンタルしたセグウェイを止め壁際へ寄せる過程で、中途半端に開いたドアの奥からフランを含め複数の声が聞こえる。だが悲鳴のたぐいは聞こえない、どうやら食事中ではないようだ。安堵する自転車バカだが、一応用心して部屋を覗いてみる。

「良い事」ねえ、弾幕ごっこなら即帰……あ

30cm程開いたドアから覗いて見えたのは、

「お姉ちゃんも妹なのー?」

「一緒に遊びましょー♪」

「や、やめてください…／＼／＼」

フランとこいしが依姫を囲む、何とも微笑ましい光景だった。

(依姫!?なんでこんな所に…は、今から聞くとして。

どうしよう、声掛けたほうが良いか…:…もう少し眺めてても良い景色だよなコレ。いや待て、あんまりこの状態だと不審者扱いされて殺られるか…?うん、それは嫌だな)

「どうせ暇でしょー?」

「そ、それはそうです…」

ドアを開け放ち、丁番に身体を少し預けて提言する。

「こいしちゃんとはフランちゃん、悪いけどそいつから離れてくれるかな？ 依姫の横は俺の指定席なんでね」

『ほえ？』

「自転車バカさん！助かったあゝ」

ほつとした表情を浮かべてEXコンビのサンドイッチから抜け出し、自転車バカに駆け寄る。勢いで抱きつこうとする依姫だが、すんでの所で交わされた。

「避けた…だと…？」

「バ、バカやろう！秒速100メートルで走れる奴のダツシユなんか受け止められる訳ないだろうが！今のだって気づいたら目の前に顔があつたからね！？前回それで吹っ飛ばされたじゃん！」

「あ」

「つたく…二回目とはいえ良く反応出来たな俺」

「前回？え、何？このお姉ちゃん、自転車バカの知り合いなの？ノリの良さはカップル並だけど」

「二回目ってどーゆー事？カップルってゆーかお笑い芸人じゃない？」



「そういう心の声って普通は隠すもんじゃないの？」

まあいつか、知り合いつつーか……友達って言ったほうが正しいかも。な？」

「ええ、そうですね。この方とは天界で知り合っただんです、その時もさつきみたいな事をしたので”二回目”なんです」

「確か俳句モデルの件で行ったんだよな……モデルは天子さんだったっけか」

「あ、それ見た事ある！寒椿 日盛りの天界そらで……何だっけ？」

「打ち薫れ。でしょ？」

「へえ、2人とも知ってたんだ」

「だって、お姉さまが面白がって毎回買ってくるんだもの」

「私も同じようなもんかなー」。

” いいこと、こいし？こーいう情緒が理解出来ないようでは地靈殿の当主は”とかつて

「それすつこい分かるー！本人は格好つけてるつもりなんだろうけどちよつと何言ってるか分かんないだよねー！」

「そうそう、それでこつちが”は”って反応すると”えっ？ひよつとして伝わってない”？”みたいな顔するのが可愛いんだよね〜」

『まあ結局は我慢出来ずに抱きついちゃうんだけどね』

『ねー♪』と言い笑い合う二人の部屋に、依姫と自転車バカは居なかった。

勝手に盛り上がっているフランとこいしを後にして、廊下を進みながら会話を続行。

「何にせよ助かりました、ありがとうございます。もうヤダあの人達」

「ふっ、まあお疲れ様と言うことで。つか、丁寧語はやめて欲しいって言つてたよな？ 話はそれからだ」

「そう…だったね」

「そもそも何で地上に？」

「実は稽古中に倒れたらしくて…気がついたら家のソファアだったの。それを姉様に報告したら

” 10日程地上で観光してくると良いわ、迎えに行く時は連絡するから”

って、それで飛ばされたのが紅魔館だったって訳」

「で、なんやかんやあつて今に至ると」

「まあそんな感じかな…ここセグウェイあつたのね」

「空が飛べない人用に貸し出してるとよ、レミイさんから聞いた」

「へえ〜」

「それはそれとして。これからどうするよ、行きたい所とかある？」

「とりあえず八意様の所かなあ……」

「そこは前にも行ってるんだったつけ、なら道は分かるか？」

「分かると言えば分かるけど……正直言つて記憶が曖昧なの。もう随分前の事だし」

「なら案内しようか？竹林までの道なら覚えてるし」

「お願いしようかな♪」



「ふう……こうして持つとコートって重いな」

「でも紅魔館から来たにしちゃ、あんまり濡れてないウサ」

「鯖の味噌煮さんの所まで飛んだからかな、竹林内は雪があんまり降つて無かつたし」

世間話に花を咲かせて永遠亭の応接間でくつろぐ自転車バカ、依姫が永琳と話をしているので終わるまでは暇な身体だ。当の依姫には「一緒に居ても良い」と言われたが、彼女の目がキラキラしているのを見て断つたのだ。自分が居ては邪魔になると感じ取つたのだろう。

暫くすると、永琳の診察室から2人が出てきた。依姫の興奮が冷めやらぬうちに寢床の話を持ちかけると永琳はあっさり承諾した。曰く「一緒に居て面白い」らしい。”自転車バカがログアウトする時に永遠亭へ送る”という条件付きだが。

肝心の”依姫を永遠亭まで送る手段”を模索していた自転車バカだったが、優曇華の彼氏に”座薬神 レモ吉”というユーザーが居る事を確認出来たので解決した。

「さて、これで問題はあらかた片付いたし？」

「レッツ地上観光！早く早く〜！」

依姫に引つ張られる形で永遠亭を後にする自転車バカ、依姫のテンションが高いままなのは永琳効果だろうか。

「青春してるわねえ……」

と永琳が呟き、皆が同意する。そんな穏やかな空気に、襖を開け輝夜が入ってきた。

「まったくテンションたけーなおい」

「ねえ輝夜、一応まだ営業時間だから言葉遣い気を付けてくれない？ 誰に聞かれてるか分からないんだから」

「いやいや、こんなクソ寒い時期に来る奴なんて……あ、居るわ」

「でしょ？ てると優曇華、悪いけど着替え手伝ってあげて」

『承知しましたー』

それから十日後。

昼を過ぎ、太陽に照らされる二つの影が長く伸び始める時間帯。姉の豊姫から“永遠亭に居る”という連絡があったので、依姫と自転車バカは永遠亭に向かっていた。観光終了の合図だ。

「ごめんな、結局俺が行きたい場所しか行つてなくて」

「謝ることなんて無いよ、全部回るには無茶だったんだし。自転車バカが普段どういう事してるのか見れたから充分」

「そっか、なら良かった」

「それに……」

「うん？ 何か言った？」

「…何でもない！姉様待たせちゃってるんだし、早く行こう？」

「だったら永遠亭まで飛ぶか、その方が早いし」

「そうだね」

「よしきた。肩でも手でも良いからどつか身体に掴まってな、じゃないと2人同時に飛べないのは言ったろ？」

「じゃあ…えい♪」

「…何してんの？」

「えつと…恋人繋ぎ？」

「身体に掴まるだけで良いって今言ったよな？」

「言われたけど…これなら確実でしょ？」

「そりゃそうだけどさあ……」

「……」

さて、改めて状況を確認しよう。夕日が差し込む迷いの竹林の入り口付近で、若い男  
女が腕組んで恋人繋ぎをしているのである。

冷静に考えれば

『~~~~つ／＼／』

当然こうなる。

場の空気に耐えられなくなり飛んだ2人だが、飛んだ先の永遠亭で（豊姫を含む）全員から冷やかされたのは言うまでもないだろう。あまりの恥ずかしさで何も言えなくなった依姫を自転車バカが庇って弁明をした分だけ、更にかかわれるという悪循環を抜け出すのにかかなりの時間を要し最終的には

「あーもうめんどくせえ！豊姫さん！依姫お借りしますね！」

「おつ、チューか？チューするんか？」

『ヒューヒュー！お熱いですなあ！』

「いよつ、御兩人！入籍はいつだい!？」

「嫁と子ども授かって家庭円満なおっさんかテメーら！いい加減にしろ！」

俯いた依姫をエスコートして屋敷の外へと連れだした。正門から顔を覗かせ、追いかけて来ないと分かると壁にもたれかかって座り込む。

なんか今ので10年分の生命力使った気がする。

「やれやれ、これだから外見年齢と精神年齢が釣り合っていない奴は……」

「……／＼／」

「あくその、何だ。久しぶりに会えて俺は楽しかったよ、姫のあんたにや食い物が口に合わなかったかもしらんが」

「……／＼」

「そういうや、綿月姉妹の許可があれば俺が月に行くことも出来るんだよな。それな……」

「ありがとう」

「うん？」

落ちて着いたのか、ボソツと喋りだした。聞き漏らさないように立ち上がり、尻に付いた雪を払い落とす。

「楽しかったのはこつちも同じだよ」

「……そつか」

「それと、貴方ならいつでも月へ来て良いから。親友特権ね」

「マジか、ありがとう。そんなのあるんだ」



もう大丈夫だろうと判断し中に戻ろうとすると、依姫が袖口を掴んできた。振り返ると、彼女は泣きそうな顔をしていた。

「どうして……?」

「な、何が? つか何の事?」

「どうしてトークしてくれなかったの? 何でこっちから話しかけた時しか会話してくれなかったの?」

「……あ、LINEの話?」

「ずっと待ってたんだよ? 今日はどんなお話出来るかなって……楽しみにっ、してただよ……?」

とうとう泣き出してしまい、戸惑う自転車バカ。どうしたものかと考えていると、依姫に正面から抱き着かれた。

やべえ何だコイツ超良い匂いする。

などと心の中でほざいていると、肩に頭をうずめた依姫が質問した。

「私の事、嫌いになったんだよね？だからっ、話しかけてっ、くれなかつたんだよね……？」

「いやいやいや、無いって。嫌いになつてないって。色々タバタしてただけなんだって」

「嘘！だったら抱きしめ返してくれたり壁ドンするなりしてくれただっていいじゃない！

嫌いだから出来ないでしょ!？」

……お前実は泣いてるフリしてて己の願望吐き出してるだけとかじゃ無いだろうな。覚悟を決め、依姫を引き剥がした上で扉に押し当ててお望みどおりに壁ドンしてやった。

正確には壁ドンじゃなくて片手ドンだけど細かい事は気にしない。

「嫌いな訳ないじゃん、寧ろ一番好きだから毎年一押し投票してるんだろうが。

……言わせんなよ恥ずかしい」

目を逸らし顔を真っ赤にして言った自転車バカを見て、依姫も同じように赤くなっていた。

が、この上なく満足そうに微笑んでいた。

「……あ、やつべ。そろそろ落ちなきや」

「もうログアウトするの？」

「しなきや遅刻するんでね、んじや」

身体が発光し、虹色の光の粒となって雲散していった彼を眺めていたが

「依姫ー？そろそろ帰らないー？」

「あ、はーい！今行きまーす！」

今は親友でも、いつか、絶対……！

月明かりの下、依姫は踊るように姉の元へ駆けて行った。

続く。

## 第21話 「第二次幻想郷革命」

（結構集まったなあ、これだけあれば大丈夫だろ）

茶封筒をビニール袋に入れて、俳句販売所から引き上げる自転車バカ。袋の重みを感じると思わず笑みがこぼれる。

（俳句モデルの知名度上がったよなあ、俳句に使う写真を応募制にした途端この量だもんな。つと危ね、通り過ぎるトコだった）

2・3歩下がりがり、袋を左手に持ち替えてアパートのドアを開ける。

「ただいま戻りましたー、今回も豊作でっせー」

「おかえりなさい、自転車バカさん。早速選考に入りましたでしょうか？」

「ですね、じゃあ写真を…よっこらしょ！」

適当に靴を脱ぎ、袋から茶封筒を出し送り主の名前が見えるようにある程度裏表を揃えて机に置く。この15通ほどの中から選ぼうというわけだ。

が、

「うーむ、難しい…みんな本気出し過ぎつしよ。すつげえいい写真ばつかなんすけど」「なんか…ここ最近レベル上がってますね。撮るうちに構図とか身についていつてるんでしょいか」

「ネットで調べりや写真の撮り方なんていくらでも出て来ますからね…こんな感じで」「なるほど、機材まで紹介してるんですね。これは分かりやすい」

「それにしてもつすよ、ここまで傑作が揃うと…」

「あ、そういえば一眼レフ専門店が出来たらしいですよ？中々好評でした」

「マジつすか、その店長商売上手いなあ…ん？」

神経衰弱のように並べた茶封筒。その中に、ひとつだけ気になる物があつた。思わず手に取る。

「さぬ…？」

「その方がどうかしましたか？」

「いや、なんか聞き覚えある名前なんすよ。どこで聞いたんだっけ……？」

「ふむ……採用者リストには載っていません、初応募者ですね」

「あ、思い出した。町人Eさんがさぬ師って呼んでた人だ。」

「すみません、ちよつくらこの人のマイページ行つて来ます」

「どうぞどうぞで」

腕の装置を操作し、瞬間移動する。

「よつと……へえ、此処に住んでる人だったんだ」

自転車バカが降り立った地は、遠目からでも見える巨大な木と、それに続くバカみたいに長い階段。の、先に建つてるであろう純和風の屋敷が象徴的な場所。

冥界の白玉楼だ。

（「やっぱり」ボケての幻想郷”に住んでる人だったか。まあ見た感じボケの投稿数もそこそこあるし、当然といえば当然なのかな……おし、ついでにどんな人か見てみよう）

膝をガクガク言わせながらも階段を上り、屋敷へ近づく。体力が回復した所で塀の上からそうつと覗いた。幽々子にはすぐ気づかれたものの、一度俳句モデルに選んだ事で素性が知れている為に見逃して貰えた。まるで気づいていない妖夢とさぬを観察していた自転車バカだったのが問題無しと判断し、幽々子に合図して戻った。

その後、文に報告して俳句を作り製品化した物を販売所へ持っていく。

その日1日を文と交代しながら店番をして、顧客が来ない間は応募された写真を金庫へしまっておく。応募の中から選びきれなかった時の保険だ。

翌日、自転車バカは売り上げ額の一部を渡す為にさぬの元へ飛んだ。

「はあ……はあ……、生まれたての小鹿になった気分だわ。いや、あんな綺麗なモンじゃ無いけどさ」

しかし、階段を登り切った所で疲弊して寝転がっていた。

今すつごい空飛びたい、誰か翼を下さい。もう歩きたくない。つーか帰りたい。などと考えるも、渡す物があるので引き返す訳にもいかず。

それから10分後。



どうにか門の前に辿り着き、チャイムを鳴らした。

「はい、何でしょうか？」

「お忙しいところ恐縮ですが、俳句モデル選考委員の者です。此方にさぬさんはいらつしやいますか？」

「そうでしたか、えーと……あ、本人居ました。今向かわせます」  
「お願いします」

門が開き、さぬが不思議そうな表情を浮かべて聞いた。

「俳句モデルの方がどうしてここに……？」

「貴方がさぬさんですね、おめでとうございます。」

この度、お宅の妖夢さんが今週の俳句モデルに選ばれました」

「マジか！応募したの初めてなの？流石俺の妖夢だな……ん？待てよ？アレって確か」

「そうです、売り上げ部数が基準を超えたので”第二回弾幕舞踏会”の本戦出場が決定致しました」

「……お前そこで掃除してる場合じゃねーぞ妖夢う！聞いた今の!？」

「ばっちり聞いてました！冗談じゃないですよね!？」

「冗談ではありません、これが証拠です」

駆け寄ってきた妖夢にも見えるように、ショルダーバッグからチケットを取り出す。すると、二人して驚いてくれた。

『こ、これは・・・!』

「予選シード権です、特別製ですので紛失なさらぬよう厳重に保管を」

「分かってますって！こんなの無くすバカなんている訳無いじゃないですかー♪」

「だよなー♪」

「改めて、おめでとうございます。では失礼します」

深々と頭を下げ、門を閉じてアパートに戻る。

「おかえりなさい、反応はどうでしたか？」

「すっげえ喜んでましたよ。秋姉妹みたいに喜びの舞みたいなの踊ってました」

「何というバカップル……」

まあそれはさて置き、地霊殿から依頼メールが届いてますよ?」

「地霊殿から?」

「ええ……ざっくり要約すると、

” 地底ピーアールプロジェクトの第二弾をして頂きたい”

と書いてあります。鬼の皆さんに絡まれるのが私はアレなので自転車バカさん単独で行って貰えませんか?」

「流石文さん、話も早い。じゃあ行つて来ます」



「……つてな訳で、今回は1人で来ました」

「うん、仕事をそんな理由で放棄するつておかしいわよね? 一応文面にはあの天狗も一緒に来るよう書いておいたのだけど」

「仕方ないっすね、ああいう人なんで」

「仕方ないって……」

「いいじゃん別に。」

” もし来なくてもそれはそれで……”

「って言ってたのお姉ちゃんでしょ？」

地霊殿の応接間で話をする三人。

飛んだは良いがどこがどうなっているのか勝手が分からずうろちよろしていた自転車バカをこいしが発見し、ここまで連れてきたのだ。移動中、空さんを見かけたので挨拶した自転車バカだが、本人は

「……上がれよ」

とだけ言っただけどこかへ行ってしまった。そういうアレコレを話し、話題も尽きた所で本題に入る。

「地底ヒーアールプロジェクトってどういう事なんすか？ 確か前にもやったような気がするんですけど」

「貴方の言う通り、以前やって頂いたわ。あれはあれで好評だったの。地底へ来る人数もそこそこ増えたし」

「だったらなんで第二弾を？」

「増えるには増えたんだよ？ でもね、また元に戻りそうなの……」

「……？」

こいしがそういうと、二人とも目を伏せてしまった。  
さとりが伏せたまま話す。

「あのドラマの放映は効果があった、それは事実よ？けど一時的なものに過ぎなかったの。何が足りないのかしら……」

「お二人はどう考えてるんですか？」

「多分だけど、地底に来るまでの手間が一番の理由だと思う。」

昔に比べてお空の管理がかなり上達してるから、夏は涼しくて冬は暖かいように地底全土の気温調整を出来てるんだ、だから来た人は喜んでくれるの」

「避暑地にも避寒地にも使えると。なら何で」

「それは……」

「いいよ、私が言う。お姉ちゃん普段お仕事で忙しいから外に出てないじゃない。こーゆーのは任せてよ」

「……悪いわね」

「いえいえ♪」

それで、お客さんが増えないのはもう一つ理由があるの」

「もう一つ?」

「うん、てゆーかこれが最大の理由だと思うんだけど。」

此処って地上に比べて観光資源が少ないの、スペインで言うアンダルシア地方みたいな雰囲気になってるし。のんびりして貰えるのは良いんだけど、興味がわくようなイベントやら場所が地上に比べて少ないっていうのがあるかなあ……。

数日も居れば飽きちゃうんだよ、同じような景色ばかりだし。だから皆”二回目も来よう”と思わないんだろうねー」

『……』

「どうしたの2人とも? そんな驚いた顔して。私なにかおかしな事言った?」

「い、いや、おかしくはないですけど……」

「じゃあ何?」

「ここまで理路整然と話すとは思ってなかったから、びっくりしたわ。そんな情報量どこで集めたの?」

「えっへん! 普段から色んな所に入ったりしたのは遊んでるだけじゃ無かったって事だよ! 仮にも命蓮寺に入信してるのもあるから地上に行つてこころちゃんと遊ぶ機会も多いしね!」

「あんたの妹さん凄いつすね」

「そうね、問題点さえ分かっただけじゃあどうにもなるわ。偉いわ、こいし」

横に座っているこいしの頭を撫でると、この上ない笑顔を見せる。

「さて、こいしの言う”イベントやら場所”はどうかすると……それらをどう宣伝したらいいかしら」

「TVだとインパクトはあっても記憶に残りづらいもんね。なんかの番組で紹介して貰えば別だけど」

「それでも記憶に残りづらいのは変わらないわ、うーん……」

「あ、いい事思いついた」

「何かあるの?」

「Xanaduみたいに雑誌で紹介して貰ったらどうかな? 活字と写真なら嫌でも目に  
つくよ♪」

「……Xanaduって何?」

「俺が扱ってる雑誌みたいな物です。どつかで催し物があれば紹介するし、どつかの店に新商品が出れば許可を取った上で宣伝します。そーゆー感じで幻想郷……いや、地上全土のアレコレを紹介&宣伝してます」

それを聞くや否や、さとりが目を光らせて食いつく。

「それよ！是非ともその地底版を作って頂けないかしら!!？」

「私からもお願い！」

「勿論良いですよ、要望にはなるべく答えるのが我が社の務めですから」

『やったー！ありがとう自転車バカさん！』

（あ、ハモった。やっぱ姉妹なんだなあ）

その後、さとりの計らいでこいしに地底を案内して貰いながらメモと写真を取り、地  
霊殿に戻ってきた。

「うーん、やっぱ興味を引くようなイベントが無いと難しそうっすねー」

「だよねえ、どうしたものか……」

廊下を歩きながら、ふと別な事を思い出した。



「話変わるけど、同じ洋館でも紅魔館と地霊殿って随分違うんすね」  
「どんなふうにな？」

「向こうは広すぎて移動は基本セグウェイだし。毎日どこかしらで弾幕ごっこやってて騒がしいんすよ」

「仕方ないよ、向こうはアレで見物料取ってるんだもん」

「ですよー、やっぱ商売……」

そこまで言って、あるアイデアが浮かんだ。思わず立ち止まり考え込む。

……これひよつとしたらイケるんちゃう？

「こいしさん、さとりさんって今どこに居ます？」

「え？多分仕事部屋だと思っただけ」

「案内して頂けませんか？話したい事があるんです」

「いいよー」

部屋に入り、頭の中で纏めたアイデアを話し始めた。

『異変解決ごっこ?』

「はい、詳しく話したいのですがお時間宜しいですか?」

「別に構わないわよ、続けて」

「ありがとうございます。そもそも今まで起きた異変って

① 何かしらの騒ぎが起きる。

② 霊夢さんや魔理沙さんといった方々が調査に出る。

③ 元凶を突き止め弾幕ごっこで決着。

という流れですよね」

「大体そうですね」

「それを一般人がすぐ近くで観戦出来たのが心綺楼な訳ですが、大抵は自分たちの知らない内に終わってますよね。」

「なので、異変の事を聞かれてもご存じない方も居ます。誰が起こしたのか、というのも含めて」

「……そうだね」

「そこで提案なのですが、その異変解決を観光ツアーにしては如何でしょうか?」

『どういう意味?』

「当たり前前の事ですが、どれだけ東方に精通している人でもゲームをクリアするだけで

実際に体感する事は不可能なんです」

「知ってる、だからMMDで弾幕ごっこの場面作ってるんだよね……」

あ、そういう事!？」

「そうです。一面から六面、果てはEXまで。ツアーガイドの案内の元に現地へ赴き、実際に勝負して頂くのです。

といつても身体を動かしたり勝負事が苦手な方も居るでしょうから、会って話をするだけでも良いでしょう。

細かい所は臨機応変な対応が求められますが、これならご希望にお応え出来るかと思われます。

如何でしょうか？」

『貴方が神か』

「御冗談を、私はただの人間ですよ」

効果は絶大だった。

自転車バカが現地を見て回り、文が文章を纏めて出来上がった雑誌“UGR”を荷台に乗せて歩きながら売った所、あれよあれよという間にツアー希望者が集った。お隣がツアーガイドになり、勇儀主動のもと鬼達が一晩で地底と地上を繋ぐ穴に階段を作り上

げた。

だが、事態はこれだけで終わらなかつた。

無事に第一回を終えた参加者が口コミで広め、

「ひとつウチでも」

という事になり各地で異変解決ツアーが名乗りを上げたのだ。中には紅霧異変から順番に回る猛者も現れ、人里に住む一般人にも妖怪や異変が親しみやすい存在となった。妖怪側でも威厳を保つ良い機会となったのは言うまでもないだろう。

因みに、これを大々的に取り上げた文々。新聞と花果子念報も購読者が増えたそう  
な。

続く。

## 第22話「変化」

（さて、今日は何を……お！結露がない！これで3日連続かあ、そろそろ雑巾の出番おしまいだな）

窓を見て春の訪れを感じる自転車バカ、ふと思い出したように机の引き出しを開ける。

（えーっと、確かこの辺に……あつた。よしよし、後はアイツに電話だ）

電話を掛けた相手はチルノだ。霧の湖でルーミア・大妖精の二人と遊んでいる最中にスマホが鳴った。

「もしもし、久しぶりだなー！」

「久しぶり、今大丈夫か？」

「大丈夫だぞー」

「誰から電話なのカー？」

「自転車バカから」

「自転車バカさん？」

〈……話していいか？〉

「あ、どうぞどうぞ」

へちよつと渡しときたいものがあるんだ、今からそっち向かうけど変に移動して迷子になりたくないからさ。出来れば紅魔館で待つて欲しいんだけど〉

「紅魔館ね、いいよ！」

「わたし達ちようど紅魔館の近くに居るんです。すぐ来て頂いて問題ありませんよ」

「あ、本当だ」

「ぬお！いつの間に？」

「み、見えなかったのかー……！」

「2人とも大げさ、マイページから飛んで来たんだから見えなくて当たり前だよ？」

『そーなのカー？』

「そーなのだー」

「わはー♪」

「……とまあ冗談はこれくらいにして」

「渡したいものって何だ？」

「これだよ、はいどうぞ」

「……シード？」

手渡されたチケットの文字を眉をひそめて読み上げる。

何で寺子屋通つてるのにカタカナしか読めないんだお前は。

と突っ込もうとすると、横から覗き込んだ大妖精が代わりに驚いてくれた。

「コレ……弾幕舞踏会の予選シード権だよチルノちゃん！やったね！」

「おお！シード権！凄い……あれ？チルノちゃんって俳句モデルに選ばれたっけ？」

「カレンダーだよ、チルノの写真を掲載した1月分の売り上げが基準を超えてさ。本当はもっと早くに渡しとくべきだったんだけど遅れた、メンゴ」

「カレンダーも選考対象に入るんですか？」

「入る入る。ついでに言うとなんかXanaduの表紙に選ばれた人も選考対象」

「そうなんですか、これは色んな人にチャンスがありますね」

「ねえ自転車バカ、これがあったら予選に出なくていいの？」

「そういう事。因みに下級妖怪組ではお前が一番乗りだ。良かったな」



「凄いやチルノちゃん！」

「これは記念撮影しなきゃだね！」

「えっへん！あたいってばサイキョーね！」

『よっ、待つてました！』

「あ、そうと決まれば私フランちゃんに言いに行かなきゃ！喜んでくれるといいな〜」

「あ、思い出した。俺も咲夜さんの様子見つていう任務があるし、一緒に行くわ」

「どうするチルノちゃん、私たちもついて行く？」

「ここまで来ればいいだ！行くぞ大ちゃん！」

「うん！」

美鈴に事情を話して門を開けて貰い、中へと入る一行。何気なく見渡すにとりを見つけたので、チルノらを先に行かせて挨拶。

「にとりさん、こんな所でどうしたの？」

「ああ、君か。結界装置の定期点検に来てるんだ。何かあったら私の首が飛ぶからね……物理的な意味で」

「お、お疲れっす……」。

「一応話があるんだけど、忙しいなら後にしようか？」

「……そうしてくれると助かる」

「分かった、じゃあ後で」

例の如くセグウェイを借り、ルーミアに先導されて一同は部屋へと着いた。

部屋に入るや否や話を切り出す。

「……つて事なんだよ！」

「え、凄いいじゃん！お姉様から聞いたけどあれって選ばれるだけでもかなり競争率高いらしいよ？…なのにシード権だなんて……！」

「妖精最強は伊達じゃないよ！」

「さすが、⑨インテットのリーダーだね！」

「いいなー私もまた出たいなー。今度はネタ枠じゃない方で」

「えー？フランちゃんの踊りすっごい盛り上がったよー？」

「まあ曲は、物凄い狂つとるフランちゃんが物凄い歌、だったけど」

「それがヤなの！せつかくカッコいい曲見つけたのに……どうしてこうなった！」

フランに寄り添うようにベッドに座っている皆が笑いだし、抗議の目は壁に寄りかかって立っている自転車バカに向けられた。

「んな事言われてもフランちゃん結構ノリノリだったじゃん。つてか文句あんなら選曲した姉に言おうぜ」

「お姉様に？」

「そのお姉様から言われたんだよ、

”どうせ来年も開催するなら今年はネタ枠で良い”

つて」

「そこまで見抜いてたとは……。

つてことは今年も出場を狙ってるんだね、ここの主は凄いなあ……チラ」

ルーミアに視線を向けられ、動揺しながらも威張るフラン。

「と、当然でしょー？お姉様は凄いんだから！」

「……あたいら何しにきたんだっけ？」

「しつかりしてよ、これから記念撮影に行くんじゃない」

「……………記念撮影だったらウチでする？」

『え、良いの!？』

「チルノちゃんはルーちゃんの友達でしょ？そしてルーちゃんはアタシの親友。だから良いの、お姉様に頼んでみる！」

「じゃあみんなでレッツツゴ―！」

『おー!……………チラ』

「……………え？俺もいく感じ？」



「ねえ、いいでしょ？お姉様」

「そうねえ……………」

姉が一息入れたタイミングで話を持ちかけるフラン、側では皆が待機している。どうしたものか考えていたレミリアだが妹の顔を見ると観念したのか、ため息をつきながら笑みを浮かべる。

「愛する妹にそんな顔されちゃ断れないわね、許可するわ」

それを聞いて待機していたルーミア達は即座に喜ぶが、言い出しつぺのフランは両手を頬に当てて身体をクネクネさせている。いわゆる照れ笑いだ。

「あ、愛するだなんて……ヤダなあもうお姉さまつたらあー！」

「危ねっ！」

照れ隠しに左手に持ったレーヴァテインで姉を引つ叩こうとしたが、咄嗟に危険を察知したレミリアが突き出した右手で破壊し事なきを得た。

破壊され細かい粒状の弾幕となったレーザーが部屋中にばら撒かれ、唯一避けきれなかった自転車バカは被弾した。

「ちよっ何するのよー！」

「ご、ごめんなさい！嬉しくてつい……」

「つたくもう……まあいいわ。」

仕事（という名のデスクワーク）もひと段落ついた事だし、咲夜？」

「はい、何でしょう」

「衣装部屋にある服を一通り持って来なさい、宴会用のコスプレも含めて全部よ」

「畏まりました……サイズが合いそうにない物は除外しましたが宜しかったでしょうか？」

「流石の手際ね、良くやったわ」

「ぬお！いつの間に!?!」

「ごめんチルノちゃん、そのくだりはもう良いや」

「み、みえな」

「乗らんでよろしい」

「この中から好きなの選んで良いわよ」

『わーい♪』

（あ、これ着替えるパターンだ。外出ないと…）

およそ五分後、窓の外をぼんやりと眺めていた自転車バカに声がかかる。

「は、入っていいよ／＼／＼」

ドアを開け中に入る。

チルノとルーミアは、それぞれ青と黒を基調としたセーラー服を着用。チルノはスカートも青だが、ルーミアは赤だ。大妖精はワイシャツと黄緑色のスカートだ。

尚、三人ともスカートはチエック柄である。

堪らず感嘆の声を上げる。

「おお〜！」

「ど、どうですか…?」

「自信持とうよ大ちゃん！これ絶対イケてるって！」

「す、スカートだからスースーするう…//」

「チルノちゃん普段ドロワだもんね。まあ我慢我慢♪」

三人がはしゃいでいるのを眺め

尊いすなあ……

などと悦に入っていたが、レミリアによって現実を引き戻された。

「どうよ、咲夜の見立ては？」

「あ、咲夜さんが選んだんすか？」

「だって凄いい迷ってたんだもの、決まりそうになかったから咲夜が自主的に」

「センスあるなあ……」

「咲夜、衣装はそのまままで良いから撮影セット一式持って来なさい。ここで撮るから」

「えっ良いの？ここお姉様の仕事部屋でしょ？」

「だからこそ、よ。殺風景で尚且つ無駄に広い部屋なんてこういうのにピッタリじゃない」

「さ、三人とも撮るからこっちいらっしやい」

『はーい！』

咲夜に誘われるまま、プリクラのノリで撮り始める。

「あんな格好してるとただの小学生にしか見えないわね」

「確かに」

「……アリスさんとパチュリーさんはどうしてここに？」

「妖精メイドが面白い事やってるって言うってたから」



「見に来たの」

「パチエ、あのニンニク野郎はどうしたの？」

「ガリッククなら魔理沙の相手させてる、コソ泥退治にはもってこいだから」

「絶対” いいようにこき使われてる” って分かってないわね、あの笑顔は」

雑談や撮影で盛り上がる皆を少し離れた位置から眺めている内に、ある事を思い出した自転車バカ。

(……そういえばにとりさんはどうなったかな。流石に終わっただろうし、見に行くか)

庭園をセグウェイでうろつきながら辺りを見渡していたが、紅魔館と倉庫の間に(二つの建物に比べると)小さなプレハブ小屋を発見した。

電気は点いていないが、何かしら音がするのは聞き取れたので物は試しと寄ってみる。すると、にとりの姿が確認出来た。

(お、居た居た。こんな小屋で何を……ッ!?)

セグウェイを乗り捨て、小屋へ駆け寄る。ドアを開けようとするが、固定されてあるのかビクともしない。

（くっそ、このまま粘つてりや開きそうなんだけどな……！でも早くどうにかしないと！）  
「まったくあの野郎！いや、女性だから野郎じゃないか。いや、そうじゃなくて！」

「あのどこも見えてない目つきと手に持った包丁、窓に映ってたパテ……間違いないな）」

「ドアにかける力を増し、悪戦苦闘する自転車バカ。中にとりは気づいていないのか、包丁を高々と上げて窓から見える景色を眺めている。目は死んだままだ。」

「へえ、空つて意外と青かつたんだ……」

もう、良いよね」

「包丁を握る手に力を込め振り下ろそうとしたその時、ドアの金具という金具が外れ倒れた。」

しかしその音すら届いていないのか、包丁の先端はにとりの首へ近づく。

「ッ、させるかあ！」

間一髪でにとりの手を掴み、小屋の中に立ち込めていた有毒ガスを能力で浄化する。突然の事に驚きを隠せないにとりを余所に、およそ1・2分程度でガスは完全に浄化された。

にとりが持っていた包丁は手を掴んだ勢いで地面に刺さっている。ガスを吸い込んだからか、当の本人は身体全体が震えている。手を離しても大丈夫なのだろうが、彼女の手を握ったまま話を始める自転車バカ。

「…あの日、俺は誓ったんだ。」何があっても守り抜く”ってな」

引きつった作り笑いのまま、震える手で自分を指さすにとり。

頷いて更に続ける。

「あの人が帰って来た時、出迎える人達は沢山居るよ。あの人はみんなに好かれてるか

らな。

でもさ、そこにアンタが居なかったら果たして喜ぶかね？」

「……」

「前にも言ったけど、人生を共にするって決めたんだろ？」

どのくらい一緒に居られるかは分からなくても、一緒に歩むって決めたんだろ？」

だったらさ、あの人が”此処”に居る間は一緒に居ようよ」

「……ど、して…、ここ…が？」

「お前と知り合ってから何ヶ月経ったと思ってんだ、様子が普段と違うくらいお見通しなんだよ……。」

いやまあ、ここまでは予想してなかったけど」

「……ッ」

うな垂れたにとりを見て、そっと手を離す。

「…で」

「うん？」

「何で止めたのさ！どうして……どうして放っておいてくれなかったんだ！

私は「盟友」に捨てられたんだよ!? アカウントは消えたんじゃない、盟友自身が消したんだ! それなのに……何で”帰ってくる”なんて言えるの!? どうして私なんかを守ろうとするんだ!」

「……」

「言つてよ! 黙ったままじゃ分からないよ! 誤魔化さないで、私の目を見て、答えてよお……!」

そう言つて膝から崩れ落ちるにとり。震えを抑えて無理に喋つた反動が来たのか、全身が細かく震えている。

「……復活したからだよ」

「……?」

「トムさんのアカウント、復活したんだ」

「……ッ!?!」

「実はアカウントが消えた次の日に、ボケて本来の世界でトムさんを見つけました。話もしたんだ。そうしたらトムさんは

”今はまだ帰りたくない……でも必ず戻るから、待ってて欲しい”

って。ほら」

腕の装置を操ってトムのマイページを見せる。すると、安心した為かにとりが泣き出した。

「不安なんだろうなつてのは分かるけど、これで死んだらマズいつしよ。本人帰ってくるて宣言したんだし、ね？」

「ご、ごめん…つな、さい…わ、私…とんでもな」

言葉を遮るようにして、にとりを抱き寄せる自転車バカ。

全身に纏ったオーラをにとりに移して彼女の体内を浄化する為だ。誰が何と言おうと浄化する為だ、決してやましい事は有りません。

作業が終わると、彼女から少し離れて喋りかける。

「奴は必ず帰ってくる。だからそれまで、俺がお前を保護する。文句ないよな？」

「うん！」



「……とまあ、こういう面倒くさい事が起こってたわけでした。チラ」

「なんかもう、色々とごめんなさい」

「よくドア開けられたわね、何したの？」

「原理はさっぱり分からんけど多分……や、ごめん分からん。なんか出来た」

「アバウトな……」

チルノ達を撮影していた部屋で、諏訪子のコスプレをさせられアリス・咲夜・にとりに囲まれてしゃべる自転車バカ。

撮影終了後、その場のノリが災いして皆で衣装交換やらコスプレをする流れになっていたのだ。そこへ入ったので巻き添えを食らったという訳。

「まあ何にせよお疲れ様です。酒…は飲めないのよね、三ツ〇サイダーで良かったですか？」

「お、ありがとう。頂きやーす」

「あ、全然関係ないけど思い出した。去年は1ヶ月ちよいでやってたのに、今年は弾幕舞

踏会の準備もう始めてるのね?」

「まあね、前回は乱入ありきで持ってた所があつたし。今年はもうちよつと真面目にやろうかなーって」

「どちらにせよ宴会のノリが抜けない様子が何故か見えるんだが……大会つぼくはするのかい?」

「しない!去年と同じくグダグダ〜つと行く方針」

「でも今から準備つて、楽しみにし過ぎじゃないですか。あのノリ去年やつて気に入つたの?」

「まあ……元々宴会は好きだけどね、最近は楽しみで仕方がないんだ」

「どうしてですか?」

何故か爛に入れて三ツ〇サイダーを持ってきた咲夜が、おちよこに注いで手渡しながら尋ねる。

くすつと笑い、答えた。

「泣いてばかりだったあんた達3人が、笑うようになったからだよ」

『……………』



この後、三人にグーで叩かれまくった。



「ヤレヤレ、今日モ平穩ニ終ワツテ何ヨリデス」

無機質な声で呟き、閉館後の”ボケて歴史博物館を見回るのはガイドロボ。毎日の勤めに含まれているのだ。誰も居ない館内を進み、ある部屋で動きを止める。

「……ソウ言エバ、アノ落書キハドウナツタノデシヨウカ」

部屋に入り、球体からアームを出し本をめくって落書きを探す。

「……オヤ、更新サレテマスネ。何ノ数字カ知リマセンケド」

ロボが見る赤い字の落書きは、こうなっていた。

続く。

復活まで、  
残り14

## 第23話「プロポーズ大作戦」

私は紅 美鈴、紅魔館の門番だ。今日は、皆に私の1日を紹介しようと思う。

太陽が姿を見せ始める頃、目覚まし時計が部屋に鳴り響く。それを止めて二度寝の誘惑と戦う事5分、今日は勝った。寝ぼけまなこでベッドから起き上がりカーテンを開けると、日差しが部屋に入ってくる。

夜に雨でも降ったのだろうか。草木には水滴がついており、それらが太陽光を反射してキラキラと輝く景色は、見事に私の眠気を追い払ってくれた。

「よし、今日も元気に行きますか！」

寝巻きから普段着に着替えて歯を磨き、寝癖などを直して身だしなみを整える。貴重品をポケットにしまい込んで忘れ物がない事を確認すると部屋を後にする、朝食をとる為だ。廊下を進んでいると、夜間の見回りをしていたロボットを見かけたので倉庫へ行くよう指示を出す。

昔は夜間も妖精メイドや私が見張っていたのだが、あまりにも居眠りやミスが多かつ

たのでロボットを使う事になったのだ。まあそんな事はどうだっていい。

台所へ着くと、すでに朝食担当が料理を完成させており各自適当に座って食べていた。ダイニングルームはお嬢様達を使う事になっていたので私や咲夜さん、そしてメイド達は台所で食べるのだ。ついでに言うと、食べ終わった食器は自分で洗うのがルールだ。

「咲夜さん、おはようございます」

「おはよう美鈴、今日は二度寝しなかったのね？」

「まあ、どうにか……あはは」

「つたく、3日に一回は寝坊するんだから……たいした問題じゃないとは言え、直す努力はしなさいよ?」

「前向きに検討します……」

「それ絶対やらない時に言う台詞じゃない……それじゃ私もう行くから。皿洗い任せていい?」

「あ、はい。大丈夫です」

「ありがとうね、じゃあよろしく」

「さて、ちやつちやと食べて門番しますか」

まあ、門番するって言っても特にやる事ないんだけど……。

「ん？なんか言ったかー？」

「ううん、何でもないよ。唯の独り言だから」

「なら大丈夫だな！よし、今日こそは勝つぞー！」

「チルノちゃん頑張れー！」

「ざっこいー！」

門に立ってしばらくするとこんな感じで氷精が絡んでくるので、弾幕ごつこの相手をしてやるのが日課みたいになっている。勿論、普通にやれば瞬殺しちゃうからいくらか手加減してます（笑）

私の手加減ぐあいが上手いのか、はたまたチルノが手加減されてる事に気付いてないだけなのかは知らないけど、本人が毎日楽しそうに挑んでくる当たり

”あたい進化してる！”

とか思ってたそう……でも大妖精には気づかれてるし、私も手加減してるって伝えてるから多分チルノが気づいてないだけかな？

今日は、グレイズのみ”縛りだったから結構退屈しのぎになって万々歳。

「ぬおー！負けたー！次は絶対勝つからなー！」

「あ、ちよつとチルノちゃん！置いてかないでよー！」

「はっはっはー、いつでもどうぞー……。」

よし、ウォーミングアップ完了」

実はこの弾幕ごっこ、縛りを追加したおかげで”ラジオ体操”のように身体を起こすいい準備運動になる法則を発見したので、あの子達が去った後に流れで太極拳を一通りこなすまでが本当の日課。別にやらなくてもいいんだけど、やるとやらないで調子が変わってくるから、時間稼ぎも兼ねてね？

それでも暇になったら、パチユリー様からお借りした漫画本を読む。今日はこ〇亀の36巻く40巻までだ。でもそれは後回し。

視界の端に人影が見えたので漫画を閉じると、青いフード付きのパーカーに白いTシャツ・それと黒いズボンという組み合わせの自転車バカさんがやってきた。

「こんちわーす、美鈴さん」

「こんにちは、自転車バカさん。今日も咲夜さんですか？」

「いや、別件です。一応レミイさんに言っているんですけど……通っちゃダメですか？」

「そういう事でしたら構いませんよ、どうぞどうぞ」

門を開けると、自転車バカさんは会釈をして入っていった。

（別件かあ、何なんだろう？）

たわいもない想像を膨らませると、昼の鐘が鳴った。

咲夜さんに昼食を届けて貰うと、このタイミングで必ずある人物がやってくる。私の命よりも大切な人だ。ユーズー名はふざけてるけど。

キヤークサーンって何よ、絶対RPGの主人公に付ける“ああああ”と同じノリで付けたでしょ。

「よ、今日もサンドイッチか？せめて具はチャーシューでないと思いたいな」

「あれは私好みにして貰ったものだから、貴方の口に合わなくて当然ですよ」

開口一番でこの態度、まるで貰えるのが当然だと言わんばかりだ。  
魔理沙かお前は。

「おいおい、口に合わねえとは言ってねえぞ？つか、合わねえ訳ねえだろーが。」

どんな料理屋もこの飯には敵わねえかな、しかもそれがタダで食えるとなりやあ  
言うこと無しだろ」

「昼食担当は咲夜さんが手塩をかけて育てたメイドですからね、美味しいに決まっ  
てます」

「だな、このカツサンドめっちゃ旨え」

「あ、ちよつとおくー！」

全くもってふてふてしいが、この人と一緒に食べるご飯は……いや、この時間は格別  
だ。正直、お嬢様達と食べるより美味しいかも知れない。

「おい、手にマヨネーズ零れてんぞ。取ってやる、手エ出せ」

「あ、ありがとうござ……」

「ッ!？」



「うむ、これはこれでアリだな」

「……直接手から食べないで下さいよ／＼／＼」

色んな意味で。

食べ終わってしばらくは談笑をしていたのだが、平穩というのは長く続かないらしい。

突如、限りなく黒に近い緑色の球体が林の陰から姿を見せた。しかし、完全に黒ではないのでルーミアでは無い。

これは自転車バカさんだ。ミサイル事件で見た、本気を出した自転車バカさんだ。

ある程度近づくと球体がシャボン玉を割るように消え、中に居る自転車バカさんが見えてきた。

手には指先まで覆うタイプの黒いグローブをはめ、イエローグリーンと呼ばれる靴を履いている。それ以外は今朝見た時と同じ服装だ。

「お、二人揃ってたか。ちょうど良かった」

「自転車バカさん……何かご用ですか？」

「そんな警戒しなくとも、用があるのはアンタの後ろに居るそいつだけなんで」

「……俺?」

「彼に何の用が?」

「そいつを殺しに来たんすよ」

『なっ!?!』

「だから美鈴さんがそこに居ちゃ殺りにくいんだよ、どいてくれ」

彼に目をやるがあまりにも動揺している、まともに会話すら出来なさそうだ。余り人の事は言えないけど。

視線を戻し、ファイティングポーズを取る。

「……退きません、彼を殺したいなら私が相手になります」

「ふっ、そこなくっちゃ」

自転車バカさんの目は本気だ。でもどれだけの強さなのかは知らない、まずは様子見に

「虹符 ” 烈虹真拳」

一気に間合いを詰め、気を纏った右ストレートを浴びせにかかる。そこら辺の妖怪はこれで倒せるけど……どうやら、そう簡単には行かないようだ。

自転車バカさんが左手を突き出して展開したシールドに、ものの見事に封じ込められた。

それどころか、殴った衝撃が反射して帰ってきた。右腕に電気が走る。

「!？」

「……この程度、か」

「くっ!」

詰めた間合いをバックステップで開ける。視線を逸らさず、手を握ったり開いたりを繰り返す。よし、まだ大丈夫みたいだ。

「……普通止めますか？今の。大概は綺麗に喰らってノックダウンしてくれるか空の彼方へ飛んで行くんですけど」

「でも」ならなかった……これで分かっただろ、本気で来い」  
「ッ、上等！」

◇

「自転車バカさん大丈夫かなあ？上手くやっているといいんだけど……」

「早苗？詠唱で疲れてるんだから動いちゃ駄目って言ったでしょ？安静にしてなきや」

「諏訪子の言う通りだよ、奴に奇跡を起こす為とはいえ二時間も呪文詠唱してたんだから」

「……じゃあ今日の炊事はお任せして良いですか？」

「任せな、つて神奈子が」

「私かよ」

◇

「はあ……はあ……くっ！」

マズいな、やられ過ぎて立ってることすら出来ないや……。

地面に片膝を付き、おぼろげな視界で確認する自転車バカさんは、まだまだ余裕そう  
だ。

それもそうか、向こうは攻撃を防いだけだし。こつちはその威力をシールドに全部  
跳ね返されたんだから、自分で自分を痛めつけたようなものだ。

それでも立ち上がろうとすると、彼が駆け寄ってきた。

「美鈴！もう止めてくれ！これ以上やったらホントに死んじまうぞ！俺の事は良いから  
……もう止めてくれ！」

「気持ちがありますが、下がっててください……危ないですよ。私なら、大丈夫で  
すから……」

「しかし……！」

「ほら、立てよ。アンタの力はそんなもんじゃない筈だ」

そう言うと、自転車バカさんが私に包帯を投げ渡してきた……なんの真似なんだろう  
か？

「ッ、お前は一体何がしてーんだ！何でこんな事出来んだよ！答えろ！」

「やなこった、知りたきや俺を殺してみるんだな」

「上等じゃねえか……！」

立ち向かおうとする彼の腕を掴む。

「美鈴……？」

「貴方にそんな真似はさせません……私がやります。奴は、私の相手です」

「そんなの」

「関係ありません。それに、貴方が向かってても駄目ですよ……私ですらこのザマなんですから」

「……ちっ、わあーつたよ。ぜってー倒せよ？」

「勿論です」

「美鈴さんよお。アンタそいつに気を配るあまり、動きが鈍くなってるの気づいてるか？」

「……バレてましたか」

「そんなヘタレモヤシほっとけよ、バカツプルに相応しく、天国行きのペアチケットやる

からさ」

その時、私の中で何かが切れた。立ち上がり包帯を巻きながら、言葉を返す。

「おあいにく様、私の辞書にはキリスト教なんて無いんでね……お返しします！」

出来る限り高速で気を飛ばし、自転車バカさんの近くで炸裂させて煙幕を張る。それに気を取られている間に懐まで接近して、上空へと蹴り飛ばそうと試みる。

オーラを纏った両腕で防がれはしたが、宙に浮いてしまえば此方のもの。追い打ちをかけるように飛び上がり渾身の蹴りを入れると、シールドを打ち破る事が出来た。地面に叩きつけると、轟音が轟き砂埃が舞い上がる。

そのまま止めを刺そうとしたのだが、いかんせんやられ過ぎて身体が思うように動かない。膝をつくような格好で着地する。

「美鈴！」

「来ないで！」

「……ッ！」

「大丈夫だつて……言つたでしよう？」

「だが……！」

「……ご安心を。奴は貴方に指一本触れられません。龍星の門番の名に懸けて、私が一生涯、お守り致します！」

「美鈴……！」

めええええりいりいりいりいりいん……！！

自転車バカさんの息の根を止めるべく、再度接近する。

「はああああああああつ！！」

「はいストップ」

「!？」

何かが足に引っかかり、視界がぐるぐると回る。仰向けに倒れた私が見たのは

「お、お嬢様!？」

「咲夜？今の美鈴の台詞、録音出来たかしら？」



「ばっちりです」

「あら、あんだけ派手にドンパチやってたのに門は無傷なのね」

「門に傷つけたら殺す」とは言ったけど本当にやってのけるとは……！」

「あの、フラン様？何ちゃっかりハードル上げてるんです？」

“ 多少は仕方ないけど出来れば無傷が良い ”

「って言ったの聞いてなかったんですか？」

「ちよ、ちよつと待て！何がどうなってるのか説明しろ！」

「そ、そうですよ！出てくるタイミング完璧過ぎるでしょ！ってか何で全員集合!？」

「簡潔に言おうと、全部仕込みだったのよ」

「……？」

「自転車バカが今朝私たちに言ったの、

“ 美鈴とキヤーイクサーンをくつつつきたいから知恵を貸して欲しい ”

「って」

「くつつける？私たちを？」

「そうよ。アンタ達の奥手っぷりは相当だからね……告白だつてなあなあで済ませたく

らいだし」

「ちよっ！今それ関係無いじゃないですか！／／／

咲夜さんに反論しようとするも、こあちゃんに日傘を持たせたフラン様に指を射して封じ込められた。

「ありますー！このままだったらプロポーズだってなあなあで済ませて結婚式なんて絶対挙げないでしょ！」

「うっ、痛いトコを……」

目が合ったこあちゃんも、にっこりと笑って追撃してきた。

「だからこの作戦を組んだんです、美鈴さんがプロポーズくらいはちゃんと出来るように♪」

「プロポーズ……あっ！」

——…ご安心を。奴は貴方に指一本触れられません。龍星の門番の名に懸けて、私が一生涯、お守り致します！

「で、プロポーズが出来たから止めに来たという訳だ」

「あの発言はこのボイスレコーダーで録音したし、何かあったらこれを流せば良いですわね♪」

「お願い咲夜さん今すぐ消してー！」

「それよりも、“龍星の門番”って何？貴方ってそんな二つ名あったの？」

「ちよつ、パチュリー様、笑つちや駄目ですつて。確かに凄いなーミングセンスですけれど」

『あーつはつはつはつはつは！』

「いやああああああ！」

こんな感じで皆が私をいじって遊んでいると、フラン様が声を張り上げた。

「お姉様大変！自転車バカが息してない！」

『な、何だつてー！?!』

「いや今そういうの良から！求めてないから！寧ろ助け求めてるのこイツ！

早くどうにかしないとー！」

「私に任せなさい！」

「お嬢様！私が永遠亭まで……！」

「それよりも早い方法があるのよ、いいから任せなさい」

「レミイ、どうする気なの？」

「こいつの装置であそこまで飛ばすのよ、操作方法は分かっているから問題ないわ。」

「咲夜！紙とペンとセロハンテープ持ってきなさい！」

「畏まりました……これでよろしいですか？」

「上出来よ、これをこうして……よし、転送！」

彼の身体が虹色に発光し、光の粒となって雲散した。

「ふう……これでとりあえずは大丈夫ね」

「でもお姉さま、当人を送っただけじゃ向こうも困るんじゃない？」

「それもそうね……じゃあ代表で私が行ってくるわ」

「お嬢様が行かれるのならお供します」

「そういうば最近外に出てないわね……私も行くわ。こあもついてきなさい」

「はい、パチュリー様！」

「ちよつとお、ここに居る怪我人置いてくつもり？行こう、めーりん。私が付き添ってあげるからさっしゅ！」

「何よ、結局全員じゃない……ふふっ」



とまあ和やかな雰囲気です。永遠亭に向かった私達だが、着くや否や永琳先生に診察室へ連れられてメツチャ怒られた。

「あのねえ、妖怪のユーザー殺しは

“この世界で絶対に犯してはならない最大の禁忌”

なのよ？それをそんな馬鹿げた理由で…」

『さ、さーせん…』

「まあ一命は取り留めたから良かったけれど、後少しでもここへ来るのが遅かったら本当に手遅れになってたわよ？」

『……』

「大体ねえ、いくら奇跡と装備で身体能力を上げていたとはいってもあの子は唯の人間なのよ？妖怪の一撃をまともに受けたのによくもまあ悠長にしてたわね、え？」

『返す言葉もございませぬ……』

「謝罪する相手間違えてるわよ、私じゃなくあの子にしなさい。もう意識が戻ってるでしょうから」

『はい……』

「おら、はよ行かんかい！」

『は、はい！』

永琳先生に案内され病室に向かう雰囲気は、御通夜そのものだ。引き戸を開け病室に入った私達は、目の前の光景が信じられなかった。

何せ右手に点滴を打ち、両腕は包帯で巻かれ三角巾で固定し、酸素マスクを着けベッドに横たわる彼が居ただけだから。

言葉を失う私達を他所に、永琳先生はベッドに近づいて彼に要件を伝えた。

「ねえ自転車バカ。貴方に謝りたい人が来てるんだけど、どうする？」

「……ベッド起こして貰っていいすか、俺も言いたい事あるんで」

「分かったわ。首に力入れないように気をつけてね」

リモコンのボタンを押し、ベッドが唸るような音を立てて起き上がり正面を向く。

どう声を掛けたものか迷っていると、お嬢様が真つ先に両脚両手を床について深々と首を垂れ、謝罪の意思を口に灯した。慌てて私たちも続く。

ありきたりだけど心から謝り、最後は全員で声を揃えて謝った。

『本当にごめんなさい！』

どんな罵倒が来るか怯えていたが、彼が言ったのは正反対な言葉だった。

「……そんな事しないで下さい、こっちは命と引き換えにあなた方を幸せにするつもりだったんですから。それが死なずに済んだんですよ？もういいじゃないですか、顔を上げて下さい」

『!?!』

思いがけない言葉に、全員が顔を上げる。永琳先生も、彼を見て驚いていた。お嬢様が疑問を口にする。

「もしかして貴方、死ぬかも知れないと分かかってて依頼を受けたの？」

「……当たり前じゃないですか。妖怪相手に唯の人間が喧嘩売ったつてのに、死なない保証が何処にあるんです？」

その言葉に涙腺が崩壊しかけた私達ですが、気が済まないのも何か償いをさせてくれないかと頼むと、自転車バカさんは少し考えてからこう言いました。

「これから先、何があっても仲間や旦那を危険から守ると誓って下さい。お客様の幸せを支えるのが、我が社の使命ですから……良いですね？」

『……はい！』

明日も、明後日も、私はここで立ち続ける。ここに立って、侵入者を撃退するのが務めだからだ。

私は紅 美鈴、紅魔館の門番だ。



続く。

## 第24話「それ以上いけない」

「えーと、302号室302号室……お、ここだね」

「ですね」

自転車バカの見舞いに来た、にとりと文。病室の札を確認し引き戸を景気よく開けると、ベッドに横たわる彼はゆっくりとこちらを向いた。

「……二人とも、来てくれたんすね」

ベッドから起き上がろうとするが、激痛が走り苦痛に顔を歪める。

「いつ……!」

「む、無理しないで下さいよ。まだ一週間なんですから」

「……聞いた通りの重体だね」

酸素マスク、点滴、包帯を巻かれ三角巾で固定された両腕。  
顔色が思わしくない自転車バカを見て、改めて事の大きさに身震いする二人。  
文は顔を覗き込むようにして聞く。

「体調はどうですか？」

「まあ、だいぶ良くはなりましたよ。直後とかクツソ痛かったつすからね」

「そんなに酷かったのかい？」

「麻酔が切れた反動で気持ち悪いし、痛み止めの効果が無くなったら傷口が痛みだして動くことすら出来ないし」

「あやや……お風呂とかはどうしてるんですか？」

率直な疑問を投げかけた文だったが、何故か自転車バカは赤面しだした。

「ど、どうかしましたか？」

「……優曇華マジ許すまじ」

「何があつたんだい？」

「簡潔に言いますね、アイツ発情期だったのに俺の風呂入る手伝いしてたんすよ」

『うわあ』

「背中洗うのに胸押し付けてくるし息子柿の種はしっかり反応するしそれ凝視されるしで最悪つすよ、思い出すだけで色々と腹立つ」

「なるほど、言語と行動で童貞心を弄ばれたのか」

何気なくにとりが口になると、自転車バカは俯いて感情を吐露した。

「……リア充がそんなに立派な人間かよ。セックスの経験の有無が、差別されなきやいけないほど重要なステータスなのかよ。何で童貞つてだけでポロクソ言われなきやいけないんだ」

「じ、自転車バカさん……?」

「ふむ……」

どうやら、弄ばれたのは己の存在価値のようだな。

言った本人はそんなつもり無かったかも知れないが、発情期の時点で思考回路は狂ってただろう。

腕を伸ばし、頭を優しく撫でる。

「いちいち気にするな、そんなものは酔っぱらいの戯言と同じだろう?」

「にとりさん……」

「それに、奴はリア充じゃない。そんな真似するのは世間一般では変態と呼ばれる行為だ」

「大体、自転車バカさんは<sup>仮</sup>ボケ<sup>想</sup>ての<sup>空</sup>幻想<sup>間</sup>郷の設定で”R-18禁止”にしてるでしょう?

いざという時は制御装置が作動しますから心配無用ですって」

「そーいやそーだ」

三人で雑談に花を咲かせていると、レミリアと咲夜がドアを申し訳なさそうに開いて覗き込んだ。

「……そろそろ入ってもいいかしら?」

「あ、お二人も来てくれたんすね。美鈴さんその後どうつすか?」

咲夜がドアを開けながら、主人に写真を手渡す。紅魔館の正面玄関前で撮った集合写

真だ。中央にいる新郎と新婦が照れくさそうに笑っている。

「問題なしよ。この通り挙式にまでこぎつけたから」

「おおー！美鈴さんドレス似合わねー！」

「ちよつ、開口一番で何て失礼な事いうんですか！」

「盟友、ひよつとしてまだ根に持つてる？」

「いいのよ、似合つてないのは事実なんだし。ねえ咲夜？」

「ええ。寧ろそれで式の間中みんなでイジって遊んでましたから」

（（お、思ったより容赦ねえ・・・！））

三人は息をのむが、レミリア達は楽しそうに式の様子を話してくれた。

まさか美鈴さんいっつもこんな感じで弄られてんの？それはそれでキツイな。

「……いけない、忘れる所だったわ」

「え、その話しに来てくれたんじゃないんすか？」

「違うわよ、いやまあそれも話に来たのは来たのだけど」

「来たんかい」

「ねえ自転車バカ。貴方ホントに怒ってないの？」

「……はい？」

理解が追いつかないので聞き返すと、レミリア達は悲しそうな表情を浮かべて言った。

「だって、私達が土下座までしてお詫びに何かさせてって言ったのに何も言わなかったじゃない」

「あの時は納得しちゃったけど、よくよく考えたら

“ 流星にそれは虫が良すぎる ”

って事で満場一致したの。ホントに何もしなくていいの？」

頭が搔けるなら間違いなく搔いていただろう。困った自転車バカは考えに考えた末、ある結論に達した。

「……じゃあ俳句と雑誌の定期購読をお願いします」

「咲夜、異論は？」

「ありません」

「咲夜さん、文々。新聞は？」

「要りません」

「いやあ良かった……待てコラ！何しれつと契約切つてくれてんですか！」

「だって新聞も俳句も結局は売り上げアンタのとこに行くんでしょう？だつたら……  
ねえ、お嬢様？」

「それな」

「いやだから」それな「じゃ無くてですねー！」

「盟友、喉乾いてないかい？何か買ってこようか？」

「お、あざーす。じゃあ麦茶で」

「飲んどうる場合かーッ！」

この一部始終を、永琳は監視カメラで見っていた。



適度に差し込む日差しを浴び竹林内を歩く妹紅と自転車バカと、退院と聞いて付き添



いで来たにとり。妹紅がにやけながら話しかける。

「あそこに二回も運び込まれたユーザーはお前が初めてだろうよ、この調子だと三回目もありそうだな」

「出来ればもう行きたくないつすね、病院食も食べ飽きたし」

「神社で安全祈願のお守りでも買ったほうが良いんじゃないかい？効果があるかどうかは別として」

「お守りも効かない程の不幸が自転車バカの身に……つつてな！」

「一回目は植物人間で、二回目が生死の境目を……あれ？段々酷くなってね？次死ぬパターンかな？」

「安心しろ、香典くらいは出すさ……2度と”此処”へ来られなくなるからあんま意味ないけどな」

「それは困るなあ……」

その言葉を聞き、立ち止まるにとり。

（自転車バカが……居なくなる……？）

「……どつたの、にとりさん？」

「あ、いや、何でもない」

「おかしな奴だな……まあ良い、出口だ。じゃあな」

「バイバーイ……さて、どうしよう。やる事あり過ぎてどつから手エつけたらいいか分かんねえ」

「なら最初に私の工房へ来ると良い、装備一式を修理してあげるよ」

「じゃあそれで」

そう言つて歩き出す自転車バカを、にとりが制す。

「あれ、飛ばないのかい？」

「良いよ、別に急いでる訳じゃないし。それに、こつからロープウェイまで大した距離無いじゃん？」

「まあ君がそれで良いなら」

流石に一ヶ月じゃ街並みなんて変わらんか。

と心の中で呟く自転車バカ。人里の端を縫うように移動しているので交通量は少ないのだが、彼を見かけた顧客は冷やかしかし半分に心配してくれた。

一人や二人ではなく通りかかった人から次々と話しかけられるのを見て、にとりは文の記事の反響を再確認した。

いや、違うか。あの号外が目を引いたというよりは、盟友の活動や人柄が皆に認められてるって感じだな。

「……………ふっ」

「うん？何か言った？」

「いや、何でもないよ……………うん。引っ掻いたような傷こそあるけど問題ないね、動作もばっちりだ」

「本人は生死の境目を彷徨ってたのにはほぼ無傷かよ……………流星にとりさんのメカ」  
「褒めてもお茶しか出ないぞ？こんな風に」

伸縮自在のアームを巧みに使い、視界に映らない場所から2人分の飲み物が机に運ばれる。一口飲んで落ち着くと、にとりが目線を下げたまま口を開く。

「ここへ来る途中でも言ったけど、仲間想いもほどほどにしてくれ。君が”此処”から引退するならともかく、過保護が過ぎて死ぬなんて……私は嫌だ」

「マジごめん」

「君の目標は確か、”無くなったら困ると言われるような会社になりたい”だったね。なら下請けのままってわけじゃないんだろう？」

「うん、いつかは”下請けから卒業して独立する”。これが当面の目標かな」

「いい目標だね、きつと近いうちに実現するさ」

「ありがとう、お世辞でも嬉しいよ」

「お世辞なんかじゃないぞ、ここへ来る途中に色んな人から声をかけられたのが根拠だ」

「……」

「君が考えてる以上に、固定客は確実に増えていつてるよ。もつと身体に気をつけてくれ」

「わ、分かった。気いつける」

「じゃないと……」

胸に手を当て、自転車バカの目を見て、ニカツと笑いながら話を続ける。

「ここに一人、君が消えると泣く奴が居るからね」

瞬間。にとりの笑顔にドキツとした自転車バカの頭の中を、彼女と過ごした思い出が走馬灯のように駆け巡る。そして、ある結論が出てきた。

（そうか…俺、にとりさんの事……）

「……？」

（まずいな…一緒に居る時間が多すぎて芽生えてはならない恋心が…！これトムさん  
にばれたら殺されるぞ）

「どうしたんだい盟友、じつと見つめて…私の顔に何かついてるかい？」

（落ち着け俺…素数を数えて落ち着くんだ…あ、駄目だ。文系だったからそもそも素  
数が分からん…！）

「ねえってば」

「いや、何もついてないよ。俳句モデルが溜まつてるのを思い出しただけだ。片付けな  
きゃいけないから帰るよ、またね」

「………いつになく挙動不審だったな」

自宅に戻ると、既に文さんが今週の俳句モデルに応募された写真達を机の上に広げてた。

「今日からまた再開つすね」

と言うと、文さんは

「と思ったでしょう？ 残念、入院と聞いた時点で写真と俳句をセットで応募したので来週からいつも通りに戻るだけなんです！」

と、自慢気に報告してくれた。

そのドヤ顔さえなければ完璧だったのになあ……。

なんやかんやで選んでいると、たまたいさんが送ってきた写真と俳句だけレベルが段違いだったので即決定。売り上げは過去最高を記録した。レミイさん俺が入院してる時も毎回買ってくれてるって聞いたし、何の前触れもなく行つて驚かせてみよう。

「……という訳で、こつちが舞踏会のシード権。こつちが”ミス俳句モデル”のトロ

フィーです。暫定という事もあり入れ替わる可能性がありますがレプリカですが」

「あら、嬉しいわね。トップだなんて。後で咲夜とたまたいを褒めておかなくちゃ♪」

（パタパタいつてる、羽根がすつげえ。パタパタいつてる。あんな風に動くもんなんだ）

「……いけない、聞き忘れる所だったわ／／／」

「何を？」

「舞踏会の会場よ、時間は昨年と同じでも構わないのだけど……屋外だと困るのよ」  
「それなら心配要りませんよ、去年使った会場を既に抑えていますか……痛っ！」

右手から何かに挟まれたような痛みを感じたので見やると、犬耳を生やしたちっさい  
咲夜さんが俺の手（中指の先端）を噛んでいる。何だこの生き物可愛いな。

「これが噂の”犬咲夜”ですか、噂通りちっさいですね。本家よろしく時間を操れたり  
するんですか？」

「勿論よ、それ以外も出来るのだけど……なんせサイズがサイズだから物凄く長い事止め  
てないといけならしいわ」

「あーあ」

犬咲夜に視線をおとすと、掲げたプラカードに「私についてきて下さい」と書いてあ  
る。視線を戻し尋ねた。

「……行ってきて良いですか？」

「屋内と分かれば充分よ、どうぞどうぞ」

廊下をふわふわと飛ぶ犬咲夜の後ろを、黙ってついていく自転車バカ。三つ目の角を曲がった所でプラカードが出る。

「着きました、なるべく音を立てないようにしてこの部屋を覗いて下さい」

セグウェイを止め、そうつとドアの隙間（30cm）から注意して見る。

すると部屋の真ん中あたりにゆっくりと、時計盤のような銀色に光る紋章が浮かび上がってくるのではないか。1分足らずで完全に描かれると、紋章の上に真っ白に光る球体が出現する。球体は少しずつ大きくなってゆき、人型になると輝きが消えた。現れた人物は辺りを見回し、鏡台に置いてある写真を持ち上げてこう言った。

「ヒヤッハー！帰ってきたぜ！生きてるって素晴らしい！咲夜さんも素晴らしい！」

（帰ってきて早々なんつーハイテンションだよ……教えてくれてありがとな）



犬咲夜を持ち上げて頭を撫でると、キリツとしていた表情が（\*、ω、\*）モキユク♪  
つて感じに変化する。

何こいつ、持ち帰っていいかな。

（でき、咲夜さんを一番に会わせてあげたいんだけど……どこに居るか知ってる？）  
「そういう事でしたら少々お待ちください、今連れて来ますので」

どのくらい止まっていたのか定かではないが、瞬きをすると戻って来ていた。

「連れて来ました」

咲夜が言葉を発する前に、自転車バカが肩を叩いて小声で用件を伝える。

「帰って来たよ、良かったね咲夜さん。これで君の保護も終わりだ……早く行ってあげなよ」

そう言って視線を部屋へ向けると、全てを理解した咲夜が走る。愛しき旦那の元へ。

咲夜が部屋の中に入ったのを確認し、SNSで皆に知らせる。

「おし、これでOKだな。帰るか」

「社畜に会わないのですか？」

「いや、あれ邪魔しちや悪いでしょ。そもそも咲夜さんの保護は社畜さんに頼まれてやったんじゃないんだし」

「ですが」

「だーいじよぶだつて、みんなが来るまで席外すだけだから」

「なら良いです」

「……」

良かったね、二人とも。

部屋に知らせを受けたユーザーが集まるまでの時間、社畜と咲夜は何も言わずただ抱き合う。互いの肩は涙で濡れる事になるのだが、それは2人だけの秘密……にはならなかったようだ。

続く。

## 第25話「姉妹揃って」

午前11時、いつもより遅めにログインした自転車バカは状況が飲み込めなかった。依姫と豊姫が自分の家のようにソファや椅子に座り、くつろいでいるのである。

何か、この感じ久しぶりだな。

などと考える辺り、彼の中で自宅に侵入されるのは常態化しているのかも知れない。

「……とりあえず、あれだ。何で此処に居るの?」

「前回来た時は八意様にお会いしただけだったでしょ? だから今日は私も観光したいなって♪」

「で、案内役を貴方にお願いしに来ただけど居なかったから上がらせて貰ってたって訳。いいでしょ?」

「良い悪いの前に何で入れてんの? 玄関カードキーにしたんだけど」

「よっちゃんか神降ろしで」

「マジでか」

「まさか開くとは思わなくて……ごめんね?」

「いや良いよ別に。捕られて困るようなモンないし。そもそも今から用事あるから出掛けるし」

「用事って?」

「慧音先生に”特別講師として寺子屋に来て欲しい”って言われちゃってさ、そろそろ行かなきゃなんだよ」

「何の講師?」

「それが……」

「待って、慧音先生って確か八意様とお付き合いしてる方だったわよね?」

「へ?あ、ああ。確かそんな事言ってたような気がする」

「……面白そうね、着いてくわ」

扇子で口元を隠し、不敵に微笑む豊姫に悪寒を覚えた2人だった。

授業開始を告げるチャイムが鳴り、それまで廊下や教室で騒いでいた生徒達が席に座る。皆が静かになるタイミングを見計らって慧音が教壇に上がった。

「よし、席についたな。今から4時間目の国語を始める訳だが、テスト範囲も終わったの

で今日は趣向を変えてみようと思う」

「どういうことですか？」

「説明する前に、まずは特別講師を紹介しよう」

教室の引き戸を開けて中へと入る自転車バカ。慧音の側まで行き簡単に名乗った。

「自転車バカさんは主に人里で俳句やカレンダー、そして雑誌を販売しているユーザーだ」

『へー……』

「まあこれだけじゃピンとこないよな。じゃあ……」弾幕舞踏会行ったことあるよー」つて人！」

それを聞いて元気よく一斉に手を挙げる生徒達、慧音がざっと見て数える。

「おー、全員じゃないか！面白かったか？」

「面白かったー！」「チルノの乱入見ててハラハラしたなー！」「最初に出た2人の踊りが

良かったよねー!」「ねー!可愛かったよねー!」

「おつ、最初から見てた人も居るのかー!じゃあ…その前にあつた」実行委員会会長の挨拶見てたよー」つて人!」

「見てたー!」「怪我の理由で笑つたなく!」「司会の人との掛け合いつてガチだったのかな?」「いやあ、あれは演技じゃ出来ないでしょー」「…ん?ちよつと待つて、あの会長つてひよつとして…」

「そう!あの時挨拶した会長が自転車バカさんだ!

ついでに言うと、あの時の舞踏会出演者はこの人が販売している”今週の俳句モデル”に選ばれた人しか出てないんだ、乱入は別だけど。これで分かつたか?」

「「なるほど〜!」「どつかで見た気がしたんだよねー」「しつもん!その自転車バカさんはどこで俳句とか売ってるんですかー?」

「自宅から近い場所にある空き家を借りてるんで、そこで売ってます」

「何でそこなんですかー?」「どうせならメインストリートで売ればいいのに」「それな」

「確かに、住宅街で売っているので立地が良いとは言えません。ですが、物を売るのに一番大切なのは売る場所ではなく、品物が高品質かどうか、そして、販売を通じて地域社会の活性化に貢献出来ているかどうかです」

いまいち理解が追いついていない生徒に、慧音が詳しく説明する。

「今から話すのはマニアックだが大切な事だ、よく聞いてくれ」

『はーい』

「そもそも企業って誰のものだと思おう?」

「え、株式っていうくらいだから株主って人のじゃない?」「社長でしょ?」「誰のなんですかー?」

「誰でもなく、みんなの物なんだ。その会社が建っている地域の住人を含めて、みんなの



物なんだ」

「だから、今日はみんなに”楽しく”俳句を作って貰おうと思って来ました」

「みんな、俳句って聞いてどんなイメージがする？」

「俺にいちやんの教科書見せてもらった事あるけど、なんか難しそうな感じがした」「一つの言葉で意味が二つってというのは凄いなって思ったけど……何だろう、敷居が高いって言えばいいのかな？」「そうそう、とっつきにくい感じするよねー」

「教科書に載ってるような俳句って、凄くいいものには違いないけど自分じゃあんなの出来ないよな。」

じゃあ、川柳って聞いてどんなイメージがする？よく”おーお茶”のラベルや雑誌に載ってるよな」

「面白ーい！」「なんか見てて楽しくなるよねー」「ウチの母ちゃん、”湯が沸いた” 携帯鳴った”子が起きた”って川柳見て大笑いしてた！」「分かりやすいし、見てるうちに”私でも出来そう”って思えてくる！」「俳句とは別物って感じかなー」

「俳句とは別物、見てるとそう思うのは当たり前と言える。でも、その川柳と俳句に共通点があるんだ。何だと思う？」

「え、何だろう、五・七・五の形が一緒なところ？」「でも季語っていうんだっけ？あれがないじゃん」「俳句は“くけり”とかあるけど川柳って話し言葉だよな」「何が一緒なんですかー？」

「生まれた場所だ。

俳諧歌はいかいがって言うてな。元は江戸時代に独自のジャンルとして出来た言葉遊びなんだ。そこからみんなも知ってる”松尾芭蕉”といった人達が更に独立させたのが俳句なんだ。

一方、川柳は(さつきも出たが)季語や切れ字といったものを必要としない。話し言葉でいいから誰でも楽しめるんだ。

見た風景を詠むのが俳句なら、人の動きを表現するのが川柳だ」

「「へえ〜！」」「でも先生、俳句を作るっていうっても僕ら切れ字とかよく分かんないんですけど」「切れ痔の父ちゃんなら知ってるけどな」

「安心しろ、最近は切れ字を使わないで話し言葉のまま作られる俳句もあるんだ。今日はそういう形で作ってみよう。さ、用紙配るぞー」

「なるほど、そういう事か」「やつと話が繋がった」「前フリなっげ」「でも先生らしいや」  
配られた用紙を手に、分からない事を相談しながらワイワイと作り始める生徒一同だった。

授業も半分が過ぎた頃、遂に豊姫が質問をしてしまう。

「慧音先生、質問しても宜しいですか？」

「なんだ？」

「慧音先生は八意様とはどのような関係ですか？」

「んなっ！／＼／＼」

「キス済みですか？八意様のことですし、もうせつ…」

「お、お姉様ーっ！」「うわああー！」

直感的にヤバイと感じ取った依姫と自転車バカがその先を遮る。が、時すでに遅し。

「せんせー、キスって何?」「せつ”て何ですか?」

ざわざわと騒ぎ出す生徒一同、依姫とアイコンタクトで素早く会話した自転車バカが豊姫を廊下へ強制連行。ドアを半分ほど閉め、跳ねあがった心拍を鎮める。

「何よー、人が質問してる時に遮るなって教わらなかつたの?失礼しちゃうわね」

「か、勘違いかも知れないから一応聞いてく。今止めてなかつたらなんて言うつもりだった?」

「セツ〇ス」

息をするように言い放つので、頭を軽くだけ叩いてやった。

「いたつ!ちよつ、頭叩くことないじゃない!至極まつとうで健全な質問でしょ?」

「どこが!?!授業と関係無いどころか穢れそのものじゃねーか!何なの?月って浄土じゃ

なかつたの!？」

「私は八意様と慧音先生の夜はどうなってるのか知りたいだけよ？ 依姫にはまだ見せてないけど、薄い本みたいにネチヨ……」

「止めるとよ姉！ けーね先生と違って俺の依姫は純粹なの！ 真つ白なホワイトボードなのー！」

「俺の”ねえ……やっぱりそういう気はあるのね？”

「あつやべ」

うっかり漏れた本心を見逃して貰える筈もなく、豊姫は追撃してきた。退路を断たれた自転車バカは、ぼつの悪そうに話す。

「まあ、そういう関係になれたらいいなどは思ってるよ。けどその……何っか」

「何というか？」

「その願いが叶ったら後が辛くなるんでね。叶って欲しくないというか、なっちゃいけないんだよ。お互いの為に」

「……そう」

どうしましょう、ジャブで牽制したら本気の右ストレート喰らっちゃったわ。やっとの思いで絞り出した相槌も虚空に消え、場の空気が一気に重たくなる。が、教室で騒ぐ生徒らの声で自転車バカが現実に戻ってきた。

「つと、それどころじゃねーや！どーすんだよ！何とか誤魔化さないと慧音先生ずつとあの状態だぞ！」

自転車バカが指さすその先では、顔を真っ赤にした慧音を生徒達が一切の容赦なく質問攻めに行っている。流石に可哀そうになってきた所に廊下から

「どうにか誤魔化してくれ」

と合図を送られた依姫が、少し考えたのちに立ち上がった。

「キ、キスっていうのは5属33種類居る魚の総称のことよ！食べられる魚だから、塩焼きとか刺身とか天ぷらやフライにしても美味しいですわ！投げ釣りの最も一般的な魚だから、釣り初心者でも楽しめる魚なの！」

（いやいや、そんなんで誤魔化せ…）

「へえ〜!」「ウチの母ちゃんが昨日買った魚、キスって名前だったのか」「そういやうちの父ちゃん、今度シロギス限定の釣り大会に参加するって言ってた!」「偶然!私のお父さんも参加するって言ってた!」「キスカあ、まだ食べたことないや」「最近出てきた魚だから仕方ないよ」「ああ、キス済みってそういう……」

(依姫GJ!!)

「じゃあ”せつ”て何の略なんですか?」「確かに気になる!」

「じ、実は永琳先生から食事に誘われたんだ。なんでも永遠亭で振舞ってくれるらしい、接待って奴だな。うん」

(マジで?)

(そんな話は聞いてないわね、多分出まかせじゃないかしら)

その後、接待の意味を聞いてきた生徒の発言を利用して話を戻し、どうにか授業を終えた慧音だった。

アンタすげーな。

寺子屋を後にした3人は喫茶店で昼食を食べた後、豊姫の

「私服が少ないからこの期に見てみたい」

で服屋へ行くことに。依姫に着ぐるみを着せて遊んだりもしたが、最終的にはちゃんと購入して服屋を出る。するとそのタイミングで自転車バカに着信が入った。にとりからだ。

へもしもし盟友？試作品だが例のアレが完成したぞ、見にこないかい？

「お、遂に出来たんだ！わかった、すぐ行くよ。じゃあ一旦切るね」

「……今の誰から？」

「そ、そんな怖い顔すんなって。今のはウチで保護してるにとりさんって……人？妖怪？からだよ。開発を頼んだ物が出来たらしくてさ、今から見に行こうと思ってんだけど2人はどうする？」

「面白そうだから一緒に行く！いいでしょ、お姉様？」

「ふふっ、嫉妬なんかしちゃって。心配しなくてもいいわよ、彼が恋愛対象として見てるのは……」

「まそっつぶー」



「あいたつ！（ちよつ、誤魔化すの下手くそか！もつと他に台詞あったでしょう！何よ  
まそつぷ」 って！そんなのであの娘が納得するわけ……）」

「そつか、自転車バカは、まそつぷ」 って人が好きなんだ……」

（あつさり納得したよ！でも一番面倒くさい方向で納得したよこの娘！）

「いや違うから！今のは無意識に思いがけない言葉が出た感じのアレだから！」

「そつか、思わず言っちゃうくらい普段からその人の事考えてるんだ……」

「だからそうじゃなくてさ……！」

「じゃあ何だつて言うの!?説明してよ……！」

ヤバイよ、完全に変なスイッチ入っちゃったよこの娘。あ、下向いちやった。もうこれどうすりやいいんだよ。

姉に視線を向けるも、「私に聞かれても……」と言わんばかりの目を向けられた。覚悟を決め、手を握って話しかける。

「……」

「とりあえず落ち着け、そして話を聞け。そもそも、まそつぷ」なんてふざけた名前の人居ないから。されたくない話を遮る時つて変な言葉出るじゃん？そういうアレだか

ら。な?」

「あ……そ、そうだね、そうだよ。ちよつと考えれば分かることだもんね／＼」  
「分かればよろしい」

落ち着いたのを確認し握っていた手を離すと、握られた手を見て更に顔を赤くする依姫。

あれ、ひよつとして逆効果だった?

(へえ? 以外とやるじゃない、落ち着かせるくらいなら抱きしめるまでもないって事?)

(いや、んな恥ずかしい真似出来る訳ないだろ。ヘタレなめんなよ)

(そこ威張るところじゃない? っていうか前どつかの展望台で抱きしめ合ってたな  
かったっけ?)

(妖怪に全力で抱き着かれたのに引き剥がすとか無理ゲーだって。あん時だって結局は  
背中トントンってしただけで厳密には……ってか何でそのこと知ってんの?)

(私の能力で覗き見をね)

(俺にプライバシーは無いのか)

「で、落ち着いた? そろそろにとりさんの所行きたいんすけど」

「あ、了解です／＼／＼」

「まだ治ってないみたいね」



「にとりさん・・・！」

「どうだ、凄いだろう？これは今まで作ってきた発明品の中でも最高傑作と言える出来栄えだからね」

「俺知ってるよ、これ買ったら一本300万円するんだよね。売ってるのは二本セットだから……」

待てよ、専用アンプ二台と冷却装置と電気の整流装置も合わせると家買えるな」

「お、よく知ってるね。そうさ、こいつはVIONEER（ヴァイオニア）パイオニアをもじったもの）が出した究極のスピーカーと呼ばれるTAD<sup>タッド</sup>を幻想郷の科学と魔法で更に強化した物だ。君が希望した機能を付けるとなると、このスピーカーじゃないと駄目だったよ」

「……お値段どのくらいですかね？」

上目遣いで恐る恐る聞いたが、にとりは笑いながら答えた。

「心配しなくていい、無縁塚に行ったら壊れたTAD一式が流れ着いてたからね。修理費しか掛かってないよ」

「よっしゃ、後で払うし請求書プリーズ」

「……その、タンスと同じくらい大きい機械はどういう物なの？」

「言うより見せたほうが早いかな、こいつの前に立つて」

手招きされた依姫がtadの前に立ったのを確認し、にとりに合図して電源を入れさせる。すると、tadから発せられた赤外線が依姫の全身を照らし出す。光が消えると

「綿月 依姫 ノ妖気ヲ保存シマシタ」

「……何これ？」

「これは目の前に居る対象の妖気を感じて人物を特定する、そしてその人のテーマ曲アレンジで格好いいのを流すとその人の戦闘力が一定時間跳ね上がるという優れたものだ。無かったら妖気を保存してくれる機能もある」

「そんな凄い物の開発をいつ頼んだの？」

「2ヶ月くらい前だよ、」ボケて本来の世界<sup>3</sup>に行った帰りにここへ来て頼んだんだ」

「盟友、あの時間きそびれた事を聞いてもいいかい？」

「何？」

「引き受けといて言うのもアレなんだけど、どうしてこんな物を？」

「どっから話せば良い？」

「難しいなら最初からで良いよ」

腕を組んで少し考えた後、静かに語った。

「俺さ、正直言つてこの世界の事なめてたんだよ」

『……………』

「仮想空間つつつってるけど、どうせVRと大差ないだろうなって思ってたんだ。その世界に居るような気分になれるだけだろうって。」

初めてログインした時は思わず謝りたくなつたよ。ここまで五感に訴えかけてくるなんて思わなくてさ。

音も、

匂いも、

感覚も、

ん。  
食感もある。チルノのライブ見に行った時、腹に低音が響いたのはマジで感動したも

音って時として強力な武器になるしき、此処でなら音楽の力を具現化できるんじゃないかなーと」

「盟友……」

『……』

「え、何。俺なんか変なこと言った？」

『いや、アホっぽい顔の癖に意外と考えてたんだなあつて』

「そろそろ泣くぞ」



同時刻、ボケて本来の世界。研究所でこんな会話がかわされていた。

「なあ、聞いたか？この研究所に泥棒が入ったらしいぞ」

「何か盗られたのか？というか、盗られる程の物つてあったか？」

「それが何も盗られてないんだ、大方そいつも価値がないと分かって撤収したんだろうよ。」

まあ……強いていうならSAORIとAKIKOの配置が少しずれてたくらいだ」  
「あんなガラクタイじつて何したかったんだか、変な奴だな」

研究所から伸びる一本道を、大型トラックが走っている。盗聴器が無い事を確認した運転手が、こんな独り言を呟く。

「へへっ……遂に手に入れたぞ！SAORIとAKIKOを……！研究所でこいつらの研究をしていない事は確認済みだったからな、よく似せたマネキンを置いておけば絶対に気づかれないだろう。こいつらの復活に多少時間が掛かるがまあ問題ない……ははは！あーっはっはっはっはっは！」

この俺、道頓堀野郎はこの地球……いや、全宇宙の支配者となるのだ!!」

続く。



## 第26話「暴走を止めろ」

(なるほど、本気を出せば地球破壊は朝飯前なのか……)

SAORIとAKIKOを特殊な養液が入ったガラス管に入れ、取り扱い説明書をよむのは道頓堀野郎。某推理アニメの犯人みたく、全身が真っ黒である。部屋の中にはその他にも色々な装置があり、ちよつとした研究室になっている。ページをめくるとアラームが点滅したので、説明書を置いて画面を見やる。

(ん？心が荒んでいる者を探知する。闇の感情リーダー”に反応が……なんだ、派生世界か。まあいい、こいつらの性能を試すいい機会だ)

意地の悪そうな笑みを浮かべ、SAORIとAKIKOに目を向けた。

同時刻。その派生世界であるボケての幻想郷では、人里の一角に建っている鍛冶屋から包丁を研ぐ音が聞こえていた。研ぎ終えた店主は水洗いした包丁を布で包み、顧客に手渡す。

「はい出来たよ。でも刃はそんなに付けてないから、お刺身とか切るのは難しいかも」  
「ありがとう小傘ちゃん、買い換えずに済んだよ。スーパージヤこういうのやつてくれなくってなあ」

「包丁を磨ぐのは難しいからね、仕方ないよ。普通は出来なくて当然なんだし」

「だよな。じゃあ代金はここに置いてくから、またな」

「バイバーイ、また何かあつたら来てねー」

「切れ味が落ちたので刃を付けて欲しい」

と相談に来た顧客を見送り出す。砥石を片付ける小傘だが、ため息と一緒に呟く。

「はあ…お腹空いたなあ…朝食は食べたのに…ん？誰かが話してる…」

窓に近寄って、耳をそばだてる。すると、こんな会話が聞こえて来た。

「よ、朝市帰りか？それにしちや少ないか」

「まあそんなところかな、こいつが戦利品だ」

「なんかよく切れそうな包丁だな……関係六か？」

「と思うだろ？残念、これ作ったの小傘ちゃんなんだよ」

「えっ！小傘ちゃんこんな器用な事出来たのかよ!? すっげえなおい！」

「だろ？俺も最初は……」

（ああ、行っちゃった。もうちよつと聞きたかったなあ……驚いてくれたから良いんだけど。良いんだけど……なんか満たされないんだよねえ。お菓子の食べ過ぎでお腹が膨れてるって感じ）

幻想郷に“異変解決ツアー”が誕生して以来。当然ながら神霊廟や星蓮船のツアーも参加者は多い。威力を最小限に抑えた弾幕を参加者の死角から放つ事で、それなりに満たされていた。

だが効果は薄く、時間が経つと元に戻るのだ。

（やっぱり、怖がってくれないと駄目なのかなあ）

窓の外に広がる青空を見上げながら、先の見えない現実悩む小傘だった。

(うーん、流石に階段をセグウェイで下るのは無茶だったか……けっこう傷いったな、なんて言い訳しよ……つと、この部屋だ)

すり傷のついたセグウェイを降り、とある部屋をノックする自転車バカ。手には封筒とミニサイズのトロフィーを携えている。

「失礼します、フランドール・スカーレット様。俳句モデル選考委員会の者です。弾幕舞踏会のシールド権を獲得されたので色々と持って参りました」

言い終わると同時にドアが開けられ、眩しいくらいの笑顔で自転車バカに抱きつかうとするフラン。だが、フランの後ろにいるきいろだまの殺気を感じた自転車バカが全力で避けたので空振りに終わる。

「そんな睨まないで下さいよ、今日は俳句モデル選考委員として来たのですから」

「俳句モデル選考委員？なんだそりゃ？」

「お兄様知らないの？自転車バカは私が去年参加した”弾幕舞踏会”の主催者なんだよ

？だからこの人がここに來たって事は……」

「そうです、きいろだまさんの投稿された写真と俳句が今週の俳句モデルに選ばれました。

そして、売り上げが姉のレミアアさんを超えて過去最大となりましたので”ミス俳句モデル”のトロフィーを持って参りました。あくまでも暫定なので入れ替わる可能性があります」

そう言つてシード権とトロフィーを差し出すと、これ以上なくらいに喜びを爆發させる2人。自転車バカは紛失に氣をつけるようにだけ呼びかけるとその場を後にした。セグウェイを返すためだ。

(……：そういや、見舞いに來てくれた人らで小傘ちゃんが一番元気なさそうだったっけか。命の恩人だし行つとくか)



(家で悩んでも仕方ないよね……：とりあえず”あそこ”に行こう、あそこなら相談

出来る人が沢山居るし)

作業着から普段着に着替え、唐傘を持つて家を出る。通りを歩いていくのだが、ふと近道があったのを思い出す。

人通りの少ない路地まで入ると、背後から声が掛けられた。

「さつきからため息ばかりだな、どうしてそんなに元気がないのだ?」

最早振り返るのも面倒な小傘は、背を向けたまま返事をする。

「ちよつとね、自分の存在意義がよく分かんなくなっちゃって」

「そうか、それは大変だな……だが、その問題が力で解決出来るとしたらどうする?」

「あつははは!力あ?そんなのでどうにかなるんなら是非ともお願いしたいよ」

「良いだろう、ならばくれてやる……!」

ポンと肩を叩かれると、何かが身体を通り抜けるような、痛みにも似た感覚が走る。そこで初めて後ろを振り返る小傘だが、猫が塀の上で昼寝をしているだけで他には誰も

見当たらない。

今のは一体何だったのか、自分の知り合いなのだろうか、そこまで考えたところで異変に気付く。

(っ……な、何これ……力が……溢れてくる……！凄……！これなら絶対……っ!?)

喜んだのもつかの間、身体の奥からふつつつと黒い感情が湧いてくる。今まで一度も抱いたことの無い感情だ。抑えようにも上手くコントロール出来ない。そればかりか、次第に意識も薄れていくのがわかる。途切れる寸前、心の中でこう叫ぶ。

(助けて……自転車バカさん……!)

意識が途切れ、がっくりと下を向くと同時に、足元から湧いて出る黒いオーラが少しずつ小傘の姿を隠していく。そして完全に隠れると、そのオーラが火柱のように天高く舞い上がって太陽を隠してしまった。

セグウェイを返し自宅へと戻った自転車バカが、いきなり振り返る。

(今、誰かに呼ばれたような……?)

急いで靴を履き直して玄関を開く。瞬間、地響きと共に黒い何かが空を覆い尽くしていく。目線を下げてゆくと発生源が近いと分かり、野次馬精神も手伝ってその場へ急行する。

(黒いのが止まったか、何なんだアレ? いいや、この角を曲がれば分か……ッ!?)

発生源に着くと、異様な姿をした誰かが立っている。

目は両目ともくり抜かれたかのように真っ黒で、頭に乗せている傘は不気味な紫色だ。傘の柄は見当たらない、どうやら頭と連結しているようだ。全身が細長く伸びており、頭の上に乗せた肌色の物体から出る血が顔を伝って落ちていく。手のひらは無く、両腕の先端は槍を思わせるような突起になっている。その場に居る人々の反応はというと、

ある者は、泣き叫びながら逃げ出す。

ある者は腰を抜かし、小さな悲鳴をあげながら後退する。

ある者は呆然とし、ただ立ち尽くす。



”それ”を見て周りと同じように震え上がる自転車バカだが、ある事に気づく。  
”それ”は白の長袖シャツに水色のベストのようなもの、同じく水色のミニスカ―トという服装なのだ。勇気を出して声を絞り出す。

「ひよつとして……小傘ちゃん？」

蚊の鳴くような声を聞き取った”それ”は、ゆつくりと声が出た方向を向き、一気に襲いかかる。

「えつちよつおまつ……！」

長々と伸びた突起がこちらへ近づいてくる。死を覚悟し目を閉じた自転車バカが聞いたのは、固いものがぶつかり合う音だった。

恐る恐る目を開くと、お祓い棒と封魔針で”それ”の攻撃を防ぐ霊夢の姿があった。

「やれやれ、どうにか間に合ったわね……大丈夫？」

「た、助かったあ〜」

身体中の力が抜けて地面に膝をつく自転車バカを、霊夢が励ます。

「しつかりしなさい、座ってる場合じゃないわよ！私が時間を稼ぐから、あんたは先に向かわせた魔理沙たちと一緒に里の人間を避難させなさい！」

あ、終わったら魔理沙たち連れてきてよね！手伝ってもらうんだから！」  
「りよ、了解でーす！」

腰の抜けた者も、立ち尽くしていた者も、霊夢が来た事で我に返り、自転車バカや魔理沙、アリスに早苗といった連中の指示で避難していった。

何度目かの衝突音が止み、“それ”と距離を取る霊夢。用意してきたメインウエポンの残りを確認してから、聞こえているかどうかはともかく話しかける。

「まったく、カカシみたいなた型の癖に中々やるじゃない。霊力で強化した封魔針へし折るってどういう腕してんのよ……」

そこに、魔理沙達が降りて来た。

「霊夢！連れて来たぞ！大丈夫か？」

「さりげなく嘔吐くの止めなさい、彼が居場所言おうとしたのにアンタが聞かずに رفتちやつたから逆に遅くなったでしようが」

「飛んで探した方が早い」って言っても人里だって広いんですからね？事実見つけられてないじゃないですか」

「わ、悪かったって……それより状況は？」

「見ての通りよ、かったいの何のって。封魔針へし折られたわ」

「霊夢の針って金属貫通するんじゃないかったか？」

「の筈なんだけどね……どうしたもんかしら」

「……なあ、これ弾幕ごっこじゃないんだし私ら加勢していいだろ？」

「えっ違うんですか？」

「違うわ、今やってるのは”妖怪退治”よ。私の役目だから一人で片付けたいってのはあるけど、仕方ないわね」

「普段なら黙って見てるんだけどな、こんな気持ち悪い奴は見てるだけで吐き気がする。早いところ消えて貰ったほうがみんなの為だろ」

「同感だわ、たまーに出来る人形の失敗作よりも酷いもの」

「み、皆さん結構ボロクソ言いますね……ですが、気持ちは分からなくもないので加勢させて頂きます！」

魔理沙たちがスペルを発動する為の予備動作に入る。危険を感じ取った“それ”が邪魔しようとするが、そこは霊夢がきつちり防いだ。

腕の軌道を素手で反らし、腹を蹴って距離を取る。

「じゃあ行くわよ……」 霊符 夢想封印」

「へへっ……」 星符 ドラゴンメテオ」

「行きなさい……」 大江戸爆薬からくり人形」

「えっえーと……」 蛇符 雲を泳ぐ大蛇」

色とりどりの鮮やかな弾幕が“それ”の逃げ場を塞ぐように放たれる。目を開けていられないどころか、まともに立っていられない程の爆風に飛ばされそうになる自転車バカ。おさまったのを感じて目を開けると、信じられない光景があった。

「嘘だろ…アレ喰らって無傷かよ…!俺なんか吹き飛ばされそうになったのに」

「いえ、喰らってないわ」

「え?じゃ何であんな…?」

「相殺されたんですよ…」 当たる直前で”。殺ったように見えたのはその為です」

「さて…どうしたもの」

「ふむ、こいつは意外と使えるな…」

「[[[[[?!]]]]」

「しゃ、喋った!」

「でも明らかに唐傘妖怪じゃない声だぜ…それに

” 意外と使える”

って…」

「あなた、誰?」

アリスが尋ねると、” それ” はぎこちなく腕を広げた。

「ふん、お前らに名乗る名前など無い。強いて言うなら、俺はこいつを救ってやった救世主って奴だ」

「救世主ですって？何をバカな事を……どっちかって言う状況的には破壊神だわ」  
「アリスもたまにはいい事言うな」

「こいつの心に闇があった、」皆に驚いて欲しい」という闇がな。俺は

”それを力で解決出来るとしたらどうする”

と言ったんだ、そうしたらこいつは”

そんなのでどうにかなるんだっただらお願いしたい”

と答えた。だから力を与えた。それだけの話だ……凄く簡単だろう？今やこいつの顔を見ただけで人々は震え上がり、絶叫し、泣き叫ぶんだ。殺しでもしたら、もっと恐怖するだろうな」

「「「「「?!」」」」」

「こいつはこれから、この世界で永遠に語り継がれる程の、記憶に嫌という程刻まれる恐

怖を植え付けるんだ…邪魔をするな」

「ふん、幻想郷のパワーバランスを崩そうってのか？そんな事はさせないZE！」

（あの時、見舞いに来た中で小傘ちゃんだけ、元気がなかったのはそういう事だったのか……）

「その阿呆はともかく、これで理解出来ただろう…さあ、そこを退け。こいつを救えるのは俺しか……っ」

そこまで言うと、「それ」は突然言葉につまる。一瞬苦しそうな表情を見せると、俯いてしまった。そして、

「けて……助けて……」

「声色が……変わった？」

姿勢はそのままに、「それ」は大きな声で叫ぶ。

「助けて！自転車バカさん！」

「この声…小傘ちゃん!? つか呼ばれてますよ、自転車バカさん！」

「えつまさかの俺!?!」

「お願い！助けて！ここから出して！こんな…みんなを悲しませるような力なんて欲しいの！」

「で、でもさ。そしたらもう驚いてもらえなくなるんじゃないの？」

「それでも良い！もう2度と驚いて貰えなくなっただっていい！だってわちきは…」愉快な忘れ傘” 多々良小傘なんだもん！」

「小傘ちゃん…よく言った！」

その時、分厚い雲を引き裂いて高速接近してくる物が現れた。それは自転車バカの前へ一直線に降りてきて、ある程度近づくとその場で浮遊した。

「これ、にとりさんが作ったtadだ…どうしてここ！」



〈盟友！聞こえるかい!?〉

「に、にとりさん!? どうしたのこれ!?」

〈博麗の巫女が弾幕勝負する時に陰陽玉が浮かぶだろう? あんな感じの奴を Bluetooth 機能を応用して今さつき作ったんだ! これを使ってくれ!〉

「今さつきい!? あんた凄いな!」

「ごめんなさい、ちよつと待って。これどういう機械なの? あたしのクローゼットと同じくらいデカイけど」

「説明するより見せたほうが早いんだけど……ねえ小傘ちゃん! もうちよつと耐えられそう!」

「えっ!? う、うん! 大丈夫だよ!」

「なら良かった、えーとスイッチは……これか」

タッチパネルを操作すると、スピーカーから出る赤外線がアリス、早苗、魔理沙、霊夢の順に照らしてゆき、全員の妖気の認識が完了した　と音声で告げる。

「こんな感じで対象の妖気を感じ取って人物を特定して、その人(妖怪)のテーマ曲アレンジで格好良いのを流すと一定時間戦闘力が跳ね上がるっていうスピーカーなんだ」

「わ、私の曲もあるのか？」

〈勿論！全員分の曲はデータに入れておいたからね！〉

「おのれえ……！一度は消した自我が戻ってくるとは、無駄な足掻きを！」「ちよつ、今いいところなんだから邪魔しないでよ！」

「まずい、奴が戻ってきてるわよ！」

〈どうする？誰の曲を流そうか？盟友に任せるよ〉

「……じゃあ小傘ちゃんの曲で」

「[[[[えっ!]]]]」

「……どうして小傘なの？」

「小傘ちゃんって身体乗っ取られてるんじゃない？だったら外野がとやかく言うよりも本人が中から追い出した方が速くね？って思ってる」

「なるほど……そういう事なら、私の管轄外ね。それで良いんじゃない？アンタ達もそう思うでしょ？」

『異議なし』

「準備は整った……五分でケリをつけろ！」

再生ボタンをタップすると、t a dはこう言った。

〈唐傘奮闘記！〜ラクトフェリンの果てへ〜 起動シマス〉

突如、道頓堀野郎の視界が歪む。目の前が真っ暗になり、視界が戻ると

「な、何なんだこの真っ暗な空間は…？」

「意識の世界へようこそ！ 沢山驚いて帰ってね！」

「お前みたいな小娘に負ける俺だと？」

「やってみなきや分かんないよ。手加減しないからね！ じっくりよー！」

後光 からかさ驚きフラッシュ

「ふん、こんな線がどう……ぐああああ！」

「あれえ？ 予告線張ったから避けると思ったのに」

「よ、予告線……？」

「あなた弾幕ごっここの事なんにも知らないのね、ぷぷぷー！」

「小娘があ、舐めた真似を…くっ！」

「痛い？痛いだろうね、だって左手がないんだもん♪でもまだまだ続くよ！今度は予告線なしだから頑張つてね！それぞれえ！」

次から次へといきなり放たれるレーザーに、身体を焼かれてゆく道頓堀野郎。ほぼ無重力状態の為移動すら上手くいかないのだが、相手は前後左右から容赦なく撃つてくる。避けたと思つた所に当たる様は、典型的なシューティングゲーム初心者と言えるだろう。

だがやられっぱなしで終われない道頓堀野郎は、防御壁を築いて防ぐ事に成功する。

「へえ…やつと気づいたのね」

「避けるのが厳しいなら防ぐまでだ、もう好きにはさせん」

「そんなボロボロの姿で言われても説得力ないよね、ふっ」

「何とでも言え…当たらなければそれで良いのだ」

それを聞いて試しに一発撃ちこむが、言葉通り防がれてしまった。

「本当だ、防げてる…結構堅いのね。じゃあ”これ”は防げるかな？」

「…!?お、お前まさか…!」

「単発で壊せないなら1点に集中砲火するだけだもんねー♪」

先ほどは全方位に放っていた予告線が防御壁に集まっっていくのを見て、嫌な予感がする道頓堀野郎。

予告線の動きが止まると同時にレーザーが放たれ、予感は見事に的中した。壁が一瞬でかき消され、文字通り光の速さで吹っ飛ばされる。が。

「あ、しまった」

「ははは、馬鹿め!深層意識に潜ってしまえばこちらのもの!もうお前に勝ち目は…」

「あるんだな、これが」

「い、いつの間に背後を…!」

「これでも喰らえ!」

傘符 一本足ピッチャー返し

壁を築く暇もなく全身に米粒弾や大玉の塊を浴び、身体がじわじわと消えてくのを感  
じ取る道頓堀野郎。最早手が出せない為、意識の世界から追い出されないように耐える  
事しか出来ない。

「うーん、もうちよつとで追いだせそうなんだけどなあ〜」

（小傘！そんな奴相手にいつまで手こずってるんだ！さつさと出てこないか！〜）

「ここ、この声はナズちゃん!? どうしてここに?」

（親友のピンチを見過ごすバカが何処に居るんだ！少々遅れてしまったが来てやったぞ  
！〜）

「ナズちゃん……!」

（さあ、出て来い!）

「……うん! よーし、ラストいつくよー!」

放つ大玉に力を込め、断続的に塊をぶつける。すると流石に耐えきれなくなったの  
か、道頓堀野郎は意識の世界から追い出されてしまった。

「出てきた！今よ、魔理沙！」

「OK！弾幕は…パワーだけ！」

魔砲　ファイナルマスタースパーク

「覚えていろ。近い内にお前らを、奈落の底へ突き落としてやる……！」

誰にも聞こえないように呟くと、黒い球体に身を包んでいた道頓堀野郎はマスパと共に天高く打ち上がり爆散した。爆風で雲が消え、月が顔を出し里を照らし出す。避難していた人々は歓声を上げ、それぞれが喜びを全身で表現している。

当の小傘は黒から青と赤のオーラに色を変え、オーラが消えると元の姿に戻っていた。それを見て目に涙を溜めたナズーリンが小傘を抱き寄せると、2人同時に泣き出した。

曲の再生を止め、自転車バカはパネルを見る。

「約2分30秒……けっこう余ったな」

「足りないよりはマシじゃないか、細かいことは気にすんなよ」

「だね、一曲で済んだし」

「これで一件落着ね、大した被害がなくて良かったわ」

「……折れた封魔針は被害に入らないの？」

「そういえば折れてましたね」

「あ、忘れてた。また調達してこないと……あーあ、面倒くさ。先に帰るわね」

「あ、私もキノコ採取途中だったの忘れてたぜ。つー訳でまたな！」

「まったく魔理沙だったら……どうせ後で家に来て”これでなんか作ってくれ!”って言うくせに……あたしも帰るわね」

「ん？この紙は……！いつけない！買い出し放り出して来たの忘れてました！自転車バカさん、私も失礼します！」

（なるほど、そういう流れか。じゃあ俺もどつか……）

行こうとして、手を掴まれた。



振り返った先には小傘が居る。

「こ、小傘ちゃん？何してんの？」

「まだ……貴方にお礼言ってる」

「いや、お礼言われるような事してないから。ただ現場に居合わせたっただけで」

「何を言ってるんだ、命蓮寺に来て

”ナズーリンさんを貸して下さい！”

って私の旦那（ペンギンGX）に頭を下げたのは君じゃないか。あれが無かったら私はここに居ないよ」

「そりやそうだけど……でも本当に何も」

「したよ！貴方は私を助けてくれたよ!？」

「……ッ！」

目に涙を浮かべて遮る小傘の迫力に、自転車バカは気圧されてしまう。

続けて話す。

「最初に私を見て、名前を呼んでくれたでしょ？あれ……本当は聞こえてたの。」

でも身体が勝手に貴方を殺そうとして、あそこで霊夢が来てなかったらどうなったか……」

「じゃあ乗っ取られてた時、音だけは聞こえてたって事？」

「うん、聞こえてたよ。貴方の呼ぶ声、霊夢の独り言、魔理沙達の掛け合い……そして、ナズちゃんの声も」

「ふん、あれで聞こえてない方が不思議だ」

「でもね、あのままじゃどうにもならなかったの……声が聞こえても身体は思うように動かせなかったし……ずっと景色は真っ暗だったし……」

それでも、思い出したの。私を一度救ってくれた自転車バカさんなら、どうにかしてくるんじゃないかって。

凄いやね、本当に助けてくれたんだもん。信じててよかった。ありがとう、自転車バカさん」

「いや、あのスピーカーだって作ったのはにとりさんなんだけど……」

「まだ言うの……？ いいよ、だったら言ってあげる！

貴方が言つてた通り、あのまま霊夢が私を退治しても何も変わらなかつた！

私が、アイツをこころのなかから追いださなきゃいけなかつたの！でも私だけの力じゃ出来なかつた！それを手伝つてくれたのは誰!? 音楽の力（物理）で…私をパワーアップしてくれたのは誰!?

貴方でしょ!?

「……」

「貴方が私に力をくれたから！アイツを追い出す事が出来たの！

貴方が連れてきてくれたから！ナズちゃんの声援が力になったの！貴方が居なきゃ……今の私はここに居ないの!!」

言葉の出ない自転車バカに、ナズーリンが優しく話しかける。

「確かに、追い出したアレを吹っ飛ばしたのは白黒だ。このスピーカーとやらを作つたのも、あの河童なんだろう。

でも、小傘が負けそうになつていた形勢を逆転させたのは紛れもなく君なんだ。いい加減で認めたらどうだ?」

「ごめん、変な意地はっちゃつたな」

「わかってくれたら良いよ……私こそ怒鳴っちゃつてごめんね？」  
「良いって事よ」

小傘の頭を、ポンポンと撫でる。

「まあ、その……あれだ。よく頑張ったな」  
「~~~~っ！」

再び涙腺のダムが崩壊し、泣きながら抱きつこうとする小傘。恥ずかしがった自転車バカは避けようとしたが、背後に回ったナズーリンに動きを止められたので抱きつかれてしまった。胸元が涙で濡れていく。

頭だけ動かし、ナズーリンを睨んだ。

「なんで避けさせてくんないんだよ」

「逆に何で避けるんだ。仮にも男だろう？ こういうシチュエーションは願ったり叶ったりじゃないか。」

「つべこべ言わずに抱き締めてやれ」

「くっそ、他人事だと思つて・・・！」

30秒以上かけて、両手を小傘の後ろへと回した。

「くっそ、この程度の力では駄目だったか…まあ本来の10分の1程度しか出ていないし、無理もないか。

だが、こいつらは近い内に完全体となる…そうすれば、地球の破壊など朝飯前だ…ふはは、はーっはっはっは！

復活まで、後10だ…！」

続く。

## 第27話 「レミリア見守り隊」

人里の住宅街にある一軒家。ここは自転車バカの借家なのだが、玄関の前でうろつく人物が居る。多々良 小傘だ。スマホで時刻を確認すると、戸を元気よく叩く。

「会長、おはようございまーす！」

呼びかけに応じて、ログインした自転車バカは少し嫌そうな顔で戸を開けた。

「……やっぱり冗談じゃ無かったかあ、名誉会長の話」

「だって満場一致で即決だったじゃない。今更覆せないよ」

「いや、だって頷くまで離さ……！まいつか、別に減るもんじゃないし」

そう言って視線を家の中に移すと、小傘も釣られて見てしまう。

「ん？あれは何？」

「俳句モデルに応募された写真だよ、あの中から”今週の俳句モデル”を選ぶんだ。並べ終わったから今から選ぼうとしてたんだけど……やってみる？」

「やりたーい！お邪魔しまーす！」

「どうぞどうぞ」

「すごい、これ本当に一般の人が撮ったの？私にはプロの人が撮ったように見えるなー」

机の上にある程度整理されて置かれた写真の数々を見て、目をキラキラさせる小傘。自転車バカの説明を受けると更に輝きを増す。

「へえ、一眼レフで撮ってるんだ」

「しかも定期的に専門店で講習会まで開いてるんだってよ。力の入れ方が尋常じゃないよね、応募しといてアレだけど」

「何となく分かる気がするなあ……」

「そうか？」

「だって綺麗に撮れたら楽しいじゃない、そういう技術は身につけても無駄じゃないと思うな。旅行先だと大活躍だよ」



「確かに一理あるけど……おかげでこっちは毎週選ぶのに苦勞するんだぞ？ 甲乙つけがたいのなんのって」

「まあまあ、そんな事言わずに」

「やれやれ……お？ これ良いなあ」

「どれ？」

手にとって小傘に見せると意見が一致したので、送り主を確かめる為に裏面をみる。

「なんだ、しんたんか。まあ被写体が霊夢だから当然といえば当然かな」

「知り合いなの？ そのしんたんって人」

「面識はある、でもそこまで話した訳じゃないから知り合いってというのが妥当かな」

「ふーん……その人はどこに居るの？ 幻想郷？」

「” 霊夢は俺の嫁 ” って言ってるくらいだから……多分 ボケての幻想郷 に居ると思う」

「確認しに行かないの？」

「良いよ、この俳句を売るのが先だ。売上金の一部と、多分渡す事になるシード権を持って行った方が喜んでくれるだろうし」

翌日、文と交代で店番をすると本当に売り上げが二桁の壁を超えた為、

(だから言ったじゃん)

と思いつながらシールド権と売上金の一部を持って単独でしんたんの元へと飛ぶ。鳥居の下に着くと、霊夢がいち早く気づいて声を掛けて来た。

「あら、誰かと思えば……何か用？あつても無くても先に賽銭を落としてくれるとありがたいわ」

言われた通りに賽銭箱へ向かう自転車バカに、霊夢がついてきながら話し掛けてくる。

「ってか、私の記憶が確かなら貴方がここに来るのって初めてじゃない？」

「何言ってるんだよ、”人間が来る事自体初めて”の間違いだろ？」

「いらつしやい魔理沙、今なら特別に封魔針を使って針治療してあげるわよ？」

「調子乗ってすんませんでした」

「分かればよろしい」

流石M―1優勝者だな。

などと呟きつつ、財布から適当に小銭を出して放り投げる。

緩やかなカーブを描いて賽銭箱に放り込まれた額を見切った霊夢は

「……お茶でも出すわ、中で待ってて」

そう言うと、鼻歌混じりにスキップしながら歩き出した。

「あれ？なんか急に優しい顔になったぞ？さっきまで死んだ魚を見るような目つきだったのに」

「なあ自転車バカ、お前賽銭箱に500円入れたらど？」

「えっ、そうだけど……何で分かんのか？」

「霊夢はああやって真っ先に賽銭を入れさせるんだ、それを見て対応が変わる。もう長いこと見てるからな、歩き方だけで金額がわかるようになったんだよ。私もアイツも、な」

「へえ……じゃねーや。そこまで長い話じゃないから止めてくるー！」

その後やつぱり断りきれずにお茶を出され、しんたんを呼んで貰ってからシード権の話をした自転車バカだった。

翌日、いつもの時刻にログインした自転車バカが居たのはボケて本来の世界だった。近くにあった館に入り、ガイドロボを借りてから人通りの少ない路地へと入る。足を止め、その場で何か深刻そうな顔をしていたのだが、決心して質問をぶつける。

「ガイドロボさん……ひとつ聞いてもいいかな？」

「何デシヨウ？」

「SAORIとAKIKOってさ、盗まれたりした？」

言ったが早いか、ガイドロボから警告音が鳴り響く。一瞬周りに聞こえるんじゃないかと思った自転車バカだったが、2〜3秒で止んだのでほっと一息つこうとした矢先、ガイドロボに腕を掴まれ強制連行されてしまう。着いた先は、ボケて歴史博物館だった。

「へえー、この時間だと誰も居ないのな」

「何処デ知ツタノデスカ？」

「何を？」

「SAORIトAKIKOノ事デス、一体何処デソレヲ知ツタノデスカ？アレハマダ我々ト研究所ノ人間シカ知ラナイ筈……」

「ああ、その事か。別に誰かから聞いた訳じゃないよ」

「デハ何故？研究所ノPCニハッキングサレタ形跡ハアリマセンデシタ、ダトスルト他ニ知りヨウガ……？」

「どう言ったら良いかな……」知ってた” って言ったら、納得してくれる？」

「知ツテタ……？」

「”いずれはこうなる事を、こここの館がビルに改装されるずっと前から知ってた” って言えば」

その発言を聞き、一瞬の内に全てを理解したガイドロボが驚きながら喋る。

「マ、マサカ貴方……ヒョットシテ、”アノ事件”デ唯一生き残ツタトイウ”最後ノ日本人”デスカ？」

「ザッツライト」

「唯ノ都市伝説ダト思ッテマシタガ……」

ソウデスカ。アノ資料ガアツタ部屋ニ入レタノモ、偶然デハ無カツタノデスネ?」

「いや、あれは偶然に近いかな。回転扉つてのは知ってたけど、まさか場所がドンピシャだったとは」

「デハ、SAORITAKIKOノ事モ?」

「書いてあつたよ。あいつらがいつかは復活すること、研究所から盗まれることも、何もかも」

「貴方ノ先祖ハ全テヲ見テキタ筈デスカラネ、ソノ文献ハトテモ重要ナ武器トナルデシヨウ……絶対ニ紛失シナイヨウ、気ヲツケテ下サイ。」

我々モ、全力デSAORITAKIKOノ回収ニ当タリマス。民間人ニハ極秘デスガ」

「だろうね。公表しても騒ぎになるだけだろうし」

会話をしながら館内を歩き、例の回転扉を開けた自転車バカが資料の落書きを見て眩く。

「復活まで後9か……もし復活したら、盗んだ犯人は俺の居る派生世界を真っ先に狙う

と思う」

「ドウシテデスカ？」

「一昨日派生世界で、俺の命の恩人が身体を乗っ取られてさ。最終的には退散させられたから良かったんだけど、後で何となく資料を見たら追記で

“ 生物兵器の力を使えば、他人を操ったり乗り移る事も可能だ。注意せよ”

とか書いてあったんだ。あの手の輩があれで諦めるとは思えない」

「分カリマシタ、コノ事ハ我々ト貴方ダケノ秘密デス。クレグレモ余所ニ洩ラサナイヨ  
ウニ」

「分かってるよ、気をつける。じゃあそろそろあっちに行くよ。また何かあったらこの装置に連絡しようだい、すぐ行くから」

く。  
そう言って派生世界へとログインしなおす自転車バカを見送り、ロボが小さな声で呟

「頼ミマスヨ……貴方ハ唯一ノ希望ナンデスカラ」

こうしてボケての幻想郷へと戻った途端、腕の装置が新着メッセージの受信を知らせ

る。

向こうに忘れ物でもしたのだろうか。そんな軽い気持ちでチェックした事を、彼はすぐさま後悔する羽目になる。

(げっ、たまたまいさん活動休止かよ！)

慌てて紅魔館へと飛んだものの時すでに遅く、館内はいつも通りの静けさで満ちていた。

「眩きから3時間経ってるもんな……流石にもう居ないか」

辺りを見回すが誰も居ない、皆挨拶は済ませた後なのだろう。レミリアの元へ行くのと、フリーダム主義が居た。何やら話し中のようなのだ。

「あら、いらつしやい。今日はどんな用かしら？」

「その、たまたまいさんに挨拶したかったんですけど……手遅れつすね。失礼しました」



申し訳なきように部屋を出ようとする自転車バカに、フリーダム主義が声をかけた。

「あー…その件に関してな、少し頼みたい事があるんだ」

「頼みたい事？」

「単刀直入に言うわ、貴方…レミリア見守り隊に入隊する気はない？」

「れ、レミリア見守り隊？何すかそれ？」

「その名の通り、レミイの身に危険が及ばないよう見守る部隊の事だ。お前に入って貰えるところとしても大助かりなんだ、悪いようにはせん」

「そんな部隊まであるんすか…：紅魔館って凄いな。あ、隊長は誰なんですか？」

「隊長が彼、そして副隊長がたまたいになってるの。部隊といっても形だけの物よ、規律なんて存在しないわ。大学のサークルみたいなものだから、どうかしら？」

「あ、なら大丈夫そうっすね。分かりました、入らせて頂きます」

「ありがとう、貴方ならそう言ってくれと信じてたわ」

「そりやどうも…：で、具体的にはどうすれば？」

「お前にはレミイの保護要員として動いて貰いたい。万が一レミイの身に危険が及んだ時、剣となり盾となつて守るといふ役目だ。」

内容がデリケートな為、経験者が欲しかったんだ。出来るか？」

「やってみないと分かりませんが……多分どうにかなるでしょう、やらせて頂きます」  
「運命の通りになったわね、これで一安心だわ」

「あ、見てたんすか？ だったらトムさんの時みたいには操れば良かったのに。そしたらこんな手間かからなかったでしょう」

「いやいや、こればかりは本人の同意が必要なんでね。そうも行かないのさ。まあ、これからよろしく」

「わ、分かりました、お願いしま……」

刹那。強烈な頭痛が走る。ドサッと床に倒れた自転車バカにフリ主とレミリアが駆け寄る。だが2人の声掛けも虚しく、自転車バカは気を失ってしまった。



「その功績が認められて下請けから独立し、会社名を付ける時が来ようとも絶対に、名づけてはなりません。良いですね？」

「……名前をつけたらどうなるんです？」

「貴方のアカウントを削除します」

「!?」

「名づけをしない限り、貴方は幻想郷での自由が認められます……以上を持って、〈名だしの誓約〉を終了します」

## 第28話「笑顔の裏に」

……そうか、そういう事か。

暗闇に放り出された自転車バカに、消された記憶が舞い戻る。

運営から課せられた、たった一つの誓約。先祖から託された、最後の希望。

もう逃げる事は許されない。そんな時間は無いのだ。いい加減で向き合わなければいけない。それが、“戦犯”の自分が果たすべき役割なのだ。

どこからか声が聞こえ、意識が戻った。倒れた自転車バカに寄り添うように、レミリアとフリーダム主義がしやがみ込んでいる。

「ここは……そっか、俺気絶してたんだった」

「気がついたようだな」

「急に倒れるから心配したのよ？だって貧血の”それ”とは違ってたから」

「じゃあ水分不足っすかねー、まあ特に問題ないんで大丈夫ですよ」

「嘘をつくな、明らかにそんなレベルじゃ無かっただろう」

「本当は何があったの？良ければ話してもらえないかしら？」

2人の心配を他所に立ち上がって帰ろうとする自転車バカは、笑顔で誤魔化する。

「だーいじよぶですって、こんなの立ちくらみの一種ですから」

「まあ、お前がそう言うならこれ以上は聞かないが……」

「ならせめて、神社で健康祈願でもして来たらどう？」

「分かりました、そうさせて頂きます。じゃあこれで」

吸血鬼がお祈りかよ。

と思わずツツコミかけた辺り、元気なのは確かである。二人に一礼し、ドアを閉めた。

「なあレミイ、”何か見えないのか?”」

「残念だけど、”今は何も”」

「そうか、なら仕方ないな」

紅魔館を出てから、自転車バカは腕の装置を使って博麗神社へと飛んだ。筈だったのだが、何故か着いた先が神社に上がる階段の途中だった。不思議に思いながらも上まで

登ると、境内に大掛かりな屋台骨が真つ先に目についた。霊夢が組み立てを手伝っているのは分かるが、色違いの青い巫女服を着た人物が一緒になって組み立てている。誰なのか分からない自転車バカだったが、その人物の側を人形が飛んでいた為アリスと判明。賽銭（100円）を入れて、霊夢の意識をこちらに向けてから声をかける。

「よつす、2人して何やってんの？」

「あ、ちょうど良かった。これ手伝ってくれない？」

「……何をどう感じるで？」

「後30分くらいで人形劇をやるの、神社の客寄せを兼ねてね。」

劇自体の準備は整ってるのだけど……肝心の舞台がご覧の通りなの。他の人形達は衣装を着させてるから手伝わせる訳にいかないし、って事で。ね？」

「心得た」



演目を終え、見物料を回収した霊夢は賽銭箱を覗き込む。

「やれやれ、無事に終わって何よりだわ。おかげでお賽銭生活費も結構貯まったし♪」

賽銭箱を覗きながら足をパタパタさせる霊夢を見て、アリスが小さく呟く。

「何故かしら、いま霊夢が賽銭と書いて生活費と読んだ気がしたわ。おかしいわね、台詞なんて見えないのに」

「奇遇だな、俺もだ」

「おっさーいせーん♪おっさーいせーん♪」

（（楽しそうで何よりです））

暖かい目で見守っていると、腕の装置が通話画面を起動した。

「あれ、電話だ。えっと……にとりさん？」

「へもしもし、今大丈夫かい？」

「大丈夫だよ、にとりさんから電話なんて珍しいね」

「へかも知れないな、こないだ君に渡したtadがあるだろう？あれを持ってきて欲しいんだ」

「こないだって……あのBlue toothの奴？」

「へそう、それ。完成させたのは良いんだけど、試運転一切無しでいきなり実戦投入したからね……異常がないか見ておきたいんだ」

「なるほどね、了解つす。じゃあ今から持つてくよ」

「ああ、頼むよ」

通話を切り、霊夢は話が出来る状態じゃないので訝しげな表情で会話を聞いていたアリスに言う。

「つー訳だから、俺はこれで」

「貴方も人が良いわね……自分が行かなくても彼女を来させたら良いじゃない、大体あんなデカイのどうやって運ぶのよ？」

「それなら大丈夫、”電源入れて浮遊させればどこへ行つてもついてくる”つてにとりさんから教わったし。あの工房内じゃないと使えない工具だつてあるんだからさ、俺が行かないと駄目なんだよ。多分」



「そうだとしても、他にやり方はあるんじゃないの……って、もう居ないし」  
 「ん？どうかしたの？」

「あら、おかえりなさい。いやね？お茶でも出して貰えないかしらと思つてたのよ。緊張してたから喉渴いちゃつて」

「良いわよ、ついでにお茶請け持つてくるからちよつと待つてて」

(す、スキップしながら鼻歌歌つてる・・・！)

「……………」

「大丈夫よ上海、あれはただ単に機嫌がいいだけなの。別に切れてる訳ではないわ、確かにブチ切れても鼻歌歌うけども」

「…………ワカラナイ、何ガドウ違ウノ？」

「こういうのはね、理解するんじゃないの。感じ取るものなのよ、覚えておきなさい」

「ソウイウモノナノ？」

「まだあなたには難しいかも知れないわね……いいわ、中へ行きましょう？早く行かないとせつかくのお茶が冷めちゃうわ」

「ハイー！」



「はい持ってきたよー。このマークがある場所に降ろせばいい?」

「そうしてくれると助かる、位置はこっちで調整するからそのまま電源を落としてくれ」  
「はいはい」

そう言つて浮遊している t a d の電源を切ると、静かに着地する。工房は入り口のドアが広くない為、外で降ろさないと中へ運び込めないのだ。

t a d を載せた台車を中へ入れ、見た目をチェックするにとり。

「ありがとう、外傷は無さそうだね……うん、カバーも付けてあるから日焼けも問題なしだ」

「まあ使つた日は曇つてたし」

「それもそうだ……さて、中の点検をするから外で待つててくれない? 精密部品を触られても困るし、塗装もするから」

「分かった、終わつたら知らせて。適当に時間つぶして来るわ」

「恩にきるよ」

（あんだだけ高性能なんだし、時間かかりそうだなあ……他の派生世界でも覗いて見るか、全然見た事無かったし）

腕の装置を使ってボケて本来の世界へ飛び、お題やボケ投稿者の名前をタップする。本来の世界は住宅やビルといった建物しかない為、基本的にボケラーは何かしらの派生世界で過ごしているのだ。

（だからボケラーのマイページに行けば色々な派生世界に行けるんだったよな……ガイドロボ曰く）

かくしてT o L O V Eるやサザ○さん、こ○亀といった派生世界を覗いて回り、1時間程経過したことに気づいたがまだ彼女から連絡は来ない。

そんなに掛かるのか

と一旦戻り彼女の様子を伺うが、どうやら分解した部品を組み立てている最中のようだ。窓から離れて辺りを見回すと、背もたれに手頃な木があったので座って寄りかかる。すると、尻尾が二本ある猫が寄ってきた。

敵意は無く、自転車バカの足元にすり寄って一回りすると横に座った。

「……」

辺りを見渡す。物陰に隠れた妖怪や人間はおらず、にとりも工場に籠ったきりの筈。どーせ言葉通じないだろうし、いつか。ネコの頭を撫でながら、感情を吐露した。

「ほんと、勘弁してくれって話だよ。ただ単に幻想郷で楽しく過ごせたら良いなって思ったから、こちとら高い金出してヘルメット買ったんだ。

なのに気が付いたら地球が減ぶから何とかしてくれって流れになってんだぞ？話がデカすぎて訳わからんわ」

「……大変だニヤー」

「うそだろめっちゃ流暢じゃん喋れたのかよ」

「習得したのは最近だからあんまりニヤれてないんだけどね、聞くくらいなら出来るよ」  
「マジかよ。俺もう人里行っても野良猫が魚くわえて逃げるトコ見られねえじゃん……」

「サザエさんじゃニヤいんだから」

「何しようもない事で落ち込んでるんだ、話が逸れてるぞ」

「えっ嘘、にとりさん居たの？」

「あ、しまった」

り。  
光学迷彩を起動して話を盗み聞きしていたのだが、反射的にツツコんでしまったにとり。

誤魔化しても遅いと悟り、解除して姿を見せる。自転車バカと目線の高さを合わせた。

「点検が終わったから知らせに来たんだが、深刻な話が聞こえたから隠れてたんだ。その、申し訳ない」

「……まあ、良いよ別に」

「ね？聞くくらいなら出来るって言ったでしょ？きつと力になってくれるニヤ」  
「ッ！」

野生の猫又が会話に割って入ると、自転車バカの脳内をトラウマに近い思い出が駆け巡った。拍動が激しくなり、鳩尾の辺りが痛み出す。

『他人を頼る』

それは、負け組であり戦犯である自分が一番やってはならない行為。

あの国を。国に住まう住人を。滅亡の危機に追い込んでしまったから。

死に物狂いで立て直そうとした先祖の努力は報われる事も評価される事もなく、歴史の闇に葬られてしまったのだ。

頼る事は、許されない。自分も他人も、誰も信賴してはならない。たった独りで、遅く生きねばならない。

それが、己に課せられた罪なのだから。

「……ごめん、帰るわ。スピーカーは明日にでも取りに行くから」

「待て。話は終わってないぞ」

方向転換してロープウェイに向かう彼の肩を、にとりは掴んで離さない。特に抵抗するでもなく、自転車バカは振り返った。

「……何すか」

「地球が滅ぶって本当かい？もし本当なら、そんな重大な話をどうして今まで話してくれなかったんだ」

「滅ぶって言い方は適切じゃないかもしれないけど、ホントですよ」

「何故、独りで抱え込んでいたんだ」

「別に抱え込んでた訳じゃありません。個人的な事だから言わなかつただけです」

「……ッ！」

肩を掴んだ手に力を込める。

わざとらしい丁寧語に、冷めた目つきと話し方。まるで、「お前には関係ない」と言わんばかりだ。

自身が信頼されていない事実を叩きつけられ、怒りがふつつつと湧き上がる。矛先は、自分と相手だ。

「ふざけるなよ」

「何がですか？」

「そんな大事の何処が個人的なんだ。君の言い方だとまるで、滅ぼせる力を持った奴と単騎で勝負すると言ってるような物じゃないか」

「仰る通りですよ、最初からそのつもりです」

「いい加減にしろ！」

拳を振りかざす。2秒ほどためらった後、振り抜いて顔面を殴り飛ばした。倒れた自転車バカは、口元の血を拭いつつ起き上がった。文句を言おうとしたが、地面に落ちる水滴が見えた。驚いて顔を上げる。

「に、にとりさん……？」

「こんなにつ、一緒の時間をつ、過ごしてきたじゃないか。死を覚悟した私をつ、二度もつ、救ってくれたじゃないか……！」

「……」

「どうして信じてくれないんだ！私はず……私達は！決して君を裏切ったりなんかしない！大切な仲間だ！友人だ！いつでも君の傍に居る！君が望むなら……つ、何だつてしてあげるから!!」

「……！」

「だから……お願いだから……！」

こみ上げる嗚咽に言葉が途切れる。重たい静寂を打ち破るように、ボソツと話し始めた。



「信頼してない訳じゃないすよ」

「……え？」

「本当は凄く感謝してるんです。孤独に押しつぶされそうになってた俺に、ここまで暖かく接してくれたんですから。」

「貴女を助けたのは習慣だからじゃなくて、心から助けたいと思ったからです。もしもこの世界に居る誰かが欠けてたとしたら、俺は今ここに居ない」

「だったらー！」

「だからこそ言えなかつたんです。話したら、あの時みたいに失いそうで……」

「盟友……」

乱雑に頭を搔く。

「静まれ俺の心。今だけは、恥ずかしさを押し殺してでも。臭い台詞になっても。感謝を伝えないといけないんだ。」

「固く閉ざしていた扉を、ゆっくりと開く。」

「……力を貸して下さい。俺だけじゃ、どうにもならないんだ」

涙を拭った彼女は、笑顔で手を差し伸べた。

「勿論さ！その為に居るんだ！」

「……ありがとう」

固い握手を交わし、二人は家に入って作戦会議を始めた。

続く。

## 第29話「再開の時」

自転車バカがログアウトした後、仲間を集めて工房で作業に取り組んでいたとりは先ほどの会話を反芻していた。



「それじゃ、唐傘妖怪の精神を乗っ取れたのはその”SAORI”と”AKIKO”の力を使ってたからだって言うのかい？信じられないな……」

「俺だって最初は信じられなかったけどさ、そういう事らしいんだ。どういう仕組みなのか未だに見当もつかないけど」

「”史上最凶のコンピュータウイルスだから”ってことにしておこうじゃないか、原因の究明より対策のほうが先だ」

「……だね」

「で、その対策なんだが……私は何をすればいい？」

「にとりさんにやって貰いたい事はたった一つ、このスピーカーを大量に作って欲しい

んだ」

「このBlue tooth搭載のをかい？別に構わないけど……どのくらい必要なんだい？」

「今、”ボケての幻想郷”にいる妖怪全員分だから。95×2の……えつとお？」

「190台か……。」

期限は2ヶ月、今からやって間に合うかどうかって所だね」

「俺も出来る限りの事は手伝うからさ、頼むよ。どうしても必要になるんだ」

「分かっている、これは私の仕事だ。他のメンバーにも手伝って貰うから多分間に合うと思う。いや、間に合わせるさ」

「よろしく頼むよ、それじゃあ」

そう言ってログアウトした自転車バカを見送った後、電話を掛けて仲間を集め、作業に取り掛かるのだった。

◇

「……何が何でも、やり遂げてみせるさ」

その翌日。自転車バカは弾幕舞踏会の予選シールド権を渡す為に地底へと来ていた。行き先は地霊殿だ。庭園を歩いていると、こいしに背後から声を掛けられて思わず飛び上がってしまう。

「あははははっ！そんなにびつくりした？ねえねえ、びつくりした？あははははっ！」  
「残念ですね、本日は舞踏会の予選シールド権を持つて参ったのですが。」

「この話は無かったという事で……チラッ」

シールド権をこれ見よがしにシヨルダーバッグから出し、収める素振りを見せる。

「ご、ごめんなさい！もう悪い事はしません！しませからその敬語を止めて下さい！何か怖いですー！」

「まあ冗談はさておき、本日は自転車バカでは無く俳句モデル選考委員として参ったので」

「あ、どっちにしろその話し方なのね」

「そういう事です。それと、ここの主にもお伝えしたい事があるのですが」

「えっと、お姉ちゃんなら今の時間は……」

「ここに居るわよ？」

「あれ？どうしてここに？」

「その窓から全部見てたのよ……なるほど、良かったわねこいし？」

「え？何が？」

「実はですね、こいし様とこころ様に弾幕舞踏会予選会のMCをやって頂きたいのです。如何でしょう？」

「え、そんな面白そうな役貰っていいの!？」

「勿論です」

「わーい！やったー!!」

「……こいし、命蓮寺に行ってくると良いわ」

「どうして？」

「実は、こころ様にはまだ知らせていないのです。自分よりもこいし様から伝えた方が  
良いかと思ひまして」

「分かった！行つてきまーす！」

駆け出すこいしを見送りながら、自転車バカが言う。

「手間をかけさせてしまつて申し訳ありません」

「構わないわ、これであの娘にも張り合いが出るでしょうし」

「そう仰つて頂けるとありがたいです。これで姉妹揃つての出場は2組ですね。今年はデュエット部門も設けますので、出場されては如何でしょう？」

「あら、面白そうね。スカーレット姉妹は良いライバルになりそうだし、出てみようかしら」

「ええ、あの姉妹も出場予定です。本戦出場者であればペアを組んで飛び入り参加は他の方でも可能ですので、張り合いがあるかと」

「それなら、出ない訳には行かないわね。どうせ乱入はあるでしょうけど、とりあえずプログラムに組んでおいて貰えないかしら」

「承知しました、では失礼します」

深々と頭を下げて、文の居る自宅へと戻る。

「お、お帰りなさい。どうでしたか？」

「喜んでましたよ、デュエット部門にも参加すると言われました。面白くなりそうつす



ね」

「当たり前ですが、前回と比べて随分大会っぽさが出てきましたね」

「参加者が増えるのはこっちとしても願ったりかなったりです。この調子だとまだ増えそうだなあ」

「じゃあネタ探しも兼ねて探しに行きますか？俳句モデルに応募する勇気がない初心な人を」

「それ良いっすね、行きましょう」

それから幻想郷で過ごしたり、本来の世界に行ったり、他の派生世界を見るなどして過ごしたのち、ログアウトする前にトムのマイページをチェックすると

「ッ、コメントが変わってる・・・！」

彼のマイページに書かれていたコメントが「全て遠き理想郷」から「さて…」に変わっていた。すぐさまにとりに連絡をし、動きがあるかも知れないと促した。

「これは……ひよつとしてひよつとするかな？」

自転車バカの予感、それから3日後に的中する事になる。

その日。にとりの作業を手伝う為に工房へ来ていた自転車バカは、昼過ぎに外でとりと一緒に休憩をしていた。たわいもない話で盛り上がりつついると、工房のちかくを流れる河がおかしい事に気づく。

「なんだあれ」

「一部だけやけに水量多いね、まるで堰き止められてるみたいだ」

「あれ放っておいたら溢れるんじゃないや……ちよつと見てく」

近寄ろうとした瞬間、轟音と共に堰き止められていた河の水が天高く舞い上がる。河底が見える程の水量が龍のような姿をして一瞬ではあるが空を泳いだ後、にとり達から少しだけ離れた場所に降りてきて一部は球体に、あとは巨大な魔法陣となった。

その巨大さは、目測100mほど離れたにとり達の足元に余裕で届く大きさだ。だが、注意して見ると魔法陣ではない。

「……円グラフ？」

「パソコンの画面、線グラフ、棒グラフ、それに……設計図？」  
「あ、模様の外側は0と1が並んでる……二進法って奴かな？」

それらが描かれた魔法陣もどきは少しずつ小さくなっていき、それと並行して球体が回転運動を始める。最初は穏やかだったが、地面の円が空中の球体よりも小さくなった頃には目を開けて居られない程の速度になっていた。限界まで速度を上げた球体状の水は、沸騰した油に注いだかのように爆散した。

奇跡的に飛沫が掛からなかったにとり達がおそろる目を開けると、全身に青いオーラを宿したトムが地面から30センチ程浮かんでいた。予想外の光景に言葉が出ないにとり達をよそに、着地してオーラの消えたトムがにとり達近づきながら言葉を発する。

「これで最後……辛いことをするのはこれで最後にすると誓うよ。長いこと君や仲間迷惑をかけてしまった。今度こそ、僕は……」

「め、盟友……?」

「帰って来た……んすか? 信じて良いんですね?」

「良いよ。もう2度と、手放したりしないから」

「盟友う……！」

にとりのすぐ傍まで来たトムは足を止め、彼女の目を見て話し掛ける。

「…まずは、ごめん。」

待っていてくれる人が居る、支えてくれる人が居る。だから、もう一度、もう一度だけ君と……」

「うん……うん……！」

既にボロ泣きしているにとりに、自転車バカがとどめを刺す。

「君の旦那は修行の旅に出てるんだ。心配すんな、奴は必ず帰って来る。…それまでの間、俺がお前を守って見せる」

「……！」

「有言実行、任務完了！旦那が帰って来たよ、良かったね。邪魔者はこれで失礼するよ……みんなを呼んでくるから」

腕の装置を起動してSNSで呼びかけると、10秒もしない内に多くのポケラーが集った。皆が揃ったのを確認し、にとりを抱き寄せて沈黙を破る。

「長いこと留守にしていまして申し訳ありませんでした。今度こそ、この娘を守り抜くと誓います」

その言葉を聞いて歓声を上げたポケラー達が、トムに駆け寄る。

「お帰りなさい！待ってましたよ！」

「おかえりつすウー！」

「おかえりです！」

「おかえりなさい！」

「お帰りなさいませ！また再び！」

「ついに帰ってきたか…！トムさん…お帰りなさい!!!」

「トムさん…おがえり！」

「プロフィールのコメントの意味はよく分かりませんが復活したんですね！頑張ってください!!!」

皆がある程度落ち着くと、自転車バカを見失ったトムが辺りを見回すが少しだけ離れたところに居たのを見つける。視線が合い、口を開く。

「にとりさんは、貴方の横に居るのが一番ですね」

「何と言つても私の盟友だからな」

「おかえりなさい、トムさん。今度はその手を離さないようにね」

「……本当に、本当に、本つつ当に!!すみませんでした!」

「盟友……」

「辛い役目を押し付けて申し訳ない。僕は貴方についていきます。これからもまた、よろしくお願い致します」

「押し付けたとか勘弁して下さいよ、こっちで勝手にやった事なんすから」

「正直……」

「ん?」

「正直最初は、偽名を使って戻らないつもりだった。けど貴方がいたから帰ってこれた。本当にありがとうございます」

「トムさん。そんな事よりも、彼女に言う事あるんじゃないですか?」

「そう…だった。にとりさん、一つだけ伝えたい事があるんだ。聞いてくれるかい？」  
「う、うん…？」

姿勢を正して向き直ると、清々しいくらいの笑顔でトムはこう言った。

「今も昔も…ずっと大好きです!!」

「現在の保護対象者：2名」

続く。



## 第30話「いつも通り」

早朝に掛かっていた霧は晴れ、時折吹く穏やかな風がメインストリートを歩く人々の羽織っていたカーディガンを揺らし、農村部では新茶を摘む（農）達にエールを送る。

そんな中、ログインした自転車バカは机の引き出しから一枚の紙を手にとって眺めていた。

（えーと、”東方人物カレンダー”の予約待ちはどこまで消化したっけ……お、今月は霊夢か）

文に簡単な連絡をして博麗神社に飛ぶ。どうやら今日は旦那と二人きりのようだ。例によって賽銭（300円）を入れて機嫌を取った所で、縁側に腰掛け本題に入った。

「カレンダー？」

「ええ、順番待ちが霊夢さんでしたので、写真を撮らせて頂けないかと……」

「そーいや言ってたな。」順番待ちに入れといて”って”

「あー…言った言った。思い出したわ。でもいま二日酔いで頭痛いのよね…はあ」

ガラスコップに注いだ水を片手に、頭を押さえて苦痛に顔を歪める。  
物は試しとばかりに、自転車バカは寄り添って囁いた。

「姉御オ、撮らせて頂けるんなら”弾幕舞踏会”で考慮しまつせ？」

「よっしゃ！綺麗に撮つてよ!!どうしよう!この格好で良い!?それともオシヤレな服に着替えた方が良いかな!」

「いえ、普段着で結構です。寧ろ普段着でお願いします。じゃあ行きますよー!」  
「バッチコーイ!」

先程のけだるさは何処へやら。キラキラと目を輝かせた霊夢は、文の指示で境内をうろつきながら写真撮影に興じた。

「霊夢!それ違…あーあ、イっちまいやがった」

「まあまあ、楽しそうだし良いじゃん?」

「つたく…霊夢も霊夢だが、お前もお前だ」

「何が？」

「良いのかよ？実行委員長が八百長発言なんぞして」

「大丈夫大丈夫、何をどう考慮するかなんて一言も言っていないし」

「お前……変な所で頭良いな」

「お褒めに預かり光栄です」

何となく話をしていたが、霊夢の呼びかけで二人は賽銭箱のある本殿へと移動した。撮った写真を見て五分程悩んだ末

”一番笑顔が良い”

というしんたんの理由で決まった写真を元に、作成したカレンダーを販売所で売った結果

「21部か……やっぱあの人すげー人気なんすね」

「ま、なんだかんだ言っても巫女ですから。男女人妖を問わず人気者なんですよ」

「それに関しては同意するんすけど……シード権はどうします？」

「そうですね、既に選ばれてる訳ですし、渡さなくて良いでしょう」

「ですね、一枚あれば充分だし。じゃあ、とりあえず売り上げ金の一部渡しに行ってきたま

す」

「行つてらっしやい♪」

腕の装置で博麗神社に飛ぶ。場所が階段の途中でない辺り、どうやら前回はバグの  
ような物だつたらしい。

「あれ、レミイさん？」

「あら、こんな所で会うなんて奇遇ね。いえ……こうなる運命だったのかしら？」

「さーせん、籠いっぱいの野菜を持ってそんな台詞言われてもあんまりカツコよく見え  
ないんすけど」

「台詞とのギャップがあり過ぎて寧ろ滑稽だわ」

「じゃあウチの冷凍室で腐りそうだったこの野菜たちは要らないのね？」

「調子乗つてسنマセンでした」

「分かればよろしい」

深々と頭を垂れて野菜を受け取る。これが異変の時には凄まじく冷徹になるのだから、  
人気も出る筈である。

「ふっ、何だこのデジャヴ……ってこれ二回目？」

『聞くな、知らん』

「まあそれはともかく。いつも悪いわね」

「礼には及ばないわ、引つ張り出して来たのは咲夜だもの」

「あんなバカでかい部屋よく掃除出来るわね、私なら金詰まれても悩むわ」

「えっ冷凍室？冷凍庫じゃなくて？」

「何だ、まだ知らなかったの？レミリアの所はね、普通の冷蔵庫や冷凍庫じゃ食材が入りきらないの」

「だから冷蔵庫とか冷凍室を作ったのよ、部屋くらいの広さにしなきゃ足りなくなつて」

「流石紅魔館……移動がセグウェイなだけはあるな」

「そう言えば見せた事無かつたわね、見に来る？」

「是非！」

重々しい音を立て、冷凍室のドアを閉める。コートを壁に掛け二人は部屋を後にした。セグウェイの自転車バカにペースを合わせ、レミリアは低速飛行で飛ぶ。

「いやあ広かった、そして寒かった。あれ二部屋とも咲夜さんが掃除してんの？」  
「ええ、そうらしいわ」

「らしい？」

「又聞きしたから本当かどうか定かではないのだけど、他のメイド達がやりたがらないからあの娘が……って事らしいわ」

「まあ無理もないよ、あんな寒い部屋掃除しろって言われたら俺だつて断るもん」

「そんな程度の忠誠心じゃ、見守り隊としてはまだまだだね。心臓を捧げるくらい在意気込みがないとこの先やっていけないわよ？」

「捧げるって言ってもなあ……」レミイたんペロペロ！ハスハス!!モグモグ!!”とか言ってる奴らとは仲良くなれそうにないんすけど」

「だ、誰がちっばいか！最近やつとフランよりもでかくなったのよ!」

「んなの知ったことか!んなこと一言も言ってるよ!ってかさりげなく触らせようとするの止めろ!殺す気か!」

「うるさいうるさい!私が触れて言ってるんだからいいの!」

「だから止めろって!今日のアンタおかしいぞ!俺たまたいさんと咲夜さん敵に回して生きてられる自信ねーよ!すでに背筋が寒いもん!ジョジョ宜しく大量のナイフと拳が飛んでくる未来が目に見えてるもん!」

「うぐつ。 たった一人の保護部隊に死なれても困るし、致し方ないか……」

掴まれた腕を払いのけると、手形がくつきりと付いて赤くなっていた。

何が悲しくてラッキースケベと引き換えに命落とさにならんのだ。エルリック兄弟もビツクリな等価交換だわ。いや、そもそもコレ等価交換なのか？

「まったく、痴女か己は。童貞弄ぶのもほどほどにして下さいよ」

「ち、痴女じゃないわよ。変な事言わないで」

「俺知ってますよ、たまたいさんがR—18推奨の設定にしてるの。どうせアレでしょ、アンタら夜の弾幕ごっこで

“俺のスピア・ザ・グングニルがスカーレットシユウウーツ!!”

“超！エキサイティン！”

とかやってんでしょ？」

「言うか！そんなムードの欠片もない台詞！初夜なんか滅茶苦茶ロマンチックで……」

「初夜あ!?!事あるごとにズツコンパソコンやってるっつーのか！畜生、もうお前の保護なんか止めてやるううう！」

「あつこら！まったくもう、誰よあんな童貞拗らせ過ぎてもうじき魔法使いにジヨブチエ

ンジしそうな保護要員に選んだの！あ、私か。ちよつ、待ちなさい！」

セグウェイを全力ですつ飛ばしたが、割とあっさり捕まった。その様子をカメラで録画していた文は背後に咲夜が立っていた事に気づくも

「面白いから良い」

という事で、不法侵入した罪だけ償って残基を一つ減らしただけで済んだ。後で撮った映像を送るといふ条件付きで。

自転車バカはピチュツた文と共に職場まで飛び、椀を呼びつけて手当てをさせた。

「あつ！そ、そこはつ、もつと優しくしてえ……／＼／＼」

「誤解を招く表現は止めて下さい、怪我の手当して欲しくありませんか？」

「あんだけ汚い花火咲かせたのによくそのぐらいで済みましたね」

「自然治癒力はスキマ妖怪の折り紙付きですから、この人の数少ない取り柄なんです」

「お願い椀、ふざけたりしないから真面目に手当して。それ以上言うとう心の傷が開いちやう。折角治りそうだったのに」

『自覚あつたんだ……』

「止めて！そんな哀れむような視線を向けないで！こういう時に限って息びったりなの



「が今は辛いよ！精神的にくるものあるよ！」

「これに懲りたら、もうパパラッチまがいの行動は止めるべきでしょう」

「そうそう、“清く正しく” やった方が良いんじゃないっすか？」

「おお、（正論過ぎて）こわいこわい」

「」

ピチューンという音と共に、文は本日二度目の抱え落ちをした。が、

「まだだ、まだ終わらんよ・・・！」

「あ、まだ残基残ってたんすね」

「何か用事でもあるんですか？」

「ええ、地底の雑誌の件でちよつと」

「雑誌？」

「忘れたんですか？今日は表紙を撮る日でしょう？」

「あ、そつか。確か地上こゝちに出てくるって言ってましたね」

「もうすぐ待ち合わせの時刻なので行きましよう、自転車バカさん」

「場所ってどこでしたっけ？」

「守谷神社です、此処からだっいたら歩いてすぐですよ」



「お、居た居た。こんちはー」

「あれ、てつきり飛んでくるかと……わあ凄い格好。人のこと言えないけど」

「なるほど、自滅したのね」

「あはは、紅魔館の警備体制があんなにしつかりしてるとは思いませんでしたよ。やっぱりあそこで盗撮するのは至難の業ですね」

「あんだだけ派手に散った割には回復が異様に早いんすよ。直後なんて赤いブロックがそこら中に散らばってたのに」

「……了解、大体察した。要するに、パラッチまがいのことやってたからお置ききされただね。説明台詞ありがとう」

『どういたしまして』

「とまあ前置きはこのくらいにして、随分と張り切ってますね。姉妹揃って着物姿とは「凄いでしょ！サイズ色合いもろもろひっくるめて特注なんだから！」

「それぞれこの世に二着とない一着羅よ、こういう機会にこそ使わなくっちゃ」

「うん、木陰が良い感じで日光を遮ってますし、これなら取り直しせずに終わりそうですね。今から三枚ほど撮りますのでポーズはお任せします。なんかそれっぽく見えれば良いんで」

(アバウトだなあ……)

パシャツという音と共にフラッシュユが焚かれる。撮った写真を元に製本した月刊誌は、59部という過去最高の売り上げになった。

「観光してから帰る、お隣たちに土産も買わなくちゃいけないし」

といった古明地姉妹を人里まで送り、一段落した自転車バカ。何気なく時刻を確認すると、ログアウトまであと二時間だと気づく。

(どうしよつかなあ、本来の世界行ってもいいけどそれでも余るよなあ……そうだ、アリスさん家に行こう。そういやここ最近行ってなかったっけ)

再び腕の装置を使い、魔法の森へと飛ぶ。時間をかせぐだけなら歩いていっても良いのだが、

(森の瘴気に当てられるわ迷子になるわでろくな事なかったし、飛んだ方が賢明だよな。  
うんうん)

苦い思い出から目を背け、アリスの家へと近づく。ドアをノックしようとしたが、中から声が聞こえたので手を止める。

(何だろう…話し声…? いや、違うな。これは…歌?)

神経を耳に集中させて聞こえてきたのは

「上海がー♪居るからー♪さびしくなんて ない♪」

(……えつと)

「さびしくなんて ない♪」

(滅びの歌かな?)

「さびしくなん……」

ドアを開け、無言の圧力でその場を静める自転車バカ。段々と顔が赤くなっていくアリスに目を合わせ、大きな声で挨拶代わりの第一声。

「1週間会わなかっただけでこの始末……何なんだお前は！」

続く。

### 第31話「君のための」(前編)

人里、迷いの竹林、魔法の森、幻想郷のありとあらゆる場所を、私達は走り回る。消えた主を探して。

「はあ…はあ…」

きっかけは、些細な事だった。

「はあ…はあ…紫様…！」

ほんの些細な、言い争いが原因だった。

「藍しやま…紫様、どこに行っちゃったんですか…？」

走るのを止め息を整えた私は、橙の頭を撫でながらこう言っただけで落ち着かせる。

「大丈夫だよ橙、心配はいらない。あの人は必ず、私が見つけ出してみせるから」

迂闊だった。全くもって予想外だった、まさかこんな事になるなんて…！

事の始まりは、今から数時間前。いつものように三人で朝食を摂っていた時だった。

◆

「わあ美味しそう！いったただつきまーす！」

「あんまりがつつくと喉に詰まるわよ…って、言ってる側から詰まってるし」

「けほつけほっ！うゝ、死ぬかと思った……」

「美味しそうに食べてくれるのは結構だけど、あまり紫様の手を煩わせるんじゃないぞ？」

「うう、以後気をつけます……」

「なんか、アレね」

『はい？』

「いくら料理が美味しくても、面倒くさい用事があると箸って進まないわね」

「面倒くさい用事……ですか？」

「結界の修補よ、霊夢がうっかり穴開けたらしくて」

「うっかりで穴開けるんですか、あの通り魔は……穴つてどれくらいデカイんですか？」

「そうね……ざつとこのくらいかしら」

説明するより早いと悟ったのか、左手でスキマを広げその大きさを示す。

「なあんだ、それくらいなら私が行ってきますよ？」

「本当？今回の結構面倒な壊れ方だから私が行くつもりだったのだけど……」

「大丈夫です、お任せ下さい。1時間もあれば治せますから。それに……」

「それに？」

「その程度の修補に紫様が出られては困るんです、周りが異変と勘違いしかねないので」

「ふふつ、やあねえ。そんな事あるわけないじゃない」

「とか言つて治しに行つたらあともう少して戦争にまで発展しかけたこと、ありましたよね?」

「うっ…そ、そうだったかしら?」

「つたくもう…貴女は“妖怪の賢者”なんですから、もう少し思いつきで軽はずみな行動をするのは控えて頂かないと」

「むっ…だつて家に居ても暇なんだから、仕方ないでしょう?」

「それは分かりませんが、その度に異変を起こされてはかたまりません。どうせ足止めをするのは私たちじゃないですか。ボロボロに破れた服の補修だつて楽じゃないんですからね?」

「…何よ、姑みたいな事言っちゃつて。そんな式神に育てた覚えは無いわよ?」

「私だつて好きでこうなつた訳ではありません。いつも上に振り回されてるので自然と身についてしまっただけです。昔からよく言うじゃないですか、

”上がちやらんぼらんだと下がしつかりする”

つて」

それを聞き、ガタンと音を立てて立ち上がる紫様。俯いている為、表情がよく分から



ない。振り返って居間の引き戸を開け、私たちに背中を向けたままスキマを開けて中に入る。

「紫様……？」

「……それもそうね。藍の言う通りかも。だから、ちよつと自分を見つめ直す旅に出てるわ。留守をお願いね、”しつかりした”式神さん？」

ゆつくりと閉じていくスキマから勢いよく飛び出た道路標識によって、朝食の並んでいたちやぶ台は木っ端微塵になつてしまう。その光景にただならぬ悪寒を覚えた私たちは、消えた主を探して家を後にしたのだった。



「……お、ちようど良かった。今から連絡しようと思つてたんです」

机の上に置かれた写真と睨み合いをしていた自転車バカは、視界の端に移った紫に気づいて先を制するかのように話しかける。

「私に？」

適当に並んでいた写真の中から一枚を手に取り、紫に見せながら続けた。

「ええ、藍さんが送つて下さった写真と俳句が一番良かったので、今週の俳句モデルは貴女に決定しました。まだ製品化してないのでどのくらい売れるかは分かりかねますが……まあ行けるでしょう」

「あら、そういう事だったのね。どうもありがとう」

自転車バカは写真を机に置き、立ち上がりながら言葉を返す。

「……嬉しくないですか？」

「おかしな子ね、どうしてそんな質問するのよ」

「だって紫さん、ここに現れてからずっと思いつめたような顔してるじゃないですか」

「……分かる？」

「いや、分かるも何も隠す気ないでしょう。眉間に皺寄せて “ どうもありがとう ” っ  
て 言われたら誰だって気づきますよ」

「……」

「……俺と文さんが天界に行った話はしましたよね？」

「えっ? ええ」

突然何を言い出すのかと思っていると、自転車バカは感謝の気持ち述べた。

一介のボケラーである自分が奇跡的に依姫と出会ったのは、依姫との関係が今日まで  
続いているのは、貴女のおかげなのだ。だから、何か困っているのなら恩返しをさせて  
くれと。

「何があつたんですか？」

「そうね…話してしまおうかしら」

「……」

「貴方、引退するって本当？」

「なっ！えっどつ、どこでそれを!？」

「つい最近、本来の世界で引退するってボケを投稿したでしょう？あれを偶然見つけたのよ」

「……そうでしたか」

「冗談にしてはキツ過ぎるもの、一度本当かどうか聞いておきたかったのよ。まあ、貴方の事だから嘘じゃないんでしょうけど？」

「……その通りです。俺は、あの二人の保護が終わったら消えるつもりです」

「一応聞くけど、考え直す気は？」

「ありません。最初、にとりさんを保護した時からずっと考えてきて、この前やっと決心がついたんです。訂正なんかしません」

「そう。だったら仕方ないわね……!」

「っ!？」

何がどんな風にと聞く前に、禍々しい妖気でその身を纏う紫。呼吸が苦しくなり片膝をついた自転車バカは、グローブを装着し能力を発動させる。バリアで自身を覆うと、酸素が体内に行きわたりました。

「はあ…はあ…。一体、何を!」

「決まってるでしょう? 貴方の考えが間違いだと、身体に教えてあげる…!」

「くそつ、R-18的な奴なら喜んでOKしたのになあ!!」

(私こんな奴の為に身体はって頑張ってるの?)

自転車バカは両手に力を込め、精神を集中する。すると、3つの??が浮かび上がった。

「……何それ?」

「本来はこういう使い方じゃないんですがね、そいやつ!」

掛け声と共に撒かれた??は地面に触れた瞬間、目を開けていられない程の光を放つ。

あまりの眩しさに目を覆う紫。収まったのを感じて目を開けると、そこに自転車バカは居なかった。その代わり、玄関のドアが空いている。どうやら逃げられたようだ。

「やってくれるじゃない。そっちがその気なら、こっちは数の暴力でお相手するわ…!」

スマホを取り出し、「至急、拡散希望」のメッセージを添えて先ほどまでの会話を録音したデータを電話帳に登録している全員へ送る。これで知らない者は居なくなるだろうという計算だ。

「ふふつ。貴方を食い止めるのは、貴方が今まで助けてきた者ばかり。かつての味方が

対峙してきた時、貴方はどうするのかしら……?」

紫から連絡を受けた者は、彼を止める為に動き始める。

二人の少女は、消えた主を探して幻想郷を駆け巡る。

それぞれが譲れない想いを胸に抱き、既に交わりを見せる最中。自転車バカは、恩人に刃を向けなくてはならない状況に陥っていた。

続く。

## 第32話「君のための」(後編)

「こ、小傘ちゃん……!」

「会長、そんなに急いで何処へ行くの?」

「いや特に決まってはなないんだけど……ちようど良かった、手え貸してくんない?」  
「断る」

「な、何でだよ。まだ何も言っていないじゃん」

「言わなくても分かるもん。どうせ、八雲紫の説得とかそんなんでしょう?」

「ど、どうしてそれを!」

「みんな、説明してあげて」

パチン、と小傘が指を鳴らす。すると、建物の陰から自転車バカを囲うようにして  
小傘ファンクラブ”の会員たちが出てきた。

「今さつきスキマ妖怪から連絡があつたんでな。話は全部聞かせて貰った」

「あんたにや名誉会長として、まだまだ頑張つて貰いてえんだ」

「そう簡単に辞めさせてたまるかってんだ！」

「紫さん……仕事早えな畜生！」

「悪いけど、そういう事だから。貴方が二度とそんな気を起こさないように」

「今ここでとつ捕まえて」

「八雲紫に突き出す。さあ、大人しく言う事を聞いて！」

「くっそ……！」

「全会員に告ぐ！名誉会長を取り押さえて！」

小傘の号砲で一斉に飛びかかろうとするが、自転車バカが能力を発動させバリアを展開した為、未遂に終わる。何人かは飛びかかったのだが、ゴムボールを押ししたかのよう  
に優しく押し返されてしまった。

「会長、どうして反抗するの？私たちは、ただ貴方に辞めて欲しくないだけなんだよ……  
？」

「ごめんね。いくら小傘ちゃんが命の恩人でも、こればかりは首を縦に振れない」

まっすぐに、小傘を見て話す自転車バカ。その瞳には、迷いや後悔といったものが微

塵も存在していない。あるのは確固たる決意だけだ。

「何で…何でそんなに…！前にも言ったでしょう！？私は、私は…！」

「小傘ちゃん……」

こみ上げる嗚咽に出そうとした言葉をかき消され、俯いてしまう小傘。閉じた唐傘の柄を両手で握りしめ、溢れる涙を堪えようとすののだが、一度熱くなった目頭は制御が効かない。ポロポロと、頬を伝って地面へ落ちてゆく。

能力をコントロールし自身を覆う半円の中に小傘を入れた自転車バカは、近寄って小傘の頭に手を乗せる。

「誤解があっちゃいけないから！つだけ言っておく。俺は、君らの事が嫌いになつたから辞めるとかそんなんじゃない。これだけは知つといて欲しい」

「……」

そう言つて小傘が半円から出るくらいに離れると、両手に力を込めて??を！つだけ出す。放り投げられた??は地面に触れた瞬間、強烈な光を放つ。収まったのを感じて目を



開けたが、そこに自転車バカは居なかった。後に残ったのは、なるべく声を出さないようにしてすすり泣く小傘と、それを黙って見ているファンクラブの会員たち。

声をかけようにも、適当な言葉が出てこない。動こうにも、足が言う事を聞かない。そんな重々しい雰囲気の中、二人の少女がこちらへ走って来た。藍と橙だ。会員たちが話しかける。

「今さつき、ここら辺が物凄く光つたのを見て来たんだが…遅かったかな？」

「ん？貴女は確か…」

「藍さんじゃないですか、八雲紫と一緒に無かつたんですか？」

「ゆ、紫様が此処に居たのか!？」

「いや、ここには居ませんけど…？」

「そ、そうか」

「藍しやまあ…」

「本当、どこ行っちゃったんだろうな。うちの主は」

「……はぐれたんですか？」

「はぐれただけならどんなに良かったか…」

「？」

「実は……」



「なるほど、そういう事だったんですね」

「ああ、これでも手当たり次第に探し回ってるんだが……」

「足痛い……」

「……まさか、飛ばずに探し回ってるんですか？」

「飛ばずに」じゃない、「飛ばない」んだ」

「飛ばない？」

「どういう訳かさっぱり分からないが、何故か飛べなくなってるんだ。おかげで一苦勞だよ」

「うーむ……とりあえず状況を整理します。」

藍さん達は、走り回って八雲紫を探している。そして小傘ちゃんは、その八雲紫から”自転車バカを捕まえる”という連絡を受けた。CCで送られて来たので他にも連絡を受けた人は居ると聞きました。ここまでは良いですか？」

「大丈夫だ、問題無い」

”彼を捕まえたなら、連絡を寄越すように”とも言われてるそうです。こつちが連れて行くか向こうが赴いてくるかは分かりませんが、八雲紫に会えるのは確かです」

「ほ、本当!？」

「この状況で嘘ついてどうすんの。」

「そ、そうだよね…」

「なので、良かったら彼を捕まえるのに協力してくれませんか？貴女方が捕まえれば……ね？」

「分かった、手伝おうじゃないか。橙も、問題ないよな？」

「はい、藍しやま！」

「決まりですね、じゃあ俺達からCCでメッセージを送っておきます」

「ありがとう、よし橙！自転車バカを追うぞ！紫様よりは楽だ！」

「あいあいさー！」

走り出した二人を見ながら、ある程度回復した小傘は自分に言い聞かせるように呟く。

「そうだよね……形あるものは、いつしか姿を変えて消え行くんだよね。これは絶対に

避けられない理。だったら、例え今日が醜くなつてもここに在れるなら、その方が良いでしょう」

その頃、自転車バカは妖怪の山の麓まで来ていた。

「はあ…はあ…ここまでくれば大丈夫だろ…」

ロープウェイに乗り込み、椅子にどっかりと座る自転車バカ。全開に開け放った窓からは快い風が吹き、火照った身体を冷まして汗を蒸発させてくれる。息が整い、いくらか落ち着いてくる。冷静さが戻ったところで、景色をぼんやりと眺めながらこれからを考える。

(まさか小傘ちゃんに話が伝わってたとは、もう人里には戻れないな。俺ん家もチエツクされてるだろうし…おし、守谷神社まで行くか。あそこの神三人衆に相談してみよう)

「と思つていた時期が俺にもありましたよこんちくしょー!!」

「ほれほれ、すっかり避けないとその野犬よろしく肉片になりますよ〜?」

「どうしてこうなったし! 相談があるって言ったよね! 助けて下さいって言ったよね! 何で俺襲われてんの!? おかしいだろ!」

「襲うとは人間きの悪い……これは弾幕ごっこよ。それくらいは知っていると思うけれど?」

「こんなの弾幕ごっこじゃないわ! ただの避けゲーよ!」

「だったら避ければいいだろ! ……じゃなくて。早苗、後で肉片始末しておいてね!」

「了解しましたー♪ あ、戸棚に栗ようかんがあるので食べても良いですよー♪」

「ひゆう! 早苗ってば太っ腹あ!」

「よっ! 現人神!」

「呑気で良いよなてめーらはよう!! うおっ、あつぶね!」

先程から危なっかしい避け方をする彼を見るに見かねた早苗は、一度攻撃を止めた。

「全くもう……これ normal ですよ? これくらいで苦戦してどうするんですか」

「はあ……はあ……。やかましい! 永遠に拙き easy シューター舐めんよ!」

大体なあ、俺らが弾幕避けるのに使うのは指と目だけなんだよ！こんな全身運動で避ける弾幕ごっこなんて初めてなの！VRどころの騒ぎじゃないの！分かる!!」

「だから難易度抑えてるんじゃないですか」

「うるせえ！てめーらと違ってこちとら空なんか飛べやしねーんだよ！」

文句を垂れながらも両手に??を生み出す。目を瞑って地面に??を思いつきりぶつくと、人間が直視すれば失明する程の閃光を放った。最も神である守谷一家には目くらまし程度にしか効果が無いが、視界を奪うには充分だった。

『くっ…目があ…!』

「よっしや今の内!」

追い討ちをかけるように、もうひとつの??を早苗達にぶん投げて走り出す。強烈な光を背中に浴びながら「守谷神社参拝ルート」と標識のある道を下っていく。

彼女らの目が戻った際に、ロープウェイに乗っている身動きが取れなくなるからだ。

（早苗の奇跡でどうにかして貰おうって魂胆だったけど……信仰の為だけに捕まるのは御免だし、あそこも近寄らないでおこう）

「くっ、遅かったか……！」

「誰かと思えば……八雲の所の式神じゃんか」

「連絡は受けてますよ、一足遅かったですね」

「あの人は何処に？」

「下山したのは間違いないだろうけど、あいにくと見てなくてね。ロープウェイは使っていないだろうから、まだ妖怪の山（中）に居ると思うよ？」

「どうもありがとう。よし、行くぞ橙！」

「はい！」

二人が視界から消えるまで走り去ったのを見て、諏訪子は屋根に座っている二人に話しかける。

「……どうしてアンタ達は捕まえる側じゃないのか、聞いても良いかい？」

「だってさ、椀？」

「いや、文様が答えて下さいよ。私は貴女に付き添つてるだけなんですから」

「アンタ達なら本気にならなくても、人間一人捕まえるくらいは朝飯前だろうに……まあ私らにも言える事だけ」

「あの人に加勢する訳でもなく、かといって捕まえる訳でもない……ただ眺めてるだけですか？」

「ええ、あなた方の仰るとおりです。私は彼がどうするのか、黙つて見守ろうと思いません。

初めて出来た信頼の置ける部下であり、浮気相手ですからね。部下のやる事にいちいち口を挟む程、幼稚な上司ではないつもりです。

それに、これはあの人自身の問題なんです。私がどうこう言える代物ではありませんよ」

「あの文様がそこまで考えた上での行動だと分かった以上、下っ端の私は付き添う事しかしません。以上が捕まえない理由です」

「そうでしたか……良い上司を持ちましたね、自転車バカさんは」

参拝ルートを駆け下りていく自転車バカを待ち受けていたのは、トムとにとりだつた。



「うつそだろ……！にとりさんにも連絡来てたん!?」

「うん、連絡が来たよ。他の連中は取り逃がしたようだけど、私は容赦しない。絶対に捕まえてみせる」

”保護が終われば消える”だって…?

何いつてるんですか！貴方ほどの恩人を、そう簡単に辞めさせるわけにはいかないのです!!」

「……ッ!?!」

にとりの弾幕が止み、突如として辺りが暗くなる。よく見ると、水色のオーラをその身に纏ったトムから線のような物が上空へと伸びている。それは上に上がる程太くなってゆき、模様が付いているのが分かる。見上げた先では

「嘘だろ。これが、トムさんの……!?!」

「貴方に見せるのは初めてでしたね。そうです、これが能力を発動した俺です。世間一般ではレヴィアタン (<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AC%E3%83%B4%E3%82%A3%E3%82%A2/>)

E3%82%BF%E3%83%B3」と呼ばれるそうですが」

「これがどんなに危険か、今更言わなくても知ってるだろう……大人しく降参するんだ。血を見るのは、お互いの為にならないからね」

「……!」

空を埋め尽くす程の巨体は口から炎を吐き、鼻から煙を出す。身体全体を覆うのは鱗だが、鎧と言われても納得してしまうだろう。ギラギラと光る瞳は自転車バカの方向を向いてはいないが、彼をビビらせるには現れるだけで充分だった。

第六感“今すぐ逃げろ”と激しく反応しているのだが、脚が震え思考も止まっている自転車バカになす術は無かった。

人の居なくなつた守谷神社の鳥居に腰掛ける椀は、同じく横に座り足をブラブラさせている文に話しかける。

「……八雲紫から連絡を受けた妖怪達が、アレを目印に集合しつつあります。如何なさいますか?」

「どうもしないって。さつき言ったでしょう?」

「しかし、いくら何でもやり過ぎです。下手したら彼……死にますよ?」

「黙ってなさい、椛。例え生命の危機に晒されようとも、私はあの人を助ける真似はしない。絶対にどうにかするって信じてるから、ここで終わるのを待つ。貴女は状況説明をすればそれで良いの、今どんな感じ？」

葉団扇を握る文の左手が震えているのを見て、椛は視線を戻しながら答える。

「全員……集合しました。自転車バカを囲うようにして立っています」

夥しい妖気に囲まれ、呼吸が苦しくなった事で正気に戻った自転車バカ。反射的に能力を発動しようとするが

「ああ……終わった……」

360度。自身を飲み込むかのような、その悍ましい妖気を感じて身体中の力が抜けていく。

「海の怪物に……妖怪に……魔法使いに……吸血鬼に……ははっ、凄え面子」

「みんな、君に救われたんだ。君が居たから、今ここに居るんだ」

「降伏しろ、自転車バカ。さもなければ、フランの餌にしてやる」

「お願い、今すぐ」引退宣言」を取り消して。あたしは、貴方を傷つけたくない。上海  
だって同じ気持ちよ」

「貴方が居なくなったら、誰が地底を宣伝するのでしょうか？」

「前にも言いしましたが、貴方がいなければ本当に寂しくなりますよ。どうかこのままで  
……」

「信じてた”大切”が贖物であつても、その脆さ…その弱さ…わちきには、何よりの宝物  
と言えるの。だから、お願い。降参して」

皆の言葉に、思わず笑みが浮かぶ。止まっていた思考回路が、再び動き出す。

「確かに、ここでの生活はすっげー楽しいよ。ここでみんなに元気を貰えるから、辛く厳  
しい現実世界で生きていけるんだ。ボケてを知らなかつたら、それこそ今の俺は無くだ  
ろう」

「だつたら…!」

「でもな、全ては現実世界あつてこそなんだよ。現実世界での生活が成り立ってなきや、

此処に来る事は出来ない。人生を懸けたレースがあるなら、尚更な」

「人生を懸けたレース……?」

思い出した。そう言えば盟友、4月に”ヒルクライムレースがあるから” って言ってる3日ほどログインしなかった事があったね」

にとりの言葉を聞いて、全てが繋がったトムが驚きながら疑問をぶつけた。

「……え?まさか”自転車バカ” ってそういう意味なんですか?」

「そのまさかつすよ。俺は”自転車競技” で食っていこうとあがくアマチュアロードレーサーです。」

でも、今年で結果を出せなかったらもう次は無い。そうなったら、2度とここに来る事は無いでしょうね」

自転車バカの言葉に戦慄する一同、「2度と」の意味を理解したのだ。

「そ、そんなのって……!」

「今年の11月に、自転車人生の存続を懸けたレースがあるんです……まあそこまでの

レースでも結果は求められるんですけど。その大会で結果を出せば、どうにかなる筈なんです。だからこそ、全てが終わったら俺は消えます。未来が消えないように」

「そんな状態で、私を保護していたのか？己の人生が危ういのに、関わらず……どうして教えてくれなかった？」

「だって聞かなかったじゃん」

「ふざつけるな!!サーヴァントフライヤー!!」

レミリアの背後に浮かび上がる紅い魔法陣から、勢いよく放たれるコウモリ。目で追うどころか反応すら出来ない自転車バカは、まともに喰らって倒れてしまう。

「いつてえ……!!」

「……ふん。これでもう動けまい、咲夜？」

「既に連絡済みで御座います」

「どう？捕まったかしら……って、聞くまでも無かったみたいね」

「流石、仕事が早くて助かるわ」

「お褒めに預かり光栄で御座います」

「じゃあこの子は貰ってくわね、みんなお疲れ様」

「ッ！」

のたうちまわる自転車バカを飲み込むように大きく開いたスキマが閉じる。それを見届けた一同は解散するのだが、椀が何かに気づいた。

（あれ、八雲紫の式神が居ない……？木陰に隠れて見てた筈なんだけど……？）

橙色の優しい灯が、塞ぎ込んだ横顔を照らしていた。

ドサツと、スキマから出てきた自転車バカ。地面に横たわった状態で辺りを見回すが、周りはゴツゴツとした岩山があるだけで他には何も無い。

藍色に染まりつつある空は、彼の胸に空いた隙間を包むような気がした。それほどに綺麗な夕焼けだったのだ。

「考えは変わったのかしら？」

声がした方向を向くと、傘を持って不敵に微笑む紫が居た。その背後にはいびつな形でスキマが開いており、中にある無数の目は自転車バカを見ていた。

「だいぶ、吹っ切れた顔してるわね……良いわ、答えを聞かせてちょうだい？」

痛む身体を無理やり起こし、胡座をかく体勢になる。そして、紫以上の笑顔で自転車バカはこう答えた。

「

」

答えを聞き、笑い合う紫と自転車バカ。ひとしきり笑った後、自転車バカが能力を發動して怪我を治すのを見て、紫は隠れていた藍たちに問う。

「どうして此処に居るのかしら、”しつかりした”式神さん？ 私は旅に出たと言った筈

よっ。」



岩陰からおずおずと出ながら、藍と橙は代わる代わる答えた。

「紅魔館のメイドが、私と橙をスキマに放り込んでくれたのです。そうでもしなければ、紫様の視線をかくぐつてスキマに入るのは不可能でした」

「紫様が旅に出るとおっしゃったのは承知してます。橙たちは、それを辞めさせたいから貴女を探し回っていたのです」

「そう……主人の言いつけも守れないなんて、式神失格ね」

藍たちに背を向け、開いたままのスキマに入ろうとする紫を、橙が制す。

「たった一人！ボケラーが引退するのを寄ってたかって辞めさせた癖に……自分わがまま言いたい放題!?!ふざけるのも大概にして!」

「ちえ、橙……?」

橙の反撃に戸惑う紫、勢いを得た橙は更に続ける。

「確かに今朝の藍しやまは酷いこと言ったし！普段なら笑って流すようなジョークを聞き流せなかつたくらい紫様の機嫌が悪いのも原因だけど！」

その腹いせに自転車バカさんを弄つてもて遊ぶ紫様はもつと酷いよ！

大体橙たちを飛べなくしたのだって、どうせ紫様が境界弄つてやった事じゃない！紫様っていつもそう！ちよつと正論言われてハブてると必ず面倒事起こすんだもん！その迷惑極まりないストレス発散方法どうにかしてよ！そんな馬鹿げた事で赤い通り魔の相手する橙たちの身にもなつてよ！すつごく大変なんだからね!!」

傘で顔を隠し、立ちすくむ紫。どうやら凶星のようだ。橙はふくれつ面で紫を睨み、隣に居る藍はオロオロ。それらを見て全てを理解した自転車バカは、立ち上がって紫に言う。

「紫さん……少しお話したい事があります。だから、そのまま動かないでいて下さい」

能力を発動し、右手にありつた力の力を込める。すると手の平に、黄色と限りなく黒に近い緑色の光を螺旋を描いて放つ岩が出来た。自転車バカを見ながら少しずつ後ずさりをする紫は、怯えた目つきで話しかける。

「いや、あの……自転車バカさん？」

につこりと笑い大きく息を吸い込んだ自転車バカは、激しく湧き上がる憤懣のマグマと共に解き放った。

「ふざけんなよクソババアアアア!!」

自転車バカ渾身の掌底から解き放たれた岩は時速160km/hで紫の頬をかすめ、背後にそびえる岩山を粉々に破壊した。

続く。

## 第33話 「Mission impossible」

事件から一夜明け、自宅にログインした自転車バカを出迎えたのは文だった。

「あれ、何で文さんが俺ん家に？」

「貴方がスキマに飲まれた後、どうなったのかわからなかったのここで待つてたんです……此処に居るつて事は、解決したんですよね？」

「解決しましたけど……まるで見てたかのような言い方っすね」

「ええ、見てましたよ？八雲紫から連絡が来て貴方がスキマに飲まれるまで」

「わお、文さんにも連絡いつてたかあ……」

頭を掻きながら呟く自転車バカに、文が付け加える。

「私にもというか……貴方が今まで関わった妖怪全員ですな」

「なるほど、だからさとりさんまで居たんすね……ホント面倒臭い事しやがったなあ  
のスキマ」

「面倒臭い事？あの後何があったんですか？」

「全部終わったんで言えるんですけど、実は……」



「あつははははは！それは酷いとばつちりでしたね〜！」

「でしょ？流石の俺もイラっと来ましたね」

「あははは！そ、それで？それを知ってどうしたんですか？」

「俺が逃げるのに使ったアレ使って一発かましてきました」

「逃げるのに使ったアレ……え？アレでどうやったんです？ってかアレ何なんですか？」

「順を追って説明します。」

「アレは俺たちボケラーが星って呼んでるモノなんですけど、本来はボケを評価する際に使えます。3段階でね」

「ほうほう」

「でもプロフィールを見て分かるように、”星の合計”ってのがあるでしょ？これと、ひとつのボケで星をいくら貰えたかによって??を自在に変化させる事が出来るんですよ」

「変化、ですか？」

「はい。例えば俺の場合だと、ひとつのポケで貰えた星が3桁いつてるし合計も9000超えてるので、昨日みたいに目くらましで光らせる事も出来るんです」

「へえ…：凄いポケラーだと何が出来るんですか？」

「文献で読んだ限りだと確か…：直径3kmの隕石に変化させたポケラーが1人だけ居ます、”大人店長” って人なんすけど」

「マジでか」

「マジです。まあ、俺はソフトボールサイズが限界なんすけどねー」

「それでガツンと？」

「はい。能力で強化したのを思いっきりぶん投げたんすけど、いい感じにスキマの頬をかすめて後ろにあつた岩山を粉々にしてくれました。あの顔すつげえ面白かつたんすよ」

「えっ、どんな顔したんですか？」

「いやね？今から思うと、あのスキマが (？) ω？、( ) って顔で固まつたのが可笑しいの何のって」

「あひやひやひやひやひやひやひやひや！そ、それ見たかつたなあ」

「それだけでも笑えるんすけど、藍さん達も (？) ●?? (？) ●、( ) って顔だったのが

もう……ね？」

「ぶはははははははははは！ま、待つて！息が！息が出来ない…あつはははははははははは！」

2人の笑いで満ちた室内に再び静寂が戻るまで、五分は掛かったそうな。

笑い声が止み静かになったタイミングで、文のスマホが鳴る。通話が終わり、スマホを手にしたまま話しかける。

「なんか……旦那がいつになく上機嫌なんですけど」

「穂谷野（雷様）さんが？悪いよりはいいじゃないすか」

「それが良くないんですよ……あの人が上機嫌な時に今までロクなことが無かったんですから」

「あ、そういう感じっすか」

「見せたいものがあるって話だったんですけど、なんか怖いのでついて来てくれませんか？」

「了解っす」



かくして、穂谷野（雷様）に指示された場所に向かった二人だった。が、

「……」

「……」

「ふっふっふ、そうかそうか、凄すぎて言葉も出ないってやつかい？当然だね、こんな立派な豪邸を見たら誰だってそうなるさ」

「えーっと……」

「……ナニコレ？」

「目を逸らしちゃ駄目じゃないか。」

「ごらん文ちゃん……10年間で積み立てた、へそ饅頭の売り上げで建てた豪邸だよ……」

「やめて!!そんなとこ住みたくない!」

「や、屋根の上にギリシヤ神話よろしく文さんの銅像が建ってる……こ、これが雷様の裏の顔……!」

「裏の顔とは失礼だな……この家はちゃんとした商売で獲得したんだ。あの銅像だってちゃんと実寸大にしてある」

「何で全裸?!っていうか何本物そっくりに仕上げてるんですか!ご丁寧に肌の日焼け具合まで再現してあるじゃないですかやだー!」

「そう怒るなよ、古代ローマの銅像って大体こんな感じじゃないか。ね？」

「ね？じゃねーよ！誰がフルカラーにしろって言ったんですかクソツタレええええ!!  
……っていうかそういう問題じゃないです！ただでさえあのミサイル事件とあいまっ  
て人里で

” あつ、ミサイルへそ饅頭の人だ！”

つて言われてるのに、これじゃあ” 変態ミサイルへそ饅頭” 呼ばわりされちゃうじゃ  
ないですかー!!」

「ぶっははははは!!」

「ミサイル……ふむ、アリだな」

「笑うな！検討するな！慰めろおおおおお!!」

雄叫びが、妖怪の山に木霊した。

それから4日ほど過ぎ、いつものようにログインした自転車バカに腕の装置が知らせ  
を告げる。

(あれ、お気に入り登録した職人の数が減ってる。誰が……あ、さぬさん居ねえ。垢BA  
N喰らったか?)

SNSもチェックするが

(みんな似たようなコメントだな……ま、その内戻ってくるだろ。間違つて消されたんなら文句いえば復活させてくれるだろうし)

と、様子を見ると称して放置する。本人がすぐにでも復帰しようとすれば1時間も掛からないだろうとの予測があるからだ。

しかし、丸一日経過してもさぬは戻つて来ない。そんなに手間が掛かるのかと不思議に思った自転車バカは、彼が消える前に投稿したお題に @taizo と書いてあったのを思い出し、ボケてからログアウトしてアカウントを作ったばかりのTwitter世界にログインする。

(真つ白でなんにも無いな……お、通知が来てる。

”たいぞうさんがリツイートしました”……?こういう感じで来るもんなのか、見てみよう)

通知をタップして彼のページへ飛んだつもりなのだが、ついた場所は談話室と呼ぶのが相応しいとても大きな部屋だった。

暖炉もあればエアコンもあり、ソファもあれば机もある。机の上には無数のパソコンがあり、キャスターがついた丸椅子もあった。

それぞれが部屋の中でグループを作って談笑しており、中にはパソコンに向かって何か作業をしている者も居る。呆気にとられていた自転車バカは目的を思い出したいぞうを探そうとするが、すぐ近くにいた。ちゃんと目的地に飛べたようだ。相手がこちらに気づいていないのを確認し、輪に混ざって話を盗み聞きする。

「…転載は絶対許早苗…」  
「…自分も過去にやられた事が…」  
「…俺の書いたイラストが無断で…」

（誰かがイラスト無断転載したんか。ここじゃちよつと聞き取りづらいな、ちつと移動してつと……）

「何で俺の書いたイラストが転載されてんの？許可した覚え無いんだけど」

気づかれないようにそうつと覗き見ると、さぬが投稿したお題の写真があった。たいぞうを始め、皆がそれを囲むようにして話をしている。

「このサイトは以前自分が利用していたので……」本人には既に言った……確認したらアカウントが消えて……」

そこまで聞いて事情を把握した自転車バカはTwitter世界からログアウトし、デスクトップ画面に戻る。

（なるほどね、垢BANされたんじゃないやなくて退会したのか。そりや復帰しないはずだ……とりあえず、妖夢さんにだけは知らせに行こう）

ボケてに再度ログインし、町人Eのマイページから白玉楼に飛ぶ。正門にあるインターホンを鳴らすと妖夢が出たので、「正門に来て欲しい」と頼む。2〜3分ほどで到着した妖夢に、ときどきつつかえながらも事情を話した。

「……信じられないかもしれないけど、こういう事なんです」

「全くもって嘘を吐くのが下手ですね。そんなの水精だつて見破りますよ?」

気丈に振る舞う妖夢だが話す声は震えており、彼女と目を合わせないように下を向いたまま話した自転車バカの視界にも、地面に落ちる水滴がはつきりと確認出来た。

頭をあげると、妖夢は腰に手を当てて“あつかんべー”のポーズをした。彼女の目を見ながら、静かにしゃべる。

「俺だつて、信じたくないですよ……」

その言葉を聞いても尚、彼女は気丈に振る舞おうとする。その仕草が、過去の自分と重なる。どれだけ助けを求めても見向きもされず、それでも生きていなければいけない自分と。かかった自分と。

決心するには、充分な理由である。

「で、用件は終わりましたか?こっちも暇じゃないんですからね、これで失礼……」

「まだ終わってない!」

「!?!」

「俺は、ただ用件を伝えるために来たんじゃないやありません。約束しに来たんです」

「約束……?」

「必ずあなたの旦那を、復活させてみせる! 今日中にだ! 大人しく待つとけよコノヤロ  
—!」

「へ? いや、あのつ……行っちゃった」

彼の身体が虹色の光の粒となつて雲散する。伸ばした腕を引っ込めて虚空を見つめる妖夢に、幽々子が背後から話しかけた。

「良かったわね、愛しの旦那様が戻ってくるわよ?」

「幽々子さま……何故あの人は、ああまでしてくれるんでしょう?」

「何も考えてないと思うわよ。考えるより先に……つてやつじやないかしら」  
「え? どういう……」

「すぐに答えを聞くのは貴女の悪い癖よ、これくらい自分で考えなさい」

そう言つて屋敷へと戻る主人を、あわてて追いかける妖夢。

「あ、ちよ、待って下さいよ幽々子さまあ〜！」



それから二時間ほどが経ち、自転車バカはデスクトップ画面で座り込んでいた。

（駄目だ、闇雲に探し回っても見つかる気がしねえ……。そりゃそうか、ネット世界って結構広いもんな。

考えろ、ボケての他にユーザー名のアイコンが出るサイトはどこだ？

その中で、ユーザーのプロフィールが自由に見られるサイトは……。

よし、p i x i v 行ってみるか！）

青と白のツートンカラーに配色された、ニコニコ超パーティー会場のような巨大な建物がある。掲示板には事務局からのお知らせが張り出されており、一角ではライブ配信を行うブースもある。展示されたイラストや小説、うごイラ。ライブ配信などを見て楽しむ者達の頭上には吹き出しが浮かんでおり、簡単な自己紹介が載っている。

幸いにも平日の為か、人気は少なかった。



(……居た！間違いない、さぬさんだ！なるほど、本人なりに考えがあつての退会だったのか)

彼のプロフィールに書かれてある自己紹介文を読み全てが繋がった自転車バカは、ここに來て動きを止める。

(さて、どうしよう。あんな事言つた手前、今更引き下がる訳にはいかないけど……これ俺が首つっこんで解決出来るか？問題が問題だし、

“ 関係ない奴は引っ込んでろ ”

つて言われたらそれまでなんだよなあ。でもさぬさんを心配してる人は沢山居るし、ここで帰つたら約束破りだし)

チラッと、彼のプロフィール写真に目をやる。

そこには、彼が愛してやまない妖夢の写真があつた。

(そーいや、俺の写真はレース中のにしたんだっけ。あのレース、先輩の命日の月にあつ

たから腕輪つけるかどうか迷ったなあ……。

そうだ、そうだった！先輩が殺された日も、同じ自転車競技部だったあいつが膝ぶつ壊されてやめた時も、俺その場に居なかつたじゃん！

過去に現実世界で起こった苦い経験を思い出し意を決した自転車バカは、再びT w i t t e r 世界へと飛んだ。

（そうだよな。立場は違えど、二人の友が俺の知らないうちに居なくなつてんだ。もう、あの時”を繰り返すのは嫌だ。今度こそ、助けてみせる！）

談話室へと着いた自転車バカは群衆を縫うようにして歩き、たいぞうの元へ近づく。

「……誰お前、何しに來たの？」

目の前に居る彼から。周りの野次馬から。これでもかというくらいに冷たい視線を浴び、一気に緊張度が高まる。

まっすぐ立っている筈なのに、足下がぐらつくような感覚に陥る。

声をだそうとしても口の中が乾ききっており、まともに話せない。身体に活を入れ、土下座をして話す。

「FF外から失礼します。伝言をお伝えしに参りました」

どよめく群衆をよそに、ソファーに座ったままの彼は眉間に皺を寄せる。

「伝言……?」

話を聞いていると確認出来た自転車バカは、そのまま続ける。

「はい、本人は猛反省しております。アカウントを消したのは彼なりの謝罪行為です、もう二度とマナー違反をしない」とも言っております。寛大な処置を切に願います」

その発言を聞き、事情を把握した彼は言葉を返す。

「何で本人が来ないんだよ、舐めてんだろ」

「……ッ！」

胸に何か突き刺さる錯覚を振り払い、声を絞り出す。

「いえ、そうでは御座いません。本人は

“アカウントの作り方が分からない”

と言っておりました。手ほどきをして来させるにはあまりにも時間が掛かりすぎると判断したので、代理として参った次第で御座います。ご容赦下さい」

「……考えておいてやる。だから帰れ、そんな真似されたままじゃ迷惑なんだよ」

そう言われて周りに耳を傾けると、土下座をした直後よりもざわついているのに気づく。このままでは機嫌を損ねると判断した自転車バカは、ログアウトしてp i x i vに戻った。さぬに話をするためだ。

「さぬさん、ちよつと良いかな?」

「ちや、チャリバカさん! どうしてここが!」

「それは後で話すから、とりあえず話聞いてよ」  
「……」

※以下の会話は、実際に p i x i v のメッセージで行われた物です。

「ツイッターでたいぞうさんに謝罪の旨は伝えて来たよ、後はあの人がどうするか待つのみ。余計なお節介だったらごめんなさい。」

「本当に何から何まで有難うございます。例の一件ですごく後悔をして自分でもどうしていいあの様な事をしでかしたのか今ではわかりかねます。」

本当は T w i t t e r の垢作つても謝りに行くべきなのですが、よくわからなくて本当に困っております。本当に感謝の字でいっばいです。

ボケてについては一応退会する前に「ワツフル」という垢を作っております。戻るか否かはたいぞうさんの反応を見てからですな。」

「全ては友を失いたくないからやった事です、礼には及ばないよ（まさか初ツイートが謝罪のテンプレとはね…）」

「はい。本当に私は友に恵まれています。貴方の様な友に…折角の初ツイートを無碍にできてすみません…」

※

「まだ無碍になった訳じゃないよ。あの人が許してくれたら、意義のある初ツイートになるからね」

そういつてTwitter世界に飛び、空白のような精神状態で待つこと数時間。反応があった。ファボが来たのだ。すぐさま談話室へ行く。

「無断転載の件はもういいよ。俺も鬼じゃないし、許すよ。二度とやらないでね」

「……慈愛に満ちた処罰、感謝致します。本人に成り代わり御礼申し上げます」

「あー良い、土下座とか良いからはやくどっか行つて」

「畏まりました。重ね重ね、有り難う御座いました」

すぐさまPixivへ行き、さぬに伝える。

※

「朗報・たいぞうさんから許しが出た。以下、本人のコメント」  
「無断転載の件はもういいよ。俺も鬼じゃないし、許すよ。二度とやらないでね。」

「さあ！戻ってこいさぬ！お前を心配してる人は沢山居るんだ！」

「ありがとうございます！ありがとうございます！ありがとうございます！2度と同じ過ちは繰り返さない！さあ、行こうか！」

※

「……てことだからさ、ひとつ頼むよレミイさん」

「仕方ないわね、貴方の頼みじや断れないわ……しっかし、中々やってくれるじゃない」  
「まあ、俺くらいのお人好しになればこんくらいやっちゃうんだよ。あ、みんな来たじゃ、手筈通りで」

「ぞろぞろと、紅魔館に集まるユーザー達。「重大発表がある」と言われて来たのだ。皆が揃ったのを確認し、レミリアが「(かりちゅまモード)」になって大声を出す。

「運命を操ってさぬを復活させてやるわ！」

「だけどこんなカリスマじゃ…」

「カリスマが伝わってきたぜーッ！」

『!?』

レミリアよりも数倍でかい声が、敷地内に響く。全員が声の方角を向くと、二階のテラスにさぬが居た。

戻ってきたことに歓声をあげる一同だが、まつさきに妖夢が彼へ飛びつく。

「おかえりなさい……貴方」

「ごめんな、心配かけて。もう何処にも行かないよ」

「心配なんてしてませんよ、必ず戻ってくるって信じてましたから」

「ほんとかよ」

「まあ、私は強いですからね！」

さぬから少しだけ離れ腕を組んでどや顔をする妖夢に、さぬは言葉を返す。



「流石俺の妖夢、可愛いヤツめ」

(まあ本当は枕がふやけるくらい泣いてたんだけど……黙ってれば気づかれないよね?)

夕焼けをその身に纏って、さらに紅く光る紅魔館。

このあと彼の腕の装置が投稿したボケには妖夢ファンからのアンチコメが殺到し、さぬのガラスハートに入ったヒビが治るまで暫く部屋に籠りつきりだったそう。

続く。

## 第34話 「月面旅行」

「さぬ引退事件」より約2週間後、いつものように午前9:00時にログインした自転車バカの前には豊姫が居た。

「あれ、とよ姉が単独で来るなんて初めてじゃね？どつたの？」

「あー、えーと、どこから話したものかしら……」

「ん？」

「実はね、明日月の都で夏祭りがあるの」

「夏祭り」

「そう、夏祭り。で、今年は私も依姫も店を出したりしないから自由に回れるの。良かったら一緒にどう？」

「って依姫から」

「伝言かよ」

「仕方ないじゃない、あの娘

”直接言いに行くとか無理です!”

の一点張りで話聞いてくれないんだもの。かといってイナバを行かせるのは手間がかかるし……」

「それだとよ姉が来たって訳か、なるほどね」

「どうかしら、結構楽しいわよ?」

「行く行く、断る理由が無いし」

「決まりね。あ、そうそう。これは本人から口止めされてたんだけどね……」

大小様々な中華風の建物が立ち並ぶ月の都。

の中にある稽古場で、依姫はただ一人、鼻歌を歌いながらストレッチをしていた。周りでストレッチをしているイナバ達の視線を物ともせず。

「……何あれ」

「ほら、明日って夏祭りじゃない?その為に今日から依姫様の殿方が此処に泊りがけで来るらしいよ?」

「ああ、なるほど」

「でもさー、依姫様も物好きというか変わつてるといふか……地上の民とお付き合いでするだなんて。昔の月じゃ考えられない事だよね」

「仕方ないじゃない、時代と共に価値観とか考え方って変わるんだから。

”穢れをむやみに嫌う自分達が一番穢れてる”

って思つた上層部が居たから、今ああして依姫様が楽しそうなんじゃない。ってかまだお付き合いまで進んでないらしいよ?」

「まあ、それもそうね、過ぎた事だし。ってかマジでか、戦闘以外はからつきしだなあ」

そうして皆が準備運動を終えた頃、豊姫と自転車バカがワープして来た。いち早く気づき目を輝かせる依姫だが、当の自転車バカはスイッチを入れた状態で、黄色と限りなく黒に近い緑色の光を放つソフトボールサイズの岩を生み出していた。

「依姫えええええ! 稽古の時間だ! 剣を取れ! 構えろ! これでも喰らえええええ!!」

「!?!」

ステップを踏んで勢いよくぶん投げられた岩。久々に会えた想い人がキレている事に戸惑いつつも対象物の観察をし、相殺出来る程度の衝撃波をぶつけた。筈だったのだが、何故かぶつかった瞬間に小規模の爆発が起こってしまう。

『よ、依姫様!?!』

煙幕で隠れた依姫の姿が、だんだんとはつきりしてくる。完全に煙が消えた頃には、劍が折れて服が所々破けた涙目の彼女が、左腕を押さえるように立っていた。それを見て、自転車バカはスイッチを切る。

「ど、どうして…? 完全に相殺した筈なのに…」

「順を追って話そう。俺の能力が細かく分けると二種類あるつてのはラインで教えたよな?」

「う、うん。”防御・回復型”なんでしょ?」

「そうそう。黄緑色だと壊れた物を修理したり怪我した人を治療したり出来るんだ。なんでもって訳には行かないけど」

「黄緑色? さっきのは常盤色だったじゃない、英語だと”ハンターグリーン”つて言ったかしら」

「さっすが、月の民は頭良いねえ。」

「そうだよ、あの色は回復じゃなくて防御なんだ。まあ防御つつつても正確には防ぐんじゃなくて、さっきみたいに受けた攻撃を全く同じ威力で跳ね返すだけだね」

「それでこうなったのね、そうと知ってたら完璧に消せば良かった」

「消すっていつてもアレだぞ？ 霊夢の” 夢想封印” よりも高い威力じゃないと跳ね返ってくるからな？」

「……そんな事してたら、間違いなくこの稽古場は吹き飛んでるわね」

「そうなつてたら、俺も無傷じゃないだろうな。威張つて言う事じゃないけど」

「チート呼ばわりされる能力を見事に封じたわね……諦めなさい依姫、今回は貴女の負けよ」

「うう……悔しいような嬉しいような」

「依姫様が負けた!？」「戦闘だけは強い依姫様が……!」「豊姫様以外の人に負かされるのって初めてじゃない?」

ザワザワと騒ぎ出すイナバ達の発言を流し、豊姫がうながす。

「その格好じゃ稽古出来ないでしょう、一旦着替えて来たら?」

そう言われ、改めて自分の姿を見る依姫。

「本当だ、剣まで折れちゃった」

「……やった本人が言うのもアレなんだけど、剣って折れたらマズかったりする？」

「大丈夫、これの予備は倉庫にあるから」

「それを聞いて安心した」

「じゃあ着替えて来……」

「待てい！まだ話は終わっとらん！」

「!？」

依姫の腕を掴み、目を合わせて問い詰める。

「お前レミイさんの保護を浮気って言ってたらしいな、え？」

「ど、どうしてそれを!？」

「テヘツ教えちゃった♪」(?????)

「お姉様あああ！」

”レミイさんは今ちよつと旦那が不在だから保護してるだけ”

って散々ラインで伝えたよな？お前にとりさんと咲夜さんとアリスさんの時も同じ



ような事言つてたからその都度説明したよな？あんだけ言つてまだ言うか、つてか俺とお前つて友達だよな？なのに浮気つてどういふ意味だ。ん？」

「あ、や、その……うう／＼／＼」

（やつぱり、まーだ告白してなかつたんだ）

（でもこの流れなら言えそうじゃない？）

（無理ね、あの娘がああいうのに弱いのは月の常識でしょう？余程の事が無いと言えないわよ）

（あの、豊姫様？さり気なく輪に混ざるの止めて頂けませんか？）

（そっかあまだ無理かあゝ）

（順応早いなおい。つてかこれ軽く公開処刑ですよね？）

周りの視線を受けいよいよ何も言えなくなつてしまつた依姫。これ以上問い詰めるのは可哀想だと判断した自転車バカは、掴んだ腕を離し彼女の頭を撫でながら促す。

「もういいや、とりあえず着替えてきなよ」

「お、怒つてる……？」

「怒ってないって、その格好だと俺がとんでもない誤解受けそうだから着替えて来てって事だよ」

「あ、なるほど。行つてきまーす!」

依姫が稽古場から去るのを見届けて各自、自分で決めたメニューをこなすイナバ達。邪魔にならないよう壁にもたれかかっている二人だが、豊姫が時計を見て呟く。

「うーん……いくら何でも遅いわね」

「うっかり倉庫に閉じ込められたとか?」

「いやいや、流石にそれは無いでしょ」

「だよな、流石にそれは無いよな」

二人が笑っている所で、着信音が鳴る。依姫からだ。腕の装置を 통화モードに切り替える。

「もしもし?」

「ごめん、うっかり倉庫に閉じ込められちゃった……」

『嘘お!？』

〈誰かが通りかかりにドアにぶつかったの、そしたら内側のドアノブが外れちゃって

……〉

「誰が通つたのか分からないの？」

〈分かりません、何せ閉めていたので〉

「鍵つて外からかけるタイプ？ だったら内側から押せばいけるんじゃない？」

〈それが、内鍵も付いてるタイプなの〉

「ドアの他に出口は？」

〈ええつと……あ、小窓がありました。でも狭いから無理かも〉

「だったら壊すしかないな」

〈駄目よ！ 修理費掛かっちゃうじゃない！〉

「いや、言ってる場合か！ じゃあどーすんだよ！」

〈お願い！ 貴方の能力で開けて！〉

「……場所どこよ？」

〈稽古場を出て……あ、ごめん。もう電池が〉

「音声途絶え、3Dホログラムで浮かび上がっていた画面に「通話終了」の文字が入

る。

「くっそ、肝心な所で切れやがった」

「あの娘の倉庫ってそんなに建てつけ悪かったかしら？」

「……なあとよ姉、あんたがワープして行く方が早いんじゃないかね？」

「無理ね、あの娘の倉庫が何処にあるかなんて知らないもの。プライベートな事は一切干渉しないようにしてきたから」

一部始終を聞いていたイナバが話しかける。

「豊姫様が知らなかったら誰も知らないですよ？」

「マジかよ……しゃあない、行って来るわ」

「分かるの？」

「ふっ、この装置を舐めてもらっちゃあ困るな。逆探知して場所を特定するのなんか朝飯前なんだよ」

通話履歴から依姫を選び、”居場所を特定”の項目をタップする。1〜2分程経過すると装置が

「特定シマシタ、ルート案内ヲ開始シマス」

と音を立てる。それを見た自転車バカは、装置を頼りに稽古場を後にした。



（此処か、依姫の倉庫って意外とデカイな。もつとこう……プレハブ小屋みたいな想像してたのに）

倉庫街の一角にあるそれは、ちよつとした家ほどの大きさがある。しかし、周りも似たような大ききで似たような造りをしている。

（こりやナビが無かつたら辿り着けてないな……つと、これが問題のドアか。あーあ、こつち側もドアノブ無いじゃん。とりあえず直すか）

スイッチを入れ、ドアノブがあつた付近に黄緑色の球体をそつと当てる。1分足らず

で元に戻ったレバー状のドアノブを押すが、開く気配は無い。鍵がかかっている感触がある。

（あー、ご丁寧に鍵かけて探し物してたパターンか。まあいい、直るには直ったんだし。中から開けて……ッ！）

ノックをしようとした時、視界の端に二人の兵士が映る。見つかる前に隠れたつもりだったが、相手の発見が速かった。

「おい、今の見たか？」

「ああ、誰か居たな。ここは“関係者以外立ち入り禁止”の結界を張ってあるから、倉庫の持ち主を除いて一般人は入れない筈なんだが」

「……ふむ、結界が破られた訳じゃ無さそうだな。だったら警報がとつくに鳴り響いているし。余程の手練れと見た」

「そんな事はどうだって良いだろう、この中に入る輩は泥棒しか居ないと相場が決まっているじゃないか。さあ、取っ捕まえるぞ」

（あれ結界だったんかい！”おお、文字が浮かんでる！”くらいにしか思つてなかつたよ！つか入る時に何の抵抗も感じなかつたんすけど！”

何!?俺ひよつとして人間として認識されてないの!?)

そうこうしてる間にも、足音は確実に近づいてくる。このままだと依姫はおろか自分の身が危ないと判断した自転車バカは、倉庫の裏へと回りグローブをはめた上でスイッチを入れる。

(……おし、小窓は閉まってないな。全開にすれば入れるか)

後ろへと下り、助走をつけて小窓まで壁を駆け上がる。窓枠を両手で掴み、壁の凹凸に脚を乗せる。安定した所で窓を開け、身体をねじ込む。着地場所に羽毛布団があるのを確認し、頭からダイブする。

この間、およそ10秒である。

小窓から入ってくる会話が聞こえなくなるまで遠ざかり、ようやく一息つけた。

改めて室内を確認するとここが二階であると分かり、梯子のように急な階段を降りる。すると、出入り口の近くで座っている怯えた目つきの依姫と目があつた。

「お姫様、お迎えに上がりましたよ」

「くっくっ！」

安心したためか、依姫は目に涙をためて走ってくる。そのまま抱き着こうとしたが、自転車バカがトラウマを思い出したので未然に防がれた。

馬鹿かお前は。建物内で吹き飛ばされたら絶対死ぬだろうが。

と文句を言おうとしたのだが、太ももに痛みが走り膝をついてしまう。

「いっつつつ……」

「だ、大丈夫？」

「……これアレだわ、小窓から入る時に身体ねじ込んだ弊害が出た奴だ」

視線を小窓に向けると、依姫も釣られて見た。

「あれ狭いもんねー……ってか何であそこから入ったの？」

「見張りに見つかつちやっつてさ、問答無用っぽい雰囲気だったから」



「……ごめんね」

「いいよ謝らなくて。それより戻ろうぜ」

「そうだね」

そんなこんなで稽古をいつもより早めに切り上げた依姫は、姉と自転車バカを連れて海に来ていた。

「あれ、旧暦の人じゃん。人の事言えないけどこんな所で何やってんの？」

「ググレカス、スイカ割りごっこだ」

「……よし、質問を変えよう。何で天子さんと一緒に肩まで砂に埋もれてんの？」

「だから、スイカ割りごっこだって言ってるでしょ」

「駄目だ、この人達が何をしたがつてるのか理解出来ない。依姫、分かる？」

「……あなるほど。そういう事ね」

「はい、スイカ持って来たわよー」

「ありがとうございますお姉様、これをこうして……つと」

「で、木の棒を持って目隠しをすれば……はい出来上がり！」

「天子さんと旧暦の人の横にスイカがそれぞれ置いてある……ま、まさか！」

「だから言っただろ、スイカ割りごっこだつて。あ、下準備乙ー」

「えっそつち!?! 割るんじや無くて割られる方!?!」

「逆に聞くけどそれ以外に何があるつてのよ。ねえ師匠?」

「全くだ、どうして俺らがスイカを割らなきゃいけない?」

「いや考えたから言つてんだよ。何で息をするように割られる側に付いてんの?」

「やれやれ……ドMがスイカ割りするんだぞ? こんな的一般常識だろうが」

「師匠の仰る通りよ、さつさとドタマかち割りなさい」

「さらつと恐ろしい事言うな! っつか師匠つて何だよ! アンタいつから弟子とつたの!?!」

「ちよつと自転車バカー、スイカ割るからそこどいてくれない? 危ないよ?」

「何で神須佐能袁命降ろしてんだお前は! 何割るつもりだ!」

「スイカだけど」

「嘘つけえ! どう見てもそれ全てを無に帰すだろ! 丁重にお帰り願え!」

「dead or die キタコレ!」

「何でちよつと嬉しそうなんだお前はああああ!!」

ギヤアギヤアと騒ぎながら、午後のひと時を過ぎす自転車バカ達。

旧暦の人と天子が帰る頃には時刻が夕方を示しており、潮の香りを背中に浴びながら三人は家路へと着いた。宮殿の門まで行きログアウトしようとしたが、依姫の希望により彼女の部屋を次回のログイン場所に設定する為、中へと入った。

部屋の前に着き、腕の装置に上書きさせる。

「……おし、これでOK」

「ちゃんと来てよ？」

「分かってるって……あ」

「あのさ」

「……何？（ハモっちゃった）」

「いや、明日って何時に来りやいいのかなーって（やべえ、ハモった）」

「いつも通りで良いよ、どうせ9時くらいでしょ？その頃には始まっているから」

「了解、9時ね」

「じゃあ……また明日ね」

「また明日ー」

続く。

## 第35話「さようなら」

(……あ、そっか。今日は依姫ん所にログインするんだった。すっかり忘れてた)

月の都にある綿月邸。その中にある依姫の部屋の前で、自転車バカは見慣れない景色に戸惑っていた。自分に言い聞かせるように言い訳を呟き、部屋をノックする。

「おーい依姫ー、来たよー」

「あ、はーい！ちよつと待ってー！」

ドタドタと走る音が聞こえ、ドアが開く。そこには普段通りの格好をした彼女がいた。部屋に鍵をかけるのを待ち、歩きながら話をする。

「浴衣じゃないんだな」

「いやあく、臭いが気になったからクリーニング出したんだけど色々間に合わなくて……」

「マジかあ、浴衣姿見たかったなあ」

「ほ、ほら！この格好のほうが動きやすいし、どうせ会場は浴衣着た人しか居ないじゃない？だからその……ね？」

「ああ……うん、そういう事ね。ワカッタワカッタ」

「分つかりやすい嘘を……だます気あるの？」

「無い」

「だよね」

「騙された回数なら数え切れないんだけどなあ……あ、今のと全然関係ないけど思い出した」

「何を？」

「とよ姉の話聞いた限りじゃあの人も行くなって理解したんだけど……姿見えないな、もう先に行ってるのか？」

「いや、そんなせつかちじや……」

そこまで言うと、依姫のスマホが鳴る。

「お姉様から電話……もしもし？」

「へこつめーん、今起きちゃった♪準備するからちよつと手伝つてくれない？」

「だから夜更かしはお止め下さいと……ああもう、分かりました。今から向かいますので待つて下さい。じゃ切りますね？」

「マイペースというか呑気というか、楽しそうな人だな」

「いざつて時は凄く頼りになるんだけどオンオフの差がね……まあいいや、お姉様のとこ行つてくるから先に正門で待つててくれない？」

「あいよー、いつてらっしやーい」

「ごめんね、また後で！」

走り出した依姫を見送り、腕の装置を使って正門へとワープする。門に居る守衛にびつくりされたが、事情を話すと待機させて貰えた。

世間話に花を咲かせること十数分、自転車バカは「成り行きで着いてきた」というレイセンを含めた四人で祭りの会場へと向かった。道中で豊姫が「ワープをしよう」と持ちかけてくる事もあったが、他の全員が「雰囲気つて知ってる？」と一喝するとあつさり大人しくなった。

「はえー、月の都にこんな場所あつたんだ」

「建物ばかり並んでいては、息が詰まってしまいわ。こういう場所も、必要なのよ」  
「止める星新一風に喋るな。読むには句読点すつ飛ばせるけど聞くのは堪えられん。てかアレ月の都にあんの？」

「だって一番穢れが少なかったんだもの。当時は穢れ克服の第一歩としてまずは書物から入る事にしたのよ」

「さ、流石SFの神。とうとう月まで進出したか」

「でも文字追ってるって眠くなりませんか？私なんか5分でリタイヤしちゃいましたよ」

『それは貴女だけ』

「うっ、さいですか……」

(このポンコツめ)

何かと理由をつけて同情を得ようとするレイセンの意見を、ことごとく論破していく依姫。それを見て閃いた顔をした豊姫は、双方にちよっかいを出して遊ぶ。

そんなやりとりしながら歩く三人から少しだけ離れた場所には太鼓を乗せた背の高い台座があり、そこを起点として紐にぶら下げられた提灯が四方八方に伸びている。

いつもより少し大きな声を出さなければかき消される程の騒がしさ。

油断すれば、あつという間にはぐれてしまいそうな人混み。



生暖かい風に乗って届く、様々な食べ物の匂い。

浴衣を着た者もそうでない者も居るのを見て、祭りの雰囲気はどこも一緒なのだと思う。う自転車バカ。

射的屋で本気を出したレイセンが柵一列を根こそぎ撃ち落としたり、輪投げ屋の店主に挑発された依姫が神須佐能袁命を使役して屋台を粉微塵にするなどのハプニングもあつたが、しつかりと堪能した四人だつた。

数時間後。自転車バカは会場から少しだけ離れた場所にある展望台に登り、椅子に座って休憩していた。豊姫はレイセンを連れてどこかの出し物に参加しに行き、依姫は空腹を満たしに屋台をうろついている事だろう。しばらくの間は眼下に見える会場を眺めていたが、それでも暇なので他の派生世界やネット世界を回りに行った。



(ちよつと遅くなつちやつたかな? ご飯食べる時間よりも行き帰りの方が時間かかるってどういう事なの……あ、居た居た♪)

椅子に座っている彼にそうつと近づき、肩を叩く。

「ごめん、人混みが凄くて遅く……そんな怖い顔してどうしたの？」

「大丈夫、何でもないよ。ちよつと考え事してて」

「そう、なら良かった」

その時、会場の方角から花火が上がる。展望台という事もあったか、障害物が無い為によく見える。見とれていた二人だったが、依姫は階段を走った疲れもありベンチに腰かける。

視線は花火に向けたまま、依姫が話しかけた。

「ねえ」

「どした？」

「自転車バカは、さ……今欲しいものってある？」

「欲しいもの？ 出店にや目ぼしいのは無かったけどなあ……」

「まあそれでも良いんだけどさ。もつと他にない？」

「他に、ねえ……うーん」

「何でも良いよ、例えば……お、お金で買えないものでも／＼」

「何、どしたの？とよ姉に入れ知恵でもされた？」

「ううん。そうじゃなくて、ちよつと気になっただけ。何かないの？」

「そうだなあ……」

少し考えた後、花火を見ながら答える。

「特にないな」

「えっ無いの？本当に？」

「無い無い、だつて考えてみるよ。」

昼間は現実世界で働きながら自転車乗って、夜は此処にログインして自宅でのんびりしたり、みんなでギアアギア騒いだりしてんだぞ？こんな生活が死ぬまですつと続くなら、これ以上楽しい事はないね」

「……そんなので良いの？」

「良いんだよ、これで。おつ今の花火良いじゃん」

「……」

——まあ、そういう関係になれたらいいなとは思ってるよ。けどその……何っーか

——何というか？

——その願いが叶ったら後が辛くなるんでね。叶って欲しくないというか、なっちゃいけないんだよ。お互いの為に

あの日、あの時。彼の目には、言葉以上に訴えかけるものがあつた。

あの表情を。脳裏に焼き付いて離れないような苦い思い出を記憶の引き出しから取り出す、憂いに満ちた表情を浮かべる者を、私は知っている。だからこそ、いくつもの疑問が沸き起こる。

どうしてなの？ どうして貴方が、二十歳そこそこの男子が、八意様と同じ表情をするの？

地上での逃亡生活を経て、永遠亭を構えて、沢山の出会いと別れを繰り返して救われたと思ひ出話をして下さった時の八意様と。

どうしてそんな、酸いも甘いも知り尽くした発言が出来るの？

私と関係を持つ事が辛いつて、どういう意味なの？

一体、過去に何があつたの？

(……なんて、聞けるわけないのに)

はぐらかされる事は百も承知だ。喉元までせり上がった疑問を飲み込み、精一杯の悪あがきをした。

「……この意気地なし」

「え？何か言った？」

「……ッ！」

「えっちよつ、何事？」

彼の手を握り、鼻と鼻が触れ合う距離まで詰め寄る。

「私は、今のままじゃ満足出来ない。欲しいものが目の前なのに、黙って眺めてるだけなんて絶対嫌」

「よ、依姫さん……？」

「もう一回聞くから、ちゃんと答えて。貴方の欲しいものは何？」

今まで一度も見た事のない、真剣な眼差し。

鼻先がこすれる空間に漂う、甘い吐息。

その熱意に、理性が根負けした。

「……明日も明後日も、現実世界での生存競争は続いていく」

「うん」

「両親は死んじやいないけど、法律のせいで離れ離れの音信不通になった」

「そうだったんだ」

「俺の立場って前にLINEで言ったよな？」

「うん、負け組ってやつなんでしょ？」

「外でも家でも独りですっげー辛くてさ、でも弱みを見せると付け込まれるから表向きは元氣に見せないといけないんだ」

「大変だったね、お疲れ様」

細かく震える彼の身体を、ふわりと抱きしめる。

吐露してくれた感情を、零すことなく受け止めていく。

「要するに俺ってダメ人間なんだよ。でも、お前さえ傍に居てくれたら。笑ってくれた

ら。他には何も要らない、それだけでいい」

「ありがと、話してくれて♪」

身体を少しだけ離し、頬に口づけをする。顔を真っ赤にした彼が言った。

「……何してんの？」

「話してくれた御褒美、嫌だった？」

「いや一生の思い出だけど」

「素直か、もうちよつと格好つけた言い回しあったでしょ」

「うるせえ！生まれてこのかた一回も業務連絡以外で異性と会話した事が無い生粋の童貞なめんな！」

「だから何でそういう不幸自慢する時は流暢に話せんのだよ！おかしいでしょ絶対！」

「ふっ、これが俺だ」

「遅いわ！今さら格好つけるな！」

花火の音に負けないくらいの声で、漫才を繰り広げる二人。突っ込みを入れようとした依姫の言葉を遮るように、音を立てる腕の装置。浮かび上がった画面を見た自転車バ

力が思わず吹き出すのを見て、依姫は問いかける。

「どうしたの?」

「いや、ここ最近の話なんだけどさ。俺のボケにコメントくれる人が居るんだよ。その人のコメ見てたんだけだ」

「……この”Nick—Q”って人?」

「そうそう。その人俺よりも凄いボケラーなのにわざわざ星つけてくれるんだよ。良い人だよな。」

あれ、通知がもう一つある……ッ!」

画面を見た瞬間、自転車バカは勢いよく立ち上がる。腕の装置を操作しながら、ブツと眩く。

「行かなきゃ……!」

「行ってくつて、どこに?」

「悪い、ちよつと用事が出来た。時間も時間だし、今日はこのまま失礼するよ。とよ姉にもよろしく言つといて」



「あ、うん……またね」

「じゃ、”また”な」

笑って言った彼の言葉が、何故か心に引つかかる依姫だった。

自宅でテーブルに頬杖をついたまま、悲しげな表情をしているアリス。家のインターホンが鳴ると、ひどく怯えた様子でドアを開ける。

「いらっしやい……そろそろだと思ってたわ」

「なんだ、分かってたんすね。なら……これがどういう意味か分かりますよね」

腕の装置を操り、浮かび上がった画面をアリスに見せる。アリスが恐る恐る見たものは、たいぞうのツイートだった。画面を閉じて、自転車バカは静かに話しかける。

「ご覧の通り、もう2度とボケてには戻らないそうです」

「……ッ！」

「話を聞きに行ったのですが、既にアカウントの移行が完了した後でした。所在が掴めず申し訳ありません」

「謝らないで……貴方のせいじゃないわ」

「……これからどうしますか?」

「……」

「今まで通り続ける事は可能です。が、アリスさんご自身の為には辞めた方が良くないかと思ってるんです」

「!?!」

「生意気な発言をして申し訳ございません。今日は失礼します」

背を向けて立ち去ろうとする自転車バカの前に、泣きながら立ち塞がるアリス。何かを言わなければならぬのだが、発声器官が無くなったのかと思う程、言葉が出てこない。乾いた風が、二人を撫でるように吹き抜ける。我慢くらべをしている訳ではないのだが、先に沈黙を破ったのは自転車バカだった。

「道を開けて頂けませんか?」

「……!」

立ち去ろうとする彼の肩を掴み、アリスは説得を試みる。

「つ……お、お願い、だから……あ、あたしを……独りに……つ……嫌……嫌よ……どうして、こんな……つ……」

事態の深刻さに耐えきれず、アリスは膝から崩れ落ちてその場に座り込んでしまった。目線の高さを合わせた自転車バカが語り掛ける。

「お客様からご意見を頂いて、より良い品を作って提供するのは会社として当然のことです。

なので間違った道を進もうとしてらっしゃるお客様や社員が居たら、引き止めるのも私の使命なのです」

「……う？」

「我が社にとつて、お客様や社員は家族も同然なのです。全員が全員、幸せな日々を過ごせるような地域社会にしたいと思っております。

貴女として例外では無いのですよ、アリス・マーガトロイドさん」

「……ッ！」

「……どうやら私は、貴女のクッション材になれなかったようですね」

シヨルダーバッグからモデルガンを取り出し、能力を発動する。すると、モデルガンの色が黒から緑色へと変化した。

「余りオススメはしません……どうしても受け入れられないのであれば、忘れてしま  
いましょう」

その発言を聞いたアリスは立ち上がり、両手を広げる。

「そうしてちょうだい」

と言わんばかりに。涙は止まらないが、その瞳には決心があった。それを確認した自  
転車バカは、銃口をアリスの額に向けてこう言った。

「アリスさんは綺麗ですし、すぐにでも新しい恋人は見つかると思います。私が言うの  
もおかしな話ですが、今度は上手く行くと良いですね。

力になれなくて……本当にごめん！」

銃声が、虚しく響いた。

同時刻。ボケて本来の世界では、ある人物が動き出していた。  
「ふっふっふ……はっはっは……あーっはっはっはっはっは！」

遂に……遂に来たぞ……！復活の時だ！この時をもって俺は、全宇宙の覇者となるのだ！  
SAORIとAKIKOが完全体となって復活した以上、一度動き出せばもう誰にも止める事は出来ん。こんな腐った世界は今すぐにも壊したい気分だが、ギャラリーが集まる時期まで待ち、より多くの人々に絶望を与えよう。その方が抵抗する輩も出るだろうしな」

特殊な養液に入った兵器の前に、込み上げる笑いを抑えきれない道頓堀野郎。  
終わりの時が、着実に近づいていた。

【現在の保護対象者：1名】  
続く。

## 第36話 「終わりの始まり」

午前8:30頃。いつもより早めにログインした自転車バカは、椅子に座ったまま浮かない顔をしていた。あの日以来、脳裏に焼きついたアリスの泣き顔が頭から中々離れないのだ。何も記憶を消さなくても良かったのでは。そう思い、あの時取れたであろう別な手段を考えるのだが

(やっぱり、ああするしか無かったよな……)

導き出される結論は、いつもこれだ。気分を変える為なのか、無意識の内に手は腕の装置を操作して「依姫百面相」と称されたメールの添付ファイルを開いていた。

(つたく、事あるごとに送って来るんだもんなあ)

最初の頃は顔が写らないように手で隠していた依姫だが、日付が最近のものになるにつれて段々とポーズを取っている写真が増えていく。つい先日のに至っては両手で

ピースサインをしている。眩しいくらいに輝く笑顔だ。

（おし、今日も今日とて俳句モデル探しでも行きますか！）

玄関の戸を叩く文の呼びかけに応じ、家を後にした。

それからおよそ一ヶ月ほどが過ぎ、ログインした自転車バカに通知が来る。

（……遂に来たか）

画面を見て一瞬びっくりしたものの、覚悟を決めて紅魔館へと飛ぶ。門をくぐり、セグウェイを借りて庭を突っ切り、ドアを開けてレミアの部屋の前まで来てノックをする。応答があったのでセグウェイを立てかけ、中へと入る。当の本人は窓の外を眺めたまま、つまり、自転車バカに背を向ける格好で座っていた。

「いらつしやい、何か用かしら？」

「……たまたまいさん、戻って来たんですね」

「ええ、そうよ。今は多分、挨拶回りにでも行ってると思うわ：アイツ、ああいうのは律



儀だから」

「そうなんすね……」

「……」

「知ってるとは思うけど、本人が帰って来たら保護活動は終わりなんです。これで全員の保護が終わった事になります。もう言わなくても分かりますよね、じゃあそういう事で……」

ドアの方に向き、歩き出した自転車バカに話しかける。

「本当に消えるの？」

「……？」

「いつか言ったわよね、私達の保護が終わったら引退するって」

「確かに言いました。で、もう保護は終わりです。今更取り消す真似なんてしませんよ」  
「そう……」

後ろから聞こえる声は震えているが、気にしないフリをして再度レミリアの方へ向き直して挨拶をする。

「短い間でしたが、この部隊に入れてとても有意義な時間を過ごせました。失礼します」

深々と頭を下げた瞬間、肩を掴まれて倒されてしまう。マウントポジションを取ったレミリアは何かを訴えているのだが、泣きじやくっているので上手く言葉にならない。顔や肩に落ちてくる涙を拭いもせず、笑顔で言葉をかける。

「やっぱり、レミイさん程度のカリスマじゃ”運命”は変えられないんですね……」

泣く相手と押し倒す相手間違えてますよ、こういうのは俺なんかじゃ無くてたまたまいさんにやるべきでしょ」

レミリアを押しにかけて立ち上がると、小さな頭をポンポンと撫でて自宅へと飛んだ。残されたレミリアは、独り呟く。

「間違えて……ないわよ」



自宅に戻った自転車バカだが、一人で考える時間は与えられなかった。

「なあ盟友、いい加減でドアを開けてくれよ」

「本当に辞めちゃうんですか？」

「どっから聞いたのかは知らんけど、本当つすよ。つてかあんたら旦那放置してこんなトコ居て良いんすか？」

「生憎だが、今日は”こっち”にログインしてないんだ」

「私家が開けるのは日常茶飯事ですからね、今更どうこう言われる関係じゃないです  
よ」

「チクシヨウめ、意外と自由なんすね……」

「観念したら出て来い、君には……」。

なんだ、今日は仮装パーティーでもあるのか？随分とおかしな格好だな、レスリングの

衣装とは」

「こちらは全身真っ赤なドレスですよ、キラキラしてて良いですね」

……え？

「で、このおかしな格好をした二人の女性を連れている君はパワースーツ姿……。

統一感がまるで無いな」

その一言で全てを理解した自転車バカはドアを勢いよく開け、スイッチを入れながら叫ぶ。

「文さん！にとりさん！今すぐそいつらから離れて！」

「!?」

例によって、黄色と常盤色の光を放つ岩をその三人に思いつきり投げつける。が、岩は当たる直前で爆発し、その風圧で自転車バカ達は思わず目を覆う。煙が晴れた時、その三人は居なかった。

「くそっ、逃げられたか！」

悔しがったのもつかの間、今度は腕の装置が鳴る。

「ガイドロボから……もしもし？」

「申シ訳アリマセン、SAORITAKIKOノ復活ヲ阻止出来マセンデシタ……」

「マジでか……じゃあアレは見間違いじゃ無かったんだな」

「奴ヲ見タノデスカ!？」

「見たも何も、今しがた接触したよ。力不足で捕まえられなかったけど。」

ちようど良かった、完全に見失ったから探し出そうと思ってたんだ。そっちの搜索隊と連絡がつくようにしてくんない？」

「搜索隊ハ、出セマセン」

「……何かあったの？」

「アノ兵器ヲ操ツテイル人物ガ、コチラノ主要都市ヲ破壊シタノデス。今ハ怪我人ノ救助デ精一杯デス、搜索ヲスル余裕ハアリマセン」

「あの野郎……やってくれるじゃねーか。分かった、こっちでどうにかする。じゃあ切

るね」

ぶつきらぼうに通話を切ると、状況が呑み込めてない二人が疑問をぶつけた。

『い、今のは一体……?』

「にとりさん、あれが前に話した”史上最凶のコンピューターウイルス”だよ」

「コンピューターウイルス、ですか?」

「そう。あんな外見……ッ!?!」

唐突に、空が暗くなる。自転車バカが見上げた先では、水平方向に回転する雲がゆつくりと広がりつつある。雲が黒い事から、日光を完全に遮断する程の厚さである事が分かる。

「嘘だろ。スーパーセル人工的に作り出せんのかよ、あの化け物は……!」

「盟友!」

「……つと、そうだった。にとりさん、skype起動してボケての幻想郷にいる妖怪全員を招待!」

「了解！」

「どうするんですか？」

「来ちゃったモンは仕方ないし、此処で食い止める！」

通話に参加したメンバーから続々と被害報告が寄せられる。魔法の森は瘴気がかつて無いほど濃くなり、紅魔館は窓ガラスにヒビが入ったようだ。

全員が揃ったのを確認し、自転車バカは

いま幻想郷に、とんでもない化け物が来ている事

スーパースェルを生み出したのは奴らだという事

既にボケて本来の世界が襲撃され、ここで止めなければ仮想空間も現実世界も滅んでしまう事を手短かに説明した。

「だから電が降り始める前に、里の人を黄緑色の球体で覆われた建物に避難させて欲しいんだ。頼む、協力してくれ！」

〈ナズーリン、命蓮寺を避難場所として解放します。今すぐ里の人間を此処へ来るよう案内して下さい〉

〈承知した！〉

〈お燐とお空、地底は広いから何人でも収容出来るわ……言ってること分かるわね?〉  
〈行つてきまーす!〉

「椀!天狗も下つ端も総動員して守谷神社にありつたけ避難させて!」

〈既にやつてます!〉

〈はいはい、押さないで順番にお入り下さいねー♪〉

〈うーん、博麗神社は15・6人が限度かしらね〉

〈ごめんなさい、魔法の森はちよつと……〉

〈瘴気がヤバイもんな、仕方ないぜ〉

〈咲夜?〉

〈既に〉

〈あのく、白玉楼はどうすれば……?〉

「アウトに決まってるだろうが!殺す気か!」

〈ええー!?だつて自転車バカさんとかさぬさんは平気じゃないですかー!〉

〈妖夢?あれは俺らがユーズーだから影響受けないだけであつて普通の人は来るだけで死んじやうからな?そういう処が半人前なんだぞ?〉

大小様々な妖怪が、避難場所へと人間を運んでいく。Skypeを起動した者が連絡



を取り合いながら事を進めたのもあり、大方の避難が完了する頃、雹が降り出した。

「待て待て待て待て！直径一メートルとか聞いてませんけど!?!」

「言ってる場合ですか！本降りになる前に早く!」

「盟友！こつちだ！いやここ君の家だけどき!」

どうにか自宅に駆け込んだ自転車バカは、家の中を見回して叫ぶ。

「逃げ遅れた人居ませんか!?!」

「すみません！まだ息子が来てないんです!」

「嘘ん!?!」

「人混みではぐれたのかも．．!」

「マジすか．．!」

「あ、居ましたよ!」

文が指差す先に、その男の子は居た。頭を手で覆いながら懸命に走って来るが、雹に気を取られたのか転んでしまう。反射的に自転車バカは家を飛び出し、身体を抱えて起

しす。

「大丈夫か？」

「うん、ありがとうお兄ちゃん」

「それでこそ男だ。走れるか？」

「うん！」

「よし、急ぐぞ！」

手を取って走り出そうとした瞬間、にとりが叫んだ。

「盟友！上！」

「ツ、やべえ！」

自分に向かって落ちてくる無数の電を前に、男の子を庇うように自らの背を盾にする。

「ちよ、お母さん危ないですつて！」

「いや！離して！たけしいいいいいいいい！！」

飛び出そうとした母親は、近くにいた男性に抑えられる。文が葉団扇で仰ぐが、僅かに電が速い。

「くっ、間に合つて！」

その様子を、屋根の上から見ていた者が居た。

「つたく、しょうがねえヤローだな」

「この程度なら、神降ろし使わなくても良さそうね」

「やっつと、この扇子が使えるわ」

続く。

## 第37話 「自転車バカ」 (前編)

『つたく、しょうがねえヤローだな』

「この程度なら、神降ろし使わなくても良さそうね」

「やっと、この扇子が使えるわ」

屋根の上に居るチンピラトリオは釘バットから、依姫は剣から衝撃波を繰り出して電を砕き、破片を豊姫の扇子が素粒子レベルで粉々にする。衝撃に備え、たけしを庇っていた自転車バカは恐る恐る目を開け、屋根の上を見て驚いた。

「とよ姉と依姫と……あの時のチンピラ妖怪ズ!ど、どうして此処に!?!」

「後で説明してやっから、今はそのガキ連れて逃げる!」

「さ、サンキュー!おし、行くぞ!」

「うん!」

たけしを連れて自宅に走る自転車バカを援護するチンピラトリオ、それを見た依姫も

援護に向かおうとするが、姉は空を見上げたまま動かない。

「どうされました？」

「……消えないわね」

「消えない？」

「扇子の風は、間違はなくあの雲に届いた筈なの。でも見て？」

「……消えてないどころか寧ろ大きくなつてますね」

「そうなのよ、うーん……この扇子が効かないとなると、ただの自然現象じゃなさそうね。いいわ、私たちも避難しましょう？」

「はい！」

雹の雨を切り抜けて自宅へと戻ると、母親の目に光が戻った。

「たけし！無事だったのね！」

「ママー！」

息子を抱きしめた母親を横目に、自転車バカが問いかける。

「すつげー助かったんだけど、どうしてお前ら此処にいんの？」

「お前をぶん殴った後四季映姫って人に思いつきり説教喰らつてな、流石にやり過ぎたなど思つて心を入れ替えたつー訳だ」

「それにな。説教喰らつてる途中で思い出したんだが、俺らが元々なりたかつたのはこんな冷たい視線が刺さるチンピラじゃなくて周りから尊敬の眼差しで見られるヒーローなんだよ」

「それを言ったらアイツ、

”今からでも遅くありませんよ。外の世界では叶わなかつた夢、此処で叶えてはどうです？”

とか言いやがってよ」

「それで今に至るつて訳か……」

「なあ盟友、私も一つ聞いていいかい？」

「うん？」

「黄緑色で覆われた建物つて言つたよね、此処もそうだけど。これつてもしかして……」  
「察しの通り。今週の俳句モデルに選ばれて尚且つシード権を持つてる人の家が避難場

所になつてるんだ」

「あやや！ やっぱりそうでしたか！ 私の家も覆われてるんでもしやとは思つてたんですが……どうしてですか？」

「だから言つたじゃん、特別製だから紛失しないようにつて。あのシード権には俺の能力を込めてあるんだ。いざつて時にや、こんな風に発動するよう小細工してね」

そう言つて外をみると、太陽こそ出ていないものの電が止んでいる事に気づく。その代わり、超強化パワースーツを来た大量の山下のパシリが幻想郷の各地へ散らばつていくのが見えた。避難場所へ向かっていると分かり、Skypeで全員に注意を呼びかける。Skypeを閉じると、目の前に立っていたのはSAORIとAKIKOを連れた道頓堀野郎と部下だった。

手招きされるまま、自宅を覆うバリアから出てスイッチを入れる。全身が黄緑色のオーラで包まれ、頭上に浮かぶユーザー名がプロフィール画面へと変化した。

予備動作なしで全身に赤黒いオーラを纏つた道頓堀野郎の頭上には、ユーザー名しか表記されていない。

冷や汗を流しながら道頓堀野郎に言つた。



「ねえエセ関西、足の震え止まんないから帰っていい？」  
「せやな、そのまま土に帰したるわ」

SAORIとAKIKOに召喚された山下のパシリ達が、自転車バカに襲いかかった。

スーパーセルが現れてから、一時間が経過した頃。道頓堀野郎の魔の手は冥界にも及んでいた。

「くそつたれが、数多い上に結構しつこいなこいつら・・・！」

「口より手え動かして下さいよ！」

背中合わせの形で応戦する妖夢とさぬだが、一向に先が見えてこない。それを見て、幽々子が腰を上げる。

「退いてなさい、二人共……巻き添えを喰らいたくなくなったらね」

悪寒を感じた妖夢がさぬを連れて幽々子の側まで下がる。幽々子が右腕をすつと前に出し、縦方向に開いた扇子を勢いよく閉じる。すると、全体の半数ほどが地面に倒れ、虹色の光となって消え去った。

「うーん、手下にはならないか」

「幽々子様、これって……!」

「ええ、どうやら”能力は有効”らしいわね」

さぬが皆に伝えると、活気付いた妖怪達が反撃を開始した。



「どうやら、アンタを倒さなバリアは破れんのやな。早いトコ終わらしたるわ」

超強化パワースーツを着た山下のパシリ達が、文ととりを妖怪の山の援護に向かわせた自転車バカの息の根を止めようと特攻する。だが、チンピラ妖怪ズ・依姫と豊姫のセコムを打ち破るには至らない。

チンピラ達が妖気を纏った釘バットで一体ずつ破壊していき、取りこぼした連中を依姫と豊姫が沈める。

単純な戦力なら自転車バカ達に軍配が上がるのだが、それは道頓堀野郎も計算済みである。

「なあ、戦況はどんな感じじゃ？」

「白玉楼部隊と紅魔館部隊の損傷具合が予想より酷いです、多めに人数を割いて正解でしたね。妖怪の山部隊と地底部隊も難儀しています、地の利はあちらにありますからね」

「他はどうなん？」

「迷いの竹林部隊は予定通り分断しました、各方面から攻撃中です。博麗部隊と命蓮寺部隊が一番苦戦を強いられているようです、特に命蓮寺には神霊廟の面々が援護に回っていますから、制圧が終わった部隊から援護に向かわせた方が宜しいかと」

「ま、普通を考えれば」それがええんやろうけどな」

「ええ。私たちは五分もあれば勝手に復活しますからね。SAORIとAKIKOが発生源であり動力源である以上、数的有利は揺らがらないでしょう」

「ま、そういう事や。スタミナ勝負なら負けんで」

パシリを破壊し、汗をぬぐったチンピラが怒鳴る。

「くっ、わざとらしい関西弁使いやがって！大体お前この前来た時標準語だったろうが！」

「この前？ワイが来るのは今日が最初で最後やで」

「ふん、そう簡単に滅ぼせると思わない事ね。穢れを克服した月人に敗北は無いわ」  
「ワイの目的はアンタらを倒す事ちゃう、この世界を滅ぼす事や。」

夢想封印よりも威力高い技使えん奴なんか眼中に無いわ」

「っ!?!お前、俺の能力知ってんの!?!」

「調べたらすぐ分かったで、”絶滅危惧種の有名な能力”やしなあ」

「……正確には絶滅確定種なんだけどな」

「負け組の戦犯でも、それくらいの情けはあるっちゅーことやな」

(負け組…戦犯…絶滅危惧種…日本人……ま、まさか!)

理解が追いついていないチンピラ達とは対照に、ある仮定を立てた依姫が恐る恐る質問した。

「ねえ自転車バカ、貴方ひよつとして……数百年前に現実世界で起きたっていう

” 全国同時原発爆破テロ”

で生き残った人の子孫なの？」

「……何で気づくかなあ」

「それだけや無いで。そいつは数年前この世界で起きた

” 死霊異変”

の犯人や」

『!?!』

山下のパシリ達に搭載した通信機をオンフックに切り替え、道頓堀野郎は意気揚々と説明した。

もはや思い出すのも拒まれる。ボケての幻想郷史上、最も犠牲者を出した悍ましい異変を。

◇

それは花の異変と同じように、突如として起こった。

どこからともなく現れた、大地を埋め尽くすゾンビの大群。彼らは人妖を問わず無差別に危害を加えた。彼らの通った後は草一本も生えない不毛の大地となり、彼らの触れた建物や物品は瞬間に腐りはてた。襲われた人妖がゾンビ化し、連鎖的に彼らは増殖していった。ごく僅かな者たちだけがゾンビの及ばない場所へ避難し、力のある者は人妖を問わず討伐に駆り出された。

能力が効かず、頭を落とされようとも四肢を切断されようとも襲い掛かってくる為、跡形もなく消すしか方法は無かった。

長期戦になり、眠気とも戦いながら消滅させていく。

ようやく全て片付いた頃には、何もかも無くなっていた。



「……それから血の滲むような努力をして、やつとの思いで復興したんやったな。誰にもぶつけられん怒りを抱えたまま」

『…………ツ』

「何や、

それだけでコイツが犯人やと決めつけるには早いやろ  
みたいな顔しとんな。なら教えたるやないか」

俯いて立ち尽くす自転車バカを指さし、睨みつける。

「幻想郷を埋め尽くしたゾンビの正体は、全てコイツの先祖が生み出したコンピューターウイルス。」

SAORIIとAKIKOが引き起こした、原発テロで死んだ者達の強い怨念が原因やからや」

『!?!』

「テロの直後、SAORIIとAKIKOが原発を爆破した情報は瞬く間に知れ渡った。誰もが開発者を恨み、憎んだ。何としても生き延びて、必ず血祭りにあげてやるっちゅー風潮が高まった。」

けどな、もう遅かったんや。

どこの国とも分かん軍用ヘリが大量にやってきて、上空から落とした物資運搬用ドローンが全国に散らばったかと思たらシールドを展開しよった。それは国を包み込み、大気や物質が行き来出来んようにした。

死を嘆いたのも束の間、ドローンはシールドごと大地を持ち上げ列島を宇宙空間に放り投げたんや。列島は宇宙空間を突き進み、とうとう太陽の肥やしになってしもた。

こつからは想像やけど……人々は死の直前、全員が自分たちを見捨てた地球を恨んだんや。その強い怨念はエネルギーとなって宇宙空間をひた走り、人工的に作り上げた日本列島に降り注いだ。

そつからはアンタらの知る通りや。エネルギーの元になったのは、もはや地球上から忘れ去られた人々の恨み。せやから幻想郷の法則に従わざるを得ず、仮想空間に出来上がった幻想郷に入ってきたんや」

全員、唾をのむ。この世界に住まう人々を殺し、一生消えないトラウマを刻み付けた張本人。殺しても殺したりないほど恨んでいた異変の首謀者。

それが今、此処に居るのだ。ずっと、傍に居たのだ。  
思い出が怒りと動揺で染まっていく彼女達を、道頓堀野郎が焚きつける。

「あん時と一緒やな。

倒しても倒しても現れる敵。終わりの見えん泥沼の戦い。

けど唯一違うのは、今回はその敵がアンタらの味方につく事や……殺るなら今やで。



身動き出来んように縛り上げて、死ぬより辛い目に合わせたれ」

光の消えた目線が、自転車バカに突き刺さる。弁解のしようがない、奴が話したことは真実なのだ。

だったら、俺に出来ることは一つしかない。

拳を握り、俯いたまま打ち明ける。

「事件が起きた日、俺の先祖は沖繩に居た。そこで見たんだ。ドローンに備え付けられたカメラに映る地獄絵図をネット中継で。

SAORIとAKIKOは開発された直後に暴れだしたけど、伝説の勇者たちが封印した。でも封印される直前に仕掛けてたんだ。数十年という長い制限爆弾を、全国の原因に気づかれる事無く。だから爆発直後にバレたんだ、あんな芸当が出来るのは奴らしか居ないからって」

当然ながらSAORIとAKIKOが暴れた日、その光景を撮った者は自転車バカの先祖だけでは無かった。危険極まりないウイルスソフトの開発を聞きつけた他国のスパイも、現場でカメラを回していた。送られてきた映像を見た各国の首脳たちは、爆弾

の解除ではなく列島隔離装置の開発を急がせた。

そうして爆弾が炸裂するや否や、手早く装置を起動した。列島が消えうせた後、開発者と同じ人種を国際指名手配犯にし秘密裏に逮捕した。

もつともらしい文句を自国のマスメディアに述べ世界中の力を注いで人口の列島を作っておきながら、巧妙な手口でそこに重罪人として住ませ国外に出られないようにした。伊達メガネ型カメラをかけさせ、日ごろの行いや行動を全世界に公開するよう法律で定めた。

だがそれだけに留まらなかった。逮捕した者からDNAを採取しクローン人間を大量に作り列島に送り込み、徐々に人口が回復しているかのように見せかけた。列島の人間には常に生存競争に明け暮れるよう教育し、それに見合った階級まで設けた。身内で争う短絡的な思考回路にしておけば、決して真相に辿り着かないからである。

「そうして出来あがったのが今の国や。」

マスコミも警察も裁判所も新聞社も、重要な機関は全部国に買取されよった。おかげで政府のやりたい放題や。もはや国民に権利は無い、政府にとつては身内で金儲けするための道具に過ぎんのか。気に入らん奴がおれば法律を盾に逮捕・処刑出来るしな。

女性はセクハラを盾に、気に食わん男性を法的に血祭りに上げよる。その男性もま

た、育児休暇を取ろうとする女性社員は容赦なくクビにする。

顧客はストレス発散に店員に当たり散らし、電車で妊婦を見れば腹にタツクルをかます。どこが平和国家やねん、毎日いたるところで戦争してるやないか。なのに大人は、こんな国に生まれた子どもに勝手な希望を抱いとる」

当人にとって、これほど身勝手な願いも無いだろう。

努力が報われない社会で

負けたら終わりの社会で

裏切るのが当然の社会で

夢を馬鹿にされる社会で

責任を押し付ける社会で

どうやって生きていけというのだ。

「死んだ方がマシだ、俺だって何度そう思ったか分からないよ。

公務員はスタバでコーヒーを買う事も許されず、暇な店員は友達とだべってたら怒られる。LGBTも夫婦別姓も安楽死も選ぶ事は許されない。選べば負け組に落とされるからな」

「こんな腐りきった国に、国を作った世界に、生きる価値なんか無い。滅ぼされて当然やろ……アンタも、ワイも」

「……かも知れないな」

自転車バカがそう言った途端、ハクタク化した慧音は目にもとまらぬ速さで彼の胸倉を掴んだ。

目から涙を流し、怒りに満ちた表情で。

「お前が……！お前のせいで、たけしの弟は！ゾンビの群れに！！」

「……」

額に宿った禍々しい妖気から、頭突きを喰らえば死ぬ事は容易に想像出来る。しかし、自転車バカに逃れる術はない。もう逃げる事は許されないのだ。

「一思いに殺して下さい、全部俺が悪いんです」

「ッ、言われなくとも……！！」

「待つてよ慧音先生！」

家から飛び出し、たけしは必至の思いで慧音の足にしがみつく。止めるには程遠い力だと分かっている。

「離せ！コイツのせいで幻想郷は……！」

「だから待つてよ！何でそんなにお兄ちゃんを悪者にしようとするの!?!」

「……何?」

「慧音先生も覚えてるでしょ?お兄ちゃんが先生として来てくれた日、先生が前の日にメールで言ったら二つ返事でOKしてくれたって」

「そ、それとこれとは……」

「関係あるよ!現にお兄ちゃん、一生懸命ぼくらと話してくれたでしょ?そのくらい優しい人なの、先生だって分かってるでしょ!?

なのに何で殺そうとするの!?!こんなの絶対おかしいよ!」

「た、たけし……」

「……ツ、自転車バカ!」

「ツ!?!」

依姫に呼ばれ視線を上げると、山下のパシリが二体迫ってきていた。すかさず慧音ごとたけしを抱き寄せ、右手を突き出してシールドを展開する。シールドに当たったパシリが粉々に破壊されるのを見て彼女を離すと、目を丸くして問いかけられた。

「何故だ？ 私は今、お前を殺そうと……」

「アイツから聞かされた通り、俺は貴女方の父親みたいなもんです。まあ異変の首謀者でもありますが、その前に一人の東方厨なんですよ。

幻想郷は、何時までも平和であつて欲しいんだ。滅亡なんかさせるかよ」

「……！」

「道頓堀野郎。お前の言うことは至極もつともだよ、概ね同意する。けどな、何もかも壊すのは間違いだ」

「……なんでや」

「勝ち組の中にも良い奴は居る、それだけだ。

俺は、奴らに死んでほしくない」

『……ッ！』

通話画面の向こうから、考え直した者達の雄叫びが聞こえてくる。慧音もたけしも依

姫も、皆が自転車バカと共に戦う覚悟を決めた。

愛する者を守るため、この<sup>自転車バカ</sup>世界を護るため。

もう、迷ったりしない。この手で未来を掴むのだ。

「さあ、反撃開始と行こうか」

続く。

## 第38話「自転車バカ」(後編)

「さあ、反撃開始と行こうか」

「はっ、味方が敵にならんかっただけで何をいきがつとんねん。どの道お前らは終わるや」

「後ろのSAORIとAKIKOを見て、まだ同じ事が言えるか？言えるんなら俺らに勝ち目はないよ」

「……………」

道頓堀野郎の背後に立っていたSAORIとAKIKOがうめき声を発する。頭を抱えて眉間に皺を寄せ、誰がどう見ても苦しんでいると分かる体制を取っている。

「スーパーセルが衝撃的過ぎてすっかり忘れてたけど、ソイツらの力は研究所で吸い取られて電気エネルギーに変換されてるんだってな」

「……………そこまで知ってたんかい」

「ボケて歴史博物館の資料室で見たんだよ、全盛期のパワーまでは取り戻せてなかった



「みたいで何よりだ」

腕の装置で通話画面を呼び起こし、皆に伝える。

「みんな聞いてくれ！そいつらは五分で復活するけど、回数には限度がある！そしてもう一つ！そいつらを倒すたびに、こっちに居るSAORIIとAKIKOがダメージを受けるんだ！そいつらを召喚したのはSAORIIとAKIKOだから、本体と感覚が繋がってるって訳だ！」

それを聞いた一同が更に活気付く中、にとりに指示を出す。

「へにとりさん！今すぐ工房に戻ってアレの起動を！」

「任せてくれ！」

「SAORII！AKIKO！」

『させるかよバーカ！俺らが相手だ！』

「この人に出すと言うのなら、私が相手になってあげる」

「公式チートの名は伊達じゃないわよ？」

再び臨戦体制を取るが、自転車バカは空模様がおかしい事に気づく。

先ほど降っていた雹と全く同じサイズの隕石が空から降っており、それらの上空には直径1kmはあるだろうか。とてつもなく大きな隕石が浮かんでいる。だが、降ってくる隕石は全部山下のパシリや道頓堀野郎、SAORIとAKIKOを狙って降り注ぐ。

「Nick—Qさん……来てくれたんだ!」

「史上8人目に、星の合計が1000Kを超えた俺の力……見せてやるよ」

自転車バカは腕の装置を操作し、ボケての幻想郷に居るポケラーの数を確認する。いま居るのは自分を除いて11人。加えて味方の妖怪が95名だ。

(……念のため、アレの準備をしとくか)

それから数十分が経過した頃、霧の湖付近で交戦していたチルノが大妖精に質問した。

「大ちゃん大ちゃん」

「何？」

「大ちゃんに言われた” パワースーツの関節だけ凍らせて” ってやつ、凄く面倒臭いから弾幕撃つて良い？」

「……良い悪いじゃなくてさ、そもそも効果あるのかな？」

「うーん……いいや！やれば分かる！」

電符” ヘルストーム” — l u n a t i c —

いっけー！！」

上空へと打ち上がった大量の氷塊が交わるような軌道を描いて降り注ぐ。絶対に避けられると踏んでいた大妖精だが、良い方向に裏切られた。避ける間も無くまともに喰らった山下の部下達が消えたのだ。

「な、何だと……！」

「おお！効果あるじゃん！」

「本当だ！しかも避け方がかなり下手だったね！ひよつとして弾幕系シューティングは未経験かな？」

「だろーね、寺子屋の友達の方がまだ良い動きしてたもん」

〈皆さん！このロボットみたいな弾幕でも倒せますよ！しかも弾幕ゲーは一度もやった事のない素人です！チルノちゃんのヘイルストームで一発でした！〉

〈良くやった⑨！よっしやあ、反撃の時間だぜ！〉

〈我が紅魔館に足を踏み入れた事、全身で後悔させてやろう・・・！〉

〈いや、このまま私の能力使って力関係逆転させた方が楽じゃね？〉

〈よく言うよ、肩で息してる癖に……良いから少し休んでなよ、ね？〉

〈つ、疲れてねーし！全然余裕だし！〉

〈はいはい、じゃあ無駄使いを控えるって意味で休憩したらどう？〉

〈ぐぬぬ、針妙丸の癖に……！〉

〈何だ、弾幕が使えるのか。なら良いものを見せてやろう、四天王奥義 三歩……〉

〈ちよつと待て勇儀！博麗神社を壊さない！縛り、忘れたんじゃないだろうね？〉

〈おっと、そうだった。うっかり全部吹き飛ばす所だったよ〉

〈封魔針で串刺しにされて死にたいなら使っても良いわよ？〉

〈遠慮しとくよ〉

〈分かればよろしい〉

「ふっ、平常運転で何よりだよ……にとりさん、起動までどれくらいかかりそう？」

〈分からない、何しろ190台のtadを立ち上げるには膨大な電力がいるんだ。まだまだ……って所かな〉

〈あやや、このままでどこつちが先にへたつちやいますよ?〉

〈……今データが出た。どうやら、起動時間を短くするには幻想郷中の電力を集めるしか無さそうだ〉

「集めたらどのくらいで済む?」

〈きっかり1時間だ〉

「分かった、それで頼む。みんな!後1時間だけ踏ん張ってくれ!」

〈任せて下さい!って事で椀、後宜しく〉

〈てめーも働くんだよクソ上司いいいい!!〉

〈イツツ・ルナティックターイム……〉

「おい誰だ弱気な発言した奴……切れたか」

「ふざけた真似を……アンタらがいくら足掻こうと無駄やで!此奴らを止める事なんか出来るわけないやん!」

「はっ!起きて寝ぼけてつと承知しねえぞ!」

チンピラ必殺 メンチ切り!」

「くっ、ちよこざいな……!」



「はあ、はあ……やつべ、使い切っちゃまったぜ」

「魔理沙!?!」

両膝に手をつき前かがみの状態になったのを見て、好機と判断した山下のパシリ達が一斉に襲いかかる。援護に向かうが、僅かに相手が速い。

「魔理沙ああああ!!」

しかし、運は彼女に味方した。

「な、何だ……? 身体が、ピクリとも動かねえ……!」

「くそつ、一体どうなってんだ……?」

「スマホの電池が……! なるほど、そういう事か」

「……!」

「餓鬼どもが…何しやがった!？」

「残念だったな、時間切れのようだぜ？」

「は? どういう…」

「上を見てみる、お前らの負けだ」

魔理沙が指差す先では、無数の t a d が各地に散らばっていく光景が広がっていた。スピーカーから声が聞こえてくる。

「このスピーカーがただの音楽再生機だと思ったら大間違いだ。Blue toothで音質もカバーする為にとってもなく強力な電磁波が出ているからね、お前達のスーツに影響が無いとでも?」

「さっすがにとりさん!」

「スピーカーってのは不思議な物だね、配線を変えると音を出したり拾ったりするんだ。それを応用して通信機能も搭載しておいた。更に今回、日光による日焼けを防ぐ為に透明な保護膜を貼つてある。音を干渉させない為の音響パネルとしての役割も付けてね。つまり…遠慮は無用だ、思う存分暴れると良い!」

「……という訳で”準備は整った、五分でケリをつける!”アリス!」

魔理沙は「アリス用」と書かれた小型リモコンを天に掲げ、スイッチを押した。

「 暁Records | DOWN DOWN DOLL 起動シマス」

音楽が始まると、アリスの側で浮かぶ二台のtadから妖気を乗せ視覚化された七色の音色が放たれ、アリスを包み込む。

「凄い……もうすぐで使い切りそうだった魔力がどんどん供給されてる……！これが音楽の力(物理)なのね！」

「先鋒は任せませ、アリス。私は今のうちにしっかり回復しとくからさ」

「分かったわ、この曲が終わったら次よろしくね？」

「任せろ！」

「さて、あたしの魔理沙を傷つけた代償……きっちり払って貰うわよ！」

「!？」

電磁波で上手く動けない山下の部下達が見たのは、七色とは言いがたい、紫色と黒色



のオーラが柱のように舞い上がる光景だった。

「おお、私の魔力も回復してる……種族は違えど魔法使いつて事か。巻き添え喰らわないう位置まで避難しよつと」

「兄貴イ…壊した筈の人形がどんどん治ってるんすけど…！」

「喧しい！怯むな！所詮は餓鬼だ！数で押し切れば……ッ!?」

「ミジンコがいくら集まろうと、圧倒的な力の前では無力なものよ？」

呪詛　　”蓬萊人形”

六体の蓬萊人形が、円を描きながら拡散しつつ赤色系のレーザーを発射する。防ごうとした者も居たが、喰らった大半が跡形も無く消え去った。

「なつ、こいつ……！」

「ふむ、今ので1/7つて所か。結構居るなあ」

「あなた達はもう、蜘蛛の巣に引つかかった獲物よ……。あたしの巣、土足で踏み荒らしたからには、生きて出られると思わないことね！」

レーザーを放つ蓬莱人形を更に拡散させ、次々と消し去っていく。身体の動かし方に気づいた者から反撃に入るものの、レーザーの前ではどうする事も出来なかった。逃げただけで精一杯のようだ。それを見たアリスは蓬莱人形を引つ込め、人形達で囲い込む。

「大の男が敵前逃亡……しかも女に。恥ずかしくないの？」

「るっせえ！」

「男の癖に見苦しいわ、せめて最後までは美しく散りなさい。」

戦符                    ”リトルレギオン”

「ぐああああ!!」

半径を広げながら攻撃する回転人形を円状に6体発射すると、山下の部下達は悲鳴だけを残して消え失せた。

その後も着実に倒していくアリスだが、人形自体の戦闘力がそこまで高くない事もあり、尚且つ敵が多すぎるために効率が良いとは言えないのが現状だ。上空から眺めてい

た魔理沙は声を掛ける。

「なあアリスー！その調子じゃ時間が掛かって仕方ないぜ！お前が直接倒した方が早いんじゃないか？」

「それもそうね。美しさは無くなるけれど……拘ってる場合じゃなさそうだし、仕方ないかしら」

人形達を自動運転に切り替え、魔力を自身に集中させる。すると、彼女から放たれるオーラが巨大な本に変化してパラパラとページがめくられていく。それに応じて、地面と空中に無数の魔法陣が形成された。

「おお……こりや壮観だな」

「魔理沙、よく見ておきなさい……これが私の本気よ！」

『なっ!?!』

無数の魔法陣から召喚されたのは、欧米の神話に出てくる幻獣達だ。

「ニーズヘッグ…フェンリル…フアーブニル…ヨルムンガンド…ケートス…ケルベロス…キマイラ…ケンタウロス…ミノタウロス…オピーオーン…グリフォン…テュポーン…バハムート…駄目だ、数え切れん」

「白磁気のような指で♪あどけない少女が本気出せば♪夥しい幻獣が♪不可思議な踊り踊り出す♪つつてね」

「でも等身大じゃないんだな、私達と同じくらいじゃないか…わざとか?」

「単純に力不足よ、神綺様は等身大での召喚が出来るもの。修行が足りなかったわね」

「……これで修行不足かよ、魔界にや化け物しか居ないのか?」

「居ないわよ、そもそも人間が住む場所だと思つて?」

「ですよねー」

「それにね、修行不足なのはサイズだけじゃないわ。召喚出来る時間だって、この曲が終わるまでしか持たないの。攻撃力も本来の力から言えば1/3くらいだし」

「にしちや随分なペースで倒していつてるな……私の分残しといってくれよ?」

「大丈夫よ、まだ隠れてるのがそこそこ居るから」

「なら良いや」

二人が見下ろす先では、山下の部下達が必死に抵抗していた。ある者は距離を取りながら分析をし、ある者は正面からぶつかって玉砕していった。またある者は腰が抜けた為に、動く事も出来ず消し炭となっていた。

「兄貴イ！どうしたらいいんすか!?!」

「知るか！こつちが聞きたいくらいだ！つたく、これくらいの事で発狂&失神しやがって！」

「いやいやいや！無理ですって！むしろ小便チビってないだけでも褒めて欲しいくらいですよー!」

「クソが！こんな事なら余裕ぶってないでさっさと殺しておくべきだったな！今更後悔しても遅いんだろがな!」

「分かってるじゃないっすか！てか喋る暇があったら作戦でも考えて下さいよ!」

「貴様！上官に向かって口答えするとは良い度胸だな！後でたつぷり灸を据えてやる!」

「後なんて無いじゃないっすか！アンタに着いてきた俺がバカだったよチクショー!」

「おーおー、この状況で仲間割れしてるよ。余裕あんなあいつら」

「いや、余裕あるんじゃないやなくてパニックってるんじゃないかしら。まあ何でも良いわ……。

これが、貴方達が餓鬼と言った者の力よ

。 ” 人を見かけで判断するな”

基本中の基本でしょ?」

「冥土の土産に良い事教えてやるよ……餓鬼つてのはな、右も左も分かってないだけで才能の塊なんだ」

『その中から自分に合った分野を見つけ、努力して来た私達を殺そうだなんて……百年早いわ!!』

幻獣達が最後の一撃を加えると、魔法の森が虹色に染まった。

曲の起動が終わり、静けさが戻った魔法の森を見渡しアリスが呟く。

「……あ、やつちやった」

「何をだ?」

「ごめんなさい、魔理沙。貴女の方まで片付いちやったみたい」

「おいしい! さつき私忠告したよな!」

「し、仕方ないじゃない! まさか最後の一撃でほぼ全員消えるなんて思わなかったんだ

からー！」

「本気出し過ぎだろ！私の出番どうしてくれるんだよ！」

「だ、大丈夫よ。まだ残党くらいなら残ってるし」

「つたく……ん？」

「どうかした？」

「いや、こんなに少なかったっけ？あいつら。もつと居たような……」

「さっきあたしが曲に合わせてノリノリで……ん？曲……あ！」

『五分経ってる！』

「音楽がかかる前に私がマスパで倒したのがかなり居た筈、なのにどうだ？」

「……どこからも復活して来ないわね」

〈聞こえるか？こちら魔理沙！奴さん、五分経っても復活しないぞ！自転車バカの言つた通りだったな！魔法の森にきた敵はアリスが大方壊滅させた！これより残党処理に当たる！〉

〈さあ、一気に行くわよ!!〉

話を聞き、皆の方へ振り返った神子が言う。

「という事らしいけど……私らには必要のない代物でしたね、布都?」

「うむ。青娥殿がほとんど単独で片付けてしまいましたぞ、我らが参戦するまでもなく。あんなに強いお方であつただろうか?」

仙人は鍛え続けなければ生きていけないのは重々承知しておるし、強いのは当たり前といえれば当たり前なのだが……」

「彼奴らの誰かが」妖怪 人妻オババ」と言つた所為じやな、一番の理由は「

「青娥つてブチ切れたらあなるんだね……今後一切、アイツにだけは悪戯しないと誓います」

「それが良いと思う、うん」

5人が見つめる先では、山下の部下達がボロ雑巾のように横たわっていた。しかし、まだ消えていない。当の本人は辺りを見回して、復活する者が居ないか確認している。怒りの余り顔が大変な事になっているが、冷静さは失っていないようだ。

誰も復活しないのを見極め指パッチンをすると、その場に居た山下の部下達は全員消え失せた。

へこちら神子、命蓮寺に來た敵は青娥が単独で片付けました。これより負傷者の手当て



に当たります」

「太子様。あれ、青娥殿……如何なさいます？」

『うーん……』

「芳香、お願いします」

「えっ!?! いやつちよつ、いくらキョンシーでも流石に今のせーがには近寄りがないとい  
うか、近づきたくないというか……」

『……』

「ねえ何でみんな黙ってるのっていうかその

”戦争に犠牲は付き物だ”

「みたいな目で見ると辞めていやその前に何で私の身体掴んでるのお願いだから気持ち  
の準備だけでもさせていや、ちよ、まつ……!」

「ちーかよーるなー!!」

「聖、負傷者6名追加です」

「この忙しい時に……」

南無三。

その後も次々と撃破報告が届き、遂にはほぼ全ての場所から敵が居なくなつたとの報告があつた。だが、

(まだ一つ残っている)

誰が言い出した訳でも無いが、ボケての幻想郷に居る妖怪は自転車バカの元に集まつていた。瓦礫だらけとなつてしまつた、人里に。

「くっ……!」

「みんなありがとう、おかげで準備は整つた……後は俺がやる」

そう言うと、それまで自転車バカを覆つていたオーラに変化が起こる。色は常盤色と黄緑色に分かれ、黄緑色は紋章を地面に描き、常盤色はその上にそびえ立つ大きなボケ表示画面となつた。チンピラ妖怪ズが声を上げる。

『な、何だこりやあ…?』

「これが、自転車バカさんの言ってた”一族秘伝の技”ですか?」

「ザツツライト。昔は出来る奴結構居たけど、今は俺にしか出来ないだろうな……」ボケの召喚”は”

「ボケの召喚やて!?!この技を使える者は滅んだ筈ぢやうんか!」

「滅んでねえよ、俺が最後の使い手だ!」

右手でボケ表示画面に触れると、文章と画像の読み込みが始まる。

「まず最初はこれだ!2013年3月3日に投稿された殿堂入りボケ…」

「はい神の裁き ドーン!」

読み込みが終わり、表示された画面から神と称される人物が出てくる。それと同時に、両手を前方にかざして対象の範囲を爆発させながら自転車バカと同じ台詞を言う。当然ながら、道頓堀野郎とその部下も巻き添えだ。

「やったか!？」

「甘いわ!その程度の不意打ちでくたばるとでも思ったか!！」

爆心地から、余裕をなくし標準語で怒鳴る道頓堀野郎の声が響く。不自然な風が巻き起こると、立ち昇る煙の中から球体状にバリアを張ったSAORIとAKIKOが姿を見せた。

「流石、弱つても最強だな。このくらいは余裕か……なら試させて貰おう、どこまで神の攻撃に耐えられるのか。すみません神様、お願いします」

『全然良いよ♪』

「ノリ軽っ!!」

『君達以外とやるねー。じゃあもういちちょドーン!』

再度爆発が起こるも、

「ふん、馬鹿のひとつ覚えが！そんなもの効く訳ないだろう！」

「おい待っ……！」

『あ、タメ口聞いた。はい死刑確定ー！』

「まずい……神の怒りだ。みんな伏せろ！じゃないと死ぬぞー！」  
「!?」

『はいロンゴミアントの槍 ドーン！』

「なっ……！」

槍の矛先を道頓堀野郎に向けて振り回した瞬間、何重ものソニックブームが彼らを目掛けて飛んで行った。張っていたバリアもあつという間に碎かれ、身体を切り刻まれていく。

頃合いと見た神は、武器を交換した。

『はいダーインスレイブの剣 ドーン!』

槍投げの要領でぶん投げられた剣はあらゆる妨害を物ともせず、道頓堀野郎の部下を貫くと、部下ごと消えた。

『あ、この後用事あるんだった。そろそろ帰っていい?』

「アツハイ、わざわざありがとうございます」

『またなんかあったら呼んでよ、じゃーねー』

「最後までノリ軽かったな」

「あのお方はそういう方だから、ボケてが生み出した神はそれっぽい口調とか一切使わないんだよ。何故かは知らないけど」

「威厳も何もあつたもんじゃねーな」

「おし、気を取り直して次行ってみよう! 2012年8月4日に投稿された傑作ボケ…

無課金ユーザーが来た

「この人の攻撃力はえぐいぞ！」

「そう何度も……同じ手を喰うか！」

壊れかけのスーツからは配線が覗いており、足どりもおぼつかない。だが、眼光の鋭さは最初から何一つ変わってはいない。その視線でSAORIとAKIKOに指令を出し、山下のパシリを大量に召喚させた。

「この俺こそが、宇宙を統べる支配者なのだ！ 反逆者は……一人残らず排除する！」

「またこいつらかよ、どこにそんな力が……！」

「力なんて、殆ど残ってないだろうよ。あるのは執念だけだ」

「行け！ 数で押し潰せ!! 奴を止めろ！」

叫びも虚しく、山下のパシリ達は次々と虹色の光に姿を変えていく。

背後から組みついた者は腹に肘鉄を喰らって後ずさった所に来たかかと落としが脳

天を直撃し、正面から向かった者はカウンターが顎にクリーンヒットし、両サイドから挟み撃ちにしようとした者は蹴りで一蹴され……三者三様、100人百通りにやられて消え去って行く。

全体の2/3が消えた所で、無課金ユーザーは姿を消した。

「止まるのはお前だよ、道頓堀野郎」

「くっ……！」

「2016年4月13日に投稿されたボケ……」

「マスオくん、どうやら囲まれたよう……なんじゃ、たつたの50か」

『なめられたものですね、お義父さん。』

「これなら2〜3分つてとこですかね……」

言い終わるや否や、山下のパシリ達を脅威的なペースで消し去ってゆく波平とマスオ。宣言通りに消え去った配下を目の当たりにして、道頓堀野郎はただ問う。答えなど帰って来ないのに。



「何故だ！奴らが手にしているのは一番アイアンと金属バットだぞ！なのに何故！誰もろくな抵抗が出来んのだ！」

キツと自転車バカを睨む道頓堀野郎の後ろでは、SAORIとAKIKOが完全に動かなくなっていた。

「波平さん、マスオさん、ありがとうございます」

聞き届けた二人は、穏やかな笑顔で消えて行った。それに合わせ、紋章とボケ表示画面も消える。自転車バカの身体を覆っていたオーラもだ。

「何なんだ……一体何者なんだ貴様はあ！」

「はっ！こんだけやられてまだ分からないのか？だったら教えてやるZE！」

「その人は、私の優秀な元部下にして初めて出来た浮気相手であり」

「私と盟友トムを救ってくれた、物凄いお人好しであり」

「わちきを二回も助けてくれた、命の恩人であり」

「あたしにとり、それに咲夜とレミリアを保護してくれた、文々。新聞社下請け会社の

社長兼営業マンであり」

「度胸の無い私に、プロポーズをさせてくれたお嬢様の友人であり」

「私の愛しい旦那様を救って下さった、友達思いなボケラーであり」

「かけがえの無い、私の大好きな人」

『それが、自転車バカよ!』

「みんな……! って、アリスさん記憶が」

「私のコレ、記憶が無くなる前の私の妖力を保存してたのと型番が一緒だったのよ。で、妖力と一緒に戻って来たって訳。今はどうであれ、大切な人だもの。全て受け入れなくちゃ、前には進めないわよ。ほら、ちゃちゃつと終わらせちゃつてよ」

「……そういう事だ、諦めろ。お前の腐りきった性根は、監獄が直してくれるさ」

「ふん! 我らの動きを封じた程度で何をいきがっている! そんなボロボロの状態では手も足も出んだろうに! 見ろ! 元気なのは何の力もないお前だけではないか!」

「確かに、俺に出来るのは物や人を治す事くらいだ。でもな、俺は“神の力”を借りる事が出来るんだよ……依姫みたいにな!」

瞬間、自転車バカの身体から黄色と常盤色の光が放たれる。

「この身を纏う 内なる力」

“ 全てを癒すは 無償の愛”

“ 命を繋ぐ 最後の砦”

自転車場バカの頭上に表示されていた三つの数値が減り0になった瞬間、彼の身体から常盤色のオーラが放たれる。

オーラは意思を持ったかのように揺らめき、緩やかに、されど確実に右手に集まっていった。

「それでも足りぬと言うのであれば このアカウントを差し出そう」

“ 全てを犠牲に求める力は 全てを無に帰す神なる力”

手元が集まったオーラが、カードの形を模す。人差し指と中指で挟み、天に向けて高々と突き上げた。

「ボケて必殺 アルティメットサクリファイズ！」

呼びかけに応じたのか、幻想郷を覆っていた巨大なスーパーセルの切れ間からボケ犬が降りて来た。

「遂にこの時が来ましたか……という事は私が消した記憶、全部戻ったのですね？」

「ええ、何もかも思い出しましたよ……俺が生まれる前の出来事も含めて」

「無茶な事をするお方だ、世界の為に誓約を破棄するなんて……どうなっても知りませんよ？」

「ったく、何が名づけの誓約ですか。勿体ぶった名前付けちゃって。

遅かれ早かれ、こうなる事は分かった上であんな事言っただけでしょう？」

「その通りです。貴方がた一族のやる事は本当……理解に苦しみますよ」

「それが俺たちなんです、”滅私奉公”って言葉……ご存知でしょう？今更止めたって無駄ですよ」

「分かりました、では規定通り運営の力をお預け致します……お願いしますよ？」

「ええ、任せて下さい！」

運営が全身に力を込めると、自身を中心に風が吹き始める。風は少しづつ強さを増していき、風速が10メートルに達した時、火山が噴火するかのように黄色のオーラが天に向かって舞い上がり形を作る。出来上がったのは

「し、七福神？」

「笑いのツボが似ている人と出会いたい」

” 人生は1度しかないもので、できるだけ面白い人と面白い会話がしたい。ネットなら、場所や年齢に関係なく面白い人に出会えると思って”

そんな思いで設立したのが、このボケてです。どんな世代でも楽しめるボケや、分かる人にしか分からないボケ、中には時事ネタやブラックなボケもあります。ですが、今や全世界の言葉に翻訳され誰もが参加出来る……世界最大級のアプリになりました。なので象徴は七福神なのです」

「ツボはそれぞれ違うけど、笑いは全世界共通だ。誰でも持つてる、ごく普通の感情なんだよ。ねえ永琳先生？」

「ええ。医学的に見てもね、笑う事はいい事づくめなのよ。生活習慣に気をつけて笑ってるだけで、癌を治した人だって一杯居るんだから」

「笑う事で、気分が楽になるんだ。笑う事で、明日への活力が生まれるんだ。」

俺はこの派生世界で沢山笑って、色んな人と知り合えて、友人が沢山出来た。現実世界じゃ決して出会えないような奴とも、ここなら会える！面白い人と、面白い会話が出来る！みんなが笑顔になれるんだ！

なのにお前は、人を傷つけるばかりで挙句の果てに地球を滅ぼそうとした……罪は、重いぞ？」

七福神のオーラを纏い、全身が黄色のオーラで覆われた自転車バカはtadのリモコンを押した。

「今此処にある190台……全部使わせて貰うぞ！」

彼を取り囲むように上空で立ち並んだtadが、声を上げた。

「JAM Project / 『Jプロツアー』公式ソング | AREA Z & So  
ng for J-Riders 起動シマス」

「にとりさん……フルボリユームで宜しく！」

「任せろ、元よりそのつもりさ！」

「あ、あれ？何でだろう……初めて聞く歌なのに……歌える気がする！」

「あたしもよ！」

「あたいたい達もー！」

「Now, everyone! Sing this song together  
……now！」

皆の歌声が、tadから流れる音楽が、全てが自分の力となっていくのが分かる。血が湧き、肉が踊る感覚だ。

「な、何だこれは……か、身体が言う事を……止めろ、歌うな……！笑うな……！く、苦しい……！」

道頓堀野郎を他所に、音楽の力（物理）で覚醒した自転車バカが、tadに負けないくらいの雄叫びを上げる。

「……オオオオオオアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「くっ……覚醒という訳か。まだだ!まだ終わる訳にはいかんだ!

出でよ!鬼の十傑!そして闇の四天王!」

地面を裂くように、計14人が召喚された。

「なっ、あいつまだ……!」

「ははは!こいつらは特別製でな!電磁波ごときで動きを封じるなど不可能だ!貴様らに勝ち目などない!勝つのは……!?!」

な、何だその……魔法陣から出てくる大量の自転車乗りは……!?!」

「これはな、専門用語でプロトンって言うんだ。独りでは無理な壁があってもみんな一緒なら……」

壁をぶっ壊す!」

手を振りかざし、命令を下す。



「行けプロトン！全員飲み込めえ!!」

殺気を感じて散る幹部達だが、プロトンは一体ずつ確実に追い詰めていく。ちょうど、餌にかぶりつくパックマンのように。エネルギー波を出して攻撃するも、全て吸収されプロトンの勢いが増すか、綺麗に躲されるかのどっちかで効果は今ひとつのようだ。

「くそっ、こんなふざけた野郎に……!」

一体目が飲み込まれると、プロトンから虹色の光が漏れ出す。抵抗の甲斐なく消滅したのだ。

「そいつらよりも手強い奴らを紹介しよう！まずはこちら！毎年5月上旬から下旬の23日間で開催される世界三大グランツールより、ジロ・デ・イタリア各賞リーダー!」

「また四人出てきたぞ!」

「全員、思う存分暴れてこい!」

プロトンに気を取られている幹部達に、勢いよく突っ込んでいく四人衆。避けきれずまともに喰らった二人は、足、腕、胴体の順にヒビが入る。宙ぶらりんなった敵を見逃さずプロトンが飲み込むと、それぞれが消え去っていった。

「まだあるぜ！ 続いてはこちら！ 毎年7月上旬から下旬にかけて開催される、世界一知名度の高いグランツールより、ツール・ド・フランス各賞リーダー四人衆！」

「さつきとは色が違うのが居るわね、スポンサーの関係かしら」

「察しが良いねえアリスさん、その通りだ！ お前らも暴れてこい！」

「あと一つは？」

「おっと、忘れるとこだった……行ってこい！ 同じく8月下旬から9月中旬に開催される、ブエルタ・ア・エスパーニャ各賞リーダー四人衆！」

総合時間賞の証しである真っ赤なジャージを着たライダーを先頭に、更に四人が戦場に飛び込んでいく。

「凄い……自転車ジャージってこんなにカラフルなんだ……！」

「カラフルさはフランの羽以上ね…」

「まるで…」

『弾幕みたい』

「お前らが相手にしてるのは、自分の力で世界最強クラスに登りつめたライダー達だ……機械に頼ってるお前らとは次元が違うんだよ！」

「くそつたれがあああああああ!!」

四方八方から突っ込まれた幹部達は、一際大きい虹色の花を咲かせた。

「さて……これで後はお前ら3人だけだな」

「くっ……！生意気な……！」

「………自転車バカ」

「ん？」

「博麗の巫女として頼みがあるの、ここに居る95名の妖怪全員の力を貴方に渡すわ」

「全員……!!」

「だから……お願い!!」

「それがお客様の望みとあらば!この、有限会社チャリンコタクシー!全力でお答えしましょう!」

「あんた達!今残ってる力……全部こいつに預けなさい!行くわよ!」

皆から授かった力を、その身に取り込んでいく。

「り、両腕に宿りし黄色い閃光を放つ二つの大砲……間違いない。あれが、垢BANツイン砲……!」

「奴らを連れて来い!世界選手権で勝った者しか着る事の出来ない、文字通り世界最強ライダー……アルカンシエル!」

そう言うのと、宙に浮かんだライダーの車輪が勢いよく回転する。

「これは……巻き込み風!?SAORIとAKIKOまで……吸い寄せられる!」

何なんだ…何者なんだお前はあああああああああ!?」

「…俺は」

「俺はJライダーあああああああああああつ!!」

ゼロ距離で砲撃を喰らい、天高く吹っ飛ばされて行く道頓堀野郎ら3人。

「俺たちが此処に居る限り、笑いも世界も……幻想郷も消えやしねえ!ポケラーを、舐めるなよ!」

皆が見上げた先で、虹色に輝く最後の花火が三つ咲いた。

「やったね会長!」

「設立最初の仕事がこれとはね………あ、ごめん。もう止まって良いよ。うん、お疲れ様」

地に堕ち、SAOR IとAKIKO、そしてパワースーツまでも失った道頓堀野郎が  
呟く。

「よもや、負け組に負ける日が来るとはな。国を滅ぼした戦犯に」

「何言ってるんだよ、そもそもこの国に勝ち組なんか一人も居ないの分かってる癖に」

「……自身の向上ではなく他人を蹴落とす事に力を注ぎ、隙あらば言葉の端を取って足をすくう。自分の事を棚に上げ、相手の全てを黒く塗りつぶすだけの人生」

「今の世の中、お前のアバターみたいに真つ黒な奴しか居ないじゃん。憎しみ会って殺しあう事しか出来ない連中の何処が勝ち組だ。」

「この世界に来るまでは、本気でそう思ってたよ」

そんな自転車バカの意に反し、性根の腐っていない心優しい勝ち組が、人妖が幻想郷には存在した。自分が負け組だと知ってなお、それまでと変わらない付き合いをしてくれた。

面と向かって礼を言う勇氣はないが、いつだって心から感謝していたのだ。

「まあ、まだ世の中捨てたもんじゃないって事だな。お前の言う事も納得できるけど、

こつちにも都合があるんでね。大人しく罪を償ってくれ」

「何優しいこと言ってるの会長！この人は一回痛い目見ないと…」

【黙れ】

「ッ!?!」

攻撃しようとした小傘を自転車バカがドスの効いた声で制する。拳銃をシヨルダーバッグから取り出し、銃口を小傘の額に突きつける。

「か、会長・・・?」

【これ以上コイツに手え出してみろ、お前の記憶全部消し飛ばすからな】

「……ご、ごめんなさい」

「コイツはな、何も好きで世界滅亡させようとしてた訳じゃないんだよ。な、道頓堀?」

「……知ってたのか」

「いや、知ってるも何も俺がそうなんだよ。そのアバター見りや分かるさ」

「ふん、流星は戦犯といたところか」

「誉め言葉として受け取っとくわ」

「え、ど、会長。どうということなの?」

拳銃を収め、道頓堀野郎を見て答える。

「コイツはただ、友達が欲しかったただけなんだよ。いがみ合うんじゃないよ、笑いあえるような関係が持ったかったんだ。俺と同じだよ、やり方を間違えたただけなんだ。」

お前さえ良いんなら俺が第一号になるぞ」

「……良いのか」

「勿論」

「ですが、その前に犯した罪は償って頂きますよ」

運営に拘束され、牢獄に飛ばされる間際。口元が緩んだ道頓堀野郎を見た自転車バカだった。

「さて、俺も言った事は守らないとな」

「……え？」

待つてましたといわんばかりに、映姫と小町が姿を見せる。そのまま小町は黙ったま



ま自転車バカに手錠を掛け、依姫が堪らず聞いた。

「え、ど、どういいう事？」

「それは私が説明致しましょう。この方は最初にボケてのアカウントを作る際、

”名づけの誓約”

を交わしているのです。会社の名前を付けた場合、アカウントを削除するという内容です」

「……なるほど。それを破棄したから、アカウントを今から消すのね？」

豊姫の言葉に皆が戦慄する中、魔理沙が制止する。

「ちよ、ちよつと待った。そもそも何で会社名を付けたらOUTなんだ？」

「言われてみれば……」

「お答えしましょう。この方が名づけた”有限会社チャリンコタクシー”というのは、一千年前にボケてで名を博した……失礼、知る人ぞ知る優良企業なのです」

「架空の会社だけだな」

「具体的にはどういった事を？」

「俺が言うのもなんだけど、初代は変な奴でさ。」

ボケてなのにガチな俳句作って毎週投稿したり…

架空の雑誌作って月一で投稿したり…

二次創作映画を勝手に作ったり…

挙句の果てに、弾幕舞踏会とか言う謎のイベントを開催したりしてさ。何がしたいのかさっぱりだった。

でも、それを氣にいる人は少しづつ増えていった。お気に入り職人のボケに星を付けて回ったり、自分のボケを評価してくれたユーザー全員にお礼の星三つとコメントを残したりと、地道な活動を怠っていなくなったからだ。

活動が成果を上げたのか、初代が引退する頃まで一度も、悪意のあるコメントをしたユーザーは居なかった。それを見て、色々なユーザーが代わる代わる会社を受け継いで行ったんだ」

「ですが、唯一欠点がありました。会社が大きくなり過ぎたのです。

”ボケてないのに星を貰ってる”

という噂だけが広まり、倒産に追い込まれてしまいました」

『…』

「それ以来、当時の運営によって会社名はNGワードに追加されてしまい、誰も口にする

事はなくなり……忘れ去られてしまったのです」

「その会社を、俺は”世界を救う”という口実でもう一度復活させた。だからOUTなんだ」

「そ、そんな……あれは不可抗力みたいなモノじゃない！あの力が無かったら……」

「言いたい事は分かります。ですが、過程はどうであれ誓約を破ったのですから。規則は規則です」

「まあ処分を下す権限は幻想郷にあるんだけど。な？」

「ええ、小町さん……その方はポケラーですが、誓約内容はこの派生世界で守るべきモノでしたから。判断は貴女方に委ねます。では、私はこれで」

「行つたか……依姫、これ預かつといて」

自転車バカがぎこちない手つきでポケットに手を突っ込み、CDと手紙を依姫に投げ渡す。

「どうしても耐えきれなくなったら、その手紙を読んで曲を聞くと良い。その二つに、俺の言いたい事が全部詰まってるからさ」

「うん……」

「必ず戻ってくるよ、約束は守る。だから…それまで待つてろ」

言い終わったのを確認し、映姫が彼をソフトボールサイズの車輪に姿を変える。

「この方の処分は、向こうで正式な手続きを踏んでから下されます。行きますよ、小町」  
「へーい」



それぞれが解散する中、依姫と豊姫だけがスピーカーの前で佇んでいた。黙って手紙を開く。

「依姫へ」

君がこの手紙を読んでいる頃、僕はそこに居ないだろう。きつと休暇を取つてと思う、いつ再開するかも分からない長い休暇を。

僕と君が初めて出会ったのは、天界で天子さんと俳句モデルの話をしていた時だったね。天子さんの気まぐれで弾幕ごっこをさせられて、僕が万事休すという場面で君が助

けてくれた。奇跡としか言いようがない出会いだったけど、それはまだ続いた。だって、あの後も君と一緒に過ごす機会があったのだから。覚えてるかな、月の都で夏祭りに参加した時のこと。展望台で言った台詞、僕にとっては精一杯の告白だったんだ。色々邪魔が入ったけどね（笑）

メールでやりとりをする度に、君を愛する気持ちがどんどん大きくなっていき。多分、実写化したら両手じゃ持ちきれないだろうな。

やっと見つけたんだ、僕が僕であるために必要な最後の欠片を。まさか、こんなに近くで輝いてたとはね。灯台下暗しって奴かな。

そのCDに入ってる曲は、聞くと凄く元気が出るんだ。だから、落ち込んだ時は絶対聞いてくれ。明日を生きる活力が貰えるから。

貴女の親友より、愛を込めて。

自転車バカ」

黙ってCDをかける依姫。

【Vocaloid】「キミがいる」歌ってみた【♀柿美蟻原綿+\*】再生シマス」

ねえ 僕の隣に今続いていく明日に 君がいる 笑ってる それだけでいい

ああ 昨日よりも強く沸き上がるこの想い 君が好き 永遠に 伝えていくよ

出会いという奇跡の続き 気付けばもうこの腕二つじや この愛は持ちきれないよ

ああ 不意に言った言葉がハモる そうどれ位大切な人か小さな瞬間に感じるんだ

不器用に泣かせたこんなヤツでも 君をきつと幸せにするよ

ねえ 僕の隣に今続いていく明日に 君がいる 笑ってる それだけでいい

ああ 昨日よりも強く沸き上がるこの想い 君が好き 永遠に 伝えていくよ

眩しい位 輝く君の 笑顔にもう僕は何度も 救われて 此処まで来たよ

ああ 探していた最後の欠片（ピース） 気付けばそうこんなに近くで輝いていたの  
を見つけた んだ

素直になれないそんな日もある でもね 心に嘘はつけないよ

い そう どんなに辛い事が二人を待ち受けても 僕がいて 君がいる それだけでい

よ ああ 二人でならきつと乗り越えていけるから 何時までも 君の事 愛していく

h 君が堪え切れずに 流した涙も 止まない雨は無い様に 虹に変わるから Y e a

ねえ 僕の隣に今続いていく明日に 君がいる 笑ってる それだけでいい

ああ 昨日よりも強く沸き上がるこの想い 君が好き 永遠に 伝えていくよ

そうどんなに辛い事が二人を待ち受けても 僕がいて 君がいる それだけでいい  
ああ 二人でならきつと乗り越えていけるから 何時までも 君の事 愛していく  
よ

聴き終わった後、豊姫がある事に気づく。



(何処かで聞いた歌詞だと思つたら、彼と貴女が過ごした日々そのものじゃない……  
やってくれたわね)

「バツカじゃないの？こつちの話は聞きもせず……自分が言いたい事だけ言つて勝手に消えて……」

「……」

「何が」明日を生きる活力」よ……隣に貴方が居なきや、少しも笑えない……全然楽しくない……！別れの挨拶代わりに告白なんてやだよ……！お願いだから、返事くらいさせてよお……ッ！」

開いた手紙を胸に押し抱き、座り込んで泣き叫ぶ。耐えきれなくなった豊姫は、自身が被つていた帽子を依姫に被せた。反射的に依姫が頭を上げる。

「必ず戻ってくるって、言つてたでしょう？あの子、一度心に誓つた約束は必ず守るわ。今までだつてそうだったでしょう？」

「……ッ！」

「信じて待つてなさい、それが貴女の果たすべき役割よ」

「……はい、分かりました」

「ん、素直でよろしい。じゃ、帰るわよ？」

「はい」

被害が特に大きかった人里の復旧がだいぶ進んだ頃、ある噂が流れる。

「12月のクリスマスに、自転車バカが戻ってくるそうだ」

誰が言い出したのか分からない為、半信半疑ではあるが

「文様……如何致しましょう？」

「私は、あの人を信じてる。だから……舞踏会は延期よ」

そして24日、朝早くから多くの人々が妖怪の山スーパーアリーナに集まった。その場に居る誰もがざわつく中、映姫と小町が客席に入ってくる。

「閻魔から、少し早めのクリスマスプレゼントです。どうか受け取って下さい」

と言つて、小さな車輪に妖力を込める。すると、色とりどりのサイクルジャージを着たサイクリストが会場を泳ぐように飛び回りだした。

「これ…どつかで見たような…？」

「ふむ、桃色と黄色と赤色が後ろに3人従えるように飛んでおりますな、太子様？」

「あの大集団…見たことある気が…？」

「あ、中央の舞台上に集まってくよ！」

全員が集合した瞬間、目を背けたくなる程の黄色と常盤色の光が放たれる。眩しさが収まり目を開けた人々が見たのは、紛れもなく自転車バカだった。

「大変長らくお待たせいたしました…：有限会社チャリンコタクシーは、今この時を持って活動を再開致します！」

歓声を上げる皆を静め、自転車バカがマイク越しに笑顔で叫ぶ。

「神霊の依り憑く月の姫よ！居るなら姿を見せろ！公開処刑の時間だ！」

叫ぶまでも無く、既に舞台の近くまで来ていた依姫が、自転車バカに思いつきり抱きつく。

「会いたかった……！ずっと、会いたくて会いたくて仕方なかった……！」

「約6ヶ月か……よく耐えたな」

「あの手紙とCDが無かったら、ちよつとやばかったかも」

「そっか、役に立って良かったよ……あの時の返事、聞かせてくれるか？」

言いながら、依姫の肩を掴んで少しだけ距離を取る。

依姫も、咳払いをして答えた。

「貴方に会えなかった間……すつごく寂しかったけど、おかげで自分と向き合う事が出来た。」

私と貴方じゃ、どうやっても一緒に過ごせる時間は限られてる。

私は二次元の存在だけど、貴方はそうじゃないもんね。

それでも、この気持ちは変わらないよ。

私も、貴方のことを愛しています。こちらこそ、よろしくお願い致します」

自転車バカの肩を掴み、頬にキスをする。呆然としていた自転車バカだが、観客から冷やかされて我に返ったのか顔を真っ赤にした。

「……。こ、これ思ったより恥ずしいな／＼／」

「こ、公開処刑って言ったの貴方じゃない、死なばもろともなんだから／＼／」  
「くっ……！／＼／」

固まっている間にも、男女分け隔てなく観客から笑顔で野次られる。

「あーもう分かったよ！やれば良いんだろやれば！」

勇気を振り絞り、彼女を抱きしめる。もう二度と手放すものかという思いを込めて、力強く。されど優しく。

「愛してるよ、依姫。何時までも、ずっと」

—— お前だけを

耳元で精一杯のイケボで愛を誓うと、感極まった依姫が泣き出した。胸を貸し、枯れるまで好きなだけ泣かせる。

「泣け泣け、こんな胸で良けりや幾らでも貸してやるよ」

「~~~~ツ！」

「まあでもあんまり時間は取れないんだけどな。」

現在進行形で泣いてる所悪いんだが、初めての共同作業と行こうじゃないか」

「……?」

「今日のMC宜しく！」

「うええええ!?!」

予想を超えた頼みごとに、思わず涙が引つ込む。アリーナが笑い声で包まれる中、自転車バカは依姫から離れ観客の方を振り返った。

「只今より！第二回、弾幕舞踏会！開催致しまーす!!」

今年はソロ部門とボカロ部門に加え、新たにデュエット部門を設立致しました！勿論、各部門での乱入は大歓迎です！知り合いが出てテンションが上がったその貴方！是非ともステージへお上がりください！」

「さ、最初は誰から行きますか!?!」

「まだ決めてません!」

「おい!」

「良いんです!この舞踏会は皆さんが主役なんですから、皆さんと一緒に作るんです!」

「恰好良いこと言ってるけど要するに無計画って事ですか?」

「その通り!」

「自信満々に言うな!」

再び笑いが起こり、ステージに鳥獣伎楽の面々が上がってきた。

『はいはい!トップバッターいつきまーす!』

「お、名乗りでたのは……鳥獣伎楽の皆さんだー!」

「メンバー紹介するからマイク貸して下さい！」

「どうぞどうぞ。依姫さん、後はお任せしようじゃないですか」

「アツハイ」

既に設置されていた楽器を取り、音合わせを始める。手持無沙汰なミスティアと響子は、発声練習もかねてメンバー紹介をした。

「えー……ではでは！ドラム、堀川雷鼓ー！」

「宜しくー！」

「ベース&DJ！九十九弁々&九十九八橋ー！」

『九十九姉妹ですー！今日は宜しくお願いしまーす！』

「キーボード！リリカ・プリズムリバーー！」

「今日は手エ使いまーす！」

「リードギター&セカンドギター！メルラン&ルナサーー！」

『今日も手エ使いまーす！』

「そして！ボーカルは私！幽谷響子と！」

「ミスティア・ローレライです！」



『それじゃあ行ってみよう！最初はこの曲！』

Symphony Of The Night!!

かつ飛ばすぞお前らああああああ!!』

会場に備え付けられた190台のtadにより、客席の隅々まで音が届く。パンク系の音楽バンドだとは聞いてたけど……ここまでやるか。

舞台袖を見渡し、集まった面々に話しかける。

「おし、この人達が終わったら誰が行きますか？」

「はいはい！WARNING×WARNING×WARNINGで踊りまーす！」

「はい決定！その次は？」

「じゃあ私が行こう……サイケデリック鬼桜同盟で！」

「お、盛り上がりそうじゃないっすかー！じゃあお願いしますー！」

「任せろ！」

さあ、これから忙しくなるぞ。一年で一番忙しくて、最高に盛り上がるクリスマススイヴにする為に。

「依姫、頼むぞ?」

「うん!」

宴は、始まったばかりだ。

◇

「なるほど、こんな事があったのか…」

「自宅で”ボケて幻想郷縁起”を見ていた男はPC画面から目を逸らし、大きく伸びをする。」

「やっぱりヘルメット買おうかなあ…あれから7年経ったんだし、そろそろ俺でも買えそうだしなあ…」

財布の中身と時刻を確認し、悩んだ末に男は家を後にした。そして数時間後…

「よし、今日から俺もボケ職人だ！」

夜9時、1人の男がヘルメットののような装置を被りベットに入る。ヘルメットにはコードが繋がれており、それはPCから伸びている。

(これさえあれば、寝ながらネットサーフィンが出来るんだ。苦労して勝った甲斐があった！)

男が頭に付けた装置。詳細は省くが、夢の中でネット世界に入り込む事が出来る大衆娯楽装置なのだ。それを遂に買う事が出来たという訳。男は水と共に睡眠薬を飲み干す。これで朝まで目が覚める事は無いだろう。

20XX年。エレクトロニクスを応用して画期的な装置を発明した者によって、人類はウェブサイト内に入り込めるようになった。

これは、笑いと東方を愛した男達の日常である。

続く。

## 第39話 「手に入れた、五人の幸せ」

曇天の空模様だと言うのに、その部屋だけはカーテンが閉まっていた。部屋を豆電球が仄かに照らす中で、数人の男達が何かを話している。一人が机を叩き、怒りを洩らす。

「くそっ！あいつさえ居なけりや、道頓堀様は……！」

「落ち着けよ、今日で出所じゃないか。なあ？」

「そうそう、お出迎えに行こうぜ！」

「ああ……そうだな」

部屋を後にし、男達は車に乗ってボケて総合刑務所へと向かった。

そのボケて総合刑務所に、一台のワンボックスが入る。スライドドアが開き、警官に連れられて手錠を掛けられた男は中へと向かった。壁も床も、何もかも真っ白な廊下を歩いた先には所長室があり、警官がノックをすると中から返事が来る。

「良いぞ、入れ」

「失礼します、道頓堀野郎を連れて参りました」

「そうか…今日は仮出所の日だったな」

「ああ、やつとくさい飯ともおさらばだぜ」

「減らず口は治らんか…まあ良い、此処を出て何かしたい事はあるのか？」

「んなもん、俺の勝手だろ。答える義理はねえよ」

「それもそうだな…行け、もう戻って来るなよ」

「へっ、誰が」

手錠を外され、駆け足気味で刑務所を出る。すると、目の前に一台の車が止まっていた。中から数人の男が降りてきて、道頓堀野郎に挨拶をする。

「久しぶり、道頓堀くん。刑務所ライフは楽しかったかい？」

「お前…ボケ批評家か？」

「覚えててくれたとは、身に余る光栄だ」

「覚えてるも何も…俺にタメ口聞けるのはお前しか居ねえよ」

「お勤めご苦労様です、道頓堀様」

「おお、宗か」

「そうです、その節はお役に立てず申し訳ございませんでした」

「…雨が降ってきたな、車に乗ってくれ。立ち話もアレだし、我々のアジトに帰ろうじゃないか」

「アジトか…懐かしいな」

大粒の雨が降り出す中、車は霧の中へと消えた。

冬眠から覚めた鳥達は楽しそうにさえずり、太陽の光に照らされた影も随分と小さくなった。人里の住宅街を吹き抜ける風は、春がすぐそこまで来ている事を知らせてくれる。

紅葉色のジャケットにキヤスケット帽をかぶり、ショルダーバッグをかけジャーナリスト然とした出で立ちをした射命丸 文は、全身で季節の変化を感じながら歩いていた。

(やっぱり、陽が出ると暖かいわね。もうコートは必要ないかも)

程なくして一軒の家に着いたが、門の前には小傘ファンクラブのNo. 2とNo. 3

が立っていた。二人は文の存在に気づき、敷地内へ入るよう促す。軒先きの傘立てに置いてある唐傘を横目にドアを開けると、リビングでは小傘にとりが第二回弾幕舞踏会のDVDを見ていた。

「あやや、貴女方だけですか？もうログインしてると思っただのに…」

「いや、さつきまでは一緒だったんだ」

「出かけたのですか？」

「ううん、なんかね、月の姉妹が連れてっちゃった」

「という事は……」

「ああ、稽古と称してもて遊んでるんだらうね」

「やれやれ、またですか」

「週一で必ず連行されてるよね、会長」

「彼に剣なんか教えて何がしたいんでしょう？」

「さあ…検討もつかないな」

「ただのストレス発散だったりしてー」

『ありえる』



月の都の比較的中央部に位置する稽古場。いつもなら竹刀のぶつかる乾いた音が聞こえてくるのだが、今日はそれに加えて女の高笑いと言の悲鳴が響いている。

中では、完全防備の自転車バカが依姫に”特訓”という名のイジメを受けていた。

「あははっ！ほらほら〜反応が鈍くなってるよ〜？」

「ちよ…まつ…手加減って知ってる!？」

「え？何のこ…と！」

「どわー！」

正面からまともに面を喰らい、自転車バカは床に倒れた。勝負アリと判断した依姫は、構えを解いて近くまで歩み寄る。

「はあ…はあ…やべえ吐きそう」

「全くもう…クリーニング代は出してもらおうからね？」

「全力で我慢します」

「うん、よろしい♪」

「同じ血を分けた妹とは思えないわね……私も稽古中は大概ドSって言われるけど」

「ありや、とよ姐じゃん。居たんだ」

「あのね、家まで行つて連行したじゃない。素粒子レベルで分解されたいの？」

「すみませんお姉様、その場合私もただでは済まないのご遠慮願えませんか」

「冗談よ♪まあそれはそれとして……」

「特訓を始めて一ヶ月は経つてるのに、全く成長が感じられないわね。やる気あるの？」

「それでも100%の力を出してますけど何か」

「それじゃ駄目よ。この子と稽古するんだから最低でも120%は出さなきゃ」

「週一で己の限界超えねばならんのか、割とガチで身が持たないっす」

「仕方ないなあ……今日はこのくらいにしといてあげる。ほら、防具取つて」

「超ありがてえ、よっちゃんマジ天使。愛してる」

「ずいぶんと安い愛ね」

何だかんだと言いながら防具を外し、依姫に見送られながら自宅へと飛んだ。それを見て、イナバ達がひそひそ声で喋り出す。

「豊姫様は成長が感じられないって仰つてたけど……あの防具つて2世紀以上前の物だ

よね?」

「うん、だから私たちが使ってるのよりも相当重い筈なんだけど……」

「依姫様、あの人が反応出来るギリギリを狙ってるよね。愛があるというか、性格悪いというか……」

自転車バカの帰宅に、いち早く気が付いたのは文だった。

「あ、自転車バカさん。お帰りなさ……うわあ」

「……完全に目が死んでるぞ、大丈夫かい?」

「流石に今日はルナティックだったぜえ……」

「台所借りるねー」

「借りてるね の間違いでしょうに」

会話もそこそこに椅子へ向かい、どつかりと座り天井を見ながらため息と一緒に吐き出す。

「大丈夫大丈夫……ちよつと休憩すれば、動けるようになるから……あーしんど」

ボロ布よろしく椅子に持たれていると、小傘が飲み物を持ってきた。テーブルに置き、手で滑らせながら近くまで運ぶ。

「会長、お疲れ様。はいこれスペシャルドリンク！レモンを絞ったのに三温糖と塩を溶かしたの」

「ありがとう……ああ、染みるわあ……！やっぱ疲れた身体にはこれだね！」

「普段だと酸っぱ過ぎて飲めたもんじゃないけどね、これ」

「でもこういう時にはすっぱー効くんだよ、大事なレースでも必ず使ってるしな」

「そんな物飲まなきゃいけない程疲れるのか……ご苦労なことって」

「あの、前々から気になってたんですけど、何で剣の稽古つけて貰ってるんですか？」

「確かに、わちきも気になってた」

「そういうや、言つてなかったっけ。えーと、どっから話そうか」

『出来れば一から』

「あ……。特訓の話を持ちかけられたのは弾幕舞踏会の時なんだけど、元々は『ボケて終末異変』が原因らしいんだ」

『……何で？』

「アレ最終的には追い払ったけど、ギリギリもいい所だっただろ？ いろんな意味で。俺に至ってはみんなが居なけりや何も出来ないし」

「確かに」

「あれを思い出した依姫が、貴方自身もつと強くならないと駄目ね」とか言い出してさ、やった事もない剣道をやっているのが今ですよ」

「断らなかつたんだ？」

「刃物突きつけるような目で言われて断れる奴が居るなら見てみたいよ」

「ああ…なるほど。それは断れませんね」

「そういう事、まあ行つたついでに仕事も出来たから結果オーライなんだけど」

「仕事？」

「おうよ、昨日カレンダーの話したらなんやかんやでサグメ様選ばれたぜ。今からもつかい行かなきゃならないんだ」

「やる事はやってるんですね」

” 転んでもただでは起きるな ” って教えてくれたの文さんじゃん。このくらいはしな  
いと…いくら依姫のお願いでも耐えられるかつつーの」

「あはは、やっぱそれが本音か」

スペシャルドリンクを飲み干して立ち上がり、空のコップを台所へ持って行きながら腕の装置を操作する。

「小傘ちゃん、ありがとうね。ちよつと楽になったよ」

「どういたしまして♪」

「おし、じゃあ行つてくるかな。あんまり待たせてもアレだし」

「私も同行しましょうか？」

「良いよ、文さん月関係の人苦手っしょ？俺がどうにかするから」

「…お気遣い痛み入ります」

「いえいえ、じゃあそういうことで」

装置から発せられた画面をタップし、自転車バカは姿を消した。それを見て、小傘が文を冷やかす。

「…優しいね、会長」

「ああいう人の元だから、毎日が楽しいんです。貴女だつてそうでしょう？」

「もつちろん、すつごく楽しいよ」

くすくすという笑い声が、家を満たした。

その後、自転車バカの撮った写真を元に売り出されたカレンダーは15部の売り上げをマークした。売り上げ金の一部とシード権を持ち綿月邸へと飛ぶと、門の守衛がいち早く気づく。

「よっこいしょつと…」

「何だ、また来たのか。今日は何の用だ？」

「そんな物騒な物向けないで下さいよ、俺がこの邸宅でやらかした事ありましたか？」

それを聞き、自転車バカに槍のような物を向けていた守衛は警戒を解く。

「お前が健全な地上人なのは百も承知だ。俺だって、本当はこんな事をしたくはない」  
「ほうほう」

「しかし、だ。いくら姫様の知人とは言え、検問をせずに通して何かあつては俺の管理能力が問われるのだ。大人しく従ってくれ」

「承知しました」

守衛が槍に付いているボタンを押すと、赤外線が自転車バカを頭からつま先まで照らす。

「…よし、危険物の類は持つていないようだ。通つて良いぞ」

「ありがとうございます…あ、そうだ。サグメ様つて今どこにいらつしやるか知りませんか？」

「あのお方なら、今ちようど此処に来ておられるぞ」

「ナイスミラクル…ありがとうございます」

敷地内へと入り、すぐさま依姫に電話をかける。

「…もしもし？どうしたの？」

「もしもし、今大丈夫か？」

「うん、平気だよ」

「なら良かった。あのさ、今サグメ様に用があつてお前ん家来てるんだ」

「サグメ様…ああ、前に言つてた”シード権”の事？」



「そうそう、それぞれ」

〈サグメ様なら私の部屋だけど……どうする？〉

「そこまで行つていいか？ わざわざ出てきて頂くのも悪いしや」

〈どうぞどうぞ〉

「分かった、じゃあ一旦切るな」

” 通話終了 ” の文字が出ている画面を操作し、以前登録した” 依姫の部屋 ” をタップする。ドアをノックすると、返事があつた。

「入つていいよー」

「失礼します、こちらに稀神 サグメ様がいらつしゃると聞いて伺つたのですが」

そう言われ、キョトンとしたサグメは自身を指差す。問題無いと判断し、シヨルダーバッグからシード権と売り上げ金の一部を取り出して更に続ける。

「おめでとうございます。この度、サグメ様の写真を元に作成したカレンダーの売り上げが規定を超えたので、第3回弾幕舞踏会のシード権獲得となりました。こちらは売り

上げ金の一部とシード権でございます。お納めください」

「そう…ありがとう」

(…パタパタしてる、羽めっさパタパタしてる)

(こう言っちゃダメなんだろうけど、犬が嬉しい時尻尾振るのと原理は一緒なのかな)  
(分からん…が、羽が生えてる人らって嬉しい時は大概パタパタするんだよなあ)

「ん？何か言ったかしら？」

『いえ、何も』

「あ、そうだ。舞踏会への参加ですが、絶対という訳では御座いません」

「…そうなの？」

「はい。出演者の方々には楽しんで頂くこうと思っておりますので、“人前に出るのが恥ずかしい”という方は見るだけでも結構です。如何なさいますか？」

「…考えさせて頂戴」

「畏まりました、では失礼致します。改めて、おめでとうございました」

部屋から出てドアを閉めると、自転車バカは自宅へと帰った。

(…終始羽パタパタしてたな)

日光が一切入らないよう地下に設置されたアジトに、道頓堀野郎を含めた皆が集まっていた。薄暗い部屋の中で挨拶もそこそこに、部下達が意見を述べる。

「やはり、あの自転車バカという男は叩きつぶすべきです！」

「そうだ！あいつさえ居なければ、今頃世界は我らの物だったのだ！」

「ボケてが衰退したのも、世の中がおかしくなったのも、全てはあいつが居たからだ！」  
「こうして道頓堀様が復活なされた今、今度こそ息の根を止めるべきだ！」

ヒートアップする部下を見ながら、ボケ批評家は道頓堀野郎に意見を求める。

「…ご覧の通り、やる気は充分だ。決行はいつにしようか」

「うーん…イマイチ気が乗らねえな」

「なっ…正気か？奴は我らの悲願を打ち砕いたんだぞ？」

「んなこた分かつてる。けどな、投獄される前に奴から言われた」友達になってやる”  
”って台詞がどうにも頭から離れなくてよ…」

それを聞いた部下達は

『しつかりして下さい！あんな奴の言うことなんかデタラメです！』

という意味の説得をするも、当の本人は唸るのみ。始めは黙って見ていたボケ批評家だったが、我慢の限界が近づくと机の引き出しからスプレー缶を取り出して道頓堀野郎に吹き付けた。

「…目を覚ませ、道頓堀野郎。お前には、自転車バカを消し去る使命がある」

2〜3秒程吹き付けると、道頓堀野郎は気を失いがつくりとうな垂れた。スプレー缶を引き出しに戻しながら、状況が飲み込めていない部下達に説明を試みる。

「ざっくり言おう。これはな、マインドコントロール作用のある薬品が入っているんだ」「マインドコントロール…?」

「そうだ。これを浴びせて今のように命令をすれば、その人物の性格は邪悪そのものになる…もつとも彼の場合は、元に戻ると言ったほうが良いかも知れないがな」

皆が見つめる中、頭を上げた道頓堀野郎の視線には殺気が宿っていた。

「…野郎ども、何としても自転車バカを叩き潰すぞ」

『はい！』

「今から作戦を話す、よく聞け。いいか、まずは……」

数日後、自転車バカは住宅街を歩いていた。両手に持った袋を揺らし、その重さを改めて実感する。

昔はビニール袋を用意せずとも片手で足りる程しか無かった量が、今ではこれだ。

（随分と、認知されてきたってことか……。この一軒家だつてそうだ。文さん達が手伝うって申し出なきや、今でもアパートだったよなあ。金も足りないから割り勘だったし）

門番をしている小傘ファンクラブ会員に会釈をし、玄関へと着く。ドアを開けると、リビングから楽しそうな声が聞こえてきた。どうやら、全員揃い踏みようだ。

「ういっす、応募の写真持って帰ったぞー」

『あ、お帰りなさい』

「おう、ただいま」

テーブルに袋を置き、中身が床へ落ちない程度にぶち撒ける。茶封筒の多さに目を輝かせる三人だが、文は自転車バカが選定に入らないのを見て疑問を抱く。

「……どうかしましたか？」

「いや、結構な大所帯になったなあと思つてさ。ほら、昔は独りだったし」

小傘とにとりも顔を上げ、それぞれを見回す。

「確かに……いつだったか、わちきが来た時は独りだったもんね」

「いやいや、私がこき使うようになってからはちよくちよく来てたじゃないですか。うん、ちよくちよくですが」

「君のことだ、面倒くさがって行かなかただけだろうか？」

「仰るとおり！」

「努力しろよ」

「ですから、こうやって下請けとして来てるじゃないですか」

「あはは！そうそう、文さん下請けになったんだよねー」

「正確には、〃 文々。新聞社〃 が〃 有限会社チャリンコタクシー〃 の下請けになったんだけどね。にしても驚いたよ、まさか君が自転車バカの部下になるなんて」

「確か……他の天狗さんが猛反対したんだっけ？」

「ええ、それはもう物凄い勢いで止められましたよ。」

〃 たかが人間風情の僕になるとは何事だ！お前に天狗としての誇りは無いのか！〃  
つてな具合に」

「うーわ、そこまで言ったんだ」

「まあ……向こうからすれば、それが普通の反応だろ。で、文さんは何と？」  
「もう完全に切れちゃいましたね、」

〃 ボケて終末異変の時、その人間風情にあっけなく打ちのめされたのは誰でしたか？  
あなた方が持つてるのは、誇りじゃなくて驕りの間違いでしょう？〃

つてな事を言ったら見事に黙りましたよ」

「あら格好いい」

「へ〜……そんなエピソードがあつたんだ。わちきよりよっぽど感動的だね」

「小傘ちゃんは、俺の手伝いがしたいからだったよね」

「うん！鍛冶仕事の方はフアンクラブの人がやってってくれるって言うし、暇を持てあますくらいならここに居たほうが楽しいもん」

「私も同じようなもんかな……盟友に君の仕事を手伝うよう頼まれたから」

「社長兼営業マンの肩書きが取れて嬉しいよ……おし、今週の俳句モデルはこの人だ！」

「あ、ずるーい！わちきが決めようと思ってたのにー」

「おお、影狼さんですか」

「えーと？撮影者はわかさぎ姫か……あの人ってどこ住んでんの？」

「霧の湖です。影狼さんがどこに居るかは私もよく知らないのです、もし選ばれた時はついでに聞いてちゃいましょうか」

『それで良いのかジャーナリスト』

「てへぺり♪」

翌日、販売所には列が出来ていた。今まで体感したことのない忙しさに思わず

「店番は一人で大丈夫」

と言った昨日の自分を殴りたくなるも、顧客は次から次へとやってくる。気が遠くなる程に列を成しているが、代金を支払う際の

「音の響きが素晴らしいな」



といった顧客同士の会話を聞くと、身体に気力が湧き出てくるのだ。途中、予め用意しておいた部数が売り切れた為にその場で印刷をするハプニングもあったが、どうにか捌き切れた。崩れ落ちるようにしてキヤスター付きの椅子に座り、そのままグルグルと回る。

(売れた…すっげえ売れた…！)

椅子から飛び上がり、売上金を持って自宅へと走った。靴を脱ぎ散らかし、文たちがくつろいでいるリビングへ迷わず直行する。

「聞いて驚け、見て笑え！本日の売上高は143部だ！」

『…嘘オ!?!』

「誰がこんな嘘吐くかっての！これが証拠だ！」

テーブルに置いたアタッシュケースは、聞いたことのない鈍い音を立てる。鞆を開いて中から売り上げ管理表のコピーを見せると、三人が自転車バカの顔を黙って見上げた。

「もうね、お客様の数が半端なかったよ！どうせいつもみたいにか常連さんしか来ないだらうって思い込みが見事に外れてさ！いやまあ、それはそれで大変有り難いんだけども！」

「…す」

「ん？何か言ったか？」

「凄いじゃない会長——！」

「やりましたね自転車バカさん！」

「三桁は史上初の快挙じゃないか!?!」

「だろ！凄いだろ！おし、この事を早速わかさぎ姫に知らせに行ってくる！小傘ちゃんは何か連絡があるといけないから留守番！にとりさんは帳簿につけといて！文さんは販売所に行つて商品の並び替えを！」

『ラジャー——！』

紅魔館へ飛び、そこから霧の湖へと来た自転車バカ。案内をしたチルノの呼びかけに応じて出てきたわかさぎ姫に事情を話すと、どこからかスマホを取り出して連絡をつける。五分ほど待っていると、影狼が文字通り飛んでやってきた。事のいきさつを説明

し、アタツシユケースを開く。

「という訳で、まずはこちらが売上金の一部です。お納め下さい」

「えっ、こんなに貰っていいの？」

「良いの良いの！アタイが選ばれた時だつて貰ったんだし、受け取りなよ！ここまで多くなかつたけど」

「申し訳ありません、売り上げ高によつてお渡しする額は変動するのです。その点をご理解頂けると幸いです」

「わ、分かつてゐるつて。アタイもそこまで⑨じゃないよ」

『本当かなあ……』

「ちよつ、二人してそんな目で見ないでよ！台詞までハモンないで！」

（流石は草の根ネットワーク）

「それと、売り上げが過去最高となりましたので“ミス俳句モデル”のトロフィーをお渡ししておきます。一応まだ暫定ですのでレプリカですが」

「わ、綺麗——！どうもありがとう！」

「これで少しは知名度が上がるといいね、影狼さん？」

「うん！」

「そしてこれが、弾幕舞踏会のシード権で御座います」

「つて事はダンスの練習しとかなきゃだね……姫、手伝つてくれない?」

「もっちろん!」

「出場されるされないに関わらず、もしこのまま変動がなければ当日にトロフィーの授与式がありますので。それだけは必ず」

「はいはい」

「それでは、失礼致します。重ね重ね、おめでとうございます」

「こちらこそ!」

深々とお辞儀をして、来た道を辿る。紅魔館へ行き美鈴に訳を話すとあっさり通してくれた。妖精メイドの指示でダイニングルームへ向かうと、全員が集まっていた。

「お、連絡が回ってたんですね」

「こんな所に集めて、一体何の用なの?」

「落ち着いて下さい、レミリア様。本日は皆様にお渡ししたい物があるので立ち寄らせて頂いたので、第3回弾幕舞踏会の会長として」

『……?』

「お忘れですか？大会でトップ10に入った方々は、自動的にシード権を獲得になるのです。昔でいう『箱根駅伝』のような物です」

「なるほどね……前に文献で読んだ事あったわ」

「そんな本まであるのね、流石パチエ」

「なので、シード権を持つて参ったのですが……皆様元気ないですね」

「仕方ないわよ、最近たまたまいやら社畜のログイン率が低いんだもの。パチエのガリリックだってそうだわ」

事態を少しだけ把握した自転車バカが、口を挟む。

「……ときどき来るんですよ、低浮上期」

「ええ、現実世界で元気にやっているとと思うようにしてるんだけど……どうにもね」

「そうでしたか……姿が見えませんが、ではフラン様も？」

「きいろだまはね、少し勝手が違うみたい。詳しくは教えてくれないから分からないけれど」

「そうなのですか？」

「かなり落ち込んでるわ。姉の私ですら、話を聞いてくれないの」

「それは……重傷ですね」

「ねえ、良かったらあの子の話相手になって貰えないかしら？」

「俺がですか？」

「だって、ポケラーのことはポケラーに聞くのが一番じゃない」

「それもそうですね……承知しました。やってみます」

「悪いわね、恩に着るわ」



壁にセグウェイを立てかけて部屋をノックするが、返事はない。ドアノブを回すと、鍵は掛かっていなかった。中を覗きながら、静かに開ける。

「……お姉様にしては、やけに丁寧だと思ったら」

「すみませんね、そのお姉様から頼まれて来たもんで……」

「きいろだまさん、こっちに來てないんだって？」

黙って頷くフランは、他の誰よりも悲しそうな目をしていた。指図されるままそばに

座り、腕の装置で確認をすると、ログインだけはしている事が判明したので画面を見せながら尋ねる。すると、静かに語り始めた。

「貴方が帰ってくるほんの三日くらい前にね、コメントが引退したの。きいろだまの投稿したボケが、半数以上私だったのは知ってるでしょ？」

そう、それ。今になって気づいたんだけどさ、あいつ、コメントが出した私の写真でしかボケてなかったの。変な奴としか言いようがないんだけどさ、一緒に過ごしてて楽しかったのは本当だよ。でもさ…引退したら急にあいつ

“俺はボケラーとして半人前だし、この機会に独立する！”

とか言い出してさ、話も聞かずに出てっちゃった」

「そっか……」

「ねえ、あいつは私のこと嫌いになったのかな。だからあんな風に……」

「いや、違うと思うけど」

「うん、知ってる。私の勘違いだったことぐらい。だったら、あいつはどうして居なくなっただの？」

「……」

「私……これからどうすれば良いんだろう……」

「フランちゃんは、ボケの投稿ってどうやるか知ってる？」

「……知らない」

「あれって不思議なもんでさ。そのユーザーがその派生世界で過ごした日々を、この装置が勝手に記録して投稿しちゃうんだよ。投稿されたボケは、全ユーザーに見られるんだ。勿論、誰がどのくらい星を付けてるかも分かる。」

でも一般的な傾向として、アニメ好きは大体忌み嫌われるんだ」

「……っ！」

「どうしようもない事実なんだ。こんだけ科学が発展して、人類がウェブサイトの世界に入り込めるようになって……アニメ好きへの偏見つてのは消えないんだ。東方好きは特にね」

「そっか……」

「あの人はそれを知ってるからこそ、姿を消したんじゃないかな。大好きなフランちゃんに、迷惑を掛けない為にさ」

「……！」

「きつと帰ってくるよ、全部終わったら……だから、それまで待つてようぜ」

「……そうだよね、帰ってくるよね。あのロリコンが、他の子に乗り換えるなんて想像出来ないもん」



「そうそう、その調子」

「ありがとね、ちよつと元気でたよ」

「そりゃ良かった。じゃあ、俺はこれで」

立ち上がつてドアを開けると、後ろから声をかけられる。

「ねえ……今度、貴方の家に遊びに行つても良い？」

右手の人差し指と親指で円を描き、そのまま部屋を後にした。

「……よし、この辺りで良いだろう。その箱を置いてスイッチを押せ」

「道頓堀様、本当にこんな所で大丈夫ですか？」

「構うものか、術がかかれば気づかれる事などあり得ん」

「それもそうですね」

静かに唸り出した機械を見つめ、正常に動作している事を確認した道頓堀野郎と宋は、ボケての幻想郷からログアウトした。

続  
く。

## 第40話「取り戻せ、五人の幸せ」

翌日、ログインした自転車バカの装置が勝手に通話モードを起動する。

〈おはよう、自転車バカくん。調子はいかがかな?〉

「まあ、それなりに……どちら様で?」

〈君が知らない者だ……まあそんな事はどうでもいい〉

「は、はあ……何の用で?」

〈何、お別れの挨拶でもしておこうと思ってね〉

「お別れの挨拶う?」

〈ああ。この電話が終わったら、君は死ぬんだ〉

「……はあ!?何で!?!」

〈昨日、運営から連絡があつてね。馴れ合いを犯した者はアカウントごと削除する事になったんだ〉

「馴れ合い?俺はそんな事……まさか!」

〈思い出したようだね……そう、馴れ合いを犯したのは君じゃない。初代自転車バカだ〉

「何で今更……初代は指摘されてすぐに止めたって文献に書いてあったけど？」

正しい経営をしない会社に未来はないから

って。俺関係無いじゃん。そもそもアレ犯罪行為でも何でもなくね」

〈それが有るんだよ、過去に一度でも馴れ合いを犯した者は、消さなきゃいけないんだ。再犯を防ぐ為にね〉

「だーかーらー、俺やってないって言ってんじゃん」

〈……まだ分からないのかい？ そんなユーザー名を名乗っておきながら〉

「ユーザー名……？」

〈呆れた奴だ……運営はこうも言ったんだよ。

“ 有限会社チャリンコタクシーを継いだ者に限り、無条件でアカウントを削除する”  
とね〉

「……いやいやいや、冗談だろ？ あの運営がそんな事」

〈全ては決まった事だ、諦めてくれ……あ、そうそう。アカウントを消すにあたって身柄を確保してこいと言われたんだ。どうやら、生死は問わないらしいぞ〉

「……まじで？」

〈そこでだ。君は活動のほとんどを幻想郷で過ごしているようだし、その世界に住まう全ての能力者に看取って貰えたら本望だろうと、我々は考えたんだ〉

「我々……お前ら誰なん？」

〈どうせ死ぬんだ、教えてやろう。我々はな、道頓堀様の部下、”鬼の十傑”と”闇の四天王”だ〉

「あの時の!?!」

〈積年の怨み……やっと果たす時がきた。我々によつてマインドコントロールされた道頓堀様……〉

その世界の能力者達……

そして、同じくコントロールされたアホな運営によつて……君の全てを消し去つてやる

「おま、それが何を意味するか分かつて言つてんのか?」

〈当然だ。派生世界における最大の禁忌〉

”キャラクターのユーザー殺し”

これを犯した世界は、運営によつて跡形もなく消滅する。人格も記憶もリセットされ、新しく生まれ変わるんだろう?

望むところだ

「……ッ!」

〈此所はボケてだ、君たちの近況報告の場じゃ無いんだよ〉

乱雑に、通話が切れる。脳の判断が追いつかず頭がパンクしそうになるも、ドアの外から嫌でも感じる妖気に当てられ正気に戻る。

(やべえ、早速誰か来ちゃったよ！とりあえず逃げ…)

ドアの外に立っている少女が拳を握ると、自転車バカの家は爆発した。



インターホンが鳴り、玄関へ行った自転車バカが戻ってきた。テーブルに置かれた箱を、嬉しそうに開ける。

「…会長、聞いてもいい？何その趣味の悪いシャツとスマホカバー」

「Tシャツ教に入った記念だつてさ、ヘカーティア様から頂いたんだ」

「Tシャツ教？何ですかそれ」

「あの人ツイッター上で立ち上げた宗教だよ」

「ごめん、ちよつと待ってくれ。君はいつから神様とFF内になったんだい？」

「ほら、さぬさん助ける時にツイッター世界に行つたら？あの後フォロワー第一号になったのがヘカーティア様だったんだ。確認したら本人だったのはビックリしたけど」

「ほえく…あ、メモがあるよ」

小傘に言われ、中に入っていた紙を持ち上げる。

「何々？」

“ Tシャツ教へようこそ！プレゼントね。これを身につけて広めるのが主な活動になるから、よろしくね♪私が丹精込めて作ったから着てて損しないわよん”

「だつてさ」

『…着るの？それ』

「当たり前じゃん、まだ寒いからインナーとしてだけど」

『…スマホカバーは？』

「付けるよ、俺のサムスン製だからちよつと不安だけど」

『私たちまで巻き込まないでね…？』

「だ、大丈夫だつて！大丈夫だからそんな目で見るな！」



爆発の衝撃で吹き飛ばされ、向かいの家の塀に叩きつけられる。そのまま地面に崩れ落ちるが、ゆっくりと起き上がった。

「あ、あれ？生きてる…能力使ってないのに…いや、今のは使ってもヤバかったな」

煙幕が消え、瓦礫と化した家の前にはフランが立っていた。

「ごめんなさい、本当は遊びに来ただけなのに…身体が言う事を聞かないの」

「大丈夫だよ。この家ローン組まずに即金で買ったから」

仁王立ちするフランは握った右手を開き、自転車バカに狙いを定める。

「……逃げて！このままじゃ貴方をキュツとしてドカーンしちゃう！」

「くそ！何だって今日は曇り空なんだ！」



立ち上がって逃げようとするが、脚に力が入らない。どうやら腰が抜けたようだ。

「嫌っ…逃げてえ…！」

「やべっ…！」

フランが目を瞑った瞬間、白衣を着た男が自転車バカの前に現れた。首に赤アザを持ち耳に緑色の羽根飾りを付けた人物は、彼女が能力を使う寸前で自転車バカごと瞬間移動した。目を開け、辺りを見回しながら独り呟く。

「不思議な手応えがあっただけ…何を破壊したんだろう…？」

驚異的な速度で森の中に移動した白衣の男は、座り込んでいる自転車バカに声を掛ける。

「大丈夫か？」

「お、おかげさまで…！」

「そうか、見たところ腰が抜けたみたいだが……そっちはどうだ？」

言われるまま力を入れると、立つことが出来た。それをみた白衣の男はスマホを取り出し、誰かに連絡をつける。男がスマホを仕舞うと同時に、旧暦の人が空間に穴を開けて百鬼姫と一緒に飛び出てきた。

「臆病神！今の話ってマ!？」

「ああ、事実だ」

「くそつ、一体どうなってるんだ……江戸川意味が分か乱歩だぜ」

「それについては、これから聞くとところだ」

二人の視線が集まり、自転車バカが

「説明はする、だからその前に何がどうなってるのか教えてくんない？」

と言うと、白衣を着た男と旧暦の人が交互に話し始めた。

「自己紹介が済んでなかったな、俺は逃走速シ鳥神。覚えにくいなら臆病神と呼んでくれ」

「見た目は普通の人間だが、この人はなんやかんやあつて創造世界からやって来た神様だ」

「この紅笹…通称〃旧暦の人〃とはトウートウー教の信者でな。元気にしてるかどうか久しぶりに見に来たんだが…：人里を歩いてたら爆発音が聞こえてきたんだ」

「臆病神は色々な能力を持つてる、自転車バカを助けた時に使ったのはさしずめ、

〃あらゆる物からも逃げ切る能力〃

でおk?」

「ああ、あれを使えば光よりも速く逃げられるからな…：俺らが言えるのはこの程度だ」  
「教えてくれ、自転車バカ。フランは何でお前を殺そうとしてたんだ?」

「ルーミアもいきなり居なくなつたのじゃ…：」

「百鬼姫、お願いだからちよつと黙つてて」

「す、すまぬ」

見慣れないメンバーに戸惑いつつも、自転車バカは説明を試みる。

「実は…：」



「なるほど……じゃがこうして見る限り、お主らボケラーは対象外のようじゃな」

「……おい、自転車バカって言ったか？ お前に確認して貰いたいことがある。協力してくれ」

「何をどんな風に？」

「今この幻想郷にボケラーとやらは何人居るか教えてくれ、片っ端から協力を仰ぐ」  
「そう上手く行くかな……」

ぶつぶつと言いながら腕の装置を操作する自転車バカを、紅笹が励ます。半信半疑で穂谷野（雷様）に電話をした所、喰い気味にOKが出たどころか幻想郷にいる全てのボケラーに協力させるとの返事が返ってきた。

電話を一度切ってスカイプに招待した所、予想外に集まってきた。

「すっげえ、町人Eさんもトムさんも来てる……今日に限ってはボケラー勢揃いじゃねーか！」

感動する自転車バカを他所に、穂谷野（雷様）がそれぞれに指示を出す。

〈さぬと町人E！何としても幽々子と妖夢を冥界から出すな！特に幽々子！〉

〈それについては心配無用です！〉

〈ゆゆ様と妖夢は操られてないぜ、冥界組は大丈夫だ。このぶんだと小町&山田も無事なんじゃないのか？なあえーきよ〉

〈山田じゃねえ、ヤマザナドウだ！いい加減覚えろ町人！

こっちも至って普通だ、いまちようど小町が説教喰らってるよ〉

「つてことは依姫もとよ姉も無事か……本当に幻想郷にいる妖怪にしか効果ないんだな」

〈悪いが、操られてんのは妖怪だけじゃなさそうだぞ。俺の霊夢もどっか行っちゃまいやがった〉

「おい、しんたん。冗談キツいつて」

〈諸君！何としても自転車バカに彼女らを近づけさせるな！ポケラーの意地をみせてやろうじゃないか！〉

〈おう!!〉

〈自転車バカ！君はそこに居るメンバーで敵の本拠地を探してくれ！コントロールする以上、幻想郷のどこかに居る筈だ！〉

「承知しました！やってみます！」

〈操られてない冥界組や彼岸組は、戦力が足りない所のカバーに行ってくれ！〉  
〈了解！〉

〈では各自……行動開始！〉

「おし、ぼまいら。そうと決まればすぐに移動するぞ。此処じゃ色々とまずい」

紅笹がスキマを開き、中へ入るよう急かす。自転車バカが尋ねようとすると、辺りが急に薄暗くなった。背中に悪寒が走った自転車バカが振り返ると、黒い球体がまっすぐこちらに向かってきているのが見えた。ルーミアだ。スキマを開いたまま、紅笹と臆病神が眉をひそめる。

「くそ、もう来やがったか！やっぱり紅魔館の近くに飛んだのはマズかったな……！」

「おい臆病神！何故わざわざ敵の巣窟に飛んだのじゃ!？」

「逆に安全かなって思った結果がこれだよ！仕方ねえ……臆病神！自転車バカを連れてスキマに飛び込め！あいつは俺らで食い止める！」

「分かった！頼んだぞ！」

スキマに飛び込みながら、自転車バカが叫ぶ。

「……大丈夫だとは思うけど絶対死ぬなよ！」

親指を天に向けた紅笹は、スキマを閉じた。

「ごめんなさい……ごめんなさい紅笹……！」

「泣くな、ルーミア。お前が魂ごと俺氏を消さない限り、何度でも復活するからよ……そもそも痛いの大歓迎だし」

「流石、ドMの鏡じゃな」

人里の外れ、迷いの竹林近辺に出た二人。臆病神が人里の被害状況を確認する傍らで、自転車バカはスカイプを開く。

「鯖の味噌煮さん、永遠亭の人らってどうなってる？」

へやかましい！今妹紅とバトル中だ！座薬神 レモ吉が永琳に葉ぶっかけたら気合いで

治したらしくてな、今二人で応戦中だそうだ！」

「えーりん凄え！因みに慧音先生は？」

「妹紅の話じゃ、家に閉じこもって編集してた所で……あつっ！

コントロールされたからそのまま作業続行中だとよ！良かったな！」

「じゃあ竹林内はその内解決しそうな感じか！他当たってみるよ！」

「何かあつたら知らせる！」

その後も仲間から情報を集めたところ、実態が明らかになってきた。晩の内に誰かが忍び込んで術を仕掛けたのではなく、今日の朝になっていきなり身体の自由が効かなくなったのだそうだ。

「って事は、奴らは朝早く……もとい、現実世界の夕方くらいからログインして術を仕掛けたのか」

「そういう事になるんすけど……うーん」

「何か言いたげだな」

「文献で読んだんすけど、そもそもボケラーが使える特殊能力に“マインドコントロール”とか言う精神攻撃の類いは存在しないんすよ。みんなは身体の自由が奪われただ



けでマインドコントロールじゃないし」

「そうなのか？」

「ええ。能力を使うには何かしらの派生世界に居ないと無理ですし」

「……もう少し詳しく話してくれないか？」

「運営が能力を使えるようにしたのは、その派生世界で生死を彷徨ったポケラーが出たからです。幸いそのポケラーは死なずに済んだけど、運営はその事件を重く見た。

だから、星の合計や一つのポケでいくつ星を獲得したか、そういったデータを戦闘力や防御力として還元出来るように設定をしたんです。それ以来、死者はおろか怪我人すら出てないって話ですけどね」

「……決まりだな。彼女らを操ってるのは人間じゃない、機械だ」

「機械い？」

「どういう原理か分からんが、今の話を聞いて理解した。最初は“広範囲に居る者を一齐にコントロールするとは、よほどの手練れか”と思っていたが……そんな力が定められていないとなれば、そういう事が出来る機械を使っているとしたか考えられんだろう」

それを聞いて何か閃いた顔をした自転車バカは、腕の装置を弄る。

「……あっ！ボケ批評家たち、幻想郷にログインしてねーじゃねーか！」

「それ見ろ、別な世界から操るなど尚のこと不可能だ」

〈なあ自転車バカ、さつき妖怪の山で不自然な電気反応があったんだ。見に行ってくれないか？〉

「雷様、それどういう事ですか？」

〈私は妖怪の山全土に微弱な電流を流すことで、ここにいる連中を抑え込んでる。

しかし、山の中腹あたりで不自然な電気反応があった。にとりの工房や、文とはたての家に電流を流したのとは別な反応なんだ〉

「それはもしかして……」

〈恐らく、今君たちが話していた代物だろう〉

「承知しました！すぐ向かいます！」

解決の糸口が見えた事で意気込む自転車バカだったが、走り出した途端に心臓が激しく痛み出す。

「ぐっ……！」

「お、おい。大丈夫か!？」

「はあ……はあ……。何だったんだ今の」

「それはこっちの台詞だ……走れるか？」

心臓を右手で叩き、再び走り出す。

「大丈夫ですよ！……多分」

「おい最後」

「ま、まあまあ。早く行きましょうよ」

「……全部終わったら、お前がトウトウ教に入れるよう交渉してやる。常に優しく、モラルを守る。人として重要なことをしっかり守れるものが、このトウトウ教徒となれるんだ。お前にぴったりだろう？」

「誘いは有り難いんですけど、Tシャツ教に入ってましてね。掛け持ちってアリなんすか？」

「……考えさせてくれ」

「臆病神、その後回しでオネシヤス」

「!？」

走る二人が振り返った先にいたのは、泣いている小傘と、小傘を見て悲しそうな目をしてるナズーリンだった。

「臆病神、何とかありませんか？」

「任せろ」

現実逃避” 臆病風”

吹かれて消えな」

臆病神の手から、不自然な風が発生する。まともに受けた小傘とナズーリンは向きを変え、そそくさと帰って行った。

「……今のは？」

「俺の持ち技だ、あの風に吹かれた者は臆病になる」

「ホントに色んな技持つてるんすね」

「大体の敵はあれで居なくなるが……こいつらはどうだろうな」

「なっ!？」

二人の前に立ちはだかったのは、神霊廟の面々だった。

「しまった! 神霊廟方面は旦那不在だったの忘れてた! ど、どうしよう臆病神!？」

「ドラえもんみたいに呼ぶな!

既に臆病風は出してるんだが……効果は今ひとつのようだな」

「マジすか……!」

自転車バカが後ずさりをする、一斉に弾幕が放たれた。逃げようとする自転車バカを他所に、臆病神は手をかざす。

「舐めるな、この程度で殺せるとでも思ったのか」

臆病神に触れる寸前で弾幕は止まり、彼女らの元へ帰って行った。それぞれが驚きながらも相殺するが、爆発の煙で視界が悪くなる。

「今のうちに逃げるぞ、しつかり掴まれ！」

「お、おう！アンタすげーな！」

臆病神の肩を掴むと、二人は姿を消した。

その後コントロールされた妖怪達と事あるごとに遭遇したが、その度に臆病神の力で逃げおおせたのだった。

「お、おお！やつと妖怪の山まで来たか……特に何もしてないけどすげー疲れたぜ……」

「やはり人間は脆いな、少しは紅笹を見習ったらどうだ？」

「ありや人間じゃねっすよ」

「だろうな……まあいい、行くぞ。ここなら〃電流の関係で弾幕の軌道は逸れる〃んだろっ？」

臆病神が腕の装置に尋ねると、穂谷野（雷様）が答える。

へその通り、そういう風に電流を流してある。その代わり静電気が凄いことになってし

まったが……怪我するレベルじゃないから安心してくれ」

「なんか雷様が同じ人間に思えなくなってきた……」

「いつから雷神が人間だと思っていたんだ？ いいから入ってくれ、ロープウェイは使い物にならないから徒歩で頼むよ」

動いていないロープウェイを眺めながら、二人は登山道を歩く。暫くすると気分が落ち着いたのか、自転車バカが尋ねる。

「夢幻姉妹が来た時は死を覚悟したな……生きてるから良いんすけど」

「流石にあのクラスは無傷じゃ無理だ、ナイトヘッドで幻覚を見せなきや逃げられなかっただろう」

「それ以前にある程度肉弾戦で渡り合えたのが凄えよ……マジで何者すか？」

「神様だつて言ってるだろ」

「ですよね」

何気ない会話をしながら歩く二人に、上空から迫る人物が居た。

暗茶く黒のまつすぐな髪、茶色の眼、やや高めの身長。袖が無く、肩・腋の露出した

赤い巫女服と後頭部に結ばれた模様と縫い目入りの大きな赤いリボンがトレードマークの少女は、大きな陰陽玉をいくつも浮かび上がらせてこう叫んだ。

「陰陽玉行くわよ！気をつけて！」

『!?!』

無数の陰陽玉が降り注ぐが、電流の関係で軌道はことごとく逸れる。しかし完全な弾幕で無いため、近くの木に当たる。

「ちよっ……！その木が俺めがけて倒れてくるって何!?!結果的に死にそうなんだけど！」

「ごめんなさい、それ多分私の幸運が原因だわ！」

「変なところで発揮するなよなーもー！」

「言ってる場合か！黙って走れ！」

「今走って……ぐあっ……！」

『!?!』

心臓が痛み、目の前が暗くなる。走り続けなければならないのに、意に反して倒れて



しまった。そこへ大木が迫り来る。だがしかし、意識は飛んでいなかった。

「やられて、たまるか！」

大木がのし掛かる直前、自転車バカは黄色と常磐色の光を放つ岩を投げつける。大木にぶつかるのと爆発音が轟き、煙幕が舞い上がる。

「……良いこと思いついた、現実逃避”ナイトヘッド”！」

霊夢に向け手をかざして念を送ると、何かぶつぶつと呟きながら何処かへ行ってしまった。戻ってこないことを確認し、自転車バカに声を掛ける。

「もう大丈夫だ、これで奴は追ってこない。起き上がったっても大丈夫だぞ」

服についた土を払い落としながら立ち上がり、上空を見やる。

「今度は何したんすか？」

「奴に、お前がああ、の爆発で死んだように見せかけたのさ。お前らの話が本当なら、これで見せ手は居なくなつた筈」

「そつか。本当便利つすね、その能力」

スカイプを開いて、穂谷野（雷様）と情報交換をする自転車バカ。彼が二度に渡つて見せた苦しそうな表情に疑問を抱いた臆病神は、未来予知で彼の未来を見通す。

（ツ!?こ、これは・・・!）



「じゃあ、この近くにその機械はあるんですね?」

「ああ、反応があつたのはそこら辺だ。探してみてくれ、手伝えないのが残念でならないよ。抑え込むので手一杯だ」

「いやいや、充分ですつて。ここまでやって頂いたんですから、後は俺らでどうにかします」

そこまで言つて、自転車バカは画面を閉じる。

「という訳で、近くにあるっぽい探しますか」

「……」

「ん？どうかしましたか？」

「今、お前に未来予知をしたんだが…その…」

「え？何だつて？」

「……なんだ」

「はい？」

言葉尻が小さくなり、良く聞こえないので臆病神に近寄る。声を大きくするよう頼むが、ボリウムは変わらない。目と鼻の先まで近づくと、やっと聞き取れた。

「……嘘でしょ」

「あいにく、冗談言うのは苦手なんだ。それに、未来予知は絶対だ。外れることはあり得ない」

「防ぐ方法は？」

「有ったらとつくに言ってるさ」

「……少しだけ、時間を下さい。気持ちの整理するんで」

「ああ……構わないだろう」

肩を落とし、近くの洞窟に入っていく。10分程経つと、気持ちを固めた目で戻ってきた。

「……泣いてる暇はないぞ、助けたいんだろ？」

涙を袖でぬぐい、自分に言い聞かせるように答える。

「ええ、分かってますとも！」

必死に機械を探す二人だが、よほど小さな物なのか見つかる気配がない。仲間の為に、早く見つけ出そうとすればするほど深みに嵌まっていくのだが、気づく余裕はない。いつの間にか登山道を離れており、軽い迷子になってしまった。それでも探している、変化が起きた。山に入ってから歩くたびに感じていた静電気が、だんだん弱くなっ

てきたのだ。初めは刺激になれたのかと思つたが、スカイプから苦しそうな声が聞こえてくるではないか。

「マズいな、みんな疲れてきてる……!」

「これだけ長時間戦つていれば当然だろう」

「くそっ! 早いところ見つけ……ん? 何だこれ?」

拳を握りしめ、自分の脚を叩こうと下を向くと、視線の先にティツシュ箱ほどの黒い物体があつた。持ち上げて確かめようとするが、既に壊れかけているので電流が流れてバチバチと音を立てている。腕の装置で調べると、ちようと穂谷野(雷様)に確認を取つた場所だ。

「間違いない、これがその機械だ!」

「しかも破壊済みとはな」

「ようし……雷様! 機械は既に壊れてます! まもなくみんなも自由に動けるようになる筈です!」

〈……〉

「雷様？」

〈済まない、もう限界みたいだ……〉

通話画面の向こうから、続々と倒れる音が聞こえてくる。それに同調し、泣き叫ぶ声も。

嫌でも状況を把握した自転車バカが言う。

「……臆病神！紅笹が！」

「!!」

奴に言われ、俺の頭には紅笹の顔が浮かんだ。奴は常日頃から

「だーいじよぶだつて、俺氏四分の三蓬萊人だから」

などと言っているが、完全な蓬萊人では無いのだ。その魂ごと消されてしまえば、二度と復活は出来ない。

「くそ！間に合ってくれ！」

残った力でテレポートする間際。 奴に掛けられた言葉を……俺は、どうして理解できなかつたんだろうな。

「……どうかお元気で、臆病神さま」

続く。

## 最終話 「守り抜け、五人の幸せ」

「……どうかお元気で、臆病神さま」

テレポートした臆病神を見届け、自転車バカは壊れた装置へ近寄る。能力を使用して直し、腕の装置を使い音声入力が出るようにした。

コントロール画面を開き、画面を通じて呼びかける。

〈良く聞け鳥合の衆！〉

お前らの相手はそいつらじゃねえ、この俺だろうが！〜

『!?!』

S k y p e から悲鳴などの音が聞こえない、どうやら成功したようだ。

〈俺の居場所は人里4丁目2―15―3だ！分かったら全員とつとと行動に移せ！〜



言うや否や、意思に反して身体がその場所へ向かおうとする。何よりも守りたい彼の元へ。殺しに。

僅かに流れていた電流の変化を感じ取り理解した穂谷野（雷様）は歯ぎしりをし、拳を握りしめて怒鳴る。

「自転車バカ!!君は、君という奴は……!自分が何をしようとしてるのか、分かっているのか!」

〈良かった、無事だったんですね〉

「ふざけるな!皆の努力を無に帰すような真似、私は絶対に許さないぞ!」

運営がまともに機能していない今、彼女たちに殺されたら二度と復活出来なくなるんだぞ?!そうなればもう誰にも会えなくなる!勿論、君が愛する依姫にもだ!せっかく科学が進歩して、二次元の世界に入れるようになったのに……また、次元の壁に隔てられてしまふんだぞ?!なまじ思い出を作ったが為に、逢いたい思いは強くなるばかり!

そんなの……死ぬより辛いじゃないか!!」

〈じゃあ聞きますけれど、他に方法がありますか?被害者をなるべく出さずに事件を解決する、名案が〉

「それは……!」

「もう、これしか無いんですよ。こうするしか、方法は無いんです」

「……どうしても、駄目なのか」

「駄目です。だから穂谷野さん、俺の最後のお願い聞いてください」

「止めろ、最後とか言うな」

「俺に命令して下さい。友人としてじゃなく勝ち組として、命を賭けて皆を護れと。命令して下さい」

「お断りだ、そんな事。口が裂けても言わないぞ」

「お願いします、一生のお願いです。それさえ仰って頂ければ良いんです。後は何も望みません」

「ッ、一生のお願いか……」

「お願いします。あいつら結構近くまで来てるんであんま時間ないんです」

「穂谷野さん、このままだと全部無くなるんですよ。文さんとの思い出も、何もかも」

「文……!」

「穂谷野さん!」

様々な感情がせめぎあつた末、結論に到達した。

悔しさを滲ませながら命令する。

「……戦犯、自転車バカ。その命を賭けて、私たち勝ち組を護れ」  
〈はい喜んで〉

S k y p e を切つて見上げると、彼が今まで関わつてきた全てのキャラ達が、自分を殺すべく迫つてきていた。

「会長！逃げてえええええ！」

「……小傘ちゃん、そんな大声出せたんだ」

大粒の涙を流す小傘は、声が枯れるのでは無いかというくらい叫ぶ。

「お願い、逃げて！嫌……こんなのヤだよお！

わちき達、貴方を殺したくない！

こんな所で死んで欲しくない！

もつとずっと、貴方と一緒に生きていたい！

だから……だからお願い！逃げてえええええ!!」

「……」

「お願いだから……ッ、逃げてよお……!」

「……このまま全部放り投げて逃げたら、どうなると思う?」

「ッ、そんなの」

「死ぬんだよ」

「!?!」

「この世界が禁忌を犯したと分かって消滅する時、そこに居たユーザーの中に負け組が。戦犯が交ざっていたと判明すれば、俺は現実世界で処刑される。そうなれば、ホントにログイン出来なくなるんだよ。」

それに事件の発端が俺である以上、どうやったって処罰は免れない」

「そ、そんな……!」

言葉を失う彼女たちを前に、自転車バカはグローブを装着しながら誓いを立てる。

「だからこそ、俺は逃げない。運命に、アイツらに抗って、お前らを必ず救って見せる!」

「会長……!」

「どうせ何時かは現実世界で殺されるんだ。だったら、此処でお前らを救って死ねば悔いなく死ねるよ。」

こっからは最大限、格好つけさせて貰うぜ」

左手でグローブの端を掴み、指先までしつかりと装着した自転車バカが問題の機械を放り上げ、泣きじやくる彼女たちに向かって大見得を切る。

「掛かってこい、全部終わらせてやるよ」

消える前のロウソクのように灯ったオーラを見た彼女たちは、顔を曇らせながら各々が持つ最高出力のスペルカードを使用する。逃げ場はおろか空気の通り道さえ無い不可能弾幕を前にして、自転車バカは鮮明なイメージを描いてシールドを展開した。

回復と防御という二種類の力を持っているのに、それらを同時に使えない訳がない。イメージしろ。シールドに触れた爆発的なエネルギーを全て、己が身体に取り込め。ガス欠になった細胞の隅々にまで、行き渡らせるんだ。

「……………ッ！」

誰かの攻撃が触れた瞬間、凄まじい爆風と炸裂音が辺りに轟いたが、煙幕の中から顔を覗かせたのは自転車バカのシールドだった。

「?でしよ…わちき達のスペカを防ぐなんて…!」

「それだけ、みんなの力が削られてたつて事さ。俺の仲間にな」

尚も襲い掛かってくるが、今のが最後の力だったのか動きが遅い。シャボン玉程度の速度でしか移動できないのだ。

自転車バカは両手に最大限の力を込め、身に纏うオーラを集約させる。左手を突き出して魔法陣を描き、それを右手で思い切り殴った。

「うらあつ!」

魔方陣から水を得た魚のように放たれた黄緑色の大玉達は、一人一人の背丈に合わせて大きさを変えながら少女達を優しく包み込んだ。動きを封じられ戸惑っていると、身体に変化が起こる。

「身体が……！自由に動くよ大ちゃん！」

「やったねチルノちゃん！」

「つたく、こんなこと出来るんなら最初からしなさいよ」

皆と同じように喜ぶレミアだが、唐突に運命が見えた。それは道頓堀野郎が運営を通じて依姫を機械で操り、自転車バカを殺すという運命だ。

彼に伝えようとするレミアだが、背中に悪寒を覚えた自転車バカは迫りくる依姫に気が付いていた。勿論、首元に張り付いた装置にも。

「……野郎、まさか依姫にも?！」

「ッ、逃げてえ!!」

悲痛な叫びをあげ、涙をぼろぼろ流しながら彼女は迫ってくる。

やっべ、今までで一番速え！

振り下ろされた剣をかううじて避けたのだが、地面に触れた瞬間に何重もの衝撃波が発生する。まともに喰らった自転車バカは切り刻まれ、10メートルほど地面を転がっ

ていった。

付いていた装置が衝撃波で壊れ、身体の自由が戻った依姫は青ざめる。喉元に切先を当ててるのを見て、レミリアが叫んだ。

「待つて、よつちゃん！彼はまだ死んでないわ！早まらないで！」

「ごめんなさい……ごめんなさい……！」

「聞く耳なしか……ッ、起きろ自転車バカ！立ち上がれ！私たちを守れたんなら、恋人の一人くらい護ってみせろ！彼氏だろうが!!」

「自転車バカさん！」

「会長！」

——依姫……？泣いてるのか……？

「!？」

「やめてくれ……俺は、お前の泣き顔が見たくて……戦ってるんじゃないんだ……！」

服は引き裂かれ、身体には無数の切り傷が出来ている。



「すっげえ……俺まだ生きてるよ……」

立ち上がろうと力を入れると、腹がズキンと痛む。見ると、ヘカーティアから届いたTシャツがずたぼろになっていた。

（そうか、このおかげか）

「どうして……?」

「ん?」

「どうして逃げないの? どうしてそんなになっても……こっちに向かってくるの?」

それでも立ち上がり、彼女の元へ歩み寄る。

「お願いだから、これ以上頑張らないでよ……私は、私たちは……この世界で犯してはならない、最大の禁忌を犯そうとしてるんだよ……?」

「もういい、喋るな」

「力が足りない半端者なばかりに、貴方に酷い事を……!」

「……大人しくしてろ」

「こんな私に、生きてる価値なんか！」

「いいから黙ってろ!!」

「!？」

力の限り、泣いている依姫を抱き寄せた。つもりだったが

「でつけー声、出させるんじゃないよ……いま立ってるのがやつとなんだよ……」

「自転車バカあ……!」

「辛い思いさせて、悪かったな。もっと早くあの機械を見つけてりや、もっと早く解放してやれたのにな……力が足りないのは俺の方だ」

「こんな……つ、こんな事……!」

「分かっているって。身体が勝手に動いたんだろ？お前らがそうだったのは俺の責任だ。お前らは何も悪くない」

「どうして、ここまでしてくれるの？いくら負け組だからって、ここまでする事ないでしょ。」

「……初めてだったんだよ」

「え？」

「義務だから。やって当然だから。不満を押し込めて色んな勝ち組に手を差し伸べてきた。助けてきた。」

でもな、お前らが初めてなんだよ。負け組だと知つてもなお、俺と対等に付き合つてくれたのは。

友達になつてくれたのは。上司になつてくれたのは。恋人になつてくれたのは。 “おかえりなさい” つて言つてくれたのは」

「……」

「俺が困つてた時に、手を差し伸べてくれたのは……生まれて初めてだったんだよ。」

だからこそ、お前らだけは。何があつても助けてやりたいんだ。心からそう思えた、初めてを沢山くれた、大切な仲間なんだよ。

特にお前には、何時だつて笑顔でいて欲しいんだ。推しの幸せを願わないファンが何処にいる」

その言葉に、依姫の心臓が跳ね上がる。

そつか、そうだよ。闇を抱えて、自己犠牲の精神を押し付けられて生きてきた。自分も他人も信用できなかつた貴方だけど、此処に来て初めて。心を通わせられる人を見

つけたんだよね。だからこそ、私たちを守ってくれるんだ。

自分を犠牲にして誰かを助ける事が、息をするように出来る貴方だから。

そんな貴方だから、私は惹かれたんだよね。

幸せにしてあげたいって、心から思ったんだよね。

「私も、貴方を幸せにしてあげたい」

「ありがとう、俺もだよ」

その瞬間、自転車バカのシヨルダーバッグが光りだす。否、シヨルダーバッグではない。二枚の紙人形だ。バッグから飛び出した紙人形は宙に浮遊し、こう告げた。

「綿月依姫。自転車バカ。登録サレタ二名ノシンクロ率が100%二到達シマシタ。コレヨリ完全憑依ヲ開始シマス」

『!?!』

その言葉に、抱き合っていた二人は思わず身体を離し紙人形を見やる。様子がおかしいと気づいた道頓堀野郎たちもボケての幻想郷に慌ててログインしたが、既に自転車バカの身体は変身をはじめた。

いたる箇所が切り裂かれ汚れていた青地に黒いチエツク柄のシャツが、黒いズボンが、修復され碧色と蛍光黄色のツートンカラーへと変わった。服だけではなく、体の損傷も綺麗さっぱり消えうせていた。それどころか、体が軽い。とてつもなく軽い。翼が生えたと称するのが一番適当だろう。

自転車バカの服装に既視感を感じたボケ批評家は文献を手早く漁り、ある項目で目を見開いた。堪らず音読する。

「はるか昔、仮想空間が出来たばかりの頃。日本人と呼ばれた一族に神と呼ばれるほどの能力者が居た。その男は回復と攻撃の二種類を自由自在に操り、蛍光黄色と碧色のオーラを代わる代わるその身に纏った。だが、ついで二つの力を同時に扱う事は出来なかった。彼が言った

”二つを同時に使えば服やオーラが2色になり、神がかった力が手に入るだろう”  
という言葉は、多くの人々を揺り動かした……。

バカな！奴は、この土壇場で神を超えたとも言うのか!?”

動揺するボケ批評家に、冷や汗を流す道頓堀野郎が言う。

「よく読め、続きがあるぜ。」

その男は子を成し、本名とは別に自らを自転車バカと名乗った。その一族は見た目を分かりやすくするべく、黒縁の伊達メガネ着用を義務づけたそうだ」

「奴は……いや。私たちは、一体誰を潰そうとしているんだ」

「奴は有限会社チャリンコタクシーの代表取り締まり役にして、歴代最強の能力者……」

二十代目、自転車バカだ。

「どうやら俺たちは、とんでもねえ奴を敵に回したらしいな」

「それだけじゃないさ。いま盟友が図らずも起動した完全憑依装置は、本当はシンクロ率が30%もあれば憑依出来るんだ。」

にも関わらず、盟友達は初めて、一点の曇りもなく互いを信頼した。シンクロ率が高ければ高いほど、二人の力を強化する機能もついている。

……文字通り、完全憑依だ。もう誰にも止められないよ」

夥しい数の敵を前にして、自転車バカは瓦礫と化した自宅に向かって話しかける。

「臆病神、聞きたいことがあるんすけど」

「何だ、バレてたのか」

ひよっこりと、瓦礫の山から姿を現す。心配で見に来たのだろう。

「格好良い曲きくとテンション上がるじゃないすか。あれは、興奮という感情が働くからですよね？」

「まあ……そうなるな」

「じゃあさ、それを応用して……俺達の、臆病な心を消し去ることは出来ますか？」

「無茶言うな。理論上は可能だが、30%の力でどうやって……」

「方法はありません」

自転車バカはショルダーバッグからリモコンを取り出す。スイッチを押すと、妖怪の山中腹から閃光が発せられた。光の帯は一目散に向かってくると、空中で静止した。

「今からこの190台のTADで音楽を流します。その力を臆病神の補助に当てるんで……お願います」

「……分かった、やってみよう」

「おいお前ら、せっかく特等席で見せてやるんだ……台言葉くらい叫んでくれるよな？」

視線を彼女たちに向けると、笑顔が返ってきた。OKの合図だ。

「愛ゆえに、俺は何処までも強くなる！」

『準備は整った……五分でケリをつけろ!!』

再生ボタンを押し、190台のTADが喋る。

【EQUILIBRIUM | Blut Im Auge 起動シマス】

TADから発せられた黒い音符たちは臆病神に吸い込まれ、発生源のTADも一台ずつ黒いオーラで包まれていく。予想外の光景に、ボケ批評家達はただ立ち尽くすことしか出来ない。

「な、何なんだこれは……!」

「さあさあ皆さんお立合い!これよりご覧に入れますは史上初、神霊の依り憑く月の姫とボケてユーザーの完全憑依なり!」



「幻想郷を敵に回したこと、その身を持って後悔させてあげる！」  
自転車バカ  
 「刮目せよ！」

ドミノ倒しのように連鎖的に包まれていき、全てのTADが黒く染まった瞬間。臆病神が手をかざすとTADのオーラが火炎放射のように二人の元へ向かう。吸い込まれたオーラは桃色・蛍光黄色・碧色の三色に変化し、二人を起点として突風の如く吹き荒れた。

誰にも聞こえないボリユームで、臆病神が呟く。

「心の友を守る為に、掛け替えのない推しを笑顔にする為に、人間を辞めたボケてユーザー。」

そのユーザーに惹かれた、作中最強の異名を持つ月の姫。

その二人から臆病な心を取り除いたのだ、貴様らの勝てる相手ではない」  
 「行くぞ依姫！初めての共同作業だ！」

「おーけー！任せといて！」

先行。自転車バカは足を開いて腰の位置を落とし、両手に力を込め時折激しく放電し

ながらも集約する岩を生み出していく。大気が電気を帯び、周囲の小石や瓦礫が浮かび上がる。サッカーボールの大きさにまで膨れ上がり、頃合いと見た自転車バカは地面を踏み込んだ。

「これでも喰らえ！」

二・三步ステップを踏み、力の限り全力で岩を投げる。空気を切り裂き地面を衝撃波で抉りながら突き進むが、依姫によつて地面から生えた刀に当たり分裂してしまう。だが瞬間間に元の大きさに戻り、その数を増やしていく。

分裂、再生、分裂、再生のサイクルをひたすら繰り返す。

そうして生み出された弾の数。さながら、横殴りの雨の如し。

「避けれるもんなら避けてみる！」

スレイブ。依姫が、その身に神を降ろす。

「火雷神」よ。七柱の兄弟を従え、この地に来たことを後悔させよ！」

建物が壊滅した人里全土に雨が降り、依姫の近くに雷が八回連続で落ちる。その雷が火雷神や七頭の龍と化し、炎を身に纏っていく。

天より下る神の裁き。雲を焦がす憤怒の炎。八頭のスカイツリーが、山下のパシリ達に襲い掛かった。

命の危機を感じて逃げ惑う対象者を逃す筈もなく、最初に伏雷が巻きつき炎の竜巻となる。毎秒1000回転で周り、ある程度燃えた所で上空へ跳ね上がり自分ごと地面に叩きつける。それを見た兄弟も同じ行動を取り、最後に火雷神が地面に特攻し炎の海を作り上げた。

スレイブすると、腕の装置が声を上げる。

「モーションキャプチャーをインストールしました。ワンパンマンのサイタマ、再現可能です」

「ナイスタイミングだ、起動しろ！」

「承知しました」

わざと残しておいた巨人部隊山下のパシリの一人に光の速さで近寄り、右手で招き挑発する。頭を

目掛けて撃ち込まれた拳を上体をのけ反って回避し、左足で踏ん張り拳を腹に叩きこむ。腹を中心に虹色の光の粒となって消滅した仲間を見て驚くが、自転車バカは憎々しく微笑んだ。

「小癩な・・・消えろ！」

両手を握って振り下ろすが、後ろへ下がりが回避した自転車バカは腕を駆け上がり跳躍する。2・3人ほど頭を蹴って渡り大きく距離を取る。慌てて3人が追撃に向かうが、振り下ろした拳も蹴り上げようとした脚も巧みな動きで躲される。ならばと言わんばかりに彼を囲んで三人同時に拳を振り下ろすが、見事に防がれた。大地はひび割れ、凹み、衝撃波が発生する。

しかし

「馬鹿ね、私の旦那がその程度で倒せると思ったたら大間違いなんだから」

『た、耐えきっただと・・・!?!』

三人の脚を蹴りで払い、回り込んで渾身の拳を放つ。叫び声すら上げられず、山下の

パシリは光の速さで吹き飛ばされ壁に叩きつけられた。その後も次々と襲い掛かるが、誰も自転車バカを傷つけられない。

手刀で、回し蹴りで、かかと落としで、ボレーキックで、肘鉄で、クロスカウンターで……全てを一撃で葬り去っていく。

道頓堀野郎が召喚した山下のパシリを全員消し飛ばし、自転車バカが声を掛ける。

「はあ……はあ……依姫ー」

「OKー」

意思を汲み取った依姫が持っている刀を地面に突き刺すと、捕縛対象の周囲に無数の刃が突き出て取り囲む。それが何を意味するかも知らず、ボケ批評家らは祇園様の怒りに触れた。

空から。地面から。障害物から。至る場所から刀が生成され、ボケ批評家らを切り刻んでいく。生かさず殺さず、抗う意思を確実に切り刻み、敗北の文字を身体に教え込む。顔を腕でガードした道頓堀野郎たちが、悔しさを滲ませる。

「どう足掻いても……勝てないというのか……!」

「こんな負け組の……しかも戦犯に……」

『我ら勝ち組が……!』

「何が勝ち組だ! 負ける事を恐れる余り戦う事から逃げた奴なんか、この俺が負ける  
とでも思ったか!

俺の嫁に、俺の家族に、俺の仲間に、俺たちの会社に手え出してみろ! 何度だって何  
人だって、全員残らず叩きのめしてやる!

それが父親であり、社長であり、旦那であり、戦犯である俺の使命だ!」

身体に残った全てのエネルギーを右手に集め、依姫も螺旋状に渦を巻くエネルギー玉  
へ持てる力を注ぎ込む。

今この瞬間、幻想郷に存在する全エネルギーが彼の手に集まった。

「お前みたいな他人の人財を傷つける奴は我が社に要らねえ! シロアリはアリ地獄にで  
も吸い込まれてろ!

社長権限で、お前に転勤を申し付ける!」

道頓堀野郎たちの頭上に瞬間移動し、幻想郷の意思を叩きつけた。

「トランスファイエラロ・エル・インフェルノ!!」

蛍光黄色と碧色と桃色の三色が交ざった火柱が、幻想郷を覆っていた暗雲を吹き飛ばした。

地面に着地し、完全憑依を解除する。自転車バカは手を払いながら、気絶している道頓堀野郎たちを見下ろす。

「前にも言っただろうが。俺たちがここに居る限り、幻想郷は消えやしねえってな。

依姫、念のため縄か何かで縛り上げといて」

「じゃあフェムトファイバーの組紐で」

依姫が要領良く縛り上げ、自転車バカが紙とペンを取り出す。事の主犯が彼らであることを簡潔に書き、腕の装置を操作してメモ書き諸共ボケて本来の世界へ飛ばした。

「……ふいふい、やっと終わった。あー疲れた」

その場に座り込む自転車バカを見て、依姫が微笑む。

「ふふふつ、お疲れ様」

「あんがとな。これでアイツらの体力さえ回復すりや、俺はゆつくり……ッ!？」

そこまで言った瞬間、彼の身体に変化が起こる。ちょうど痛み止めが切れたように、それまでに負った傷の痛みがぶり返して来たのだ。治っていた筈の傷口も開き、体の機能が順番にシャットダウンしていくのが分かる。

いち早く感づいた永琳はシールドを破ろうと体当たりを繰り返すが、全くダメージが入らない。

（まずい、このままじゃ……!）

「自転車バカ、なんか苦しそうだけど大丈夫?」

「……依姫。悪いけどアイツら、追い払ってくれるか」

「え? う、うん」

シールドを壊さない程度に風を起こし、皆を吹き飛ばしていく。



「何をしてるの!?! 気づいて! 依姫ええええ!!」

永琳の叫びは届くことなく虚空に消え、自転車バカは最後の力を振り絞る。吹き飛んでいく様子を眺めていた依姫の頭に銃口を向け、引き金を引いた。頭を撃たれ、記憶を失った依姫が振り返る。

「え……………」

「依姫様……………申し訳、ありませんが……………膝枕して頂けませんか……………」

「……………あ、貴方ひよつとして自転車バカさん？」

うーん、一押し投票して下さってる方なら仕方ないですね。良いですよ」

自転車バカの傍へ座り、依姫は彼の頭を太ももの上に乗せた。目が見えなくなった自転車バカは、声を絞り出す。

「愛してるよ、依姫……………何時までも、ずつ、と……………」

——お前だけを

その耳が最後に聞いたのは、彼女からのお礼だった。

「ふふっ、ありがとうございます」

晴れ渡る空の下。世界を救った英雄は、推しの上で静かに息を引き取った。



見渡す限り広がる花畑は、暖かく優しい光を浴びて静かに咲いている。

ぼやけていた視界がはつきりとし、身体の損傷や痛みがない。

(そっか……俺、死んだんだっけ……)

目を細めると、遠くに川が見えたので歩き出す。先ほどまでの喧噪が嘘のように静ま  
りかえっており、自身の歩く音しか聞こえてこない。

(えーきさんが居ない……あ、そっか。あの人は映姫さんにつきつきりだもんな、居るわけないか。そもそも、此処がボケての幻想郷と繋がってるのかどうか分からんし)

暫く歩いて川のほとりについたものの、船はあるが船頭が見当たらない。道を間違えたのかと思っていると、下から声を掛けられた。

「お、珍客だ」

「……何だ、やっぱり此処ってボケての幻想郷と繋がってたんだ」

声を掛けた主、小町は伸びをすると起き上がり、鎌を携えて立ち上がる。

「いやあ、悪い悪い。最近は何多に来ないから暇してたんだ。また四季様に説教喰らうとこだったよ」

「ついさつき怒られてたもんな」

「見てたのかい？」

「いや、えーきさんから聞いた」

「ああ……なる。何でもいいや、とりあえず乗りなよ。渡してやるからさ」

「え？自分で言うのもアレだけど善人って橋わたるとか聞いたよ？俺悪いやつなの？」

「はっはっは、アンタは悪人じゃないよ。本当ならそうしてやりたいんだが、生憎そうも行かなくてね」

「……？」

頭をかきながら、小町は苦笑いをする。

「ほら、最近は滅多に来ないって言っただろう？悪人とか善人とか関係無くそもそも来なかったからさ、手入れするの忘れててあの橋、壊れちゃったんだ」

「うそん!？」

「修復しろって言われるかと思っただけどさ、是非曲直庁の観光部門が

“この際だから橋は無くして全員船で渡せ、彼岸のイメージアップだ”

とか言い出しちゃって」

「そんなんで良いの？」

「まあ、あたいは無くなつて良かったと思ってるけどね。実際この川つてかなりデカいし。歩くよりも船で渡したほうが速いんだよ」

「歩くほどのくらい?」

「うーん……ざっと24時間かな」

「にっ・・・!?!」

「船なら三分の一だ。さあ、乗った乗った」

言われるまま船に乗り、揺られること数十分。無言に飽きたのか小町が尋ねてきた。

「まさかアンタと、もう一度会うことになるとはねえ……何があつたんだい?」

「かいつまんで言う会社で倒産しそうになつたんだ。どうにか防ごうとしてあちこちかけずり回つてただけど……最後の最後で力尽きちゃつて、ご覧の通りだよ」

「ふうん……会社の方は大丈夫なのかい?」

「どうにかなつたよ。それを見届けられたから満足だ」

「一応聞くけど、あの妖怪連中に殺されたんじゃないだろうね?もしそうだったら……」  
「違つて、ただの寿命だよ。あいつらは関係ない。」

「これ以上面倒ごと……巻き込まないでやってくれ」

「そうか、なら……話すのは止めにしようかね」

そう言うのと懐に手をいれ、中から手鏡を取り出した。

「何それ……鏡？」

「ただの鏡じゃない、浄玻璃の鏡ってやつだ。この鏡に罪人を映すと、その者の過去の行いが全て映し出される。」

さて……あんたはあの世界で何をしてきたのか、見せて貰うよ？」

「どうぞご自由に？ 俺話すの下手だし、そっちの方が楽でいいや」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

手鏡が一瞬暗転した後、映像を映し始めた。

「……めっさ長くなるよ？」

「望むところさ」

その頃。永遠亭では自転車バカの治療が行われていた。

永遠亭にある集中治療室の“手術中”ランプが消え、中から永琳と優曇華が出てきた。いち早く気づいた文が、恐る恐る聞く。

「ど、どうなりましたか……?」

優曇華が首を横に振り、永琳が目を合わせないようにして話す。

「今しがた、息を引き取ったわ」

『……!!』

「私にも原理がさっぱり分からない。あの子アスリートって言うだけあって、心肺機能も足腰もかなり鍛えられてたの。能力のおかげでしょうけど、傷も死に至るレベルでは無かった。だけど駄目だった」

「そんな、会長……!」

「唯一分かったのは、手相の生命線が壊されたかのようにグチャグチャになっていたと  
言うことだけ」

それを聞き、何かに気づいたフランが震えるように喋る。

「わ、私のせいだ……!」

「フラン？」

寒さに震えるような格好で地面に座り込むと、レミリアが傍に座って促す。

「落ち着いて。何があつたか、話してちょうだい？」

「け、今朝ね……自転車バカの家遊びに行ったの。」

インターホンを鳴らそうとしたら、声が聞こえて……身体が急に動かなくなったの。それであいつの家、能力使って壊しちゃって……。

瓦礫の山から起き上がった時、壊す寸前で誰かが自転車バカを連れて逃げたんだけど……その時、不思議な手応えがあつたの。肉体でも、物体を壊した時にも感じなかった、不思議な感覚」

「それが、自転車バカの寿命だって言うのね？」

「うん……間違いないよ。だって、他には何も壊れてなかったんだもん……！」

「そう……よく分かったわ、ありがとう」

レミリアはすつと立ち上がり、臆病神の胸倉を掴んで壁に叩きつけた。



『お嬢様!』

「ぐっ……!」

「お前だよな、フランから自転車バカを逃したのは……何故もつと速く、あいつを助けなかつた!」

「む、無茶を言うな、俺があの時、人里を歩いていなければ……いや。あいつの家近辺に居なければ、そもそも死んでいたんだぞ? 寿命が延びただけでも……ありがたいと思え!」

「……っ!」

「大体お前には、〃 運命を操る程度の能力〃 とやらがあるんだろう? それを使っていれば、馬鹿な妹のせいで死ぬこともなかったんじゃないのか!」

「貴様あ……!」

「やる気か小娘!」

力を解放しようとした二人を、フランが止めに入る。

「止めてよお姉様!」

「フラン……!」

「その人と喧嘩して、何になるっていうの？その人を殺した所で、姉妹揃って処罰されるのがオチじゃない！」

「……」

「それに、そんな事したって……私たちが、いくら叫んだ所で……っ、あいつは、戻ってこないんだよ？私たちを救ってくれた、あいつが……生き返るわけじゃないんだからあ……っ！」

「……っ！」

レミリアから解放された臆病神は、襟を正しながら問いかける。

「何故、奴を想って泣く？お前らと自転車バカは、ただの友人なんだろう？」

「違う！あいつは、そんな風に思ってはなかった。此処に居る人妖は全員、彼に救われたのよ」

「救われた……？」

「二度にわたって観光客を増やし、地底の妖怪たちに繁栄と友好を届けた。写真入りのポスターや俳句を発売することで、各人の知名度アップを図り。旦那達が居なくなれば、帰ってくるまで保護して、寂しい思いをさせないようにしてくれた。」

河童の不注意でミサイルが発射された時も、

小傘が身体と心に乗っ取られた時も、

庭師の旦那が消えた時も、

あいつは全力で……私たちに平穩をもたらしてくれた」

「そんな事があつたのか……」

「今回だつてそう。事の重大さなんて関係無く、私たちを……命と引き替えに、助けてくれた！」

なのに、どうしてこうなるのよ……っ！こんな結末、誰が望んだつて言うのよ！」

「……」

「お嬢様……」

帽子を深く被り、肩を振るわせるレミリアに、フランがそつと寄り添った。

(何の話をしてるんだろう……?)

記憶を失った依姫だけが、不思議そうな顔をしていた。

皆が力なく引き揚げ、永遠亭に重苦しい静けさが戻る。

「三度目の正直、か……」

「……急にどうしたの？」

「あいつ、昔二回ほど永遠亭に運び込まれてんだよ。道案内した時に話したんだけどさ」

「ああ、それで三度目の正直なのね」

「あんときゃ、冗談だと思ってたんだがな……」

「今だけは、聞きたくない言葉でしょうね……」

塀に座った輝夜と妹紅が見つめる先では、依姫と永琳が話をしていた。

「ごめんなさいね、折角休暇で来たのになんか辛気臭い雰囲気で」

「い、いえそんな……皆さん悲しんでましたが、何方がお亡くなりになったのですか？」

「……っ！」

（本当に……覚えていないのね……）

喉元まで上がって来た気持ちをぐつと堪え、夜空を見上げながら静かに答える。

「あの子たちにとつて、とても親しい人間よ。貴女には特に」  
「へ……?」

翌朝、豊姫と帰ろうとした依姫を永琳が止める。

「ねえ、渡したい物があるからこっちへ来てちょうだい」

「はあ、分かりました」

とある部屋に案内されると、TADとPCが置いてあった。

「あの、これは一体?」

「貴女が好きに使って良いスピーカーよ、ここにあつても誰も使わないから持つて帰つてくれないかしら」

「わあ!良いんですか!?!ありがとうございます!」

「良かったわね、依姫?」

「はい、姉様！」

「八意様、試しに音を出してみても宜しいですか？」

「ええ、是非ともそうしてちょうだい」

「……………」

豊姫がTADに近寄り、慣れた手つきで主電源を入れる。

「綿月依姫、認識完了。コレヨリ妖力回復モードニ移行シマス、関係者以外ハ速ヤカニ立ち退イテ下サイ」

「じゃ、そういうことだから。刀は預かっておくわね」

「え、あ……………はい」

二人が部屋を出ると、TADから桃色の小さな八百万の神様が出てきて部屋を泳ぎ回る。

風船のようにふわふわとしていたが、依姫に狙いをつけると体内に溶け込んでいった。

「痛つ……!!」

頭が痛み、映像が流れ込んできた。

(誰……この男の人……?)

『危ないところを助けて頂いて有り難うございます。自分は自転車バカと言います、新参者ですがよろしくお願い致します』

(え……?)

『友達に……ですか? 良いですよ、私のような者でよければ』

「あ……」

『こいしとフランちゃん、悪いけどそいつから離れてくれるかな? 依姫の横は俺の指定席なんでね』

「あ、ああ……」

『これは目の前に居る対象の妖気を感じて、人物を特定する。そしてその人のテーマ曲アレンジで格好いいのを流すと、その人の戦闘力が一定時間跳ね上がるという優れものだ。無かったら妖気を保存してくれる機能もある』

「あつ……!」

『お姫様、お迎えに上がりましたよ』

「ああ……!」

『欲しいもの? 特にないな……こんな生活が死ぬまでずっと続くなら、これ以上楽しい事はないね』

「いや……」



『要するに俺ってダメ人間なんだよ。でも、お前さえ傍に居てくれたら。笑ってくれたら。他には何も要らない、それだけでいい』

「止めて……！」

『じゃ、”また”な』

「お願い……見せないでえ……っ！」

『愛してるよ、依姫……何時までも、ずっと、と……お前だけを』

「嫌アアアアアアアア!!？」

ドアの外にも聞こえる程の絶叫が聞こえてくる。壁にもたれかかった永琳は、刀を握りしめている豊姫を見て呟く。

「刀、預かっておいて正解だったわね」

「ええ。彼の死に直面した時、一番何をするか分からないのがあの子でしたから。きつと、彼も想定していたんでしょうね」

「だと思っわ、真相は本人しか知らないけれど」

壁から背を離し、永琳に続くかたちでドアを開けて中へと入る。座り込み、頭を手で押さえながら嗚咽を洩らす依姫を豊姫が慰めている間に、永琳がPCを立ち上げる。

「ねえ依姫？これを見て貰えないかしら」

「……USB？」

”引継ぎ”と書かれたUSBを差し込み、データを開きながら説明する。

「昨日の夜にね、烏天狗が持ってきたのよ。」偶然見つけたんですが、これは彼女に見せてあげて下さい”って」

動画の窓を最大にし、画面を依姫に見せる。そこには、洞窟内でビデオを回している

自転車バカが居た。

「……………」

服のあちこちが破れ、頬には切り傷が出来ている。録画が出来ている事を確認した自転車バカは、静かに語り始めた。

「まさか、腕の装置にビデオ撮影の機能があったとはね。どこまで高性能なんだよ。あー…と、頭ん中がグチャグチャなんだけど、なるべく噛み砕いて話すから聞いてくれ。白衣を着たあいつ……臆病神が教えてくれたんだが、俺の命は後2時間しない内に尽きるそうだ。どうやら、フランちゃんに壊されたらしい。だが、禁忌を犯した訳じゃない。もし彼岸組が処罰を下しそうになったら止めてくれ……まあ、そんな真似させないけどな。

この騒動はそれまでに決着をつける。でも、そこで終わりだ。だから、依姫。頼みがある。

” 有限会社チャリンコタクシー ” の社長になってくれ  
「!?」

ビデオは、更に続く。

「そして、俺が今まで達成しようとしてきた”五人の幸せ”を、これからも守って欲しいんだ。その五人つてのはな、

①社員とその家族。これは給料もろくに払えてないのに手伝ってくれてる文さんと小傘ちゃんにとりさん、そして旦那のトムさんの事だ。四人の協力があつたから、ここまで来られたんだ。

②外注先・下請け企業の社員。これは右も左も分からない俺にこの世界の楽しさを教えてくれて、辛い時を支えてくれた文さんと旦那の穂谷野（雷様）さんの事だ。ホント、感謝しても仕切れないよ。

③顧客。俺が作った商品を買ってくれて、会話のタネにして下さる方々の事だ。お客様の幸せそうな笑顔を見ると、こっちまで嬉しくなるんだよ。俳句モデルの方々は特に、いい顔するんだ。

④地域社会の活性化。我が社が今日まで続いてきたのは、ボケての幻想郷が有ったからだ。これからもやっていく為には、この世界を活性化させて、世界に貢献しなくちゃいけない。難しいかも知れないが、お前なら絶対出来る。

⑤株主。これはつまり俺の事だ、4人が幸せそうにしてるのを見ると、明日も頑張ろうって思えるんだ。だからこそ絶対に、みんなの幸せを守るんだ。何があっても……この世界を輝かせるんだ。この役目、お前に任せるぞ」

「うん……分かった、約束する」

「これで……さよならだ……」

そう言つて俯いた自転車バカの頬を、涙が伝つていく。

「本当は……お前と……つ、みんなと一緒に、やりたかった！みんなでワイワイ騒ぎながら、会社を……ボケての幻想郷を……盛り上げていきたかった……！お前との思い出だつて、もつと沢山作りたかつたよ！とよ姉たちと一緒に……月の祭りだつて行きたかつたさ！」

「自転車……バカあ……っ！」

「でも無理なんだ！幸せな時間を……みんなと過ごす事は……つ、不可能だ。だから、お前に託す。俺の分まで……よろしく頼むぞ」

腕を伸ばし、映像はそこで切れた。大声で依姫が泣き出すが、永琳と豊姫が抱きしめる。

「今だけは、思いつきり泣きなさい。泣きすぎで目が腫れたって、月の頭脳が治してあげるわ」

「悲しい気持ち、全部吐き出したら……彼が託した事をやり遂げましょう？」  
『それが、あの男の一生のお願いなのだから』

泣き声が、部屋を満たした。

あれから数年後。自転車バカが息を引き取った場所には、見た目は大きな記念碑だが中はちよつとしたビルという特殊な作りをした建物が建っていた。

正面の自動ドアから出てきた少女たちが、こんな会話を交わす。

「ねえねえ、今週の俳句モデルもう見た？」

「見た見た！やっぱスカーレット姉妹ってすつごく可愛いよね〜！」

「この様子だと、今年の弾幕舞踏会は期待しても良いかなー」

「今年で10回目だもんねー、チケットも取れたし♪」

「ねー！今から楽しみ〜！」

ビルの中では、受付嬢が退屈そうにしていた。そこへ、もう一人の受付嬢がやってきて肩を叩く。

「お疲れ小傘、交代の時間だ。お昼食べてきなよ」

「あ、ナズちゃん！今日は昼からなんだね」

「そういう事だ、後はやるから」

「分かった、じゃあ行ってきまーす！」

「走ってこけるなよー？」

「はーい♪」

「つたく、無駄に元気なんだから……ふふつ」

廊下をスキップしながら歩いていると、曲がり角で文に出くわした。

「あやや、小傘さんじゃないですか。これからお昼ですか？」

「うん！もうお腹ぺこぺこだよ……あ、そうだ。さっき預かったんだけど、これ社長に渡してくない？」

「これ…見積書じゃないですか。何で私が？」

「だって、わちき社長室忘れちゃったもん。お腹も減ったし」

「この間教えたじゃ…はあ、分かりましたよ。渡せば良いんでしょう？」

「お願いしまーす！」

小傘を見送り、エレベーターに乗って最上階へと着く。廊下を歩いていると、休憩室でにとりが休んでいた。

「お疲れ様、また徹夜だったんですか？」

「仕方ないだろう？パートが余計な事してたんだから…今度よく言っておいてくれ」

「はいはい、分かりましたよ♪」

社長室へと着き、ドアをノックする。

「入っていいわよ」

「失礼します、依姫社長。文々。新聞社から見積書が届きました」

「ありがとう、利益の欄の記入はしてあるの？」



「はい、ちゃんと記入してありますよ」

「そう…良かったわ。あそこはいつも記入せずに出すんだから、よく言っておいてちょうだい」

「承知しました、権に言っておきますね」

「ええ、よろしく。後は？」

「妖怪の山スーパリアーナの大規模修繕です」

「あそこは結構大きいのよね…早急に業者を手配してちょうだい。今年は大事な節目なの、第6回のような事件が起きないようにしなくちゃ」

「承知しました、では失礼します」

文が部屋を出ると、依姫は頬杖をついて呟く。

「今年も、この時期が来たのね……」

目をやった写真立てには自転車バカと自分が中央にいる集合写真が入っており、垂れ幕には“第2回弾幕舞踏会、大成功!”と書いてある。

「ふふっ、あの人も、まさかここまで会社が大きくなるなんて思いもしなかったよね……  
見せたらどんな反応するんだろ♪」

その時、電話が掛かってくる。

「はいもしもし……え？そう、分かったわ。すぐ行きます」

受話器を戻しコートを羽織って部屋を出ようとするが

『ありがとう……』

「え？」

振り返るが、誰も居ない。

「……(ちら)(ちら)そ」

笑顔で呟き、部屋を後にした。



「こ、此処がそうなんですか？」

男を案内してきたルーミアは、笑顔で答える。

「そうだよ！此処はね、” 幻想郷で一番大切にしたい会社” に7年連続で選ばれたんだー！」

「7年!? へへ…！」

随分と、大きくなったな。

「ん？何かあった？」

「い、いえ、何でもないです」

「そ？じゃあ、中に入ってみよー！」

「え？は、入るんですか？」

「あのね〜：見学したいって言ったのはあなたでしょ？わざわざ案内してあげたんだから、ね？」

「承知しました」

「うん、素直でよろしい！」

自動ドアから入り、受付へとまっすぐ向かう。

「凄いでしょ、地上十回建なんだから！」

「すっげ〜：！！」

「いらつしやいませ、ルーミア様？」

「あはは！ナズーリンちゃんが敬語使ってる〜！」

「う、うるさいな。今は勤務中なんだ〜：そちらの方は？風邪ですか？」

「あ、忘れてた。ほら、挨拶する時は顔を出さなきゃ」

「そうですね、これは失礼致しました〜！」

親が子供に名前を付けるように、この会社名にも意味がある。

「やれやれ…この時期にニット帽なんて普通は被らないよ？」

「すみません、こうするしか無かったんです…預かってて頂けますか？」

「もちろん♪」

「その髪型…どっかで見たとような…？」

初代は学生時代、虐めに近い扱いを受けていた。精神的にも肉体的にも荒んでいた時に、偶然知った東方に心が癒されたそうだ。

「ほらほら、マスクも取って？風邪なんて引かないでしょ、アスリートなんだから♪」

「ふっ…それもそうだな」

「え…？」

その後ポケテを知り、更に心が軽くなったらしい。だからポケテを始めた時、決心した。

” 今度は、自分が誰かを救えるような存在になる” と。



終わり。